呪は月を擁いて

鉄屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪は月を擁いて

【Ｎコード】
Ｎ５５８８Ｕ

【作者名】
鉄屋

【あらすじ】
テンプレの如く憑依し、毎日楽しく、必死に生きていく。そんなお話にしたいです。
※オリ設定、キャラ改変などがあります。感想やご指摘など頂けると嬉しいです。『ＩＳの世界へ』からタイトル変えました。

プロローグ（前書き）

ＩＳの二時創作です。作者の妄想に付き合えない方は回れ右を。

プロローグ

気が付くと白い部屋だった。
いや、白い『場所』という表現が似合っている。
見渡す限りの白一色。白しか存在が許されない、そんなように思える。

なんでこんな所にいるんだろうか？どうやって来たのか？疑問は尽きない。

頬を抓ってみる。……痛い、俺は起きてる。

どれだけ考えてもわからない、という事しかわからない。

思考を止め、ため息を吐く。

視線を上げると、人の形をした、ぼやけた『影』が有った。

何故『影』しか見えない。怪しさ爆発。等の疑問を抱くが、最初に浮かんだ疑問を問う。

「此処、何処だ？」

――――お前の体は死んだ

予想外の返答で思考が止まる。そんな俺を置いて奴は言葉を重ね

ていく。

どうやら俺の質問には答えてもらえないらしい。

◇◆◇◆◇◆◇

話を纏めると、『生きてくれ』という『声』と『ねがい』によって肉体は死んでも魂は生きている。らしい。

万物全てに神が宿る。『声』に宿った神が何かした、らしい。

……て事は、目の前にいるのが……神？……手、合わせて拝んだ方が良いのか？

アホな事考える俺を置いて、『影』は俺の後方に指を指す。

振り返ると、大きな門があった。

『影』が手を広げると門が開いた。開いた門を見て、俺は――――

大きな門（くち）のなかは、まっ黒。

――――喰われる、そう思った。

『影』が喋り始める。初めて、口を開けて。

――――呪(ねがい)いは叶う

まっ赤な口の動き、俺は違和感を感じた。『ねがい』と言った口の動きに。

――――だが

あの口の動きは、

――――対価を貰う

『のろい』と言わなかったか？

――――対価はお前の名(にんしき)と情有(つながり)る名

まただ、また違う。

今度は、『にんしき』と『つながり』口の動きは、確か……！？

体が引っ張られる！？……黒い糸！？門から！？

――――それを

門(くち)が閉じるとき、『影』が引いた顔を視た。

――――我が

妖しく哂う

――――喰らう

俺の顔だった

◇◆◇◆◇◆◇

黒く、まっ黒く、染まる。

視界が、体が、意識が。

何かが体に入っていく。

大事な何かが喰われていく。

薄れゆく意識の中で、『　』に穴が空いた感覚だけが、嫌に残った。

◇◆◇◆◇◆◇

……？……眩しい？

目を開けると白い天井が目に入った。

……白？また白！？　おおぉお！？！？

飛び起きようとして超悶絶。痛い、体が痛い。痛くて熱い。涙目になりながら、頑張って体を起こす。

痛みに負けつつ、現状把握の為、自問自答をやってみる。

Q1，ここ何処？

Q2，なして包帯捲かれてる？それもいっぱいに？

Q3，何がどーなってこーなった？目が回る展開についていけないんだけど？

A1，たぶん病院の個室。

A2，怪我したんじゃね？それも盛大に。

A3，知るか馬鹿野郎！！

◎まとめ

怪我して入院、他わからん。以上！ありがとうございました！

お馬鹿な脳内会議（？）を終え、ベットから降りてみる。痛みで悶絶しながらも。

二の足で立てる事に安堵し、ため息を吐く。すると、何か割れた音がした。

音元の方を向いてみると、花瓶を落としたまま固まってる人がいた。

「……意識が戻ったのか？」

「え？…あ、まぁ」

知り合いにこんな人いたっけ？と思いながら質問しようとすると。

「あ、あの、聞きた「良かった！」ムグ！？」

「良かった！！本当に！……本当に良かった！！！！」

「！！！！！！！」

全力でハグされ、あまりの激痛に遠い場所に旅立った。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

新しい生、新しい繋がり、それらを受け入れ始めたとき。
奪われたモノのが何なのか理解する。

呪は月を擁いて　第一話

『家族になろう』

第一話　『家族になろう』（前書き）

まとめました。

第一話　『家族になろう』

目覚めてから３０分がたった、が……

「すまない」

「大丈夫ですよ」

「だが、私の所為で……」

「大丈夫ですって」

「怪我人の、傷口を開くような事は、してはならんだろう？」

「まぁ、そうなんですけど、それより質問に……」

「……すまない」

「や、ですから……」

こんな遣り取りを続けていた。

「すまない」

「ですから……」

「本当に、すまない」

「……」

いい加減、嫌気がしてきた。

「もういいです」

「しかし！！わた「質問に！答えて！くれませんか！！」……わかった」

やっと質問に答えてもらえる。

そう思い脱力し、大きくため息を吐くと、激痛を感じた。

「グゥ……！！！！」

「大丈夫か！？」

「は、はいぃ」

情けない声が出る。

「すまない、私のせいで……」

「だ、大丈夫です」

「……すまない」

「や、ですから……」

そして、ループした。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

――――さらに３０分後――――

ようやく、よぉーやく拷問が止まった。
再開される前にさっさと質問を終えよう。

「なんで、俺は怪我をしてるんですか？」

「……事故に遇ったからだ」
「事故？」
「ああ、事故だ」
「なんで、事故に？」
「それは……」
「それは？」
「それ…は……」

……俯いてしまった。中々ヘヴィな事故らしい。仕方ない、質問を変えよう。

「言いたくないなら、いいです」
「……いや、なんと言ったらいいか、判らなくてな……すまん」
「いえ、ところで……」
「……なんだ？」
「貴方は……」
「……ん？」

「貴方は、どちら様ですか？」

「っ！！何を――――」

「え？」

初対面じゃないのか？

そう思い視線を向けると、纏う空気が変わった。

「――――何を言っているんだ！！神威！！」

「……カムイ？」

「呆けるな！！」

んな事言われても……

「お前の『名』だろう！？」

「俺の、『名』？」

「そうだ！忘れたのか！？」

そんな名前で呼ばれた事は無い。

「……まさか」

とは、言えなかった。

「……本当に、忘れ……たの……か？」

縋るような視線と、

「――――ッ！！」

溢れそうな『何か』を耐える表情に気づいたから。

◇◆◇◆◇◆◇

面会時間が過ぎ、1人になった。

疲弊した頭で考える。あの人――――織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）さんが、教えてくれた事を。

漆月（しつづき）　神威（かむい）

俺の名前。

漆月（しつづき）　龍我（りょうが）　漆月（しつづき）　絆（きずな）

俺の父と母。

織斑（おりむら）　一夏（いちか）　篠ノ之（しののほうき）　箒

俺の弟分と妹分、らしい。

……気付いた。ここで…ここまできて、初めて気が付いた。

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉ＳＦの、世界

理解した途端、凄まじい拒絶心が産まれた。

――――ッ！！なんで！？なにがあった！？

混乱する頭で『こうなる前』を思い出す。

そうだ……俺は！俺達は、車で！！

両親の車に乗り、年1度の親戚が集まる家に向かう道中。

こ、交差点の所で

赤信号を無視した、大型トラックに。

……事故に、あった……

横から突っ込まれ、後部座席の窓に、寄掛かっていた俺は。

そ、そのあと……

強い衝撃を受け、反対側の窓を割り、宙を舞った。

片ほうが、ぁ、あかくて

片目が血で染まり、朦朧とする頭で聴いたのは。

……おかん、と

片腕が動かない母の、『死なないで』という、叫び『声』と。

おやじ、が……

頭から血を流す父の、『遺り残した事が有るだろう』と、怒り『声』で。

つくり、かけ、のぷ、プラモ……

頭に浮かんだのは、『創り操りたい』プラスチックキットシリーズ。

ぉれ、は

『ガンダム創りたい』と『声』に出て。

ふた、り

父と母の、色々な『声』が聴こえた後。

めが

酷く眠くなり、視界が黒く染って。

しろ、ぃ

白い『場所』にいて。

くぅ

そして、影に、喰われた。

うぅ

助けを求め、両親(ふたり)の『名』を呼ぼうとして、気付く。

ぅあ？

『名』がわからない事に、思い出すのは影(あくま)の『声』。

――――対価はお前の名と情有る名（にんしき）（つながり）

……！？

――――それを

ぁ

――――我が

ぁぁ

――――喰らう！

ぁぁぁぁ！！

怖い位、冷静に、理解した頭。だけど、心は、

ぁぁぁぁ

なにも受け入れず、全てを、拒絶した――――

◇◆◇◆◇◆◇

日が暮れた道を、足を引き摺るように、歩む。
あの子、神威の事を思いながら。

忘れられた、事が、信じられない。信じたく、ない。
夢で、悪夢で在ってほしい。そう願う。

全部、あの親友(ばか)が仕組んだ悪ふざけで、家の扉を開ければ、皆揃って出迎えてくれる。

そんな、逃避するような思考が、生まれてくるが、

――――貴方は、どちら様ですか？

神威の、他人に向ける、目が、言葉が、それらを否定し、現実だ

と、告げる。

「――――っ！……はぁ」

歩みが止まり、ため息が出る。

「一夏に、何と言えば……」

一夏（おとうと）の顔が、頭の浮かぶ。

そして、共に過ごした、暖かい日々も――――

◇◆◇◆◇◆◇

一夏は、神威に良く、懐いていた。

神威の後に続き、その後を、箒が追いかけた。

いつも、三人でじゃれ合っていた。三人で喧嘩していたりもした。

直に仲直りをして、三人で笑い合っていた。

そんな三人を見ているのが、堪らなく――――好きだった。

稀に、私もその輪に入り、笑い合っていた。

「本当の兄弟みたいだな」と、言えば。
一夏も箒も、神威も嬉しそうに、笑っていた。

「金魚の糞みたいだな」と、からかえば。
一夏は真っ赤になって必死に否定し、箒は恥ずかしそうに顔を伏せ、神威は困り顔で、笑っていた。

親友(たばね)はその輪を、面白くなさそうに、見ていた。
箒(いもうと)を取り戻そうと、突撃し、失敗して、「お姉ちゃんのバカ！」と言われ、撃沈した。
腹を抱え笑う私に、泣き付き、私は、拳で慰めた。

そして、そんな私達を見守る、二人の視線(め)。

龍我さんと絆さん、私と一夏の、本当の親と――――言えた人達。

私達を産んだ親(ひと)に、棄てられたあの日、二人は直に、駆けつけてくれた。
抜け殻のようになる私を、涙を流す一夏を、力強く、癒すように、抱きしめてくれた。

「よく頑張ったね」と言い、頭を撫でてくれた、龍我さんに。

「もう大丈夫よ」と言い、抱きしめてくれた、絆さんに。

逞しさに、安心感に、暖かさに、温もりに、護るように抱きしめてくれた、優しさに。

涙が溢れ、私は、一夏は、『声』を上げて、泣いた。

この日から、龍我さんと絆さん、神威の住む家が、私と一夏の、帰る『場所』に、なった。

家へと帰る道中、私と一夏を挟み、歩調を合わせ、護り包むように、歩いてくれた。

繋ぐ手に、恥ずかしさを覚えたが、それ以上に、比較にならないほどに、嬉しかった。

家に着くと、神威が「おかえりなさい！」と、迎えてくれた。

一夏は直に、「ただいま！」と返し、嬉しそうに、笑っていた。

一夏の返事を聞いた後、神威は私を見上げ、一夏も釣られるように、私を見上る。

一夏と目を合わせ、一度頷き、神威と目を合わせ、「ただいま」と、返し、笑った。

この時から、私達は、家族と、呼び合う、呼ばれ合う、関係になった。

神威は、もう一度「おかえりなさい！」と言い、嬉しそうに、本当に嬉しそうに、笑った。

此処から、新しい生活が始まった。笑顔ばかりの、幸せと呼べる、日々が。

些細な事で喧嘩しても、稀に涙を流しても、幸せだと、胸を張って言える、日々が。

ずっと、ずっと続くと、信じていた――――かった、日々が。

◇◆◇◆◇◆◇

――――気が付くと、玄関の前だった。

扉を開け、習慣となった言葉を掛ける。

「……ただいま」

返す『声』は無く、私の『声』だけが響いた。

「……一夏？」

一夏（おとうと）を探そうとして、思い出す。明日まで、親友（たばね）に預けていた事を。

「……はぁ」

どうやら、相当堪えているらしい。危ない足取りで、自室を目指す。

如何にか辿り着き、扉を開ける。扉を閉めることを、忘れたまま進み、ベットに倒れ込む。

そして、枕元に置かれた物が、視（め）界に入る。

「……縫い包み」

体を反転させ、手を伸ばし、胸元に抱き寄せる。

――――ハッピーバースディ！！

一夏と箒、神威がプレゼントしてくれた、兎の縫い包み。

一緒にいた束（うさみみ）は、嬉しそうで、悔しそうな表情（かお）をしていた。

「ふふっ」

思い出し、笑う。だが、直にため息へと変わる。

「……はぁ」

宝物(たいせつなもの)を、強く、強く抱き締める。

「……神威、どうして……」

今朝別れたときは、

――――いってきまーす！

太陽を思わせるような、笑顔だったのに。病院で、目覚めた後は、

――――貴方は、どちら様ですか？

窓に映る欠けた月、暗い夜の象徴のような、冷めた空気を纏っていた。

「……はぁ」

月を視界から外し、開けたままの扉を視て気づく。

「家(ここ)で一人になったのは……初めてだな」

いつも、誰かが家にいた。そして……

「神威も……」

当然いた。だが、今は病院で、一人。

「初めて、会ったときは……」

お互い、一人だった。

「……神威は」

一人で、泣いていた。

「……」

今、記憶の無い神威は？

「泣いているに決まっている！！！！」

私は、弾かれたように飛び起き、病院へと、駆け出した。

龍我さんと絆さんが残した、『ねがい』を、思いながら――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――駆ける。病院へ、神威の元へ、駆ける。

大地を、踏み潰すように、蹴り砕くように、駆ける。

神威に忘れられた衝撃で、抜け落ちた『声』を、拾いながら、駆ける。

父親（りょうがさん）と母親（きずなさん）の、最後の『ねがい』を思い出しながら、駆ける。

――――神威を、頼む

――――神威を、お願い

何度も二人に謝りながら、何度も自分自身（おろかもの）を罵りながら、神威（おとうと）の元へ駆ける――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――ああああああああ！！！！

うそだ！うそ、うそだ！なんで！なんで思い出せない！？
こんな、こんな馬鹿なことがあるか！！あって、あってたまるか！！
っ！はぁはぁ、おちつけ、おちつけ！こんな夢のような！……ゆめ？……そうだ！
夢だ！夢に決まっている！！じゃなけりゃ忘れるなんてない！ある
わけない！！
みんな夢だ！みんな……皆だ！！

俺は、必死に想い、頭を毟り引き出そうとして、他の人達の『名』に想いをむける。

いつも馬鹿をやり、もてる為に音楽を遣り始めた、男友達に。

いつも殴って叱っていた、男勝りの、姉貴分に。

いつもじゃれて、引っ付いてきた、弟分と妹分に。

いつも嫉妬と嫉みを向けてきた、年上の、女友達に。

だが、誰一人と想い出せず、同時に感じる痛みが、現実だと告げる。

う、そだ！うそだ、うそだぁ！うそだうそだうそだうそだうそだうそだ
うそだ！
うそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだうそだ

うそだうそ――――うそだ！！
うそだって、だれか、うそだって、いってくれ、うそだって、いって…ぅそ、だ、て

狂いそうだった俺は、こうなった原因を考え、在る『場所』を思い出す。

……そうだ、あそこだ、白い『場所』だ！
あそこで、あの、あの影（やろう）に！俺は！俺はぁ！！

全ての原因を『影』と決め付け、憎み始める。

あれが、あいつが！あいつが俺を！！あいつの所為で！俺は！俺はこんな目に！！
あのクソ影（やろう）所為で！！……殺す、殺してやる！！ブッ殺してやる！！！！

心の底から殺意が湧き上がり、殺しに行く方法を、探し求める。
が、直に至る。

確か事故で……！！クッ、ハハ！アハハハ！！簡単、簡単じゃないか！
死ぬだけでいいんだ！なんだ、簡単じゃないか！！

濁った目で周りを見渡し、昼間使った果物ナイフに、視（め）界が留まる。

晒う表情（かお）抑えられずに、俺は、凶器（はもの）に、手を伸ばした――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――人混みを掻き分け、駆け抜ける。

後少し、後少しだ！後少しで神威の元に！！

急ぐが、赤信号に、停められる。

「くそ！」

赤から青に変わる時間は、約一分。その一分が、とても永く感じる。

まだか！まだなのか！？

漸く青に変わる。その瞬間、又駆け出す。

病院に辿り着き、階段を駆け上がり、神威の病室を目差す。

［漆月　神威］と書かれた扉の前で、一度止まる。

二、三回深呼吸をし、開け様とした瞬間、看護婦に呼び止められた。

此処に居る理由を、責め問われた。

急かすようになる説明で、舌足らずになるが、必死に語り続ける。

最初は、眉間に皺を寄せていたが、次第に苦笑へと変わり、

「少し、待っていて下さい」と言い、離れていった。

言葉に従い留まるが、此処で待つのは、拷問のように思える。

戻ってきた看護婦に、「人が出払った時、ナースコールでは対応出来ませんので」と、

ＰＨＳを渡し、「部屋から連れて出る場合は、必ず連絡して下さい」と言い、去って行った。

私は礼を言い、深く頭を下げ、深く感謝し、見送った。

やっと、やっと神威に会える

扉を開け、視界に映る姿に、私は固まり、凍りついた。

神威は、凶器(はもの)を胸に、衝き立てようとして、涙を流し、身体を震わせていた――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――凶器(はもの)に、晒う表情(かお)が映る。
白い『場所』で最後に見た、あの影(あくま)と同じ、晒う表情(かお)が。

俟っていろ、クソ影(やろう)！

ナイフを逆手に持ち、腕を高く上げ、胸を目掛け振り下ろす。が、

……！？なんで！？

胸を刺す、その直前で刃が止まる。信じられず、もう一度繰り返す。

ぐ、くそ！

が、結果は同じ。

――――呪(ねがい)は叶う

何度も、何度も繰り返す。頭に響く『声』を振り払うように。

――――死なないで

頼む！死なせてくれ！

――――遺り残した事が有るだろう

ここで！この世界で！遺り残した事なんて……無い！

聴きい入れててしまったら、両親を怨んでしまいそうで。

そして、本当の原因に気づいてしまったから。

――――呪(ねがい)は叶う

呪いを懸けたのは俺自身、死の間際に懸けたのだと。

……もう、やだ……死にたい

刃先を、悲願するように胸に押し付けるが、呪いがそれを拒む。

死なせて、よぅ

死に逃げる事も出来ない現実に、涙が溢れ視(め)界が霞む。

……だれか

この世界で、俺を知る者、理解できる者など居ない。と、解っているが、
『声』が漏れるのを留められなかった。

「だれか、たすけて……」

呟いた途端、凶器(はもの)が叩き落とされていた。抱えていた狂気と一緒に。

呆然と見上げてみると、昼間と同じ『何か』を堪えた、織班　千冬さんの姿が在った。

◇◆◇◆◇◆◇

――――信じられなかった、目に入る姿が。

固まる思考と身体、だがそれは一瞬の事。

「だれか、たすけて……」

助けを求める神威の『声』で動き出す、手に持つ刃物を払い落とす、『ねがい』と共に。
この後、呆然と見上げてくる神威を、見つめ返す。

ここまで、ここまで追い詰められていたのか！！

気づけなかった自身を罵倒し、怯え始める神威に言葉を懸けようと口を開くが、
何を言えばいいか解らない。ならば気持ちだけでも、と、抱き締める。

「！！」

身体を硬直させる神威の頭を撫でる。

「……ぁ」

解き溶かすように何度も、何度も撫でる。

暫くすると、硬直を解き、少し身を委ねてきた。
少しでも受け入れて事を嬉しく思い、同時に、とても落ち着いた自分に気づく。

以前に、自分自身に、懸けてもらった『声』を紡ぐ、
父親（りょうがさんきずなさん）と母親の想いと一緒に。

◇◆◇◆◇◆◇

暖かい、此処(うでのなか)はとても暖かい、そう思う。

「「よく頑張ったな」」

よく響く『声』が聴こえた。顔を上げると、優しい表情(かお)が見えた。

「「もう大丈夫だ」」

頑張った、大丈夫だ、という『声』に助けられた気がした。
同時に、罪悪感が湧いてきた。彼女にとって俺は紛い物(にせもの)。そう伝えようとするが、

「俺、神威じゃ……」

言えなかった。言えば、この暖かい温もりが無くなってしまいそうで。

「神威だ」

「……え？」

「お前は神威だ。今、お前が神威で在る事に間違いない。お前は、神威で、いいんだ」

お前は神威でいい。その言葉に救われ、身体が軽くなり、涙が出てきた。

さき程とは違う涙が。そして、言葉は続く。

「初めからやり直そう、一緒に、家族として」

「……家族」

「そう、家族だ」

「……なりたい」

「そうか、なら神威……」

俺を放し、両肩に手を添えて、視線を合わせ言った。

「「「家族になろう」」」

心にまで響くような想いに、俺は、『声』を上げて、泣いた。

◇◆◇◆◇◆◇

――――家族になろう

以前に言ってくれた、両親（ふたり）の言葉。

泣く神威を抱きしめながら、頭をあやすように撫でながら、思う。あの時の私のように救われたのかと。重荷を下ろしてやることが出来たのかと。

神威は何かを抱えていた。それが何なのかを問い質すことはしない。

今は、笑うことが出来れば、笑い合うことができれば、それで良いと思う。

気が付くと神威は寝ていた。

苦笑しながらベットに寝かせ、ＰＨＳを取り出す。今日は此処で、神威と一緒に休ませてもらおうと、許可を取る。

看護婦から許可を貰い、私も同じベットに横になる。神威を抱き、寝顔を見ながらこれからの事を考える。

一夏と箒は泣くだろう。束は……どういった反応をするか分からないが、大変な事になると思う。

だが、大丈夫、という確信に似た思いもある。

神威と寄り合い、また家族になれた。一夏と箒ともなれるだろう。

束は……分からないが。

そのようなことを考えながら、私は目を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇

――本当に、いいのか？

――うん！

――でもな…

――じゃあ1つ、『おねがい』！

――うん？

――お姉ちゃんと！みんなを！よろしくお願いします！！

――ああ、わかった！約束する！

――うん！

また1つ、呪(ねがい)いが掛けられた。

◇◆◇◆◇◆◇

失った者は、決して戻らない。

その事を、理解し、受け入れる者もいる。

逆に、拒絶し、受け入れない者も。

呪は月を擁いて　第二話

『もういっかい』

第二話　『もういっかい』（前書き）

前、後編くっ付けました。

第二話　『もういっかい』

時計の秒針が動く音しか聞こえない。
他の音が聞こえないくらいに、俺は時計に意識を集中させていた。
只今１２時４２分３７秒、約束の時間は１時半。
早く来てくれ、と思う反面、まだ来てほしくない、とも思ったりもする。
今日、俺は原作主人公&ヒロインの、一夏と箒に対面する。
少し楽しみだが、途轍もなく不安である。

「こんなのお兄ちゃんじゃない！とか言われたら……死ねる」

昨夜、千冬さんのおかげで大分調子を取り戻せた。自分でも調子良い奴だと思う、が！
また、ダークサイドに堕ちそうな気がする。なんとなく。

「はぁ、仕方ないんだけどな」

少しは踏ん切りがついたつもりだ。
この世界で生きていこう、かな？ぐらいには思えるようになった。
これも千冬さんのおかげだ。昨日の昼間とは違い、頼れる姉貴肌だった。

「なにがあった？」

わからないが、思いつく事といえば――――

「ブラコンだから、か？」

――――だった。今日、膳は急げと一夏に会わせようとするところを考えると、そう思う。

さらに、箒とも会わせようとするのは――――

「シスコンでもある、のか？」

――――と、本人が聞いたら鉄拳制裁されそうなことを考える。

ここまで考えて、ある人の名前が出てきてない事に気づく。

「どうして、篠ノ之　束の名前が出無い……？」

箒とも知り合っているから、知らないはずがない。少なくとも友達以上は確実、

俺に名前くらいは言ってもいいはずだ。

「俺と仲が悪いから…言わない？」

有りえる、箒とかなり仲がいいらしいのだ。

俺は嫉妬対象くらいにはなってそうだ。そうでなければ…

「……危険物だから話に出さなかった……とか？」

……理由としてはこっちの方が強い気がする。なんせ天災とか言われてたし。

「なんにせよ、今は一夏と箒か…」

時計を見る。只今１時５秒、３０分を切った。
「結局は出たとこ勝負、なんだよなぁ……」
そう打ち切り、横になるが……
「――――暇だ」
そう、暇なのだ。
仕方ないのでまた考え事をする。とてもくだらない事を。
「起きて、知らない天井だ……をやってない」とか。
「あれ？俺、オリ主？」とか。
「見られてたら危ない人確定じゃね？」とか。

◇◆◇◆◇◆◇

私は今、病院へ向かってる。一夏と箒と一緒に。
二人は手を繋ぎ、私の前を歩いている。その後姿は、微笑ましく思う。

今朝一度帰宅し、一夏を迎えに行ったが大変だった。

篠ノ之家に着いた直後、一夏と箒が「「おにいちゃんは！？」」と、詰め寄ってきた。

なんとか落ち着かせ、今の神威を説明する。

この二人に隠し通す事は不可能に近い。ならば、と打ち明ける。

怪我をしている事を、そして……記憶を無くしている事を伝える。

酷な事を言っている。だが、今迄の繋がりは断ち切られてしまったのだ。

新しい繋がりを結ばなければならない。遅くなれば、悪い結果しか生まないだろう。

それに、この二人なら、と思う。

現に、伏せていた顔を上げ、「おもいだしてもらう！」と、意気込む一夏に、

「うん！わたしも！」と、箒が続き、神威と会ったらどうするかを話し合っている。

――――強い

そう思い、頬が緩むのがわかる。そんな私に、

「私も行ってみようかな？」

と、束が言ってきた。

「……頭でも打ったか？」

と、返した私は悪くない筈だ。理由を聞いてみると、

「ちょーっと興味ある」

だった。その答えに私は当然、

「駄目だ」

と、返した。

「なんでー！？」と喚く束を強制的に黙らせる。

当たり前だ、今の神威に束を出したら……酷い結果にしかならないだろう。

昼食を摂った後、病院へ向かうことを二人に告げる。

二人は元気好く「「はーい！」」と返した。寝転ぶ束を気にせずに。

神威の病室をノックする。

「ど、どうぞ」

と、緊張が読み取れる返事だった。

扉を開けると、一夏と箒が神威に駆け寄って行った。

私も追うように歩み寄る。

大丈夫、きっと大丈夫

そう自分に言い聞かせながら……

◇◆◇◆◇◆◇

扉が開き二人の子供が駆けてきた。

おそらく、この二人が一夏と箒なのだろう。

「おにいちゃん！だいじょうぶ！？」

「いたくない！？」

「う、うん。大丈夫、痛くないよ？」

「「ほんと！？」」

「ほんと」

「「ほんとにほんと！？」」

「ほんとにほんと」

いきなりの質問攻め、純粋に心配しているんだろう。
緊張は直に無くなり、代わりに笑みが浮かぶ。
「？おにいちゃんわらってる？」
「あ、ほんとだ」
「ん？……ああ」
「たのしいの？」
「いや……嬉しい、かな？」
「うれしい？」
「どうして？」
「心配してくれたおかげ、かな？」
二人は不思議そうな顔をした。
「ぼくのおかげ？」
「うん、そうだよ」
そう一夏に返せば、嬉しそうに笑った。
「わたしは？」

「もちもん箒も、ありがとう」
そう箒に返せば、嬉しそうに笑った。
そして二人は、
「ぼくのおかげだって」
「わたしはありがとうっていわれたよ？」
「ぼくのおかげ！」
「わたしだよ！」
「ぼく！」
「わたし！」
喧嘩を始めた。でも、それすらも微笑ましい。
そうして見ていた俺は、
「おにいちゃん！ぼくだよね！」
「え？」
「おにいちゃん！わたしだよね！」
「ええ？」
喧嘩に捲き込まれた。

「おにいちゃんぼくのおかげだって！」
「わたしにありがとうって！」
「あ、うん……そうだね」
しかも、喧嘩の原因は俺らしい。
「おにいちゃん！」
「どっち！？」
「……同じじゃ、駄目？」
「「ダメ！！」」
……如何したらいいんだ？これ
千冬さんに目で助けを求めたが、笑って返すだけだった。
どうやら、助け舟は出してくれないらしい。
「じゃ、じゃあ！一夏は男の子で一番！」
自分でも、訳分からん事を言い出す。ヤケクソとも言うが。
「おとこのこでいちばん？」
「そう！一番！」
「わたしは？」

「箒は女の子で一番！」
「やったぁ！」
何の一番かは、聞かないでほしい。頼むから。
「ぼくがいちばん！」
「えへへ、いちばん」
どうやら、俺の想いは通じたらしい。
喧嘩も収まってくれた――――
「ぼくがいちばんだって！」
「わたしだっていちばんだよ？」
「ぼくのほうがすごいんだ！」
「わたしのほうがすごい！」
――――わけではなかった。
ホント如何すればいいんだ？これ
一夏を褒めれば箒が、箒を褒めれば一夏が、褒め言葉を求め、
二人を褒めれば比べ合う、そんな状態が暫く続いた。
だが、千冬の、「林檎を食べるか？」の言葉に、
二人仲良く「「たべるー！」」と答え、即座に喧嘩を止めた。

そうか、物で釣ればいいのか
林檎を食べながら、子供の扱いを一つ学んだ。
そして、もう一つ学んだ。

「ねえ、おにいちゃん」

「ん？」

子供は時に――――

「ほんとにわすれちゃったの？」

「ッ！！」

――――とても、残酷なのだと。

◇◆◇◆◇◆◇

先ほどの微笑ましい空気が、無残に散った。

神威は今、問い詰められている。一夏と箒に。
過去に在った事を次々と述べる、憶えていないのか？と。
だが、対する神威は、

「ごめん、ごめんな……」

としか返せないでいる。
二人の問い掛け一つ一つに、表情を歪ませる。
それでも笑う、笑おうとする姿は、とても……痛い。

視ていられない。
直にでも割って入りたいが、それは出来ない。
これは、神威自身が望んだ事。
これを条件に、一夏と箒に会う事を承諾したのだ。
だから、出来ない。

私に出来る事は『ねがう』こと、それだけだ。
笑い合う為に、今を乗り越えてほしい。
きっと繋がる、強く結ばれる。
そう『ねがう』ことだけだ。

言葉数は、減っていった。

箒は、視線で、訴えるだけになり。
一夏は、それでも、と、問い続け。
神威は、歪んだ笑みで、謝り続けていた。

一夏は、押し黙った瞬間、病室を飛び出した。

「一夏！？」

「追ってください！千冬さん！」

「だが…「早く！」…く、直戻る！」

一夏を追い、私も病室を飛び出した。

残された神威と箒に、後ろ髪を引かれながら――――

◇◆◇◆◇◆◇

お前は神威じゃ無い。

そう、言われた方が楽、なのだろうか。

一夏と千冬さんが消えて行った扉、

閉められた扉は、俺を拒絶しているようにも見える。

「やっぱ俺じゃ駄目、か……」

舞い上がっていたんだろう、千冬さんに認められて。

彼女一人に認められて、全てに認められた気になっていた。

実際は違うと分かっていた、つもり。本当に、つもり、だった。

「――――嫌になる」

自分の馬鹿さ加減が

俺は、漆月　神威の皮を被っただけの、偽者。

あのクソ影（やろう）と同じ、漆月　神威を喰った、この子達から奪った、悪者。

「おにいちゃん……」

「え？」

「あの、ごめんなさい」

俺は、今、どんな表情（かお）をしているんだ？

「なん、で」

「おにいちゃん、くるしそうなかお……」

なんで、箒があやまる？

「わたしといちかが「違う！！」――ひっ！」

「あ、ごめん……」

俺は、なにをしている？

「……ごめん」

「おにいちゃん？」

「ごめん、ごめんな…」

俺は、何に対してあやまっている？

「おにいちゃん、て……」

「……手？」

「うん、て」

恐る恐る出した手を、箒が握る。

暫くして、ふにゃりと笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

「まだ、戻らないつもりか？」

隣に座る、一夏に問いかける。

「……うん」

「……そうか」

まだ、戻るつもりは無いのだろう。

一夏が神威を、どの様に思っているのか聞いてみる。

「今の神威を、どう思う？」

「おにいちゃん、おにいちゃんじゃなかった」

確かに、神威の纏う雰囲気は変わっていた。

「でも……」

「ん？」

「おにいちゃんだった」

雰囲気は違う。だが、一夏と箒の言葉に、必死に応えていた。

「今の神威は……嫌、か？」

一夏は首を振る。

「やくそく」

「約束？」

「うん、やくそく、してた」

なるほど、そういう事か。

つまり、一夏は神威の変化など関係なく、

「ならばもう一度、約束すればいいじゃないか」

「もういっかい？」

「ああ」

「……うん！もういっかい！！」

ただ、約束を忘れた事を、其れだけを怒っていただけだ。

だから、事が済めば、

「一夏、戻るか？」

「うん！」

もう、笑顔だった。

◇◆◇◆◇◆◇

「えへへ」

どうして、笑える？

「ねえ、おにいちゃん」

頭が、追いつかない

「ぎゅーってして？」

抱きしめろ、ということか？

「だめ？」

その言葉に、身体が勝手に動き出す。

そうしなければならない、というように。

「んふー」

俺は、この子を抱きしめる資格が、あるんだろうか？

恐る恐る聞いてみる。

「俺で、いいのか？」

「うん！」

「前と…違うぞ？」
「んー……うん」
何故、やはり、その二つが頭の中を飛び廻る。
「まえはポカポカしてた」
「……」
「いまはじ～んってする！」
「じーん……？」
「うん！じ～んって！」
よく、わからない
「あー！！」
振り向くと、一夏と千冬さんがいた。
「ほうきずるい！」
「えへへ～いいでしょ？」
「おにいちゃん！ぼくも！」
「ダメ！まだわたし！」

困惑する頭で千冬さんを見る。
千冬さんは、強く頷いた。
――――お前は神威でいいんだ
昨夜の言葉が、頭を過ぎる。
そうか、そうだった
この子達は最初から、俺を神威(おれ)だと受け入れていた。
拒んでいたのは、俺自身。気づけば簡単な事だった。
笑みが浮かんで来るのが分かる。
「あれ？おにいちゃんわらってる？」
「あ、ほんとだ」
「ん？ああ、嬉しいからな」
「「なんで？」」
「一夏と箒がいてくれたから、かな？」
一夏と箒が嬉しそうに笑い、千冬さんが微笑み、
「ありがとう」
俺は、この世界で始めて、心から、笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

夜、月を見ていた。

明日、俺は退院する。
暫く通院しなければならないが、少しの間で済むだろう。

「今日は楽しかったな」

あの後、三人と過ごした時間は楽しかった。
面会時間を過ぎても、居座ろうとした一夏と箒。
その二人を帰すのは、中々に大変だった。
だが、その出来事も、楽しいと言えた。

そして、強いと思った。
眩しいくらいに、強く視えた。

「……俺は、弱い」

そう思い、窓に項垂れる。

「強くなりてぇ」

「ふふ、強い力……あげようか？」

「！！」

顔を上げると、機械的な『何か』に身を包んだ、

「やぁ、良い夜だね」

篠ノ之　束の姿が在った。

不思議の国へ誘う、白兎のように。

◇◆◇◆◇◆◇

物語には、核と成るべきモノが在る。

時に人で、時に世界で、時に物で、時に言葉で。

核が解る時、本当の意味で幕が挙がる。

呪は月を擁いて　第三話

『魅せられて』

第二話　『もういっかい』（後書き）

ちーねえが主人公に思えてきた……

お気に入りに登録してくれた方々、感想をくれた方、評価してくれた方、本当に励みになります。

ありがとうございます。これからも、この駄文を宜しくおねがいします。

第三話　『魅せられて』　（前書き）

束さん登場。

第三話　『魅せられて』

窓枠(境界線)の向こうに写る景色(みえるモノ)は、異世界(不思議の国の白兎)だった。

「インフィニット……ストラトス……」

「――――それ、この子の名前？」

違うのか？

「この子はまだ名無し、中々似合う名前が無くてねぇ……」

そう言いながら篠ノ之(白い兎)　束は雰囲気(すがた)を変える。

「Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ……いいね！これ以上、この上無い程ピッタリだ」

その雰囲気(すがた)はまるで肉食獣(けもの)。

「素敵な名前をありがとう、だから是非とも聞いておかないといけないね？」

俺(えもの)を見る目は全てを暴(たべる)くと告げている。

「何で言えたのかな？まるで『知っていた』かのように」

対する俺は、

「なんとなく？」

衝撃続きで脳が麻痺していたのだろう。
こんな言葉がサラリと出た。

「……ぷ、ふふ、あははは」

纏う雰囲気（すがた）が四散した。

「あははは！面白い、面白いよ！
記憶喪失と聞いて髪の毛三本分興味がでたけどこれは予想外！
これはもう別人だね！流石の束さんにも予想出来なかったよ！！！
うん、今の君はとっても面白い、喜べ少年！興味対象認定だ！！」

「…はぁ、ども」

「いえいえ～どういたしまして、だよ！
むふふふ……今日はこの子と来て正解だった。
私の勘がカオス理論を越える事も証明できたし！」

「……はぁ、そうですか」

「そうそう！うん、満足！余は満腹じゃ！
後は箒ちゃん抱き枕で夢の国に旅立てば万事ＯＫ！！
――――は！？ならば速く帰らねば！！ちーちゃんにばれちゃうし！」

「……はあ」

「じゃあね～むっくーん！！」

「あ、はい」

「ジュワッ！！」

と言いながら真下に降下、そして着地。
ＩＳ（？）を解除し、スキップしながら去って行った。
飛んで跳ねる兎のように。

「……なにしに来たんだ？」

頭を掻きながら考える。
一難去ってまた一難、そんな言葉が頭に浮かんだ。
篠ノ之　束とゆう嵐は、昼間の余韻を全て吹き飛ばし、疑問を残して去って行った。
ただ、大部分を占める疑問は、

「むっくん……」

俺は赤い毛むくじゃらか？　だった。

◇◆◇◆◇◆◇

翌日、退院を済ませた俺を、

「「おにいちゃーん！」」

「おー転ぶなよー」

一夏と箒、

「調子はどうだ？」

「おかげさまで」

千冬さんが迎えてくれた。

「そうか、では帰るか？」

「はい」

「二人は案内を頼む」

「「はーい」」

右に一夏、左に箒が、手を繋ぎ歩き始めた。

これから、俺にとって帰る『場所』となる家に。

帰路の途中、目の付いた物を一夏と箒が説明してくれた。
ここは何の建物か、この店にはどんな物が置いてあるのかを。
想い出話をする二人は、とても微笑ましく、自然と頬が緩む。

少し胸に刺さるモノがある、が気にしない。
この先何度も、何度でも味わう事になるのだ。
小さな棘など一々気にしてなど要られない。
そう思いながら歩む。

「もう少しで家に着く」

会話と思考の間に千冬さんの言葉が滑り込む。

「着けば昼食が出来ている頃だろう」

「……だろう？」

「……ああ、まだ紹介して無かったな。
篠ノ乃　束、箒の姉だ。束が今、昼食を作っている」

……束が昼食を作っている？
俺は今、幻聴を聞いたのか？

困惑顔で千冬さんを見る。
そんな俺をどう捉えたのか、警告に似た説明をした。
凄く真剣な目で。

「……束は、とんでもない奴だ」

でしょうね、突然目の前に居ましたから、しかも飛んで

「……束は、神威に興味を持っている」

知ってます、既に興味対象認定済みです

「……興味を持った相手に、何を仕出かすのか分からん」

……これが、最後の晩餐、なのだろうか？まだ昼だけど

「……何か遇ったら私を頼れ、必ず助ける！」

直に頼ります、直に助けてもらいます！

「必ず護る！」

「千冬さん……」

「神威……」

ドラマのクライマックスもどき（？）をしているうちに到着した。

これから暮らすこの家が、魔境の巣に見えたきた。

「おにいちゃん！ピンポンおして！」

そう言う箒が、死神に見えた。

原作一夏は、何時もこの様な目にあったのだろう。

「おにいちゃん！はやく！」

そう言う一夏が、悪魔に見えた。
原作ヒロイン達は、何時もこの様な思いをしたのだろう。

「ふふ、押してやれ」

そう言う千冬さんが、鬼に見えた。
原作生徒達は、何時もこの様に見えたのだろう。

ゴクリ　と唾を呑み、歩み出る。
震える指で、呼び鈴を鳴らす。

ピンポ～ン　と音が響いた後、轟音とも呼べる足音が近づいて来る。

「おっかえりー！！」

勢い良く開かれた扉から、篠ノ之　束が飛び出て来た。

極度の緊張状態の俺は、

「昨晩ぶりです束さん」

と、言っていた。

一瞬空けて、何か切れる音と凍りつく音を聞いた、気がした。
そして、背後から凄まじい怒気を感じた。

切れる音源は千冬さん、その証拠に、

「三人は先に中で待っていろ。私も用事を済ませたら、直に行く」

恐ろしい程、穏やかな優しい声色だった。

頷く事しか出来ない俺に対して、

「「はーい！」」

平然と返事をし、中に入る一夏と箒に、戦慄した。

慌てて二人を追いながら、束さんの姿を視界に入れる。

凍りつき、顔は土気色だった。

暫くして、断末魔が響き渡ったが、俺は聴いてないことにした。

◇◆◇◆◇◆◇

制裁事件数分後、昼食開始となった。

束さんは怪我一つどころか、髪や服の乱れ一つ無かった。

篠ノ之家の兎は化け物か？

「「「いっただっきまーす！」」」

「「いただきます」」

食卓に並ぶのは、普通に美味しそうな料理。

無数にある一口サイズのハンバーグ、大きなオムレツ、山盛りサラダ。

ソース、ドレッシングは一切かけられてない。

各手元に和風ソースとケチャップソース、それぞれ入った小さな器。

ドレッシングは和、洋、中、と小さめのビンに入れてある。

ご飯の相方はオニオンスープ、ハンバーグに合わせたのだろう。

取り皿が各自三枚、千冬さんの所にだけ大根下ろしがある。

え？これ本当に束さんが？

信じられず、束さんを凝視するがニコニコと笑ってるだけ。

「神威、残念だが現実だ」

どうやら、不思議の国では無いらしい。

「ご飯はね？楽しく美味しく食べるべきだと思うよ、束さんは」

……え、誰？この人誰？これ夢？

今度は開いた口が塞がらない。

「神威、本当に残念だが、現実だ」

どうやら、本当に不可思議の国では無いらしい。
ならば、俺がする事はただ一つ。
戦う（たべる）だけだ、この現実（りょうり）に向かって。

ハンバーグを箸で掴み、口に入れ噛み締める。
中から少し肉汁が出てきた。
小さなハンバーグでこれが出来るということは、相当な腕前だ。

ゆっくりと味わい、飲み込むと、口から漏れる。

「――――そんな馬鹿な」

否定したい、心の叫びが。

何やら喚く人がいるが、今の俺には余裕が無い。

次にオムレツに取り掛かる。
ケチャップソースを付け、口に入れる。
ふわふわだった。ケチャップソースもまろやか、お手製と解る。
なんとゆうハーモニー。そのハーモニーもケチャップソースで調整できる。

逃げるようにオニオンスープを飲む。
軟らかい辛さ、おそらくじゃが芋が使われている。
じゃが芋を磨り潰し、溶かし混んでいる。

戦慄しながら束さんを見る。

ふて腐れているが、如何したのだろうか？

次はサラダに挑む。使うドレッシングは和風。
噛むと野菜独特の歯応え。とても新鮮だと解る。
和風ドレッシングは青じそ系統、大根を下ろし状にして混ぜてある。
野菜と野菜のコラボ、合わない訳がない。
野菜の鮮度から、目利きも出来るのだろう。

全て飲み込み、一息つく。

「――――これが現実」

否定したい、魂の嘆きと共に。

兎が言葉で飛び跳ねているが、今の俺は本当に余裕が無い。

いや、まだ俺にはご飯(きぼう)が残されている。
決死の思いで口にかき込み、ふっくらとした米を噛む。
噛めば噛むほど甘さが滲み出てくるようだ。
その甘さも直に溶けていく、使われている水に秘密があるのだろう。

「――――完敗だ」

認めよう。これは完璧な、完全なる敗北だ。

「神威」

千冬さんは笑っていた。

全て分かっている、そう言わんばかりの、聖母のような笑みで。

きっと千冬さんも、同じ思いをしたんだろう。
そして、乗り越えてきたんだろう。この試練を。
ならば、俺も乗り越えて見せよう。

そう思い、もう一度戦(たべる)う事を始める。

暫くして、気づいた事を聞いてみる。

「束さん、何で泣いてるんですか？」

「誰のせいだよ！？」

……誰のせいなんだろうか？

◇◆◇◆◇◆◇

「待たせたな」

「……三人は？」

「寝ている」
「昼間から騒ぎっぱなしだったからねぇ」
束の隣に座り、同じように月を見上げる。
「……で？」
「うん？」
「話があるんだろう？」
「ふふ、ちーちゃんは鋭いなぁ」
「何年の付き合いだと思っている？」
視線を束に向ける。
「……この子の名前がね？決まったんだ」
束がリング状の物を懐から取り出す。
「……何と言うのだ？」
「Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ」
「……お前が付けたのか？もっと珍妙な名が付くと思っていたが」
「ひどいなぁ……確かに私が名付けたんじゃないけどね」

「誰だ？」
「むっくん」
「……何？」
「昨日会いに行った時にね、ボソッと言ってた」
「……知っていたのか？」
「知らないはずだよ、間違いなく」
「では何故？」
「わかんなぁ～い」
束はお手上げ、とばかりに首を振る。
「でも、さすが私の興味対象。そうでなくっちゃ」
「……まだ言っていたのか、それ」
「と～ぜん、まだまだ言うよ～？」
「嫉妬対象じゃなかったか？」
「前はね。でも今は違う、別人だよあの子」
「……神威だ、あの子は」

「ふふ、そうだね」
自然と顔が月に向く。
「……明日の事は？」
「話してある」
「そっか……それにしても、あの二人がねぇ……」
「ああ……信じられないな」
「そうだねぇ……ちーちゃんにとって本当の親だから、ね？」
「当然だ、束もお世話になっただろう？」
「うん、感謝対象だからね」
「ふふ、そうだったな」
静かに笑い合う。
「……ねえ、ちーちゃん？」
「なんだ？」
「この子、むっくんに持っててもらおっか？」
「……何故だ？」

「お守り、かな？」
「……なるほど」
「いい？」
「ああ、良いんじゃないか？」
「よし、じゃあ決まり！この子も喜ぶしね」
「喜ぶ？」
「うん、この子名前貰ったの、ほんとに嬉しかったみたい」
「……」
「この子、むっくんに凄く感謝してる。力になりたがってる」
「だから、か？」
「うん、そう」
「……珍しいな」
「ん？」
「自分の作品（こども）を譲るなど」
「ん～……月に、魅せられて、かな？兎だけに」

「そうか、ふふ……」

「そうだよ、ふふ……」

月の下、私達は笑い合った。

◇◆◇◆◇◆◇

別れは必ず訪れる。人だけでなく、物にも、想いにも。

当然、悲しみ泣く者は居る。逆に、慶ぶ者も。

そして、それらに当て嵌まらない者も。

呪は月を擁いて　第四話

『明日は晴れ』

第三話　『魅せられて』　（後書き）

うちの束さん家事ぱーふぇくと。

第四話　『明日は晴れ』（前書き）

巷に雨の降るごとく。

第四話　『明日は晴れ』

今日は、別れの日。

漆月　龍我　漆月　絆

俺の……いや、漆月　神威の両親。

その二人の、別れの儀式。

外は雨が降っている。貫くような、強い雨が。

二人は今、その身を焼こうとしている。

ゆっくりと、棺が進む。

まだ火の無い、炉に向かって。

一夏は、耐えていた。

口をへの字に曲げて、『何か』を耐えていた。

手は、千冬さんと繋がれている。

千冬さんは、いつもと変わらない姿だった。

ただ瞳だけが、揺れていた。

『何か』を誤魔化すように。

今になって、気づく。
家に二人の部屋が在る事。
一夏が『別れ』を解る事。
他に織斑の『名』が無い事。

つまり、そうゆう事なのだろう。
箒は、じっと棺を見ていた。
まだよく分かってないようだが、
もう『会えない』事、それが解るようだ。
束さんの手を、握っている。

束さんは、遠い目をしていた。
此処では無い、遠い『何処か』を見ている。
そんな目をしている。

二人にとっても、特別だったのだろう。
漆月　龍我　漆月　絆　この両名は。
束さんが兎耳を外している訳、そこにあるのだろう。

周りも、悲しむ人が殆ど。
中には不快な輩がいるが、あまり気にならない。
俺自身が、一番不愉快だからだ。

漆月　龍我　漆月　絆
この二人に、深い悲しみが持てない。

昨日、初めて顔を見た。

今日、別れる。

言ってしまえば、顔を見ただけの――――他人だ。

俺に有るのは、申し訳ない思い。
俺が漆月　神威で在る事。
詫びるような思い、それだけだった。

棺が納まり、蓋がされる。
炉に火が灯され、炎に変わる。

涙を流す者、嗚咽を出す者、顔を逸らすもの。
その中、此処に居るのが、間違いに思えてくる。

暫くして、人が別室に移動し始める。

俺も促されたが、一人になりたい事を告げる。
察した千冬さんが、皆を促し、残してくれた。

一人になった途端、深いため息が出た。

俺が今、漆月　神威で在る事。
それが、酷く、嫌だった。

雨が降る外を見る。

冷たい空気に触れたくなり、外に出た。

冷気を吸い、肺を満たす。

千冬さん、一夏、箒、束さん。

四人と同じ想い、悲しみを味わいたい。

だが、冷えた頭が否定する。不可能だ、と。

嫌に冷たい、ため息が出る。

無性に、雨に打たれたくなった。

きっと、懺悔でもしたかったのだろう。

また歩み出そうとして、

「風邪引くわよ？」

止められた。

雨以外の音が、酷く、鬱陶しく感じた。

◇◆◇◆◇◆◇

告別式を終え、去る車の中、先の出来事を思い出す。

漆月　神威、漆月　龍我の子。

此方が話し掛けた時、不快感を出していた。
その不快感は話が進むにつれ、警戒に変わった。

特に警戒を露(あら)わにしたのは、
私が更識の姓を出した時、
口元を扇子で隠した時、この二つ。

更識を知っていた。……いや、それは無い。
漆月　龍我が私を、更識を教える訳が無い。
さらに、あの子は記憶喪失。

では何故？

癖となった口元を隠す仕草、それをしつつ思考の海に沈む。

周りから聞いていた？

思い当たるのは篠ノ之　束、天才と呼ばれる者。
だが、私を見る視(め)線は不信感、警戒では無い。
由(よ)ってこの線は無い。

勘……かしら？

第六感、そう呼ばれる物。
それにしては的確すぎる。

目を閉じ、さらに深くに沈む。

事故に遭い……『何か』に目覚めた？

事故のショックによる人格の変質、そう診断されていた。
確かに七つにしては出来過ぎた精神、己を持っていた。
事故後の変質、納得は出来る。だが、それ以外の『何か』が在る。

未来予測……予知能力の類（たぐい）？

私の事を、そして遇う事を知っていた。
そう考えれば納得できるが、可笑しな箇所が出てくる。

何故この仕草に反応した？

私を知っているなら、他にも反応してもいい筈。いや、最初から警戒する筈だ。
それに、私の経験からくる勘は違うと告げている。

では何故？

疑問が最初に戻る。
つまり、現段階では答えが出ないという事。

思考の海から上がる。

「お母様？」

「なにかしら？」

「いえ、難しい顔をなされてましたから……」

「ふふ、ありがとう」

見上げてくる娘。更識を継ぐ娘。

何時か裏に立ち、暗躍する娘。その中で、自分だけの楯を見つけるのだろう。

この娘は敏い、楯に成る者もきっと敏いだろう。

あの、漆月　龍我のように。

――――！

漆月　神威、漆月　龍我の血を持つ子。

本来、更識と漆月は結ばれない。

だが、今回の件であの子はただの漆月　神威となった。

唾、付けておこうか？

警戒された今は無理でも……

「ふふ……」

「？」

いずれ――――

◇◆◇◆◇◆◇

時刻は深夜、眠気を誘うベットの上。
雨音を聴きながら、ぼんやりと考える。
更識、そう名乗る人と漆月　龍我の事、その関係を。

漆月　龍我……何者なんだ？

更識家と繋がりがあるのだろう。

漆月　龍我は暗部……？

更識は対暗部、裏の住民。
漆月　龍我はその一部、なのかもしれない。
神威はその子供、話掛けるのは可笑しくない。
だが、少し引っかかる。

何で……知り合いなんだ？

仕事仲間、そういった表現の方が合っている。
話を円満に進めるのなら、その方が良い。

更識の一部じゃ……ない？

ただの知り合い。……いや、それは無い。

途中から、扇子で口を隠した後から、問い掛けの質が変わった。
何かを確認してるような、見定めているような。
ただの知り合い、その子供にする事じゃない。

縄張り争い……？

……違う気がする。
本当にそうなら周りも被害に遭ってるはずだ。それに、裏の人間だ。
子供（ガキ）の発言が何に成る？権力（ちから）など無いに決まっている。
なにより、俺にしか興味が無い感じがした。

……わかんねぇ

判断材料が無いに等しい、そもそも何が必要なのかすら判らない。
そんな状態で判る訳がない。そう思い投げ出した。

「あ～止（や）めだ、止（や）め！」

「おわったの？」

「うお！？」

振り返ると箒がいた。

「……いつからそこに？」

「さっきからいたよ？」

全く気づかなかった。

「どうしたんだ？」
「おねえちゃんがいないの」
「束さんがいない？」
「うん、おうちにいないの」
家にいない？
「だからね」
「……うん？」
「おにいちゃんのとこにきたの」
……何故そうなる？
この子の人物図式はどうなってるんだ？
「……千冬さんは？」
「いちかとねてるよ？」
そう言って首を傾げる。
「……そっちに行かないのか？」
「……？うん」
……凄く不思議な目をされた。

俺がおかしいのか？

「おにいちゃん」

「……ん？」

「いっしょにねよ？」

「……は？」

思考が停止し、暫く固まっていると…

「……ダメ？」

反則技を使いやがった。（上目＋涙目）

頭にＫＯと表示された気がする。

「一緒に、寝ようか……」

「うん！」

ベットに上がり、くっ付いてきた。

「おにいちゃん」

「ん？」

「ぎゅーってして？」

続闘希望らしい。俺のＭＰもう０よ？

「……ダメ？」

体が勝手に動く。ＨＰは満タンらしい。

「えへへ～」

だがＨＰも減っていく。

「なでなでもして～」

どうやら、箒は俺をコテンパンにしたいらしい。

「ん～…んふぅ」

ＨＰがガンガン減っていく。

「……明日、晴れるかな？」

現実逃避をしてみる。

「……はれ、るよぉ……んぅ……」

…逃げられなかった。うとうとの状態で喰らい付いてきた。

どうやら、箒は本当に俺をフルボッコにしたいらしい。

「……すぅ……すぅ……」

どうやら、勝利できたようだ。

だが、ＨＰが赤字の俺は、

「……明日は晴れ……か」

止まない雨に呟き、意識を失った。

◇◆◇◆◇◆◇

「なるほどねぇ～」

光の届かぬ地下、私はモニターと睨めっこをしている。
映っているのは更識のデータ。

「今日は品定めってとこかな？」

むっくんといった女、あれはとんでもない雌豹だ。

「その内、仕掛けてくるよねぇ……」

実際を想定する必要もなく結果は見えている。

「負け、だね……どうやっても」

人、物、情報、日本中に網を張っている。
更識と敵対、つまり国と敵対するという事。
そう言ってしまえる程の権力(ちから)が在る。

それに対し此方は情報、それしか無い。

「う〜ん……」

クルクルと、椅子と一緒に頭を回す。

「戦っちゃあ駄目だよねぇ……」

まず、それが絶対条件。

「目を逸らさせてもなぁ」

ただの時間稼ぎにしかならない。
視線は必ず戻る。あれはそうゆう女だ。

「身元も割れるし……」

事を起こせば必ず尻尾を掴む。
私のデータも必ず持っている。逃れても、仕立て上げられるだけだ。
今はまだ、あの女の視界(め)はむっくんしか入ってない。
私は外れている。だから下手な事は出来ない。

「チャンスは一回……」

おそらく、二度目は無い。

「ん～……ん？外れてる？」

外れているなら外れたままが良い。

「なら、代役が必要だね」

相手は国家レベル、生半可な者じゃ駄目だ。

「国……国かぁ」

そう、国。国の相手は国がするべきだ。
人がする必要など全く無い。

「相手してくれるとこ……いる？」

他の国から見れば日本は弱小国、相手になどする訳が無い。

「この国、力無いからねぇ～」

一旦、椅子と頭の回転を止める。
そして同時に視界（め）に入ったモノ。

「……あった」

目の前にいる私の作品（こども）。
知れば誰もが欲しがる…力。

「ん？……んん！？」

もう一度、椅子と頭を回し始める。

「この子の事は何処の国も知らない…」

知っているのは……ちーちゃんと名前を付けたむっくん。

「この子の事を知れば……」

世界中の目をこの国に向けられる。

「更識は……」

むっくんどころでは無くなるだろう。自分の知らない力、目を背けたり出来ない筈だ。

そして外の相手に、忙しい状況に成る。

「だけど、この子の性能(ちから)を使いこなせるのは……」

ちーちゃんしかいない。

むっくんの為なら絶対に協力してくれる。

「でも、この子はむっくんに渡すと決めたから……」

もう一つ作らなければ、強い力を秘めた作品(こども)を。

「……どうせなら、この子にも」

むっくんを絶対護れる強い力をあげよう。

「よし！決まり！！」

椅子を止め立ち上がり、崩れ落ちた。

「あれれ？」

どうやら目が止まらず回っているようだ。

「むぅ、私としたことが……」

そう呟き、床に転がった。

◇◆◇◆◇◆◇

転換期。物事が移り変わろうとする、時期。

移り変わるのは物事だけではない、人も同じ。

目に入る光景や価値観、そして、日常すらも。

呪は月を擁いて　第五話

『今さらだ……そんな事は』

第四話　『明日は晴れ』（後書き）

ＸのＤｒは良いキャラだと思います。

妹は風邪でダウン中。

ヒロイン誰にしようかな？

人物紹介？

漆月　神威　うちのオリ主

１２月２４日生まれ。現７歳。一夏、箒の二つ上。黒目黒髪、顔は中の上でややツリ目。
少々鈍いが頭の回転自体は悪くない。今現在は憑依仕立ての為、不安定。
原作知識はあるが１０年前なので全く役に立たない。原作が始まる頃には忘れている可能性が大。
状況把握出来ずに流されまくってる。周りに助けてもらってるだけ。全然主人公らしくない。
ＩＳ手に入れてないのにパワーアップフラグＯＮ。
自分で書いといて『こいつホントにオリ主か？』といつも思う。

呪いについて

Ｆａｔｅの令呪のようなもん。だが上限が無い。
スーパー呪いブーストされたパンチはとっても凄い。ただパンチした後ボキッ！グチョッ！となる。
その後呪いでうにょうにょ再生。痛み抑える呪いが無いのでとっても痛い。
ちなみに呪いを思いついたのは誕生日決めた時。
鉄屋が１２月２４日に事故ってリアル苦シミマスになった（超マジ）のを思い出して決めた。
あん時どんだけ周りを呪ったことか…とくにＴＶでキャッキャウフフをしてる奴をなあぁぁあ？

織斑　千冬　ブラコン

一話でブラコン戦士に覚醒。ブラコンパワーで世界最強になるだろう。

そしてヒロイン候補その1。くっついたら熟年夫婦みたいになりそう。

二人で昼ドラ見ながら茶をズズ～……みたいに。甘さはビターだと思われる。

ホントはドジッ娘でいくつもりだった。しかし断念した。

理由は妄想しながら書いたら萌え尽きそうになったから。無念なりぃ。

織斑　一夏　シスコン&ブラコン

やんちゃボーイ。フラグ体質は未覚醒、今後に期待。

神威と箒と同時に知り合う。すぐにワーワーキャーキャー。キャッキャウフフでは無い。

千冬お姉様に『金魚の糞その1』の称号をいただいた。やったね！

篠ノ之　箒　シスコン&ブラコン

ファースト幼馴染。『金魚の糞その2』の称号もち。

一夏は家族。神威はおにいちゃん。何がどう違うのか鉄屋にもわからない。

全くツンツンしてない。何が如何してこうなった？

一応ヒロイン候補その2。でも兄フラグしか立つ気がしない。と

Ｌｏｖｅるか？
原作開始時にどうなってるか不明。さすが束の妹。おそるべし。

篠ノ之　束　シスコン

家事ぱーふぇくとな天才。喜怒哀楽を装備。常識も装備。
今の神威とは一生お友達で終わるきがする。
ＩＳ作ったのは箒が「つきにいるうさぎにあいたい！」と言ったから。
シスコン魂が萌え上がり作成。出来た頃には箒は忘れ、神威とキャッキャ遊んでいた。
よって神威嫉ましや…の嫉妬対象に。箒が絡むと空回りがハンパない。さすが天才。

第五話　『今さらだ……そんな事は』（前書き）

今回はおバカな話。

第五話　『今さらだ……そんな事は』

鳴り響く目覚ましを慣れた動きで止める。

「……あと5分……」

そうつぶやき、朝のまどろみを楽しむ。

「たまんねぇ……「おっはよー！」……ぐはぁ！！」

朝の幸せを奪った者を見る。

「今日は箒か……」

「うん！おはようおにいちゃん！」

「……おはよ、そしてどいておくれ」

「は～い」

朝が弱い俺をいつも一夏か箒が起こしにくる。
ジャンケンで決めるのでどっちが来るのか分からない。
箒の時は、たま～に束さんの入れ知恵がある。
その場合、飛び起きたり残念な気分になったりと心臓に悪い。

「着替えるので退室お願いします」

「は～い、すぐきてね？」

「了解」

今日はプレスだったので入れ知恵は無い。あれば音を使って起こされる。
最初は風船割ったりクラッカー鳴らしたりと軽い悪戯だった。
それがだんだんエスカレートしていった。
まず轟音に変わった。
事故った音、何か崩れる音、破壊音など。
当然俺は飛び起きた。そんなの聞いて寝てられるか。
だがそれもまだマシな方だった。
次に銃撃音、爆音に変わった。
戦争でもしてるのか凄い音がした。
当然俺は慌てまくった。偶に悲鳴が聞こえたし。
だがそれから趣向が変わった。
人の音声がメインになった。
「お前は既に包囲されている！」と言う警察官とか。
「アアァァァァ……」とか言うゾンビとか。
当然俺はビビッた。マジビビッた。
拳銃撃ってたし。凄く軋(きし)んだ音してたし。
この前なんか特に酷い。

昼ドラ流しやがった。しかもド修羅場。
「あんた！この人の何！？」で始まる浮気バレのパターン。
言い争う女に男が「お、俺は……」で途切れた。
凄いもん聞いたと思ったし、凄く続きが聞きたいとも思った。
何とも言えない朝を迎えたんだ。この日は。

だが、こんな事やられて黙ってる俺では無い。
当然仕返しをした。束さんにとって酷くダメージを受ける方法で。
あれは楽しかった……またやりたいものだ。ククククク……。

「おにいちゃん、まだー？」

「今行く」

とりあえず今は朝飯優先。

今日も一日、頑張ります。

◇◆◇◆◇◆◇

俺が漆月　神威となって一年と少しが過ぎた。

始めは色々大変だったが、住めば都。
中々楽しい毎日を送っている。

一夏との約束も守れた。
二人で箒に誕生日のプレゼントを買うとゆう約束。
プレゼントは紅いリボン。
それから毎日、箒は紅いリボンを付けている。
今も隣でポニーテールを揺らしながら歩いている。

そして、俺は今、

「「ついたー！」」

「着いたね、学校に」

…
また小学3年生をやってます。

この春、一夏と箒が1年生となり、同じ小学校に通い始めた。
それから毎日、手を繋いで登校してます。
通学時の、暖かい視線が心に刺さります。
おかげで近所では有名人です。

「おにいちゃん、またねー！」

「おひるにむかえにいくねー！」

「おーわかったー」

朝の試練は終わった。俺も教室へ向かうとしよう。

教室に向かいながら考える。
あの二人は何時兄離れをするのか？と。
早く兄離れしてほしい。
なぜなら――――

「よう！お兄ちゃん！」

「おはよう、お兄ちゃん」

「お勤めご苦労さま、お兄ちゃん」

――――お兄ちゃん。この渾名を無くすために。

「おはよう、クラスメイト諸君。
朝から心身えぐる挨拶ありがとう。
その心遣いのあまりに……殴りたくなるんだが？」

「またまた～嬉しいくせに～」

「照れんなよ！アハハハ！」

「愛されてるわね？お・に・い・ちゃ・ん？」

「……お前ら全員爆発しろ」

「「「「「「アハハハハハハハ！」」」」」」

今や、俺を名前で呼ぶ奴はいない。
このクラスだけでなく同学年は当然。
一年生も、一夏と箒のおかげで皆お兄ちゃんと呼ぶ。

挟まれた二年生も呼び始めた。
その波は収まる事がなく、上の学年も呼び始めた。

俺は一夏と箒をなめていた。あいつ等はまだ子供だと、なめていたんだろう。
だがあいつ等は主人公&ヒロイン、その補正が付く。影響力という補正が。
俺が皆にお兄ちゃんなんて呼ばれるのはそのせいだ、そうに決まってる。
他にもお兄様、お兄ちゃま、お兄たま、兄君(あにくん)、兄君(あにぎみ)、兄上、兄貴、兄神、アンちゃん、にぃちゃん、あにぃ、おにぃ、にぃに、にぃちゃ、ニィハオ、スーパーブラザー、ブラザーブラボーなど。
多種多様にある。これは何式まで増えるのだろうか？

そして、その波に――――

「チャイムが鳴ったぞー、席に着け」

「「「「「「はーい！」」」」」」

「日直は……お兄ちゃんか」

――――教師まで呑まれ、感染していた。

「起立、礼」

「「「「「「おはようございます！」」」」」」

「おはよう」

「着席」

「さて、朝のＳＨＲだが――――」

日直の日は、教師の集う職員室に行かなければならない。
会う教師は皆してお兄ちゃんと呼んでくる。
これは虐めじゃないか？学校一丸の虐めじゃないのか？
ＰＴＡは何を――――ああ、汚染されたのか……詰んでやがる。

「……この後、全校朝礼がある」

一夏のフラグ体質が開花すれば変わるのか？
そうなら早く覚醒してくれ！そして俺を救ってくれ！！

「そこで、お兄ちゃんが表彰される」

「――――はい？」

……俺、なんかしたっけ？

「最近、学校全体の雰囲気が良くなっている。
お兄ちゃんが皆にお兄ちゃんと呼ばれるようになってからだ」

漆月が、だろ？そこは……

「そこで、先生達全員から感謝を込めて、表彰状を作った」

……作んなよ、そんなもん……

「賞の名は……」

すげーやな予感……

「皆のお兄ちゃんで賞！！だ！」

――――――アハハハハハハハハハハハ！！！

「すごい！すごいよおにいちゃん！！」

「さすが兄貴！俺等に出来ないことを平然とやってくれる！！」

「そこに痺れる！憧れるぅ！！あっははは！」

「ステキ！抱いて！！」

「先生はな……お兄ちゃんのような生徒を持てて――――幸せだ」

「ぐはぁ！」

「先生もうやめて！兄神のＨＰはもう０よ！！……ぷぷっ」

「お前が一番ひでぇよ！！」

「兄上は今日もぉ……絶・好・調！である～る！！」

「「「「「「アハハハハハハハハハハ！」」」」」」

「朝のＳＨＲを終わりにする。号令は……今日はいいか。
皆、お兄ちゃんを体育館に――――導いてやってくれ」

「わっかりましたー！」

「さあ、行こうぜ！ピリオドの遥か先へ！！」

「神の世界への引導を渡してくれる！！」

「……ここは……地獄だ――――」

――――――アハハハハハハハハハハハハハ！！！

おのおおおおおおれえええええええ！！

◇◆◇◆◇◆◇

「これで、良しっと」
「終わったのか？」
「うん、ちーちゃんは？」
「済んでいる」
「そっかぁ……」
僅(わず)かな沈黙。
「……ねえ、ちーちゃん？」
「なんだ？」
「引き返すなら、まだ間に合うよ？」
「……何？」
「これは私が始めた我が侭」
「……」
「始まれば世界は荒れる。
私達は荒れる渦の芯になる」

「……」
「そうなれば…今迄の日常は送れなくなる。
皆とも一緒に居られるかも分からない」
「……そうだな」
「だから……」
「今さらだ」
「え？」
「今さらだ……そんな事は」
「……」
「私は自分の意思で此処に居る。
それに、約束しただろ？」
「……？」
「『お互いに遠慮はしない』
そう約束したはずだ。忘れたのか？」
「……ふふ、そうだったね」
「あの子達は強い、大丈夫だ。
お守りも渡してあるんだろう？」

「うん！最高（とびっきり）をね！」

「なら、大丈夫だ」

「まだ実現出来て無いのもあるけどね」

「……大丈夫なのか？」

「いやぁ～こればっかりは資材も時間も足らな過ぎるからねぇ」

「……大丈夫なんだろうな？」

右手が唸る。

「モチのロンです！」

「……本当だな？」

「ブッ飛んだモンが出来て無いだけです！」

「つまり、物騒な物を持たせようとしてるのだな？」

「むっくんが言い出しましたあ！」

「……神威が？」

「Ｙｅｓ！！」

右手が静まる。

「はぁ……」

「私も予想外だったからね～あれは」

「どんな代物（しろもの）だ？」

「秘密」

「……何？」

「ふ・た・り・の・ひ・み・つ！」

「……」

「んふふ～羨ましい？」

「……」

「そろそろ始めよっか？」

「……後で覚えておけ」

「覚えてたらね？んじゃ……ポチッとな」

そして、嵐が世界を包む。

◇◆◇◆◇◆◇

時刻は深夜、一夏と箒は既に寝ている。

俺は一人、居間にいる。

「まだ、帰って来ないのか……」

待ち人はまだ来ない。

首から提げたモノを弄りながら呟く。

「ＩＳ……」

黒と白の指輪。

平行に並ぶラインが、１箇所だけＸ（クロス）している。

交差の中心部に金色の宝玉がある。

月に掲げるように並べる。

「もしもの時……」

そう束さんは言っていた。

思い当たるのは――――更識。

告別式の後、一度だけ接触してきた。
接触と言っても、大した事では無かった。
話した内容はどれも当たり障りのない、経過のようなもの。
その時、二人の子供を連れていた。
何故連れて来たのは解らない。
だが何をしたいのかは、解る。

恐らく引き抜き――――いや、取り込むつもりだ

漆月　龍我は裏の住人、だった。
実力も相当なものだったのだろう。
更識家頭首が直々に出てくるという事は、生半可な実力の訳が無い。
もしかしたら、人としても優秀、だったのかもしれない。
漆月　神威はその血が流れている。欲しい、そう思ったのだろう。
あの時は下見、だった。その下見が終われば、次は当然…。

「どうなるんだ？これから……」

「どうなるんだろうねぇ？」

「成る様にしか成らんさ」

いつの間にか、待ち人が帰ってきていた。

「おかえり、首尾は？」

「上々、かな？」

「やれるだけの事はしてきた。そちらは？」

「少し慌ただしかったけど、大丈夫」
「そうか……ん？あれは？」
「！！」
「ん？なになに……皆のお兄ちゃんで賞……？」
不味い！気づかれた！
「どうしたんだ？これは」
「……俺に聞かないで下さい。
一夏と箒に聞いてください。
マヂでホントにお願いしまス……」

一夏と箒が花々しく飾ったんだよ、アレを。
あろう事に居間に堂々と、アレを。
俺の心を打ち砕いた、アレを。
「そ、そうか」
「ん～……ま、いっか」
「そんな事より、この後は？」
「私達は……待ち、だな」
「まぁ、色々啖呵（たんか）切ってきたしね」

「……何言ってきたの？」

「何回も説明するの面倒だから一回で済むようにしろ。だっけ？」

「ああ、その間此方に手出し出来ないようにもしたな。
それでも来た者はこの国で生きる権利を失うようにもしたな」

「……よくできたね」

「事前に送ってあったデータを信じなかったのは向こうだからね。
結構言いたい放題だったねぇ。何か言ってきたら、この子要らない？で済むし。
それに……――――更識に釘を打てたし」

「……それでも更識がきたら？」

「そうだな……仕掛けて来たら他国に、世界に言えばいい。
更識が奪い独占しようとしている。とでもな」

「そうなれば更識は表出（おもて）る。そして、権力（ちから）を奪われる。」

「暗部は影に、闇に生きてこそ意味が有る。」

「明るみに出ちゃったら終わりだよねぇ？
やってる事もただの犯罪になっちゃうし」

……この二人、何やったの？

「まあ、そんなこんなで今は各国の準備待ち」

「……はい、良く解りました」

「あっ、そうだ！」

……まだあんの？

「むっくんにあげた子に、名前付けてあげて？」

「……どゆこと？」

「ＩＳはこの子達を示す名称になったから、固有名称が必要になっちゃった」

「なるほど。ちなみにそっちの子は？」

「『白騎士』だ」

「その子はまた名無しに戻っちゃうから、ね？」

まぁ、名前が『無い』のは嫌だよな……

「さて、そろそろお開きにしようか？」

「そうだね～今日は疲れたしね～」

「ん、了解」

自室に戻りながら考える。こいつを何と呼ぼうかと。

月夜の光の下、ただ其れだけを、考えた。

◇◆◇◆◇◆◇

流れる時の中で、人は多くの事を学び、先へと進んで行く。

だが過去となった事は、薄れ行く。大事な、重要な事でさえ。

忘れた隙間は、何れ大きな穴と成る。忍び込める、大きな穴に。

呪は月を擁いて　第六話

『また、遇えたわね？』

第五話　『今さらだ……そんな事は』（後書き）

これで皆のお兄ちゃん。

箒のイジメフラグ、へし折りました。

これでやっとオリ主に……なってないな。

第六話　『また、遇えたわね？』（前書き）

今回、半オリキャラが出ます。
……いや、またなのか？

第六話　『また、遇えたわね？』

まだ、かしら？

指で扇子を転がしながら時を待つ。
これまでの、これからの事を考える。
開き、閉じと、扇子の奏でる響きを楽しみながら。

篠ノ之　束の策は見事だった。
自らを囮として表に立ち、注目を集める。
出した手札も強力、未知な物。目を向けないわけがない。
ＩＳの情報、データの対価を求めるのも当然。
自身とその周りの安全を要求するのも当然の事だ。
あの子もその中に入れ、更識からの壁を作る。
あの子に手を出すことは、篠ノ之　束を狙うと見なされる。
更識は他国の侵入に、目を光らせなければならない。
その状況を創り、更識に釘を刺した。
あの子は裏の人間（わたしたち）以外からは唯の子供、狙う理由が無い。
その理由も、言える訳がない。
綱渡りのような状況下で良く出来たものだ。
関心する。尊敬の念すら出てくる。

そう迄して護りたいあの子、漆月　神威。
酷く、欲しくなるのが、人の性（さが）。

篠ノ之　束は、世界から抜き出た杭。

同時に、旨味の塊でもある。
その杭を、抜く事も、叩く事も出来ないが、旨味を摂る事は出来る。

彼女は今、世界という鍋に身を浸(ひた)す出汁(だし)。
出汁は絞り摂られ、何時かは無くなり、枯渇する。
だが、其処まで待つ必要は、無い。
周りが満足する程度摂れていれば十分。
彼女の旨味、重要度は低くなっている筈だ。
それは、彼女周辺に向ける目が無くなるという事。

そろそろ、かしら？

発表から2年がたった。
篠ノ之　束の周辺は、今や手薄。
接触するなら、今が好機。
機会は多くないが、無い、わけではない。

閉じた扇子を顎に差す。

先ず、私が出るのは悪手。警戒心を呼び起こすだけだ。
それに、あの篠ノ之　束が何も持たせてない、わけがない。
最悪、ＩＳを稼動できる状態で持っている。
ＩＳは女性だけしか反応しない。
その事は事実、証明されているが、信じきれない。
理由が不透明だからだ。
そして、あの子にＩＳを起動させてはならない。
起動させてしまえば、世界中の目があの子に集中する。
世界で初めて、ＩＳを動かした男に成る。
そうなれば、手出しが出来なくなる。

護衛名義で近ずくことは出来るが、それ以上の事は出来ない。

会わせるなら、警戒心が低く更識と解る者。

「お待たせしました。お母様」

初会の時、警戒心が少なかったこの子に行ってもらおう。

「ふふ、来たわね」

将来の楯候補でもあるから、ね。

◇◆◇◆◇◆◇

竹刀の打ち合う音が響く。

「ここまでにしようか」

「はい」

その言葉に体の力を抜く。

「大分上達してきたよ」
「ありがとうございます。柳韻さん」
篠ノ之（しのの）柳韻（りゅういん）、束さんと箒の父。
俺は今、その人に剣を習っている。
「じゃあ、先にあがろうか」
「一夏と箒は？」
「向こうを見てごらん」
言われた方を向くと、一夏と箒が切り結んでいた。
面をしているのでよく分からないが、たぶん凄い顔してると思う。
審判の姉（ちふゆ）さんは苦笑していた。
「僕の視立てだと……千冬ちゃんが火付けて、二人は白熱中、ってところかな？」
「また、ですか？」
「はは、そうだね」
「あの二人も飽きないなぁ」
「譲れないものがあるんじゃないかな？」
「譲れないもの、ですか？」

「わからないかい？」

「……ええ」

生憎、検討がつかない。

柳韻さんは何か含んだ笑顔だった。

「ともかく、先にあがろうか」

「……はい、そうですね」

道場を後にし、篠ノ之家の縁側でお茶を一服。

「……美味い」

「……美味いねぇ」

お茶は何故、ここまで染み渡るのか。……爺臭いと言うなかれ。

「ところで神威君？」

「はい、なんでしょうか？」

「何時、箒を嫁に貰ってくれるのかな？」

「ブッ！！」

そうだった！この人と二人きりになるとこれがあった！

「箒はこの神社の巫女になるから、

式は和式になるけど……いいよね？」

「え……と、その……」

いろいろスッ飛ばしすぎじゃね？

「まさか……嫌なわけ――――じゃないよね？」

「ッ！？モチロンです！！」

今背筋凍ったぞ！？

「うんうん、そうだよね。箒は可愛いからね」

「ハハハ……と、ところで」

「うん？」

生贄を捧げようとする。

「い、一夏と…な、なんか怪しくですか？」

生贄は一夏だ。

「一夏君と？」

「は、はい。仲良いですし……何時も一緒みたいですし……」

頑張れ！頑張るんだ！俺！！

「一夏君と、か……」
「ええ、たぶん良い男になりますよ？」
手応え有り！イケル！
「一夏君は――――――遠慮したいな」
「ゑ？」
錯覚でした！！
「良い男に成るのは分かるけど。
一夏君と付き合うって……何て言うか、大変そうじゃない？」
「――――そうですね」
正にそのとおり。一夏（あいつ）は既に覚醒しています。
「それに、変に鈍いよね？」
「――――そうなんですよね」
一夏と話してる子見たけど……ありゃひでぇよ。
花咲く笑顔が一瞬で砕け散ったし。
俺もその余波食らうし。
「だから、神威君の方がいいな」
「はは、は……」

「龍我とそう言う話、してたしね」

「……はは」

漆月　龍我と友人だったらしい。なんでもお互い、得物を持ってガチンコしたらしい。

その激闘の末、友情が生まれたらしい。道場にある細い傷ってその時のものらしい。

真剣の傷…じゃないよね？

「僕は約束を守らないといけない」

「はは、あははは」

やべ、スイッチ入った……

「だから僕は……「兄さーん！！」……ん？」

ナイス箒！

「どうし……ぐぇ」

「うぅ……」

どうやら、また負け越したらしい。

「兄貴！」

「一夏か……今日も？」

「おう！俺の勝ち！」

「で、姉さんは何て呼ったの？」

「さて、な」

ため息を吐きながら箒を撫でる。

「うん、やっぱり神威君がいいな」

なんか聞こえるが、幻聴だろう。

そう思い、青い空に視界を向けた。

明日も学校頑張ろう

そう、現実逃避をしながら。

◇◆◇◆◇◆◇

「では総帥、次のお客です」

「わかった」

生徒会所属。役職名、総帥。それが俺の肩書き。
総帥の前に『お兄ちゃん♪』なんて書かれているが、
俺は全く見えない。見えやしないから問題ない。
机に肘をつき、ゲ〇ドウスタイルでスタンバイ。

「ぐす……ひっく……」

「さて、君はどうしたのかな？」

俺のメインの仕事は……

「むぅにぃ～ひっく……一夏君が……ひっく」

――――愚弟（いちか）の尻拭いだ。

「一夏が、どうしたんだい？」

「……付き合って……ひっく……くれるってぇぃ……たのにぃ……ぐす」

「続きが、何処に？だったんだね？」

「はぃ……ひっく」

まただよ、あん畜生め。
何故わからんのだ。

「私……私ぃ……ぐす」
「それで君は……諦められるのかな？」
「……ぐす」
「わからない、といったところかな？」
「はぃ……ひっく……」
一夏（あいっ）どうしてくれよう。
「では、少し時間を置いてみてはどうかな？」
「……ぐす」
「もう一度アタックするにか、それとも諦めるか。
しっかり答えをだしてからにしたほうがいい」
「……ぐす」
「アタックするなら、自分の気持ちを全て言葉にしなければならない」
ついでに一夏を落としてくれ。
「……」
「そうでなければ一夏に伝わらない」

愚鈍だし。

「……はい」

「俺から言えるのはそれだけだ」

「……はい！」

「酷な事だが、頑張ってくれ」

マジで頑張って一夏を落としてくれ。

「はい！むぅにぃ！ありがとうございました！」

そう言って部屋を出て行った。

「……もういないよな？」

書記兼秘書に問いかける。

「はい、今日は終わりました」

「……明日は？」

「女子１６名と男子１名です」

男がいるのか。

ならば助っ人を呼ぼう。

「書記兼秘書よ……」

「秘書兼書記です」
「同じだろ？」
「いえ、違います」
「まあいいか、明日はご意見番を呼んでくれ」
「わかりました。手配します」
ご意見番、箒の出番だ。
「じゃあ頼んだ。俺は上がる」
「はい、お疲れ様でした。総帥」
「……お疲れ」
そうして俺は部屋を出た。
心がとてもお疲れでした。

◇◆◇◆◇◆◇

帰路の最中、ふと思う。
なんでこんな事をやらなければならんのか、と。
全ては生徒会長と一夏のせいだろう。
今の会長は歴代初、女子の会長だ。
世の中、女のほうが偉い、と言う奴が出てきたが、俺の通う学園に限ってそれは無い。
自力でなっただけだ。俺という餌を使って。立候補者のスピーチの時は――――

「私が会長に成った暁には！
お兄ちゃんを生徒会に迎え入れる事を約束しましょう！
でも！私の下に就くのではないわ！上に立ってもらうのよ！
皆のお兄ちゃん！私達の上に居るのが相応しい！
役職名は総帥！私達を締める者！
きっとそれがお兄ちゃんの…在るべき姿よ！！
だから皆！力を貸して！！」

――――てなことをほざいてた。
他の立候補者はその場で辞退。なんか感激したらしい。声援と拍手の嵐がすごかった。
そこで生徒会長が即決定。前代未聞の投票無しで。
ちゃんと立候補続けろよ！とか、俺を巻き込むな！とか言いたかったが、空気を読んだ。

カルト熱に割って入って行けないし。

だが、空気を読んだのがいけなかった。

会長直々に指名され、壇上に立たされた。

会長は「お兄ちゃん総帥！皆に神託を！」とかほざいた。俺はヤケクソで色々言った。

「拝(おが)め！」とか「称(たた)えよ！」とか言った……ような気がする。

その時俺は超笑顔だったらしい。一夏と箒がそう言ったから間違いない。

もはや俺のポーカーフェイスは天元突破しただろう。

そんなこんなで総帥着任。これもまた、前代未聞の役職だ。

仕事内容は生徒会会議の総締めなど。生徒会員が意外と、ほんっと～に意外と真面目であり、

軽い確認や簡単な指摘で済んでいた。全く苦でない仕事で済んでいたんだ。少しの間は。

一夏の馬鹿野郎が涙の雨霰(あめあられ)を起こすまでは。

事態を重く見た生徒会は対策を施した。その名も、お兄ちゃん総帥の相談室。

一夏のコードネームは断想剣(どんかんやろう)。（命名神威）

断想剣に切り裂かれた乙女の心。その心を少しでも癒す為。

そんな名目の元、発動した。

だがやってみると誰もが同じ、付き合っての勘違い。

何故「好き」とか「恋人になって」とか言えんのだろうか。

最初は疑問に思った事を言ったのだが、会長に怒られた。

その辺は禁句らしい。何故だ？

直球が出来なくなり、当たり障りのない事しか言えなくなった。
きっと俺のポーカーフェイスは天元突破、宇宙（そら）の彼方だろう。
おかげで今や順番待ちがワンサカいる。

偶にいる男は、嫉妬に駆られた奴ばかり。
そんな時は箒を呼び「そんな事を気にしない人は格好良い」と言ってもらう。
一夏の傍のいる箒の言葉は信憑性があり、効果はバツグン！
気分を１８０度変えて帰っていく。ちょろいな。
後で箒に何か奢ってやれば万事解決。懐が涼しくなるが、背に腹は変えられん。
それに、甘物を食べる箒は見ていて和む。数少ない癒しなのだからしかたない。

だがそろそろ原因（いちか）を如何にかしなければ。

姉さんと教育指導するか？

頭痛（あんちくしょう）の種の調きょ…教育内容を考えながら歩いていると、視線を感じた。
常日頃から色々な視線を受けている為、かなり敏感なのだ。そして、
……この感じの視線は過去に二回。

視線の元を辿ると、女の子がいた。

「こんにちは」

一度だけ会った、澄んだ青髪の――――

「…また、遇えたわね？」

――――更識の娘。

◇◆◇◆◇◆◇

決断を、唐突（とうとつ）に、余儀（よぎ）なくされる、時が在る。

自身で判断し、決める。たとえ、苦渋な事だとしても。

出来なければ、悲痛と後悔しか、残らないのだから。

呪は月を擁いて　第七話

『私は大丈夫』

第六話　『また、遇えたわね？』（後書き）

篠ノ之　柳韻　束&箒のオヤジさん
剣持つと鉄の男。普段は気さくなおっさん。
そして親バカ。にした。

第七話　『私は大丈夫』（前書き）

今回オリ主マジモード。

そしてシリアスもどき。

第七話　『私は大丈夫』

「また、遇えたわね？」

「……」

「あれ？無反応」

十中八九、厄介事。

俺は立ち去ろうとするが――――

「篠ノ之博士、最近帰ってないんでしょ？」

――――縫い止められた。

「気になる？」

「……何をした」

「せっかちだなぁ」

「何をしたと聞いている」

「お茶しながら話そっか。すぐそこの喫茶店で、ね？」

「……」

後を追い、店に入る。
同時に、見(けん)を始める。
「いらっしゃいませ。二名様ですか」
「はい。内緒話がしたいので奥の席をお願いしま〜す」
「ふふ、わかりました。では、こちらに」
一番奥の席に案内され、腰を落とす。
「ご注文が決まりの頃、伺(うかが)います」
そう言い、店員は去って行った。
「何頼もうかな〜……神威君は？」
「……水でいい」
「付き合い悪いなぁ」
長々と付き合う積もりは無い。
「邪見(じゃけん)しないほうがいいと思うけど？」
「……ホットコーヒー」
「りょうか〜い。私は……ストレートにしようかな？」

「お決まりでしょうか？」
先ほどの店員が来た。
「ストレートティーとホットコーヒーでお願いします」
「畏まりました」
注文を聞き去って行った。
「……で？」
「まあまあ、注文が届いてからだよ」
「……」
「ふふ、ねえ？」
「……何だ？」
「私達、外から見たらどう見えるかな？」
「……」
馬鹿馬鹿しい。
「からかう私、からかわれる神威君……」
狩人と獲物……

「恋人同士……に見えない？」
――――争う仲だ。
「お待たせしました」
「お、来た来た」
「では、ごゆっくりどうぞ」
伝表を置き、店員は去って行った。
「ん……おいし……」
俺も一口だけ飲む。確かに旨い。
「……で？」
「んもう、せっかちだなぁ」
「十分、付き合っただろう？」
「私はもうチョット付き合ってほしいんだけど？」
「束さんに何をした？」
「その聞き方はいただけないよ？」
「問題ないだろ？」

「喫茶店だよ？」
「見張りがいるんじゃないか？」
あの店員だ。
「気づいてたの！？」
顔色を変えた……正解か。
「……束さんに何をした？」
質問には答えない。
「……」
僅かでも混乱させる為、隙をつくる為。
「束さんに何をした？」
このやり口は束さんの十八番、使わせてもらおう。
「……それは卑怯だと思うけど？」
答えない、ならば……
「束さんが帰れない理由……」
「……」

無理にでも、
「お前達が手を廻した」
こじ開ける。
「！！」
「当たり……だな？」
おそらく、相手は初陣。
「……そうよ」
「何故だ？」
解りきったことを聞く。
「それは……」
「それは？」
狩人が未熟なら、やり様があるからだ。
「……」
「俺を手に入れるため、か？」
その為に、主導権を握る。

「！！」

「これも当たり」

だが、相手の持ち札が解らない。

「……ええ、そうよ」

「それで、俺に何を望む？」

出来ることは、ハッタリ。
全て解っているように見せる。
逃げる為に。

「それは……」

「それは？」

「……」

「……言えないのか？」

……逃げ時か？

「なら、帰らせてもらう」

そう言い席を後にしようとするが、

「待って！……言うわ」

止められた。

「……必要なことか？」

「……聞かないと後悔するよ？」

「……いいだろう」

「実は――――」

話の内容は殺意が湧く――――胸糞悪い鬼札だった。

◇◆◇◆◇◆◇

神威君が去った後、心身（からだ）を椅子に預ける。

「……ふう」

結果だけを見れば、こちらの勝ち。

でも戦果は……

「……ぼろ負けかな？」

「ふふ、そうね」

「お母様！？」

全部見てた！？

「それで、どう感じたのかしら？」

「……手強かったです」

「そう、ふふふ……」

全て、見透かされていたように感じた。

「初陣には良い相手だった筈よ。
それに、良い経験にもなった、でしょう？」

「……はい」

……お母様も人が悪い。
勝ち札だけを教えて、話の運びを教えない。相手のデータも教えない。
私の成長の為だと解るけど、あの殺意は…怖かったんだよ？

「でも、相手に時間を与えたのは…駄目よ」

「う……」

だって！ほんとに怖かったんだよ！？
「恐らくは、大丈夫でしょうけど……」
「……ほっ」
「初陣としては、没落点よ？」
「うぐ……」
だって、男の子とお茶なんて初めてだから緊張して……
「そうそう、神威君とのお茶はどうだったかしら？」
「！？」
「ドキドキした？」
「どきどき！？」
こ、このタイミングで聞かないで！？
「恋人同士に見えない？……だったかしら？」
「あ、あれは！！」
だ、だって！こうゆうのに憧れてたんだから！
「……惚れちゃった？」

「！？！？！？」

大人っぽい雰囲気にいいなぁ、と思ったけど！
全て暴かれるような目にドキドキしたけど！
けど！けど！！話したの初めてなんだよ！？
だから……ほほ、惚れたなんて！！

「ふふ……」

「お母様！！」

「うふふふふ」

私で遊ばないで！！

「御党首、お嬢様、そろそろ……」

「ええ、帰りましょうか？」

「……はい」

絶対後でからかわれる。

漆月　神威君、かぁ……

そういえば、何時店員が更識（うち）の者って解ったんだろ？

◇◆◇◆◇◆◇

今は深夜、神威と二人居間に居る。

話の内容は、更識が神威に接触し、叩き付けた選択肢。

「これが、更識が俺に出した条件」

「……」

束は今、重要人物保護の名目で軟禁に近い状態。
更識が手を廻し、動きを封じた。
その手が篠ノ之夫妻、箒にも伸びようとしている。

更識は、その際在るであろう監視や聴取。
さらに、全員が別々に暮す事になる。という内容を無くす。
保護名目での護衛は残るが、心身に受ける負担は格段に減る。
特に、箒には……。

当然、その対価は神威。

「俺は……呑むしか、無いと思う……」

「だが！それでは――「箒に！！箒に辛い思いさせるなんて、出

来ない！」――――っ！！」

神威は箒を可愛がっていた。

そんな条件を出されたら……呑むしか、無いだろう。

「……だけど」

「……？」

「それを破るなら……！！」

……危ない傾向だ。だが神威にとって、箒は其れだけ大切なのだ。

妬けるくらいに…。

「……落ち着け」

「でも！！ほう「落ち着け神威！……視得ることも見えなくなる」

……くそっ！」

気を鎮め、落ち着いた方が良い。

神威も、私も。その為に、

「先ずお互いに周辺の変化、気に付く事を上げる。いいな？」

視界から外す。

「……わかった。それと、ごめん」

「いいさ。私から言うぞ？今日、白騎士の解体要望が出た」

「解体？」
「ああ、技術提供の名目で、な」
「……もしかして」
「……更識も咬んでいると思うが、各国からの要望だ」
この二年は開発施設等を造り、下準備をしていたのだろう。
「解体後、ＩＳコアの初期化をする」
「初期化も？」
「ああ。……おそらくだが、危険、と判断されたのだろう」
当然と言えば当然だ。ミサイルを人が撃墜したのだ。
コアとはその力の源、危険視しない方が可笑しい。
「神威の方は何かあるか？」
「……無い、な」
「……そうか」
「……束さんは？」
「束か……束は今、コアの作成をしている」
「……『マスターコア』を？」

「いや、『普通のコア』だ」

そう、束は『普通のコア』を作成している。

「まぁ……ＩＳを動かすならどっちでもいいけど……」

「……束は『マスターコア』の事を一度も口に出していない」

「……隠してる？」

「おそらく、な。しかし……」

「コアを作るには『マスターコア』が必要だ……」

「……束はそれを隠している」

「……コアをただ作っただけじゃ、コアに成らない」

「……作ったコアを、ネットワークに繋ぐ必要がある」

「そして、『マスターコア』にアクセスが絶対に不可欠」

「そのアクセス権を持つのは」

「俺と」

「束だけだ」

「さらに、『マスターコア』を持つ白騎士が解体される」

「……そのコアは初期化され、『普通のコアもどき』に成り下がる」

「……『マスターコア』を持つＩＳは」

「神威が持つ『月下（げっか）』だけになる」

「コアを作る時のアクセスは俺のＩＳに変わる。けど……」

「表面上は何も変わらない」

「束さんがそれを隠す理由（わけ）は」

「自分だけがコアを作れる、そう視せる為」

「つまり、束さんは……」

「何か仕掛けようとしている」

束は既に感づいていた。そして、仕込みの最中なのだろう。

「……何するつもりなんだろ？」

「……解らん」

「ですよね」

「まぁ、足りまいモノは解るがな」

不足しているモノが在る。
仕掛けが、大きければ大きい程に。
絶対に、必要なモノ。

「……時間、かな？」

そう、時間だ。
肯定し、一つ頷く。

「そうなると……俺達に出来ることは時間稼ぎ……」

そう、時間稼ぎ。
今出来る、最も有効な唯一の手は――――

「……俺が更識に出向くのが、一番……か？」

――――神威が更識に行く事。

神威が更識に行けば、視線を逸らせる。
勝利の美酒に酔わせ、手を止めさせる。
その間に仕掛けを終える。
それが今、打つ事が出来る、一手。

だが、神威に重荷を背負わせる事に成る、一手。
だが、行けば帰って来れない可能性が高い。
だが、行かなければ、私達が護衛名目で離される。
最悪、篠ノ之夫妻と箒が、盾にされる。
そうなったら、終わりだ。

だが、他に打つ手が無い。

私が出向いたのでは、意味が無い。
私では肩代りが、出来ない。
私では、何も、出来ない。
私では……。

何故、護れない……何故、力が無い……
何故、何故！何故何も出来ない！？

「姉さん……」

気付けば神威が、すぐ傍に居た。

「俺、行くよ」

行けば、帰って来れない

「行って、時間を稼いでくる」

それは、私がしなければならない事

「大丈夫、上手くやる」

そんな保障なんて、無い

「姉さんは一夏を護ってあげて？」

神威も護りたい

「箒達の事もあるし」

だが、神威が犠牲になる

「だから俺、行くよ」

「――――神威！！」

激情を吐き出しながら抱きしめる。

「何故！何故神威なんだ！！」

「……姉さん？」

「何故神威でなければならない！！」

「……」

「欲しい奴など他にもいるんじゃないか！？
何故、何故神威なんだ！！
他の奴でいいじゃないか！！」

「……」

「何故私は……護れない！
何故護る力が無い！！
何故何も出来ない！！」

「……」

「何故！何故また奪う！？

何故、何故……」

「……」

「なぜ……またうばう、の……」

「姉さん……」

もう失うのは……いやだ！

「護っているよ」

「――――ぇ？」

背を、あやすように撫でる手が、ある。

「ずっと護っていてくれてる。三年前から、ずっと」

「……」

「今、俺が立っていられるのは、姉さんのおかげ」

「……」

「今度は俺の番なんだ、きっと」

「……ぃ……」

「俺も護りたい。姉さんを、皆を」

「……みぃ……」
「だから俺、行くよ」
「神威ぃ……」
「そして、帰ってくる」
「ぇ……」
かえって…くる…？
「絶対に帰って来る」
ぜったいに……？
「そして更識に……」
……？
「俺を喰った事、後悔させてやる！」
――――！！
「やられたままでいられるか！！」
「ッ、はは、あはははは！！」
何を、何を勘違いしていた？
神威は囚われに行くんじゃ無い。

戦いに行くんだ。
ならば、私に出来る事は――――
「神威」
「？」
「盛大にやってやれ！！」
「――――当然だ！！」
――――背を押す事、決して折れぬように。

◇◆◇◆◇◆◇

「ここでいいよ、兄さん」
「……そうか」
今日は、別れの日。
共に居られない、その事を知った時から、

時間の許す限り、共に居た。
最初は悲痛を嘆いていたが、柳韻さんの気転で何とか成った。
ただ「花嫁修業をしなければならないからね」との説得内容で。
まぁ、箒が笑顔になればいいんだけどね。

「じゃあ、頑張るんだぞ？」
「うん！花嫁修業頑張る！」
箒が凄い乗り気なのを除けば。
「……そうか」
「私は大丈夫、だよ？」
「……ああ、そうだな」
「兄さんも花婿修行がんばってね？」
「……頑張るよ？」
……柳韻さん、何吹き込んでるんですか！？
「じゃあ兄さん」
「ん？」
「またね！」

「ああ、またな！」

箒は、笑顔で駆けて行った。

俺も往こう――――

「ふふ、もう良いかしら？」

「はい」

――――戦場へ。

「さあ、行きましょう」

「わかりました」

早速、仕掛けてみよう。

「一つ、いいですか？」

「何かしら？」

「俺は強く成りたい。だから、業を教えてくれませんか？」

「ええ、その積もりよ」

「教えてくれるんですね？」

――――盛大にやってやれ！！

「――――漆月の業を」

「！！」

この時、俺は哂っていただろう。

口を、三日月の様にして、哂っていただろう。

◇◆◇◆◇◆◇

別れが在れば、その逆の、出会いも当然と、存在する。

その様は、吹き抜ける、風のように。

過ぎ去った風は、温かく、見知らぬ風は、騒がしい。

呪は月を擁いて　第八話

『宜しくね』

第七話　『私は大丈夫』（後書き）

シリアス話…だった。が何故こうなる？

弁解します。

次期楯無ちゃん、この頃はまだ初心。
そして初陣なので未熟未熟ぅ！
そんでオリ主マジモードにドッキン子！！

…何で最後こうなった？

箒独りぼっちフラグＯＦＦ。

箒一時離脱。次はきっと６年後。
花嫁修業も終わり、ぱーふぇくと箒になっているはず。
この子は結局ツンツンしなかった。しかも未だに性格がつかめない。
最近、束の不思議成分が箒に移ったのだと理解した。
だって束の方が書きやすいから。

ＩＳ名決まりました。

自分じゃ選べずアミダで決めました。
こんな決め方で申し訳ございません。

春夏秋冬様、ＳＩＬＶＥＲ様、ｐｅｉ様、杉やん様、
ご協力、本当にありがとうございました。

人物紹介？＋α（前書き）

七話終了時のもの。

人物紹介？＋α

漆月　神威　うちのオリ主

皆のお兄ちゃん。学園では総帥。只今更識に出張中。
性格がちと黒くなってきた。束の教育のおかげだろう。
ＩＳもゲットしたのでやっとオリ主と認められたであろう。
癒しの存在が居なくなり、これからどうなっていくのだろうか？

呪いについて

『令呪って精神にも効くよな？』と気づいた。
オリ主が崇められても心折れても復活するのはたぶんこのせい。
だが気づいたのは一昨日。なんで？……鉄屋も呪われてる？

織斑　千冬　ブラコン

ブラコン戦士からブラコン乙女に進化。
基本戦闘能力は変わらないがブラコンパワーブーストが跳ね上がった。
しかもブラコンパワーが他からも補充可能になった。
他の補充元はぬいぐるみ。ふかふかする事で充電できる。
現在ぬいぐるみは兎、ライオン、熊、パンダ、ペンギンの五つ。
毎年オリ主から誕生日に一つ送られる。誕生日が近づくとソワソワし始める。

バッチリ乙女もやっている。ゆえにブラコン乙女。すばらしいだろう？

織斑　一夏　シスコン＆ブラコン

エアボーイ。そろそろ出番があるだろう。
フラグ体質は覚醒している。よって男の敵となった。
『金魚の糞その１』の称号の他に『断想剣』のコードネームを持つ。
「鈍き心にて、淡き想いを断つ！名付けて、断・想・剣！」とのこと。
そのうち『天上天下恋慕爆砕剣』とでも呼ばれるだろう。……もげろ！

篠ノ之　箒　シスコン＆ブラコン

ミス不思議ちゃん。鉄屋にとって書き難い子Ｎｏ．１。
『金魚の糞その２』の称号は健在。
『神威の花嫁？』の称号も手に入れた。花嫁＝兄さんと一緒に居られる。とのこと。
その中に恋愛感情が有るのか無いのかわからない。
神威に対して色んなメーターがレットゾーンを突破しているからである。
一時離脱した。再登場はたぶん６年後。たぶんね？
６年あれば恋愛感情とか自覚する……よね？
なんか色んな意味でぱーふぇくとになって再登場する。……気がする。
原作開始時にどうなってるか相変わらず不明。結局ツンツンしな

かった。なんでだろ？

篠ノ之　束　シスコン

絶賛軟禁中。足りない箒分は写真でカバー。
写真だけでご飯３杯はかるいかるい。そのまんまの意味で朝飯前。
只今、毎日夜なべして、せっせとＩＳコアを作ってる。
呪詛でも吐きながら作っているだろう。そのトバッチリは世界各国。哀れな。
マスターコア自体を単独で作ることは最早不可能。
マスターコアを作るにもマスターコアが必要になった。
理由は神威嫉妬時にラボで物にヤツアタリ。必要な物にボカーン！んでチュドーン！
爆発に自分もシッカリ巻き込むのも忘れない。さすが天才。やってくれるぜ天災。

篠ノ之　柳韻　親バカ

束＆箒のオヤジさん。剣持つと鉄の男。普段は気さくなおっさん。
漆月　龍我の友人。言葉でも剣でも語り合う仲。
お互いの子供をくっ付けようとしてた。龍我の死後、その使命感に燃える。
これから箒に花嫁修業の名目で色々吹き込んでいくだろう。
箒が変な事言い出したらコイツのせいと見て間違いない。

十六代目　更識　楯無

現在頭首であり当主。東いわく雌豹。
欲しいものは手に入れる。敵対する者のは容赦無しの人。
逆に身内には甘い。特に娘２人には。そして娘をからかうのが大好き。
娘の教育方針はやりたいようにやらせ、その中で必要な事を刷り込んでいくやり方。
ちなみに初恋相手は漆月　龍我。だが結ばれない関係に枕を涙で毎日濡らしていた。
龍我が絆と結ばれたと知って、さらに枕を涙で毎日とても濡らしていた。
神威が欲しいのはこのへんも関係してるのだろう。たぶん……
漆月との関係は次話あたりで明かされる予定。

次期　更識　楯無

次代の楯無。本名どうしよう？の子。まだ未熟未熟ぅ！未熟千万！！の子。
小説読んで妹との関係でポンコツ臭がしたからこう決めた。
なんて事は言えるわけがない。
妹との仲は現在良好。何時か亀裂が入るのか？
オリ主とのバトルは試合に勝って勝負に負けたと言ったとこ。
オリ主マジモードにドキドキしてた。
この子も親と同じように枕を涙で濡らす日々になるのだろうか？

ＩＳコアについて

うちの設定でＩＳコアはマスターコアと普通のコアの二種類ある。
マスターコアは普通のコアに命令権がある。当然、生体再生能力

もある。
他の機能はまだ秘密。
そしてＩＳコアを作る時、必要不可欠なもの。
普通のＩＳコアのベース自体は手順さえ解れば誰でも作れる。
だが、この先からはオリ主と束しか出来ない。
作ったコアベースからマスターコアにアクセスさせＡＩデータをロードさせる。
データを得たコアベースとナノマシンが独自に動きコアを作っていく。
その際、プロテクトなどを張り解析できないブラックボックスになる。
それで初めてＩＳコアと呼べるものになる。

人物紹介？＋α（後書き）

漆月関係はまた今度で。

１０万ＰＶ突破記念＆感謝（前書き）

皆様のおかげで１０万ＰＶを突破しました。

なのでちょっとしたバカ話を。

キャラはちと壊れているので注意を。

１０万ＰＶ突破記念＆感謝

神＜どうも、神威です＞

束＜やほ！束で～す＞

神＜今回は１０万ＰＶ記念＆感謝のちょっとしたバカ話です＞

束＜ただ今ネットワークチャンネルでお繋ぎしてまーす＞

神＜さて、バカ話の内容は……＞

束＜内容は？＞

神＜千冬姉さんの誕生日の夜！です！＞

束＜わ～どんどんぱふぱふ！＞

神＜てな訳で、壁の向こうに千冬姉さんがいます＞

束＜そしてぇぇ今ここに！束印のスーパーハイパーセンサーがあ～る！＞

神＜そんでもって今ここにぃ！グレートモニターがあ～る！＞

束＜今からそいつにぃぃアクセェェェス！……えい＞

神＜お、映った＞

束＜どれどれ……お～ぬいぐるみ贈ったんだ？＞

神＜うん＞

束＜でっかいライオンと見詰め合ってるねぇ＞

神＜見詰め合ってるねぇ……お？動いた＞

束＜……おぉ、ハグした！＞

神＜ほほ～贈った甲斐がありますな～＞

束＜すっごい笑顔だよ！＞

神＜……あれ？放した＞

束＜ほんとだ……ん？前足持った？＞

千「……がお」

神＆束＜＜がお！？！？！！？？＞＞

神＜がお、がお！？前足振って……がお！？＞

束＜……あいさつ？あいさつなのかな！？ねえどう思うむっくん！？＞

神＜え？あいさつなの？これあいさつなの！？＞

束＜じゃあ何さ！？も一回見てみ……ん？＞

神＜どうし……お？＞

束＜兎のぬいぐるみを凝視してる……＞

神＜次は何だ……ぴょん！でもやるのか？＞

束＜ぴょんぴょん♪……かも？＞

神＜お？手に取った……＞

束＜……ゴクッ＞

千「……」

神＆束＜＜ドキドキ、ドキドキ＞＞

千「……がう」

神＆束＜＜兎を踏みつけたーーー！？！？＞＞

神＜なんでさ！？＞

束＜実は私が嫌いなの？ちーちゃん……＞

神＜どーしてそーなる！？＞

束＜だって私は兎だもん……＞

神＜それは兎に失礼だ！！＞

束＜これこそ失礼だよ！？＞

神＜第一ぬいぐるみだろ！？アレは！！＞

束＜兎魂を持つ束さんがあんなことされ……お？＞

神＜？……あ＞

千「……かぷ」

神＆束＜＜兎を食べさせたーーーー！？！？＞＞

束＜なるほど、そーゆー事か＞

神＜……何がわかったの？＞

束＜ちーちゃんはね、束さんを食べちゃいたいくらい愛してるんだよ！＞

神＜アホか！？遊んでるだけだろ！！＞

束<――――ウソだ！？>

神<それ以外なにがある！！全く……ん？>

束<あれ？兎を戻した？>

神<食事完了、かな？>

束<むぅ、でもライオンをちーちゃんとすると……兎は私……>

神<……まだトリップ中？>

束<……つまり私をコアとして……融合合体が……！！>

神<出来ねぇよ！帰って来い駄兎！！>

束<もうチョットくらいイイじゃんか！？>

神<はいはい、後で一人でやってなさい>

束<ぶ～>

神<で、千冬姉さんは……>

束<お？ライオンを横にしたぞ？>

神<……昼寝かなんか？>

束<……かな？……お？電気消したぞ？>

神＜お休みかな？＞

束＜かもね……おぉ、またハグ！＞

神＜頬ずりもしてね？＞

束＜してるねぇ……幸せそうな顔で＞

千「……ん」

神＜……＞

束＜……＞

神＆束＜＜萌え～～～～～！！＞＞

神＜これは、いいものだ！！＞

束＜いい！ディ・モールト……いい！！＞

神＜まさに……お？おお！？＞

束＜顔埋めてグリグリしてる！！＞

神＜……素晴らしい！＞

束＜ちょ！？赤い鼻汁出そう！！＞

神＜俺達を昇天させる気か！？＞

束＜ちーちゃん…なんて恐ろしい娘！？＞

神＜……くっ！このままでは……ん？＞

束＜ゴール、ゴールしちゃいそ……お？＞

神＜……動かなくなった＞

束＜……寝た、のかな？＞

神＜……危なかった＞

束＜……九死に一生だね＞

神＜……束大尉＞

束＜ハッ！何でしょうか総帥＞

神＜これは永久保存だ！＞

束＜ハッ！了解しました！！＞

神＜よし＞

束＜総帥！一つ提案があります！！＞

神＜なんだ？言ってみたまえ＞

束＜どうせなら編集したほうがいいと思います！＞

神＜編集？＞

束＜はい！笑った瞬間に花を添えるとかバックをピンクにするとか！＞

神＜……＞

束＜どうでしょう！？＞

神＜束大尉……＞

束＜はい！＞

神＜存分にやりたまえ！！＞

束＜ハッ！では早速！！＞

神＜ちょ待て！俺も行く！俺もやる！！＞

束＜あっはっはっ～！楽しくなってきたぁ！！＞

神＜ではでは！今日はこのへんで！＞

束＜グッナイ！！＞

――――ブツ！！――――

１０万ＰＶ突破記念＆感謝（後書き）

少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

この駄文を見てくれた皆様、ありがとうございます。

第八話　『宜しくね』（前書き）

オリ主強化プラン開始。

第八話　『宜しくね』

眼前の相手に刀を振るう。

「ふっ！」

右上段から左下段への切り下ろす。

「甘い」

だが、防ぎ左へ流され、

「がっ！？」

刀の柄頭（つかがしら）で突き刺された。

「ぐ、げほっ！」

「ふむ……」

対峙する相手は漆月（しつづき）　荒刃（こうじん）、漆月　神威の祖父。
漆月　龍我の父であり、師であった人。

「斬（ざん）はまあまあ、か……」

「げほげほっ……はぁ……」

「……うむ、大体の方針は決まった」
今は俺の師でもあり、理解者でもある。
「今日よりこれを付けろ」
そう言って取り出したのは、
「サポーター……ですか？」
紺色のサポーター。
「ほれ」
こちらに放り投げてきた。
当然受け取ろうとするが、
「――――重い！？」
そう、重いのだ。
「まだあるぞ」
「……え？」
どさどさと出てきた。
この人さっきまでこんなモン持って動いてたの？
「頭、肩、手、腰、足首に付けて過ごせ。

風呂と就寝以外、外す事は許さん」

「……はい」

鬼だよ、この人。

「お前は追い込む程、何故か力を発揮する。
この際、その性質を利用する事にした」

そうなんです。死に掛ける程ポテンシャルが上がるんです。俺の身体は。

「今の重量に慣れたら増やす」

おかげでこんな目に遭う破目に。

「それとこれも持ち歩け」

渡されたのは長刀。

「……」

銃刀法に引っかかんねえ？

「刃は潰してある、問題ない」

「……はい」

そうゆう問題なのか？

「根回しはしてやる」
それでいいのか？
「それに……」
「？」
「早く力を付けたいのじゃろう？」
「！！」
「少しでも早く己の一部とするのじゃ」
「――――はい！」
そう言われてはやるしか無い。
「今日から学業が始まるのじゃったな？」
「はい」
「ならばそれをとっとと付け着替えろ」
「はい」
「暫くは送りを出す。だが、帰りは自力で帰れ
これも修練じゃ、よいな？」
「はい」

「では、ワシは先に上がる」

「はい、ありがとう御座いました」

「うむ、では後でな」

そう言い残し、師は去って行った。

この地に来て一月近く。

俺は更識と距離を置く事に成功した。意外と簡単に出来た。

漆月の子供が更識に居る、この事を漆月に訴えた。

この事は、在ってはならない事。

更識の祖は、自身の組織(ちから)力を恐れた。

もし更識が暴走すれば、抑える者が必要になる。その抑える者が、漆月の祖となった。

更識は、実力もあり、権力も強い。

漆月は、権力は少ないが、実力は高くある。

更識は、国内、又は国外に、目を光らす。

漆月は、更識に、その動向に、目を光らすだけ。

更識は、敵を倒し、捕まえ、情報を得なければならない。

漆月は、敵を殺し、壊すだけ。

更識は対暗部、漆月は対更識として存在している。

云わば、更識の首輪。それが漆月。

漆月の血を持つ俺が漆月の業を求めれば、更識に居る事は出来なくなる。

そして、俺の訴えを聞いてくれたのが、師の漆月　荒刃。

師は、漆月　龍我が裏から抜ける時、後押しした人。
そんな人が、孫である神威の訴えを、聞かぬ筈が無かった。

一緒に過ごして解ったんだが、師は爺バカな所がある。
四年前の事故の日、会う約束をしてたらしいが、
漆月　龍我が死に、裏を知らない神威と縁が切れ涙した、らしい。
今回の事は渡り舟だったようで、かなり頑張ってた。
俺も調子に乗って「もうお家に帰れないのぉ？」とか、
「同じ学園に通えないのぉ？」とか、首を傾げバカっぽく言ってみたら…

「任せておけぃ！何とかしてやるわい！！」

と、家に月二回くらい帰れるように成りました。同じ学園にも通えるようになりました。

爺バカ最高！マジ格好イイと思います！！

でも、修行は鬼です。

「神威ー！まだかーー！？」

呼ばれたので行かなくては、重しを付けて……。

◇◆◇◆◇◆◇

教室への道程（みちのり）がとても険（けわ）しい。
春休みを終え新学期。今日から俺は六年生。

送りには、師も一緒に付いて来た。
なんでも、学園長に挨拶に行くとか。
嬉々として付いて来た。
こういった事に憧れていたっぽい。

……爺バカ自重しろ

そんな事を考えていたら教室に着いた。
後はドアを開けるだけなのだが、

Q. 刀背負った奴はどう成る？

A. 不審人物。お縄を頂戴！

だろう。

だが何時までもこうしては居られない。

ええいままよ！！

ドアを開け、歩み始める。

教室は静まり、奇怪な視線が――――

「うおおぉぉ！？」

「どうしたんですか！？そのお姿は！？」

「きっと神の名に相応しいように修行を始めたのよ！！」

「マジで！？スゲェ！！」

「さすがお兄ちゃん総帥！！」

「ジィィィイク・神兄いいいい！！！！」

――――無かった。

A．大丈夫だ問題無い。

だったようだ。

「うんうん、さすが私の上に立つ人」

「……会長か」

「また一年間よろしくね？」

「ああ、よろしく」

「あ！今日、新入生に挨拶するんだけど」

「……」

凄まじく嫌な予感がする。

「総帥の神託、その格好でやってね？」

「……冗談か？」

「Ｎｏｎ！超マジ！！」

「――――ジーザス」

Ａ．大惨事に成りました。

◇◆◇◆◇◆◇

拷問の時間を終え、後は帰るだけになった。
午前で終わりなので帰る『場所』である家によって行く。
どうせなら、と一夏を探していたのだが、
「あいつ……何やってんだ？」
ツインテールの子と何か揉めている。
……見なかった事にして帰るか？
厄介事なのは間違いない。さっさと離れようとして、
「あ！兄貴！！」
見つかった。
「……よう、愚弟（いちか）」
「今俺置いて帰ろうとしなかったか！？」
帰りたくなるわ！！
「……話し中だっただろ？」
と、言わない俺は立派だと思う。

「そうだけどさ……」
「そっちの子と何揉めてたんだ？」
「あーそのー」
どうせ恋のから騒ぎだろう。
「……言えない事か？」
「いや……この辺案内する約束したんだけどさ」
「案内？」
「うん、引越して来たばかりだからこの辺知らないんだって」
「……で？」
……何かもう分かった。
「でも、朝兄貴がいたから……」
「……いたから？」
「明日にしてもらおうとしたんだけど……」
「それが駄目で揉めていた……か？」
「……何で分かんの？」

「……分からんでか」

やっぱり俺かよ。
こいつ全然兄離れできてねえ。

「……でも約束したんだろ？」

「……久しぶりに話せると思ったからさ」

「あー……約一ヶ月ぶりだしな」

一夏の言い分は解る。
俺と箒が居なくなったのだから。

「だが約束は守らないとな？」

「でも……」

「まあ待て、先にその子を紹介してくれ」

「わかった。鈴」

「……鳳（ファン）　鈴音（リンイン）です」

何処かで聞いた事ある名前だ……

「漆月　神威。こいつの兄貴分だ。
俺も案内に付いていっていいか？」

「え？」

「二人きりの約束じゃ無いんだろ？」

「……あ、はい」

「それとも……」

「？」

「二人きりの方がいいか？」

「な！？なな！！？？」

ニヤリとしながら言ってやれば、
面白いくらい、バレバレのあたふたした反応。

「くくく……」

「か、からかわないで下さい！！」

「ははははは……」

「笑わないでよ！！」

「すまんすまん……クク……」

「むうぅぅぅ」

こうまで反応が良いとは。

「……何の話しをしてるんだ？」

「「え……」」

「？？」

「分かんないの？」

「おう」

「マジで分かんねぇのか？」

「お、おう」

「「……はぁ」」

「？？？？」

二人同時に溜息を吐き、自然と視線（め）が合う。

――――敵は強大だぞ？

――――理解しました。嫌なくらい……

――――愚痴くらいは聞いてやる

――――ありがとうございます

人は、言葉が無くとも、解り合えるのだな……

「俺と兄貴で案内する話し、だよな？」
「「……ああ（うん）、そうだ（よ）」」
「じゃあさっさと行こうぜ」
「「……ああ（うん）、行こうか」」
「おう！」
鈍感（ばか）が先導し、俺達も続く。
「道は長く険しいぞ、鳳」
「はい……あ」
「どうした？」
「鈴（リン）でいいですよ？あたしの事は」
「いいのか？一夏と同じでいいのかなぁ？」
「な！？にゃにを！？！？」
「くくくく……」
「もう！からかわないで！！」
「わるいわるい」

面白いんだから仕方がない。

「うぅぅ」

「じゃあ……お詫びとして、敬語は無しでいいぞ？」

「え？」

「その方が楽だろう？鈴の感じからして」

「それは……」

「まだ見慣れてない『場所』だ、少しくらい楽したって良いさ」

敵も味方も分からない『場所』なら、なおの事だ。

「！！」

「な？」

「――――うん！！」

「あと、俺の事も好きに呼んでもらって構わない」

「いいの？」

「ああ」

「じゃー……大哥（ダァゲェ）！」

「成る程、了解だ……じゃあ鈴」
「なに？」
「改めて、宜しく」
「うん、宜しくね」
「おーい！早く行こうぜー！」
何時の間にか足を止めていた俺達に、一夏が催促を掛ける。
「行くか」
「うん！」
そして、俺達は、歩み始めた。

「そーいや兄貴」
「ん？」
「何で刀背負ってるんだ？」
「……聞くな」

少しは空気読め！愚弟（いちか）！！

◇◆◇◆◇◆◇

やられたわね……

あの子は更識と漆月の関係を知っていた。
恐らく、篠ノ之　束から知ったのだろう。
彼女には漆月を調べ上げるだけの能力（ちから）が有る。

そして、此方に出した条件。
更識に来る棟（むね）を聞いた時、出した物。
篠ノ之家に手出しをしない。それだけだった。

それは此方も予想内の事。
篠ノ之家は、あの子を手に入れる為の札でしか無い。
当然、承諾した。

漆月を知っていたのなら、手離しはしなかった。

今、あの子は漆月に居る。最悪、漆月が動く。
篠ノ之家を抑えているのならやり様は在るが、手離した今では不可能。

本当、やられたわね……でも

手が無い、訳では無い。
あの子は漆月に居るだけだ。漆月に属している訳では無い。
だが、漆月に居る以上、漆月としての行動をしなければならない。
そこに、打てる一手が、在る。

あの子は、何時の日か、此処を出て往く

その日迄に、楔を討ち込めばいい。
帰れないように、心に確実な、確りとした楔を。

それに、娘には、私の様な想いはさせたく無い。絶対に――――

燃えるような、紅い月を睨み、そう誓った。

◇◆◇◆◇◆◇

世界各地に散った、力の源（みなもと）。だが、限られた数しか無い。
手に入れた者は、源を、確かな力へと、変えて往く。
確かな力に成ったのなら、当然、その力を、試す事に成る。

呪は月を擁いて　第九話

『負けはしないさ』

第八話　『宜しくね』（後書き）

※柄頭：刀の切っ先と正反対の位置にあたる金属製の部品。

※大哥：中国語。
（1）　いちばん上の兄，長兄の名詞
（2）　同年配の男子に対する尊敬と親しみをこめた呼称．
この場合（2）の意味。

オリ主、長刀を持つの捲。

チャイナっ子登場。
この子は原作通りだと思う。登場は一年早いけど。

ＧＸは佐々木小次郎がモチーフとの事で長刀を持たせます。
長刀の銘はまだ決まってません。

ＡＳＴＲＡＹの
ガーベラ・ストレート＜菊一文字＞
タイガーピアス＜虎鉄＞
みたいに英名、和名で通る銘にしようかと思ってます。
長刀だけでなく、太刀や刀で構いません。
バカでかいガーベラ・ストレートだってありますし（笑）

皆様の御力をお貸し下さい。お願いします。

第九話　『負けはしないさ』（前書き）

一夏と鈴は基本セットです。

第九話　『負けはしないさ』

始業式から一ヶ月が経ち、ゴールデンウィーク。
その間は一時帰宅が許され、たった今家に着いたのだが。
「……なにこれ？」
一夏の隣に鈴が座り、テーブルを挟み姉さんが座っていた。
姉さんが徒ならぬ雰囲気を放っている。
鈴を品定めする様なとんでもない目つきをしている。
対する鈴は顔色が悪い。
と言うか全体的にヤバイ。完全に怯えてる。
一夏は固まってる。余波を食らってるようだ。
ちなみに俺は混乱している。
だって帰ってきていきなりコレだぞ？
脳の処理が全く追いつかん。
原因は一夏だろうが、何でこうなったのかが分からん。
全く分からん。分からんから逃げよう。
トンズラしようとしたが、

「ああ！？兄貴ぃ！！」
目敏(めざと)く見つけやがった。
そうなると……
「む？」
姉さんが気づき、
「大哥ェェ……」
鈴が涙目で救いを求める。
「……ども」
一夏、覚えてやがれ？
「なんだ帰ってたのか」
「まぁ、ね」
「丁度いい、神威にも聞きたい事がある」
「……何？」
ぜってぇ碌(ろく)な事じゃねぇ。
「二人の関係をどう見る？」

やっぱりだよ！！

「友人関係」

「……そう、見えるか？」

「そうとしか見えない」

鈴が片思いしているけど。

「そうか……」

「それ以外何に見えるんだよ」

「……少々目に付く所があってな」

あ、また目つきが……

「「ひぃっ！？」」

あ、ガタガタ震え始めた……

「私にはそう見えんのだ」

不味い、ブラコンモードだ。

「まるで恋び「ストップ！ストーップ！！」…む？」

一夏は兎に角、鈴が不憫だ。

「落ち着け、姉さん」
「しかしだな……」
「この一ヶ月、俺も一緒だったけどそういった関係に成ってないよ」
「……そうなのか？」
「ああ。それに鈴は引っ越して来たばかりだったから、
頼れる者が少なかったんだよ。そうだよな？鈴」
鈴は頭を縦に振った。残像が見そうなくらい激しく。
「だから一夏を頼るのは当然だろ？なんせ姉さんの弟なんだから」
コレでイケルはず。
「……そうだな」
よし！ノーマルモードに戻った！！
「すまなかったな、鳳」
「いいいいえ！あたしの方こそ！！」
取りあえず一件落着と言った所だろう。
姉さんは俺達を大事にしてくれる。
その想いは嬉しいのだが、偶にその想いが行き過ぎて酷い事に成ったりする。

特に女関係だと酷い。今回みたいに成る。

「それより、そろそろ飯の時間だから飯作らねえ？」

「俺！俺が作る！！兄貴は座っててくれ！」

「あ、あたしも手伝う！」

「おう、頼んだ」

そう言うとバタバタと台所に駆けて…いや、逃げて行った。

「む……」

「いや、だから違うって。ちょっとした恩返しだって」

また発動しそうだから先手を打っておく。

全く、帰ってきて早々コレは無いと思います。

◇◆◇◆◇◆◇

待ち人が来たようだ。

「待たせたようで、申し訳ない」

「いえ、此方からお呼びしたのです。お気になさらずに」

そう、私が漆月　荒刃を呼んだ。

「して、何用で？」

「貴方の孫、漆月　神威の事です」

「神威の？」

「はい、何時まで此の侭でいるのですか？」

「……」

「漆月に属さない者が漆月の業を修める。更識（わたしたち）は予備戦力と見做（みな）し初めています」

漆月の業を修めるには必ず漆月に属さなければ成らない。当然、更識も同じ。

これは更識と漆月との間で決めた掟、破ることは許されない。

「ですから、そろそろ御決断を頂きたいのです」

「……そうか」

「どう成されます？」

あの子、神威は漆月に属する事は無い。属すれば抜ける事は容易では無い。
漆月　龍我の前例が在る為、以降は漆月より抜ける事は死を意味する。
漆月　荒刃は神威の祖父で在り理解者。神威の死を許せる訳が無い。
由って、漆月に属する事は無い。
逆に、漆月から抜ける事は、今の段階では簡単。
本格的な業を身に付けていない為、漆月として見做されないからだ。
此処で神威を手放せば、また札を使い、手元に寄せる事が出来る。
だが、其れでは堂々巡りに成る可能性が在る。
そして、篠ノ之　束も居る為、時間は掛けたく無い。
「もし、現状の維持を希望でしたら……手が無い訳では有りません」
「……どの様な？」
「漆月の仕事をさせるのです」
「じゃが、それは……」
「仕事、と言っても簡単なものです」
「簡単なもの？」

「はい、私の娘を直々に監視する事です」

「な！？」

驚くのは無理もない。この様な事は過去に無い。

「外からでは無く内での監視。今の神威であるから許せる事です。
此れならば、貴方の周りも認めるでしょう」

漆月には、神威を好く思わない者も居る。
だが、更識の次期楯無を監視出来る唯一の者と成れば、手出しは出来ない。
さらに、漆月は今の状態を神威に望むだろう。この事は身の安全に繋がる。

「……じゃが、未だ未熟じゃ」

「それは娘も同じ事です」

「だから簡単な監視……か」

「はい」

「更識としては、良いのか？」

「私が言い出した事です。問題有りません」

利は神威以外にも有る。
漆月の名を持つ者が更識に居れば、当然警戒する。
それは気を引き締め、更識が高みへ上る手段に成る。

「……では、何時から？」

「早い方が良いでしょう。身の安全の為に」

「……そう、じゃな。忠告、痛み入る」

「いえ、当然の事です」

「では、伝えておく」

「はい、ご理解感謝します」

月夜の会は、私の望む形で、幕を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇

「おっまたせー！」

「来たか」

「遅かったね」

束さんのラボに俺達は集まった。

「いやぁ～箒ちゃんが離してくれなくてね～」

束さんは俺達の中で唯一箒に会う事が出来る。
軟禁から開放されたので、会いに行っていた。

「……箒は元気だった？」

「うん！元気に花嫁修業頑張ってたよ！」

「……そっか」

「むふふふふ、きっとイイ嫁に成りますぜ～ねえ旦那？」

「……ソウデスネ」

「ふふ、その話は後でしよっか」

後でも勘弁して欲しい。

「では束、此方の状況は把握しているか？」

「大体はね、私の方は解る？」

「何してる、かは解るけど……」

「何がしたいのか、が解らん」

ＩＳコアを創り何かをしようとしているのは解る。
だがその何かが解らない。
「ふむ……今、政府が如何なってるか知ってる？」
「いや、知らんが……関係あるのか？」
「あるよん」
「政府って今、滅茶苦茶じゃなかった？」
「おお正解！流石漆月に居るだけはあるねぇ」
今、日本政府は世界各国から叩かれてる。
束さんがＩＳを開発したからだ。
「確か、ＩＳの研究と扱える人の育成する場を造ろうとしてるんだっけ？」
「そうそう」
「それと何が関係している？」
「今ね、その所為で外からの出入りが多くて更識も大変なんだ。
有耶無耶に出来そうだから仕掛けようとしたんだ、けど…」
「「けど？」」
「肝心のコアが更識に無いから無理でした！」

「「……」」

「てへ」

「「……」」

俺と姉さんの右手が怒って唸る。

「「ふん！」」

「みぎゃあ！？」

姉さんは額に、俺は後頭部に殴りつけた。

「うぅ……イイ拳してますなぁ」

「で？どうすんの？」

「ちょっとお茶目しただけなのにぃ～」

「……神威」

「おう」

月下を右腕だけ展開する。

「代案をキリキリ話します！！」

「さっさと話せ」

「Ｙｅｓ！！今造ってる所がなんか治外法権ぽいのに成りそうなんです！」

「そうなのか？……あと普通に話せ」

「うい！その機関の深い所に属すれば、更識も手が出し難く成ると思うんだ」

「なるほど」

「しかし、どうやって成る？」

「其れなんだけどね、時期はわかんないけどＩＳの大会の話があるんだ」

「なんかあったな、そんな話」

「……それで？」

「ちーちゃん、大会出て一番取って」

「……なるほど」

大会でトップに成る程の実力者なら育成者のオファーも当然来る。
それは同時にＩＳの知識もあるとゆう事、研究面でも求められる。
中々の発言力を持つ立場に成れそうだ。

「でも何時始まるんだろ？」

「ん～早くて一年、かな？」
「ほ～……で、姉さんはいけそう？」
「ふふ、誰に言っている？」
「ま！ちーちゃんなら大丈夫！」
「ああ、負けはしないさ」
姉さんはＩＳの深い所まで知っている。問題は無いだろう。
「じゃあ、俺は漆月で更識の目を集める」
「私は大会で頂上を目差す」
「私は……ちーちゃんのＩＳ作ろうかな？」
「とりあえず、こんなとこかな？」
「うん、こんなとこだね」
大体の方針は決まった。
次は大会後にすればいいだろう。
「んじゃ、話し戻そっか」
「ん？」
「戻す？」

「うん！可愛い可愛い箒ちゃんのお婿さんに成るむっくん？」

その話しかい！

「……なに？」

「予行練習として、束さんをお姉ちゃんと呼んでみないかい！？」

「……は？」

「……何？」

「さあ！遠慮無く言ってイイゾ！！」

何言い出すんだこの人は？

「……そん時になったら考えます」

「だ・め！今言ったらハグも付けちゃうよ！！」

こうなったら…

「姉さん……」

「おお！？姉さん……これもいい！！」

「しっかり捕まえておいて」

「わかった」

俺は展開した儘の右腕を掲(かか)げ、兎を狩る為、歩み寄った。

この後の事は、語る必要は無いだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

ゴールデンウィークの最終日。
漆月に戻る途中、行く手を遮るように人がいた。

「やあ！久しぶり！」

更識の娘、次期楯無がいた。

「何の用だ？」

「そんな警戒しないでよ」

無理な話だ。

「今日は唯のメッセンジャーだよ？」

「内容は？」

「神威君のお仕事が決まりました！」

「仕事？」

「うん、自分の立ち位置、拙いのわかってるでしょ？」

解っている。俺は唯の居候。漆月の業を学ぶのは本来有り得ない事。

今は多少のやっかみ等で済んでいるが、何時まで続くか分からない。

「仕事内容は？」

「私の監視」

「……何？」

「因みに此れは決定事項です！荒刃さんも了承済み」

師が頷いたのなら仕方が無い。

他に道が無いのだろう。

「何時からだ？」

「今から」

「だから俟っていたのか」
「そうだよ、行こうか」
「何処にだ？」
「あそこの喫茶店」
指差すのは以前と同じ喫茶店。
「分かった」
「……素直だね？」
「仕事だからな」
「む……」
それ以外に意味など無い。
「……じゃあ、はい」
手を出してきた。
「何の積もりだ？」
「エスコート」
「……それも仕事か？」

「私のお願い、かな？」

恐らく、足元を見ている。

俺とこいつとの関係は、漆月と更識の関係に発展する。

それを解ってやっているんだろう。

「いいだろう」

「ありがとう」

その手を取り、喫茶店へと足を向けた。

「～～～♪」

横を盗み見れば、機嫌良さげに歩いていた。

頬を赤くするなど、良く出来た演技だ。

そう思いながら、喫茶店に足を踏み入れた。

◇◆◇◆◇◆◇

第１回ＩＳ世界大会。その名はモンド・グロッソ。
己の力を示す為に。誰よりも強く在りたい為に。
最後に立っていた者は、呼ばれるだろう。世界最強、と。

呪は月を擁いて　第十話

『一太刀の如く』

第九話　『負けはしないさ』（後書き）

鈴は千冬が苦手に成りました。

そして、更識のターン！

雌豹の名はダテじゃない！！

今までの前後をまとめました。

第十話　『一太刀の如く』（前書き）

オリ主プチ暴れ。

第十話　『一太刀の如く』

あれから1年と半年近くが経った。

此処は、漆月の鍛錬場。俺は刃を潰した長刀を持ち、対峙している。

相手は漆月の同世代の一人、俺に難癖をぶつける奴。
日頃の鬱憤も籠めて、叩き潰してくれよう。

その為に、何時までも睨み合っているわけにはいかない、此方から仕掛けよう。

「ふ……」

「！！」

鼻で哂った、挑発で。

「おおおぉぉぉ！！」

上手く釣れた。刀を振り上げ、向かって来た。頭に血が上り動きがまる解り。
潰してくれ、と言ってくれている。そのオーダーは、喜んで受けよう。

右手で肩に担ぐように構え、左の指先を合わせる。
相手が間合いに入った瞬間、大きく前へ跳ぶ。

「！！」

左の親指、人差し指、中指を一つにした突きで鳩尾（みぞおち）を下から撃つ。

「ぐふ！？」

くの字に成り落ちる頭を、刀の柄頭で眉間を衝き貫く。

「が！」

顎が上がり開いた首を、突き飛ばすような手刀で薙ぐ。

「きゅ」

下がる相手に一歩踏み込み、刀の鍔（つば）で顔側面を殴り飛ばす。

「お」

崩れ落ちる相手に、刀の切っ先を心の臓に向け踏み込み――――

「其処まで！」

――――衝く寸前で停めた。

これは極稀に有る、実戦の様な組み手、相手を倒せれば良い。
どの様な方法、手段でも許される。相手を倒せれば何をしても良い。
対峙する相手は殺すべき敵、情け容赦などは不要。

実戦でそんな事をすれば、殺されるだけだ。

漆月の業は殺す事、又は壊す事に重点を置いている。
その為、この組み手は死合に近い。勝敗を決める法は二つ。
審判が止めるか、片方が動かなく成るか、その二つ。

敗者と成った者に賛辞などは、当然無い。
唯の肉塊を意味する者に、贈る言葉など、無い。
そして、見極められる。
折れずに立ち上がれる、強い者か。折れて倒れ伏す、弱い者かを。

俺は一礼をし、離れた。師の荒刃の元へ歩む。

「ふむ、使える様に成ってきたな」

「師の御蔭です」

「謙遜するな、重しも付けた侭じゃろう」

「事実を言った迄です」

確かに重しは外していない。
だが、其れでも動けるように鍛えてくれたのは師だ。

「まあ良い、この後は仕事じゃったな？」

「はい」

そう、この後は更識に行かねばならない。

「ならば、サッサと汗を流してこい」

「はい、では失礼します」

「うむ」

道場を後にし湯浴みに急ぐ。重しを外せる数少ない機会だからだ。そして今回は、気に食わない奴をブッ飛ばした後の風呂。気分良く浸かれるだろう。

更識の事が頭から抜け落ち、意気揚々と湯浴みに向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

汗を流し終え、更識に向かう最中考える。

更識は俺に何をしたいのかを。

やっている事が、何と言うか……ぬるい。

今からやる監視も、ごっこ遊びの範疇の様なものだ。正直、理解できない。

橋渡しの様な事もするが、頻度は少ない。

第一、俺が欲しいのならもっと直接的な手段でくる筈。

そもそも、俺を欲しがる理由がいまいち解らない。
最初は戦力として確保しようとした。と思っていたが、それは違うようだ。
更識頭首ではなく、その娘に関係している。そう考えるように成ったのは――――

「あ、来た来た」

――――こいつの、俺を見る視線。

「待たせた」

「いいよ、待つのも楽しいから」

熱を帯びている、気がする。

「ならば、遅くなって良いのか？」

「それは駄目」

「そうか、残念だ」

もし、そうだとしても漆月と更識には壁が在る。
超えられない、壊せない、確かな壁が、存在する。だから、この考えは――――

「それで今日、託けは？」

「無いよ」

――――無い。そう、思いたい。

「では、何を？」

「今日はね…」

後ろに隠したバスケットを出した。

「じゃーん！アップルパイを焼いてきました」

「……そうか」

「あそこで食べない？」

指差した所に丸いテーブルと二つのイス。

「わかった」

今日は只の時間潰しで終わるようだ。

だがそれも、悪くは、無い。

「さあ、遠慮なくどうぞ」

「……頂く」

まだ暖かいパイを齧る。

「……どうかな？」

緊張が分かる顔で聞いてくる。

「…美味い」

「！…よかった」

素直に答えれば、安心したように笑った。

「紅茶もあるから飲んでね」

「ああ」

それから食べ終わるまで、お互い無言だった。
気まずい雰囲気では無く、どこか穏やかな感じがした。

俺とこいつには枷が有る。
俺は漆月と更識からの、こいつは次期楯無としての、枷。
この時間は多少外す事が出来る。

俺は何時か枷を壊すが、こいつは縛られ続けるのだろう。
だから、その時が来るまでは、付き合うぐらいはいい。そう、思う。

「……美味かった」

「そう言って貰えると作った甲斐があるわね」

言葉通りの表情（かお）。だが直に、ニヤニヤした表情（かお）に変わり、

「……ねえ」

自分の胸を指し、
「お替りのパイも食べる？」
戯言を言ってきた。
俺はチラリと胸を見て、
「――――はっ」
鼻で笑って返した。
「な！？その反応はないじゃない！！」
「寝言は寝て言え。それに、まだまだだろう？」
まだ発展途上だ。
「くっ！！……憶えてなさい！今笑った事、後悔させてあげるわ！！」
「憶えていたらな」
此れは何時か壊れ……いや、壊すモノ。
その時までの付き合い、ただの戯言、其れだけだ――――

◇◆◇◆◇◆◇

熱気と声援が響き渡る。

「そろそろだね」

「ああ」

此処はアリーナ、第1回ＩＳ世界大会の会場。

今日はその始まりの日。

「いよいよ、ちーちゃん無双伝説の始まりだね！」

「何馬鹿な事を言っている」

「私が手懸けた作品を持つちーちゃんだよ？だったら決定事項だよ！！」

「そうか」

まあ、束なりの励ましなのだろう。

「ちーちゃんだってその積もりでしょ？」

「――――当然だ」

そう、全て勝ち抜く。神威の為に。

今まで、神威と束は戦っていた。神威は漆月で、束は政府で、戦っていた。

私だけが、見ているだけだった。見ている事しか出来なかった。

漸く、漸く私も戦える。肩を並べられる『場所』に立てる。

此処は、他の候補生を下し勝ち取ったモノだ。

そして、此処で得るものは、戦える『場所』に立つ為の切符にすぎない。

だが、それでも、見ているだけは、もう――――嫌だ。

「お、燃えてきたね！」

「ああ」

「んじゃあ記念撮影！……パシャリ」

何時の間にか手にしたカメラで私を撮っていた。

「……おい」

「そのエロ素晴らしい姿は写真に残しておくべきだと思います！！」

今、私はＩＳスーツを着用している。

これはＩＳを装着する際に基礎となる物、薄地でボディラインがハッキリと映る。

「束、カメラを渡せ」
「Ｎｏ！！出来ません！！」
「いいから渡せ」
拳を鳴らしながら歩み寄る。
「これはむっくんに贈呈します！」
「……何？」
神威に、渡す？
「ちーちゃんのステキな姿、喜ぶんじゃないかな～？」
「む……」
神威が、喜ぶ？
「ちーちゃんから贈られたシルバーチェーンだって、肌身離さず着けてるしねぇ？」
「……」
神威は誕生日に贈ったチェーンを月下に繋いでいる。
そして、いつも肌身離さず着けていてくれている。
贈った身としては、嬉しい事この上無い。
「ちーちゃんの写真も、大事にしてくれるよ。きっとね！」

「……」

私の写真を持つなら…次は、ロケットペンダントを贈ればいいのか？

「いいよね？」

「……好きにしろ」

「Ｙｅｓ！！好きにします！」

こんな事をしている間に、前の試合が終わったようだ。

「出番のようだな」

「そうだね」

私のＩＳ『暮桜』を展開する。

「行ってくる」

「あ、ちょっと待って」

「何だ？」

「むっくんから伝言！」

「神威から？」

「うん、体はＨｏｔに！心はＣｏｏｌに！だってさ！」

「――――解った、礼を言う」

「どんうぉ～り～！」

そうして私は飛び立った。

体は熱く、心は冷静に――――

神威の言葉で、迷いの無い心体（けん）に成る。

「一太刀の如く――――」

――――ただ、振るうだけだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「すごい……」

思った事が、毀(こぼ)れ落ちる。

ＴＶに映るモンド・グロッソの光景。その中でも強い光り。

織斑　千冬

他を圧倒している。

ヒラリと、かわし舞う姿は柳葉の様に。

突風の如く、翔(かけ)る姿は獅子の様に。

隣に座る神威君も、目が離せないようだ。

刀を抱き、握り締めている。

此処は、彼の部屋。今は共に居る。

更識と漆月は、モンド・グロッソの監視などで出払っている。

監視と護衛の名目で、モンド・グロッソが終わる迄一緒に居る事に成った。

妹は幼馴染と一緒に居る。

私は次期楯無、万が一を考え知名度が低く実力が高い漆月に居る。

彼と共に居られる事は、嬉しい。

最初、私を見る視(め)線は警戒心しか無かったけど、ある時から変わった。

橋渡しの任を受けたとき、その時から変わっていった。
私も知った、知っていった。
外(かれ)を知り、此処が箱庭だと知った。
同時に、縛る鎖が存在することを。

私を縛る鎖は、緩く、楔が確りと刺さっている。
逆に、彼を縛る鎖は、締め付けが強く、楔がとても脆い。
知ってしまったら、目に映るモノが変わっていった。

広い庭が、箱庭に変わってしまった。
酷い時は、牢獄の様に、見える事が在る。
母の言葉が、絡みつく鎖の様に、見える時が在る。
酷い時は、有りもしない首輪に繋がれている様に、恐ろしい時が在る。

彼といる時は、それが無い。

彼は、縛られている事を理解してくれている。
優しい幼馴染や可愛い妹にも言えない鎖を、解ってくれている。
確認した事は無いけれど、確信に似た思いが在る。

私の言葉を受け止めて、返してくれる。
更識じゃない素(わたし)を見て返してくれる事が、嬉しい。

だから、共に居られる事が、嬉しい。

「すごかったわね……」

「――――ああ」

彼は立ち上がった。

「どうしたの？」

「熱を冷ましてくる」

そう言い、庭に出て行った。

当てられた。その気持ちは解る。

私も同じだけど、一心に剣を振る彼を見ていたい。

初めて見る彼の姿に惹かれるが、

その目が私を見ていない事が、悲しい。

映る者は、織斑　千冬。

宙（そら）を舞う姿は、美しかった。

澄んだ太刀筋は、綺麗だった。

囚われず飛ぶ姿は、焦がれる程に羨ましかった。

彼は今、何を考えているの？

剣を交（まじ）えているのか。

肩を並べて振るっているのか。

それとも――――此処を出て往く時の事なのか。

振り返り、彼の部屋を視る。

酷く殺風景の部屋。

目に付くのは、端に置かれた机。その上のある刀器や暗器。

此処に居る理由は、力を手に入れるだけ。

それだけしか無い様に思える部屋。

彼が居なくなるのは――――嫌

母は、押さえる策が有る様に思える。

でも、成功したら、素(わたし)を見る目は、きっと無くなる。

更識としか、見てもらえなく成る。

それは、それだけは絶対に――――嫌！

剣を振る、私を見ない彼は――――

「どうしたら、いいのかな……」

――――未来(さき)を告げている様に思える。

モンド・グロッソが終わった夜、私は泣いた。

月明かりの射す自室で、静かに、泣いた。

◇◆◇◆◇◆◇

心に誓を立て、前を見て、真直に進める者は、強い。

心定まらず、彷徨う様に歩む者は、脆い。

彷徨う中、押す手は、差し出される手は、果たして――

――

呪は月を擁いて　第十一話

『ごめん……』

第十話　『一太刀の如く』（後書き）

裏タイトル『私を見て』でした。

一年半も顔を合わせると分かってしまうモンがあるんです。

ちなみに
楯無（熱視線）→オリ主
オリ主（同情）→楯無
です。

楯無ちゃん救う為にどーやってもオリ主が必要になる。
オリ主を動かす為に先ず心境の変化をさせました。
これより楯無ちゃん救出？プラン開始。
結構難しいけどガンバル！

以下ボッシュートしたプラン

その１
楯無ちゃん更識抜けｏｒ脱走プラン。
原作開始前に色んな意味で終了の為、ボツ。

その２
簪に楯無を譲るプラン。
どーやっても姉ＶＳ妹の死闘になる。救いにならん為、ボツ。

その３
原作まで先送りプラン。
何故かオリ主が悪鬼羅刹になり原作キャラ殺害に…

鉄屋の脳がアーパーの為、ボツ。

以上です。

第十一話　『ごめん……』（前書き）

またオリキャラ登場。だが、ちょい役。
そしてお兄さんです。

第十一話　『ごめん……』

第一回モンド・グロッソから、暫くが経った。

大会は終わったが、生まれた熱は未だ冷めない。

姉さんは総合優勝を果し、世界最強（ブリュンヒルデ）と呼ばれるようになった。

姉さんは熱の根源、色々な勧誘が舞い込んで来ている。

その中に、俺達が狙っている所も有った。

その『場所』はＩＳ学園と呼ばれるように成った。

今度の春に、第一期生が入り、本格的に機能し始める。

ＩＳ指導者に姉さんが居る為、入園希望者が後を絶たない。お陰で倍率がバカ高。

中にはコネを使い入る者も居る。そういった者にはオークションみたいな事をやっている。

運営資金がどれ位掛かるか分からない。その事を盾にして資金ゲットしようとの魂胆だ。

政府も強かな事をする。自国だけで賄えと言われてるので当然かもしれないが。

姉さんが落ち着くまで、俺達は動かない。迂闊な動きは、終わりに繋がる。

その為、俺は今、学園でボーっとしている。何故なら――――

「――――素晴らしく平穏」

――――だからだ。

俺は中学生、一夏は小学生。よって騒動の源が無い。

総帥などとふざけた役職も無い。此れこそが、俺の在るべき姿なのだ。

「ビバ平穏……」

「何言ってんだ？神威」

「んあ？」

こいつは御手洗（みたらい）数希（かずき）。

お兄ちゃん騒動以降、学園で初めて名前で呼んでくれる友人。

『名』を呼ばれた時、目頭が熱くなったのは内緒だ。

未だに兄と呼ぶ者が多い中、俺を名前で呼ぶ数希は――――勇者だ。

「あーＩＳ騒ぎが無いからな」

「成る程、確かに」

「平穏はいいねぇ」

「爺くせぇ」

「うるせぇ」

こんな普通にバカな会話など、素晴らしいじゃないか！

「んで、神威は帰んねえのか？」

「もーちっとボーっとしてから帰る」

少し、考えたい事もあるしな。

「程々にしとけよ？んじゃな」

「おー」

ホントにいい奴だ。さすが勇者。

教室は俺一人になった。放課後の教室は一人になれる穴場だ。

考えるのは今夜の事、更識（あいつ）の娘の事。

あいつが楯無を継ぐ為の修行が始まった。

俺は、業を受ける相手として、抜粋された。

今夜、あいつとぶつかり合う。

だが、あいつは今、どこか不安定な感じがする。

先日、会った時も様子が変だった。特に橋渡しの任の時。

任を告げに来た更識頭首の『声』に、一瞬だが脅えた。

あいつは、自身の親に脅えた。

何故、脅える必要が在る。
何故、脅えなければならない？

脅える理由が解らない。
二人の間に何かあったのだろうか。

それとも、今夜仕掛ける為の演技か？

今夜、仕掛けて来るとしたら、間違いなくあいつの筈。
だが今のあいつでは…無理、だと思う。それに、あいつは本当に脅えていた。
だから演技とは思えない。

そうなると、結局解らない。

「成るようにしか成らん、か」

そう、出たとこ勝負しか無い。

俺は腹を括り、教室を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

夜、更識の鍛錬場。
月を背に、静かに待つ。

今回の組み手は無手、得物は使わない。
基本は俺が受けで、あいつが攻めの形で行う。だからと言って、受けっぱなしでは無い。
隙があれば攻めに回る。隙を衝くのは、あいつに解らせる為だ。
あいつの成長を促すようにやらなければならない。難しい事だが、仕方が無い。

立場上、やるしか、無い。

「お待たせ、しました」

着いたようだ。

「早速、始めようか」

「胸を借りる、形に成ると思いますが……お願いします」

初めて聞く敬語、睨み付ける様な視線。

更識として居るのか？ならば――――

「……手加減は無用」

――――漆月として、相手をしよう。

「――――往きます！」

「――――乞(こ)い！」

だが鬼気迫る、全く余裕が無いのは、何故だ？

◇◆◇◆◇◆◇

「はっ！」

「……ふっ！」

数えるのが、莫迦らしく感じる程の、攻防。

どれだけ経ったかは、解らない。

攻め手を往(い)なし、間の手を討ってくる。

衝けば逸らされ、蹴れば防がれ、一撃を貫う。

投げれば、飛び受け、投げ返される。

絞めれば、抜けられ、封じられる。

「はぁはぁ……」

「……」

私とは対象に、息は切れて無い。

重しを着け、動きを制限されている筈、なのに差が大きい。

全く敵わない――――

「終わりか？」

「っ……まだ！」

――――が、止まられない。止まりたく無い！

でも、私の全力の衝きは、

「雑だ」

軽く流され、

「あ……」

私は前に倒れた。

「うっ……！」

「終わり、だな」

冷たく見下ろす漆月（かれ）に、睨み返す。

睨み返す事で、自分を保つ。

「まだ、まだよ！！」

まだ、慣れてない。この視線に慣れてない。
私はもう、更識として生きなければならない。
漆月の視線に慣れなければならない。
もう素を見る視線は、無い。無くなる。だから――――

「まだ終われない！」

――――まだ終われない！

「……今日はもう、止めておけ」

「……え？」

視線が変り、気が殺がれる。

「これ以上は逆効果だ」

素を見る視線。

「立てるか？」

そう言い、彼は近づいてきた。

「大丈夫……」

目を逸らしながら立ち上がるが、

「！？」

身体がいう事を利かず、崩れ落ちそうになり、

「何処が大丈夫だ」

熱い腕に、支えられた。

「！？」

突然の事にパニックになりそうに成るが、

「……なあ」

「な、なに？」

彼の質問に、

「お前、何か遭ったのか？」

「！！」

思考が止まり、

「……何かが、遭ったんだな？」

口から出たモノは、

「ごめん……」

謝罪の言葉だった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ごめん……」

そう言い、腕の中で身を硬くする。

更識頭首と、何か遭ったのだろうか？

俺関係で間違いない筈だが、こいつがこう成る理由が解らない。

俺を手に入れる話なら、賛成する…筈。

何か、見落としている？

情報を得るため質問しても、応えてくれる訳が無い。

ならば、こいつの反応で判断するしかない。反応を鮮明にする為、月下を展開する。

展開する所は額のみ、ハイパーセンサーだけ。重しは頭にも着けている為、外見では判らない。

展開、完了……周囲に人影無し……

観得る世界が拡大し、感覚が敏感に成る。
これは、更識頭首と対面する時、何度もしてきた事。
こいつに使うのは、これが始めて。

「……更識頭首」

「！！」

びくり、とまる判りの反応。
俺の道着を握り締め、顔を伏せる。

「……何を言われた？」

「っ……」

小さく、震え始めた。

「俺を手に入れる……」

「！！」

反応有りだが、これは聞くまでも無い事。

「……今夜はその始まり、か？」

「――――っ！！」

震えが大きく成った。当たり、か？
だが、震えるのは何故だ？こいつは賛成者、その筈……だろ？

◇◆◇◆◇◆◇

言えない、言える訳が無い！
実行しているが、やっているのが私だなんて、言える訳が無い！

更識と漆月の壁は厚い。でも今、私と彼の壁は薄い。
監視名目の、会い会。これが壁を薄くさせていた。
提案したのは母だけど、形としては、漆月の悩みを更識が解決した事に成った。
監視が続くに連れ、母は彼を漆月から切り離す様に動いていた。

――――如何にか出来そうね……貴方のお陰よ？

その事を、先日、初めて知った。

――――流石、私の娘ね

褒めの言葉が、素（わたし）を見る彼を、唐突に終わらせる、処刑斧（ギロチン）に、見えた。

――――楽しんでいらっしゃい？

送り出された手は、その断頭台に、発たせられる、鎖に、見えた。

言えない、言える訳が無い！

鎖を縛りつけたのが、私だなんて――――言える訳が無い！！

◇◆◇◆◇◆◇

言葉が、出なく成った。

腕の中で震える、こいつを見てると、問い詰める気が殺がれた。

それにこいつは、俺が更識に取り込まれるのを良しとしてない。

何と無くだが、そんな気がする。

今は、落ち着かせた方が、いい

そんな考えが、浮かんできた。

脳裏に浮かび上がる、苦(にが)い記憶が、在ったから。

こいつをあやす様に、撫でていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「!?」

何をされたのか、解らなかった。

撫で、られて、る？

だけど、この優しい手が、とても――――辛(つら)い。

甘えてたくなる。吐き出してしまいたくなる。

自分の想いを、懺悔を、言ってしまいたくなる。

更識でいたくない、こんな可笑しな事を、言ってしまいたくなる。

誰にも言えない事を、言えなかった事を、言ってしまいたくなる。

でも――――

「……悪かったな」

やめて

「問い詰めて、悪かった」

やさしくしないで

「多少は、知った仲だ……」

おねがい、いわないで

「愚痴くらいは、聞いてれやる」

そんなことといわれたら

――――抑えられなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

泣きながら、漏らす、

「たすけて……」

こいつの『声』は、

――――だれか、たすけて……

過去の俺、そのものに聞こえた。

理屈抜きに理解した。

こいつは今、一人だ。あの時の様に、一人きりだ。

この世界で堕ちた……堕ちかけた、あの時の様に一人きりだ。

周りの事が信じられずに、逃避する事が出来ずに、

助けを求めたこいつは、あの時そのモノ。

気付けば、こいつを、抱きしめていた。

◇◆◇◆◇◆◇

信じられない

抱きしめられた事が。

優しい

受け止めてくれた事が。

嬉しい

こんな醜い私に応えてくれた事が。

私は腕を彼の背にまわした。離れたくなかった。

更識(ここ)で私を解ってくれる人は居ない。だから、離したくなかった。

一人は、一人きりは嫌だから。

◇◆◇◆◇◆◇

解ってしまった。こいつの現状を。

正直、敵でいて欲しかった。今日会った時の様に。

俺はもう、こいつを敵と、思えない。

如何しようか、と悩んでいると、こいつはポツリポツリと話し始めた。

俺の現状と、こいつの懺悔にも似た内容を。

話を聞いていても、不思議と怒りは感じなかった。

こいつは利用されただけ、そう感じたから。

俺にしがみ付くような手が、嘘ではないと告げていたから。

話し終えたこいつは、少し吹っ切れて、諦めた表情(かお)をしていた。

こいつは俺の枷を解く為に、自分の居る『場所』を裏切ったのだ。

此処までして貰ったのだ、助けない訳にはいかない。

だから俺は、一つ提案した。

◇◆◇◆◇◆◇

「枷を壊す気は有るか？」

その問いに私は頷いた。
私が居なくなれば、全ての重荷が妹に乗る。妹は気づいていない、縛られている事を。
壊してあげたい。幼馴染と妹を縛る鎖と楔を。だから、私は頷いた。

この時から、私と彼は共犯者。

彼の耳に口を近づけ、呟いた。

契約の証として、本当の『名』を。

「私の『名』は、夢織（ゆめおり）。月夜に夢を、紡ぐ者」

◇◆◇◆◇◆◇

誓、契約を結び、真名を名乗り、共に歩み始めた。

確固たる意思を持てば、折れることは、無いに等しい。

喩（たと）え、泥を被る事に成ろうとも、手折（たお）れる事は無い。

呪は月を擁いて　第十二話

『噛み砕く』

第十一話　『ごめん……』（後書き）

まずは心から救出を！
でなければ、この先の困難を乗り越えられんからさ！！
楯無ちゃんがオリ主を落とした感が強い…さすが雌豹の娘！
ついでにヒロイン候補その３に昇格！！

２０万ＰＶ突破記念&感謝（前書き）

皆様のおかげで２０万ＰＶを突破しました。
ありがとう御座います！！

そしてまたバカ話です。
キャラが壊れてるので御注意を！

２０万ＰＶ突破記念＆感謝

神威
＜２０万ＰＶ突破記念＆感謝のバカ話の時間です。今日はオリ主の神威と＞

夢織
＜ヒロインに昇格した楯無こと夢織でお送りしまーす＞

神威
＜……候補じゃなかったっけ？＞

夢織
＜まあまあ、細かいことは気にしない気にしない＞

神威
＜細かいか？＞

夢織
＜細かいの！で、今回のお話は、私のライバル、箒ちゃんのお話です！＞

神威
＜箒！？なら始めよう！サッサと始めよう！！＞

夢織
＜えらく乗り気ね【ドン！】……って、どっからセンサーとモニ

ター出したの！？＞

神威
＜センサーとモニターを繋いで【ドスッ！】……と＞

夢織
＜ドスッ！？繋ぐような音じゃないわよ！？＞

神威
＜音の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）だ＞

夢織
＜明らかに違うわ！？＞

神威
＜さて、様子は……＞

夢織
＜お願い！聞いて！？＞

神威
＜黙れ！！＞

夢織
＜！！＞

神威
＜そして聞け！！我は兄貴！兄貴・ザ・兄貴！！箒（あく）の敵を断つ剣（つるぎ）也！！＞

夢織
＜兄貴とＧガンと武神親分が混ざってるわよ！？＞

神威
＜もし、箒が虐められてたりしたら……ブッ血ＫＩＬＬ！！＞

夢織
＜落ち着いて！落ち着きましょ！？きっと箒ちゃんは笑顔で元気よ！？＞

神威
＜……そうだな、よし映すぞ＞

夢織
＜……ええ、そうしましょ（箒ちゃん分が枯渇して錯乱してるのかしら？）＞

神威
＜お、映った！＞

夢織
＜これは……舞、かしら？＞

神威
＜神楽舞、篠ノ之流剣術の型の一つだ＞

夢織
＜そう……＞

神威

＜箒……大きくなって……＞↑箒以外アウトオブ眼中

夢織
＜むぅ……＞↑ちょっと面白くない

柳韻
「次は崩(くず)れ落しの型だ」

箒
「はい！」

神威
＜ん？崩れ落しの型？＞

夢織
＜どんな型なの？＞

神威
＜いや、聞いた事が無い＞

夢織
＜そうなの？……あ、躓(つまず)いた＞

神威
＜箒！？＞

箒

「うぅ……」

柳韻
「駄目だ、わざとらしい。其れでは神威君を落とせない」

神威
＜――――はあ！？！？＞

夢織
＜落しってそうゆう意味！？＞

神威
＜何教えてんだあの人は！？＞

柳韻
「着崩しも忘れるな！」

箒
「はい！」

神威
＜親だろアンタ！？んな事教えんな！！＞

夢織
＜なんて恐ろしい、型稽古なの……＞↑超戦慄

神威

＜どこがだ！？＞

柳韻
「違う！この場合は顔をもう少し上げろ！！それは怒りや照れの上目使いだ！！」

箒
「はい！」

神威
＜アアアアァァァ――――アホかあ！？＞

夢織
＜なるほど、全部同じじゃダメなのね……＞↑真顔

神威
＜感化されてる！？＞

箒
「兄さん……」

柳韻
「もっと弱弱しく縋るように！」

箒
「にぃさん……」

柳韻
「そうだ！その感じを忘れるな！！」

箒
「はい！」

神威
＜……【ゴ！！】……＞↑ＩＳ展開してモニター壊した

夢織
＜これが篠ノ之流、落しの型……＞

神威
＜……ｏｒｚ＞

夢織
＜（私も負けてられないわね……）……大丈夫？＞↑慈悲深い表情

神威
＜……ああ＞↑呪いが発動して復活開始

夢織
＜あれは何かの間違いよ、ね？＞↑さり気なく手を握った

神威
＜ああ、そうだな……箒があんな稽古しているわけがない＞↑完全復活

夢織

＜そうよ、だから元気だして、ね？＞↑慈悲深い笑顔で首を傾げた

神威

＜ああ、ありがとう夢織……＞↑真顔で見つめる

夢織

＜いいのよ、貴方が元気になれば……（作戦成功！）＞↑超慈悲深い笑顔で見つめ返す

神威

＜夢織……＞↑超真顔

夢織

＜神威……＞↑目がキラキラうるうる

神威

＜――――それがお前の落しの型か？＞↑実は復活して超冷静

夢織

＜うん――――――――はっ！？＞↑やっちまった

神威

＜だと思ったわ！！＞

夢織

＜もうちょっとだったのにー！！＞

神威

＜もう帰（けえ）る！！＞

夢織

＜あ、待って！？えっと、読者の皆様お付き合い頂きありがとう御座いました！

ではまた！！……待って！待ってってばーー！！＞

――――――――ブツン！！――――――――

２０万ＰＶ突破記念＆感謝（後書き）

今回の相方は楯無こと夢織でした。

楽しんで貰えたのなら幸いです。

第十二話　『噛み砕く』（前書き）

久々の再会ですが……

第十二話　『噛み砕く』

春が直ぐ其処の時期、ＩＳ学園の稼動まで後僅(わず)か。

そんな中、私達はラボで久しぶりに顔を合わせた。

始めは再会を喜んだが、話が進むに連れ、驚愕に変わった。

神威は、更識の娘を味方に付けた、と言った。

正直、信じられない。あの更識の娘だ。何か裏が有るのでは？と疑ってしまう。

だが神威は否定し、それは無い、と断言した。神威を信じたいが、信じきれない。

「う～～～ん……実際に会って視てみないと判らないねぇ……」

確かに、顔を合わせて判別するのが手っ取り早い。

「そうだな、私達は会った事が無い。話だけで判別は出来ん」

「そうなんだよね……で、何時会えるのかな？」

「今日会えるよ」

「ほえ？」

「今日か？」

「おう、そう言うと思って直ぐ其処の喫茶店で待たしてる」
用意周到なのは、流石と言うべきか。
恐らく私達の反応を予想し、確信していたんだろう。
「……むっくん」
「ん？」
束が真剣な表情（かお）で問いかける。
「今からする事は敵（あいて）に此方の中身を見せる事になる。それは解ってるよね？」
「ああ、解ってる」
そう、更識が娘に此処に来た事を聞かない訳が無い。
「だから、会うには条件を付ける。いいよね？」
「……ああ」
確かに、条件を付け、隠せる物は隠したい。
「先ず、会うのは居間で会う。ラボ（ここ）の存在は話さない」
「当然、だな……俺も話して無いし」
当然の事だ。漆月邸（ラボのありか）の地下は隠すべきだ。

「次、むっくんが持つ月下の事だけど……何か話した？」
「いや、話して無い。俺がＩＳを持ってる事も知らない」
「うん、なら良し。この事は絶対に話さない。いいね？」
「ああ、解った」
神威が持つ月下の事は漏れないようにする。これは絶対だ。
「後、結構キツイこと聞くかもしれないけど……いいよね？」
「まぁ……あいつも覚悟してるから、いいだろ」
場合に因っては問い質さらければならない。
もし、神威を騙している節が有るなら…後悔では足りないぐらいの思いをしてもらう。
「それと、その娘が操られてる可能性も有る。本人は知らずにね？」
「……ああ」
その可能性も、確かに有る。
「その場合、私達よりもむっくんが危ない。恐らく、身動きが出来なく成る」
そう、束縛されるだろう。そして尋問の後は……考えたくも無い。

「そうなったら、どうするの？」
「手足、四体が動かないのなら……」
神威は猛禽類の表情（かお）を浮かべ――――
「全てを、噛み砕く――――其れだけだ」
――――哂った。
「ふふ、解ったよ。じゃあ一つ追加」
「ん？何？」
「危ない橋……に成るかもしれないよね？
だから、私達の頼み事を一つ聴く事。いいね？」
成る程、それで妥協しよう、そう言っているのだろう。
「……りょーかい、解ったよ」
「ん！ならこの話はこれでお仕舞い！ちーちゃんもそれでいい？」
「ああ」
後は神威に呼んで来てもらい、それからの話になる。筈だが――
――
「じゃあ束さんは早速頼み事をしよう！」

――――束は終わってないらしい。早速頼み事をしている。

「え？もう？」

「うん、Ｎｏｗ！じゃあ言うよ？」

「……よし、来い！」

「では遠慮なく！――――束さんをお姉ちゃんと呼びなさい！！」

「おう、おね――――――――はあ！？」

「……諦めて無かったのか？」

「おうさ！！諦めるモンですかい！！」

如何しても姉と呼ばせたいらしい。性質（たち）の悪いことに言質も確り取っている。

「さあ！呼ぶがいい！！愛しさや切なさも全部ひっくるめて！！」

「……他の呼び方は何が有りますか？」

神威も言った手前、逃げられない事が解っているようだ。

「んん！？もっとグレード高くをお望みと！？むむむ……」

「いや、あ、う、あ～た、束姉（たばねえ）さん……でいい、ですか？」

「むむぅ！？束姉さん…束(たば)も束(たばね)も字が変わらない、
姉さんはお姉ちゃんより一見距離が有る様に見える…が！
頭に束(たば)を付ける事により親近感がグゥレェイトォ！！にアップ！
その想いと心遣いが束さんのハート&ソウルにクリティカル！
！！！
うん、いい！いいよむっくん！！その呼び名で承認だあ！！…
…うふふふふ」

「あ、はい。そう呼びます。じゃ、俺、あいつ呼んで来る」

「行ってらっしゃ～い！……フフフ、フハハハハハハ！！」

そう言い、神威は逃げて行った。正直、私も逃げたい。
だが、この狂った様に莫迦笑いする馬鹿を黙らせなければならない。
手段は――――

「破ぁ！！」

「らおぅ！？」

――――拳で。

「落ち着いたか？」

「Ｙｅｓ！超クールＤｅａｔｈ！！」

「もう一発必要か？」

拳を軽く揺らしながら聞く。

「Ｎｏ！Ｎｏ　ｍｏｒｅ！！」
「普通に喋れ」
「Ｓｏ　ｔｈａｔ！ちゃんと理由が有るんだよ？」
「どんな理由だ？」
「あのねちーちゃん、なんかあやしくない？」
「何がだ？」
「むっくんと更識の娘」
「……如何、あやしいんだ？」
「男と女の意味で」
「……何？」
神威と、更識の娘が？
「だからちょ～っとそういった目を光らせないとね」
「……」
神威と更識の娘が、男女の関係？
「もしかしたら、むっくんを婿に下さい！かも？」

「……」

詰まり、この会は……その挨拶？

「私は箒ちゃんを泣かせる訳にはいかないんだよ！！てな訳で、
姉と呼ばせて箒ちゃんの存在をむっくんの脳にアピールしようかと」

「……そうか」

「そうなんだよ！って――――――――ヒィ！？」

如何やら、聞くことが一つ、増えたようだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「まだかなぁ……」

彼が説明に行ってから一時間は経つ。
まだ私が来る事を説得しているのだろう。

本来敵である私が味方に付いた。簡単に信じてもらえるとは思ってない。
だけど、確りと話し合える『場所』を得る為にも、信じて貰わなければならない。

まだ私達は今後のことを話し合っていない。
更識や漆月では周りの目を気にしなければいけないから出来なかった。
だから、一度でも話し合う必要がある。その事が一番の目的。

でも、見方によっては……

彼との此れから事、その挨拶に見えなくも、無い。

彼は私を受け入れてくれた。けど、それはきっと恋目からでは無い。
実際にそういったことを一度もしていない。
でも、甘えさせてくれるから、気を許してくれているのは間違いない。

手強いのよね……

彼は私の想いにきっと気づいている。その上で気づかないふりをしている。
お互いの立場上、まだそうしなければならない。でも、少しくらい応えてくれても、良いと思う。

酷い人……

そう思う。でも、そんな彼に惚れてしまったのだから、仕方がない。
だから、今日此れからの事で少しでも先に進めれば、とも思う。
その為にも先ず、篠ノ之　束と織斑　千冬に私を信じて貰わなければならない。

将を射んと欲すれば先ず馬を射よ。とも言うけど、簡単にはいかない…でしょうね

「悪い、待たせた」

酷(かれ)い人が来たようだ。

「うん、待たせられたよ」

「悪かった、だが会ってくれる。それで許してくれ」

「ふふ、わかったわ。許してあげる」

私の為にしてくれた。と思えば悪い気はしない。

「それはどうも……行こうか？」

「じゃあ、はい」

私は手を差し出す。

「ったく、しょうがない奴だな」

苦笑しながら手を取った。

「ふふ、宜しくね」

「あいよ、お嬢様」

そうして、私達は漆月邸へ向かった。

私を救ってくれた愛(かれ)しい人を絶対に離さない、そう思いながら。

◇◆◇◆◇◆◇

只今、俺達はテーブルを挟んで向かい合っている。

配置は俺の隣に夢織、俺の前に束さ……束姉さん、夢織の前に姉さんだ。

ただ、姉さんの雰囲気が、なんかヤバめ。

何時ぞやの鈴の時のようだ。隣は兎の様に背を丸めビビッてる。

一夏は空気読んで外に逃げて行った。何でこういう空気は読めんだよあん畜生は。

まあ、今回こうなるのは、仕方ないと思う……が、なんかオカシイ。

「では、話しを聞こうか」

「はい、お話しします」

対する夢織は覚悟していたのか、平然としていた。

「先ず、私が此処に来たのは、周りを気にせず話し合える『場所』を得る為です」

「……」

そう、俺達にはそういった『場所』が無い。そして、目の届かない『場所』は此処しかない。

「その『場所』は此処しか無い為、私が出入りする許可を得に来ました」

「ふむふむ」

束姉さんも恐怖から逃れられたようだ。

「その許可を頂けますか？」

「……話しを全て聞いてからだ」

「そうだねぇ……そもそも何で自分の親を裏切ったのかな？」

先刻どうりに言った。それもキツイ言い方で。

「……私は妹を、幼馴染を更識の鎖から解放したいのです」

「……」

「なるほどねぇ」

姉さんは目を少し細め、束姉さんは珍味を視る目で、見ていた。

「彼の、神威君のおかげで、私は鎖の存在に気づけました」

夢織に釣られるように二人は俺を見たが、何か変だ。

よく判らないが、何か別の意味を含んでるような視線だ。

「これが、裏切る理由です」

「……そうか」

「ふ～ん……これから如何するのかな？」

「私は権力（ちから）を得る為、十七代目楯無に成ります」

妹達を解放するなら権力を使うのが手っ取り早い。

「なるほどねぇ……」

「……その為の話し、をする為に此処が必要なのか」

「はい」

「だが、頻繁に来れるのか？」

そう、そこなんだが……夢織に案があるらしい。

「はい、四月以降は大丈夫です」

「……何でかな？」

「私、四月から神威君と同じ学園に通うので」

「――――は？」

「――――へ？」

「――――何？」

んな事聞いてねえぞ！？

「下校時に、一緒に寄るようにすればいいでしょう。
神威君も偶に寄ってから帰ってましたから不自然では無いかと」

そうなのか？と目で聞いてくる二人に困惑でしか返せない。俺も今知ったから。

「母には……デートの一環、と言えば納得するでしょう」

「「――――！！」」

……なんか罅（ひび）がはいった幻聴（おと）したぞ？

「……成る程、そう見せれば良いという訳か」

「うん、そう見せればイイんだね」

うん？なんか一部強調したような？

「――――！！……はい、今はそれで良いと思います」

……夢織も？

「「「……」」」

カ～ン！ってゴングが鳴った幻聴(おと)した、よね？

「……此れからの事はこちらにも関係有る事だ、同席するぞ？」

「うんうん、当然だね。知っとかないとイケナイね」

「そうですか？私と彼の事ですよ？」

話しが反れ始めた気がする……

「二人の現状次第でこちらも動かなければ成るまい？」

「そうだね、演技なんてしなくて良くなるかもしれないし」

「母が動く時はお知らせします。それと演技ですが、私は続けても構わないですよ？」

……反れてるよね？

「だが、それでは遅いだろう？」

「そうだね、何か有った後だとダメだし？」

「それなら書置きで十分でしょう、ちゃんと伝わります」

……話じゃなくて論点がずれてるのか？

「駄目だ、直に見た方が詳しく解るだろう？」

「見てない所で何か有ったら問題だよね？」

「私と彼が仲良く成るのは問題無いでしょう？」

……論点ずれてるよね？絶対ずれてるよね？

「「「……」」」

良し！途切れた！！

「俺お茶入れなおしてくる！」

「ああ、頼んだ」

「うん、待ってるよ」

「ええ、お願いね」

逃げれた！

「神威が来るまで待つぞ」

「うん、そうするべきだね」

「ええ、聞いてもらうべき話ですから」

訳が無かった！！

◇◆◇◆◇◆◇

お茶飲んで一息――――

「……それで、何時まで演技を続けるんだ？」

「……私が正式に楯無と成るまでそう見せればいいかと」

「ふむふむ、そこで終わりなんだね？」

「……ええ、そう見せるのは終わりですね」

――――つけねえ！？

「そうか、終われば神威はもう必要無いのだな？」

「じゃあ此処に帰ってくるんだね？」
「その考えは軽率だと思いますが？」
……今回は話が進んでるのか？
「何故だ？楯無に成れば神威に用は無いだろう？」
「うんうん、後はそっちだけの問題だよね？」
「まだ篠ノ之博士の家族が保護名目で囚われている状態ですよ？
彼が私と居る方が開放しやすいと思いますが？」
「――――！！」
うぇ！？い、今一瞬束姉さんが歪んで見えたぁ！？
「へぇ……また何かしようとしてるのかな？」
兎耳がツノに見えるぞ！？
「いえ、物の例えです。ただ、手を回したのは母なので、
彼が私の傍に居る方がスムーズに開放出来ると思いますよ？」
「ふぅん……でもいいのかな？自分の妹達をそっち除けで、
早くしないと鎖が伽藍締めに成っちゃうんじゃない？」
「――――！！」

うお！？夢織もか！？

「……ご心配なく、私が楯無と成って開放しますから。
それに、自立も出来ないうちに放り出すなんて私には出来ません」

目が全く笑ってねえ！？

「「……」」

「落ち着け、話が外れている」

おお！流石は姉さん、解って――――

「今は神威の事が先だ」

――――え？

「まぁ、二人は神威の事から離れたんだ、私が決めて良いな？」

「「――――！？」」

俺の事？本人は蚊帳（かや）の外ですよ？

「神威は帰って来ると私と約束しているからな、この事を前提で進めるか」

……うん、確かに約束したね

「……でも今帰って来ているので約束は果たしたのでは？」

あれ？俺約束果たしてた？

「更識からだ、解っているだろう？」

ですよね～まだ果たしてませんね……サーセン！

「うんうん、そして箒ちゃんのお婿さんに成るんだからね！」

「「――――！？」」

……俺、承諾したっけ？

「……束、それはまだ先の事だ。今は関係無いぞ？」

「そうです。まだ如何なるか判りませんよ？」

まぁ、確かに判らない……よね？

「そうかな～？今箒ちゃん凄く頑張ってるからねぇ……誰かさんの所為で、ね？」

それはキツイよ兎さん！？いや、今鬼か？

「……遣ったのは母です。私は全く関係無いです」

――――ウソだ！お前当初ノリノリだったじゃねぇか！？

「まぁ、お婿さんの事は決定事項だから、ね？むっくん？」

こっち来んなバカ兎！！

「…そうなの？神威君？」

こっち見んな寝ぼ女！！

「――――神威」

こっち……いいいいいい！？目が、目が光ったぁ！？！？

「私の頼み事を何でも聞いてくれるんだったな？」

「「――――え！？」」

何でも！？何でもですか！！？？

「折角私に言ってくれたんだ、頼み事をしよう」

俺に出来る範囲で超優しいのをお願いします！マジで！！

「じゃ、じゃあ束さんも「束はもう終わっただろ？」……うぅ」

おお、一睨みで撃沈した！バカ兎は兎小屋に帰れ！！

「わ、私もおね「お前は関係無い部外者だろ？」……ぐぅ」

おお、一睨みで沈黙した！寝ぼ女は寝て夢見てろ！！

「では、私の部屋で話すか。其れが最初の頼みだ」

……え？複数ですか？

「……二人は其処に居ろ、良いな？」

「「はい……」」

「さあ行くぞ」

お手柔らかにお願いします……

◇◆◇◆◇◆◇

そんなこんなで帰り道なんだが、

「……」

隣のお嬢様はご機嫌斜めだ。

まあ惨敗だったんだ。仕方ないだろう。

「……ねえ」

「ん？」

「頼み事は何だったの？」

「気にする程、大した事じゃ無い」

そう、頼み事は大した事では無い。
姉さんを千冬姉さんと呼ぶ事に成っただけだ。只其れだけだ。

「そう……」

俺の返答で寂しげな表情（かお）に変わった。
だが俺は、夢織の寂しげな表情（かお）を見たくなかったから、

「……一つだけなら頼み事を聞くぞ？」

「……え？」

一つだけ、聞くことにした。

「……いいの？」

「無理、無茶、理不尽な事じゃ無いならいいぞ」

当然、適度な頼みに抑えてもらうが。

「うん、わかったわ」

「で、何か有るか？」

「う～ん……そうねぇ……」
夢織は俺の言葉で思案する表情(かお)に変わり、
「後でもいいぞ？」
「そう？とっておくわよ？」
「ああ、決まったら言ってくれ」
「ちゃんと聞いてよ？」
「ああ、わかったてるよ」
「うん、じゃあ……はい」
手を差し出し、
「あいよ、お嬢様」
「ふふ、宜しくね？」
笑顔に変わった。
「じゃ、帰るか」
「うん！」
そうして、俺達は帰って行った。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

又一つ、新たな繋がりが、出来た。

新たな繋がりは、自身を見せ、先を想わせる。

そして、途切れていたモノが、又一つ、繋がれる。

ＩＳの世界へ　第十三話

『諸君、時は来た！！』

第十二話　『噛み砕く』（後書き）

勝者……千冬の姉御！！
決め業……鬼神の睨み！！流石は世界最強！！
夢織ちゃん……惨敗でした！
漁夫の利を狙った兎……撃沈でした！

ここらで二章を締めます。
次は三章開始、の前に人物紹介？です。

人物紹介？＋β（前書き）

十二話終了時のものです。
そして相変わらずです。

人物紹介？＋β

漆月（しつづき）　神威（かむい）　うちのオリ主

ヒロインに落とされたオリ主の風上にもおけない奴。
この世界に来た時の絶望感を夢織に見いだした為、コロッと落ちた。
恋や愛の気持ちよりもっと深い部分を落とされた感じ。
恋愛じゃ無いからオリ主としてセーフ？アウト？
落ちたのは箒の癒し成分が無いから…かも？
なんかもうハーレムでいいかな…と思ってます。
そーいえばハーレムって何人からハーレムなんだろ？誰か教えて？
ＩＳはチョクチョク展開させていた。主にＶＳ雌豹の時に。
衝撃のファーストブリットは束に炸裂。だが今更になって羽だして無い事に気づいた。
世界一カッコイイロリコンのようにクルクルボカーン！が出来んかった…ちくしょう。

呪いについて

次回を待て！！

月下について

束すぺしゃる！の一品。展開した姿は…説明いるのか？

ＩＳなので部分展開は出来る。武装は…まあ、大体思ってる通りかと。
オリ主が束にポロッとＧＸの武装を話してしまった為、出来てしまった。
オリ主の起動時間はソコソコいっている。今や月下はオリ主にゾッコン。
コア作る時のデータ送信時にオリ主の事も送ってる。『崇拝せよ！』と。
おかげでＩＳにもお兄ちゃん病が感染してる。オリ主が気づかないのは幸いなのか？

長刀の銘は決まりました。登場まで暫しお待ちを。
他の銘は別の形で使わせていただきます。
杉やん様、春夏秋冬様、黄泉傀儡様、ｎａｍｅｌｅｓｓ様
ご協力、本当にありがとう御座いました。

織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）　ブラコン

世界最強の名を得てブラコン乙女からブラコン戦乙女に神化した。
ブラコンパワーブーストの上限はもはや計測不可能。とゆーかあるのか？
もう指先一つで敵を爆発出来そうだ。お前は既に死んでいる！みたいに。
そして弟達を想う気持ちも桁外れに大きい。大き過ぎて制御出来て無い。
制御出来るまで少々時間が必要だろう。大きいのも問題なのだ。
第一回チキチキオリ主争奪戦の覇者。でも頼み事は名前を呼ばせるだけだった。
名前＋姉で呼ばせる束に軽くジェラシ～したらしい。乙女心は健

在です！

織斑（おりむら）　一夏（いちか）　シスコン＆ブラコン

出番を奪われたナイスガイ。でも鈴はバッチリ落とした。
兄も姉も中々帰って来ないので鈴の店にしょっちゅう通う。
腹は満たされるが心は満たされない日々が続く。
兄と姉が両方帰って来たと思ったら姉が覇気を纏っていた為逃げ出した。
なんて不憫な！？でも一夏は叩かれて伸びる子！だから鉄屋はペシペシ叩くよ！！

篠ノ之（しののの）　箒（ほうき）　シスコン＆ブラコン

花嫁修業奮闘中。内容は……察してくれ。
偶に会える姉を通してオリ主の現状を知る。そして「私も頑張る！」と戦意が上がる。
そんで花嫁修業がヒィィィィィトアァップ！！…この娘はホント如何なるのだろうか？
そんでもって何時か手に入る紅椿でヤバイ事が出来る事に今更気づいた。
絢爛舞踏で月下にエネルギー補充でサテライトが∞発射ｏｒ撃ち続け可能に…！！
とんでもない理不尽な破壊魔が出来上がる…これは酷い！！
箒が絡むと何でこうなる！？うちの箒は何でこうなの！？この娘ホント怖い！！

篠ノ之（しのの）束（たばね）　シスコン

偶に箒に会えるので箒分を直接チャージ出来るようになった。
オリ主に姉と呼ばせる事に成功。「全ては箒ちゃんの為に！！」だそうです。
だが争奪戦で漁夫の利作戦は失敗。要注意危険人物に楯無（夢織）をリストアップ。
更識没落計画失敗発覚時に月下の性能を身体で確かめる事になった。ハンパないらしい。
自分の作品を自分の身体で試す科学者魂に鉄屋は涙がホロリ。
では皆様、束の為に指で十字をきって指を絡ませて、アーメン…
ありがとう御座いました。

篠ノ之（しのの）柳韻（りゅういん）　親バカ

箒に色々吹き込み中。真面目だから性質（たち）が悪い。
とーぜんの事だが落しの型はこいつが作った。流石は束の親、ただモンじゃ無い。
束があーなったのもこいつの所為な気がしてきた…決して鉄屋の所為じゃ無い！ハズ…。

十六代目　更識（さらしき）　楯無（たてなし）　隠れ親バカ

娘の為に頑張って厚い壁をガリガリ削ってた。一応成功した。と見れる…のか？
でもなんか鉄屋の中でカリスマブレイクしてしまった人。
ピエロに見えてきたとか小者臭がしてきたとか使い終わった紅茶パックとかそんな感じ。

マズイどうしよ、出番終わってないぞ？ライフカードなんて無いんだぞ？
あ、鉄屋は紅茶よりコーヒー派だよ？

更識（さらしき）　夢織（ゆめおり）　次期　楯無（たてなし）

犠牲キャラからヒロイン候補その３に大出世。名前もゲット！
妹＆幼馴染を解放する為奮闘開始。なんかこの娘が一番マトモな気がする。
オリ主を落とす離れ業もやってのけた。流石更識の娘と言ったところか？
しかーし！深い所だけ落とした為、恋や愛に変えるのは大変…かも？
でも心の拠り所を見つけたのでこれからは確り歩いて行けるだろう。
まあ、親と同じく枕を涙で濡らしたが…ついでに争奪戦に惨敗したが…。
最初オリ主に抱いた気持ちは興味半分の所があった。
監視名目で会う中で確りとした恋心に変わっていった。
実はオリ主を恋の目オンリーで見れるのは今現在この娘だけだったりする。
夢織の名前はガンダムXの主題歌からきている。
ガンダム無双３でガロード乗せたユニコーンで暴れてる時に思いついた。
ガンダムXのBGM聴きながら武者MK？を凹ってる時にピキーン！と。
流石は可能性の獣！……なんで鉄屋は普通に考える事が出来ないんだ？

鳳（ファン）　鈴音（リンイン）　チビッ娘

一年早く登場したチビッ娘。色々ちっちゃい娘。
特に胸が絶望的にちっちゃ【ボガ！】…とか言ったらこうなるので禁句。
オリ主を大哥と呼ぶ。イントネーションはｄａ←ｇｅ↓である。
転入時、一夏に優しくされ乙女回路がショート。そして一方通行が始まった。
そんで千冬に目で殺されそうになった。漆月家に行った時は、
二人きり↓チャンス！↓アタック開始↓千冬が帰宅↓アウチ！↓絶望のゴールが直ぐそこに！
死の宣告をオリ主が消してくれたので救世主と仰ぐ。んでお兄ちゃん病に感染。
結局この娘も染まってしまった。また一人信者が増えた。計画どおーり（ニヤリ

漆月（しつづき）　荒刃（こうじん）　爺バカ

神威の祖父。んで爺バカ。だが刀持つと鬼へと変貌する。
最初は更識とっちめようとしていたが、オリ主の言葉に刀を収めた。
オリ主が「この俺が破壊する！」とネタ言いに「流石ワシの孫！」と感涙。
「ならば！」とオリ主に無茶難題の修行をつける。
なんだかんだでついてくるオリ主に「流石ワシの孫！」と鼻高々で感涙。
そして修行がヒィィィィトアァップ！！拷問のような事に成った。

今のオリ主の状況を「ワシの孫なら大丈夫！」と信じて見守るのみ。
まあ、ネタ言ったオリ主が悪い。自業自得だろう。
楽しみは孫にお小遣いをあげるときの顔を見る事と偶に買ってくる茶請け。
今は煎餅がマイブーム。理由はオリ主がよく買ってくるから。やっぱり爺バカ。

御手洗（みたらい）　数希（かずき）　勇者Ｌｖ１

数馬の兄貴。優（やさ）メン、イケメンでは無い。同学年で唯一オリ主を名前で呼ぶ勇敢な者。
勇者でありながらモブ。鉄屋自身もすっかり忘れていた為モブ。
ＬＶはモンスター（オリ主を兄と崇める奴）を倒せない為上がらない。
モンスターのＬｖは高くないが数がハンパなく多い為に勝てない。
１対５以上は当たり前。
だいたい口頭でバトる。「なんで兄と拝めない！？」と。でも勇者は心折れる事が無い。
今日もまた戦い抜くのだろう。そしてまた引き分けるのだろう。
なぜかイジメに発展しない。オリ主が勇者と呼ぶ理由はここらへんが原因。
また思い出したら出すだろう。忘れててゴメ～ンね☆

人物紹介？＋β（後書き）

最近、原作入った時の事ばかり考えてます。
原作前にやりたい事がまだ有るので大丈夫だと思うのですが…。
もし原作に飛んだら『あ、このバカやりやがった』と思ってて下さい。

第十三話　『諸君、時は来た！！』（前書き）

再誕の時が来た！！

第十三話　『諸君、時は来た！！』

あの激論会から暫く時が経った。

千冬姉さんは、ＩＳ学園の指導者として教鞭を振るっている。

束姉さんは、ＩＳ関係で何かやらかしているらしい。

夢織は、俺と同じ学園に通っている。

そして今俺は、

「それでは、会長の挨拶」

全校集会で話を聞いている。

壇上に上がる新会長は、あの会長だった。

「以前から知る人は宜しくね？知らない人も宜しくね？
新しく会長に成りました光道音（こうどういん）麗（れい）です。では始めに……」

周りから拍手の音が聞こえてきたが、俺は嫌な予感がして出来なかった。

「ん？どうしたんだ神威？」

数希の問い掛けに答える余裕が無い。脳に響くモンがあるからだ。俺の第六感だか第七感だか知らんが「先を言わせるな！」と言っている。

「諸君、時は来た！！」

まさか……

「私が居た学園の伝説を皆知っているだろう！？
会長の上に立つ、神の名を持つ者が居た事を！！
当時会長だった私の、その上に立っていた男の事を！！」

またかぁ！？

「この日に為に駆け付けて来た者達も居る！！」

……お兄ちゃん支援友好の会！？なんだそれ！？左翼か！？

「その中に私と同じく誕生の瞬間に立ち会った者も居る！！」

会長席に居る人って……小学校の時の担任！？アンタ何やってんだ！？

「だから私は！今！此処で！宣言する！！総帥復活を！！」

――――――――――――――――ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

すんなあああああぁぁぁ

で泣く！？

「神の名に相応しく在ろうとする姿を称えよ！！」

おいそこ、驚き過ぎ！目玉落ちるぞ？って……夢織！？

「今、上への道を昇る光景を目に焼き付けよ！！」

俺は珍獣か！？てかこれ天獄への階段じゃね？

「総帥、皆に御顔を……」

はいはい、振り返ればいいんだろ？回れ右っと――――

――――――――――――――ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

――――おおぉぉぉぉぉお！？

「さあ、総帥！神託を！！」

……イイだろう、逝ってやろう、最高にキてる台詞で逝ってやろう！！

「漆月　神威が命ずる！！我に従い、平伏せぇ！！」

≪≪≪≪≪≪≪Ｙｅｓ　ｙｏｕｒ　ｍａｊｅｓｔｙ！！　Ａｌｌ　ｈｅｉｌ　ｇｏｄ　ｂｒｏｔｈｅｒ！！≫≫≫≫≫≫≫

……ちょっと気分イイなんて事は無いぞ？

◇◆◇◆◇◆◇

「あはは、ビックリした！本当に驚いたわよ？」

「ああ、そうだろうそうだろうさ……コンチクショウめ！」

今は昼、屋上で夢織と飯を食っている。俺は不貞腐れて食ってる。

「そんなに不貞腐れてると信仰度が下がっちゃうわよ？」

「んなモン廃（すた）れて錆びれて溺死しろ」

つーか信仰度って何だ？なんにせよ、ろくなモンじゃない事は確かだ。

「あはは……でも、都市伝説は本当だったのね」

「都市伝説？」

「ええ……ある学園で生徒は勿論、教師すらも平伏す存在がいる。その者は、神如き名を持つ総帥として君臨した。って都市伝説よ」

「……俺は祭り上げられただけだ」

一夏と箒の存在に因って……

「そうなの？迷える子羊（せいと）に勇気と希望を与えたって話も有るけど？」

「……ホラ話だろ？」

あの相談室の事か？……一夏め！

「でも格好良かったわよ？……我に従い、平伏せ！私もつい流されちゃった。後光が見えたしね」

「……そうかい」

あんな事言ったあの時の俺を血祭りに上げてやりたい！！

ついでにお前は眼科に行った方が良い。きっとその目は曇っている！

「あ、いたいた」
「あの人は……」
「ん？……会長か」
「探したわよ、お兄ちゃん総帥」
悪の根源（かいちょう）は俺を探していたようだ。
「何の用だ？」
「また相談会を開くから放課後開けておいてね？」
「……またか？」
「うん、また」
またアレをやらねばならんとは……
「で、何時からだ？」
「ん～……まだ分かんないわ、秘書も決まってないし」
「秘書……」
「……何？」
夢織と目が合った。

「秘書はコイツで」

「え？」

「わかったわ、名前は？」

「更識　楯無だ」

「更識　楯無さんね。明日の放課後空けておいてね？」

「え？」

「じゃ、また明日に」

「ええ、また明日に」

「……え？また明日？」

そう言い会長は去って行った。

「……神威君、どういう事なの？」

夢織は困惑顔で訊ねてくるが、

「明日になれば解る」

俺はこう返すだけだ。逃がさない為に。

「……秘書ってなんなの？」

「大丈夫だ、明日になれば解る」
と言うか何で秘書なのか俺も解って無い。
「……何が大丈夫なの？」
「……旅は道連れ、だ」
世は情け。では無いかもしれないが。
「答えに成ってないわよ！？」
「明日に成れば解る」
明日に成れば嫌でも解る。
「はあ、もういいわよ……」
よし、言質取った！
「……ねえ、神威君」
「なんだ？」
「……私もお兄ちゃんとか言った方が良いのかしら？」
「それは勘弁してくれ……」

お前は飲まれてくれるな。俺のＳＡＮ値の為に。

◇◆◇◆◇◆◇

それから数日後。

「第１３回目の作戦会議のお時間です！」

俺の部屋に千冬姉さん、夢織、束姉さんが集まった。

「各自の現状、最近の変化等等の発表するべし！はい、ちーちゃんから」

「私は前と同じヒヨッ子の育成だ。まだ基礎だがな」

千冬姉さんはＩＳ学園に教師として席を置いている。教える事は当然ＩＳの事だ。

だが深く教えず基礎だけ教え、生徒自身に進んで学ばせる様にしている。

進んで調べ学ぶ者は成長が早く、教えて貰うだけの者は一定で止まる。

そして故意に優劣を付け、比べさせる。

ＩＳ操者と成れば何時も他者と比べられる為、今の内から慣れさせておく。
此処で躓く者はＩＳ操者としてやっていける訳が無い。
それ以前に、ＩＳ操者にすら成れる訳が無い。要は篩い落としだ。

「まだ色ボケが抜けない奴もいるがな……」

俗に言うミーハーな奴らだ。千冬姉さんが鬱陶しげに話すのは、ウザイからだろう。
中にはストーカー紛いの奴もいるらしい。何をしにＩＳ学園に入ったんだ？

「まあ、近々新しい規則が出来る。それまでだろう」

今年から始まったＩＳ学園は試験要素が多い。
規則が決まりきってないのもその所為だ。入学した第一期生はモルモットの様な者。
ＩＳ学園の実験要素、其のものだ。

「私から言えるのは現状だけだ、気に障る変化は無いな」

「ふむふむ……では次、泥棒猫ちゃん」

「……楯無です」

これはノーコメントだ。

「私の方は……ＩＳを取り入れるか入れないかで揉めています。
篠ノ之博士の狙い道理に」

更識は対暗部用暗部、最も必要なのは権力と力。
ＩＳという強力な力が有るが、束姉さんが作ったモノ。だから手が出し難い。
特に更識頭首には効果覿面(てきめん)だろう。仕掛けが有るのか無いのか、で。
取り込んだ場合、仕掛けが有れば痛手を負う可能性が有るからだ。
取り込まない場合、時代に措(お)いて行かれ、段々と更識の必要性が無くなって行く。
実際に仕掛けが有る為、どちらを選んでも結果は……まあ、早いか遅いか、だ。

「取り込んだ場合、誰がＩＳを持つのか？の話も有ります」

候補は更識頭首……は無い。束姉さんが作ったモノを持つはずが無い。
そして下の者に力を持たせる訳にはいかない。だから候補は、夢織……だろう。

「ただ、ＩＳを持つと表に出る事に成ります。これが揉める原因です」

暗部が表に出るメリットは、粗(ほぼ)無い。
日の光にあたれば動く姿が解る。敵にさえ解ってしまう。其れでは暗部の意味が無い。
あたって良いのは月夜の光、その位だろう。

「私からは以上です」

「ふむふむ…では、むっくん」

「変わり無し。以上」

俺から言う事は無い。
更識が俺を取り込むのはまだ出来ない。まだ壁が在る。
最後の壁は時期。時期が来なければ壊せない。

「ふむふむ……次は束さんだね？束さんも変化無し。以上！」

「……そうか」

「……そうですか」

「……そうなのか」

束姉さんがやってる事。強いて言えば……思いつき、だろう。
色々作っているが、作り方が問題なのだ。
目を閉じて作ったり、足だけで作ったり、マジックハンドだけで作ったりと色々だ。
正直、作る気有るのか？と思う。だが周りは止める事が出来ないのが現状。
偶にそれで作れてしまうのだ、正常に動く凄いモノが。だから止められない。

逆に、辞めさせられた事もある。コアの作成だ。
最初は束姉さんが「これ以上コアを作れない」と言ったが、周りが強制して作らせた。
中には、箒の安否を盾にした者も、居た。
その事も有り、束姉さんが薄ら笑いをしながら作ったモノは、爆弾より性質の悪いモノ。
見た目はＩＳのコアだが中身は別物、バグとウイルスの塊。
ソレを繋いだＩＳは動かない、だけなら良い。動くと色々ヤバイ。

武装が有れば、ブッ放して地獄絵図。
武装が無ければ、摩訶不思議の動きをし腕や足が体からオサラバしそうに成ったらしい。
性能を見る為に繋いで有る計器なども、中身が蹂躙される。
因って、周りが作るのを辞めてくれ、との非難で辞めた。

箒を盾にした奴は当然、消した。俺の手で、確りと……

「ではでは、今回の議題は……更識にＩＳを持たせようぜ！！でいくべ。
んじゃ、トーク開始。ガンガンいこうぜ！！」

「……決定、ですか」

「おうさ！だって持たない道は無いでしょーが」

「そうなんですけど……」

「……束は何か案が有るのか？」

「それを今から考えるんだよ、ちーちゃん」

「非公式に手に入れても使ったらアウト、だしなぁ」

「そうね……正規で手に入れても駄目なのよね……」

「それに、更識は直接ＩＳ開発に係わって無いからな。企業系統も無理だ」

「ねえねえ、泥棒猫ちゃん。知られて良い範囲って何処まで？」

「……楯無です。知られて良い範囲は……名前まで、ですね」

「……そこでもう駄目じゃね？」

「代表や候補生はある程度機密保持の名目で情報の流出を防げるが……」

「ですがその為に精細なデータを提出する必要が有る、ですね？」

「ああ、そこで偽造し見つかれば隅々まで調べられる」

「ねえねえ、ちーちゃん。ＩＳ学園で身元調べる事出来ない条件ってナンジャらホイ？」

「……基本的には此方に身元の判るデータなどを送る事に成っている」

「……偽造の真偽は問わないのですか？」

「下手にすれば国際問題に発展する。
出来る時はその者が大きな問題を起こした時だ」

「それって国内にも適応すんの？」

「……いや、国内は出来る」

「まあ、日本が造った所ですし当然でしょう」
「ねえねえ、むっくん。漆月で優劣はどないして決めてんの？」
「ガチンコ」
「漆月はそうだったわね」
「……そうなのか？」
「はい、かなり実戦に近いです」
「ふむふむ、もふもふ、ふもっふ」
「それで束、何か浮かんだのか？」
「ういむっしゅ、泥棒猫ちゃんがお外で代表候補に成ればイイと思います！」
「外で、ですか？」
「あい、外で無双して勝ち取ればイイんじゃない？」
「……確か千冬姉さんも実力で代表を勝ち取ったんだっけ？」
「ああ、そうだったな」
「確か代表とかの決め方って国ソレゾレだった、よね？ちーちゃん？」

「ああ、決め方は各国の自由だ」

「……つまり、私が代表候補を勝ち抜きで決めている国で代表候補に成る。と？」

「まあ、外に出るだけならパスの偽造で済む……のか？」

「そうだな、外から情報を求められても操作は出来る。更識ならお手の物だろ？」

「そう、ですね……視察に来ても人と物を用意しておけば良いだけですし」

「んじゃ決定。異議は？」

「無いな」

「無いです」

「無し」

「良し、じゃあお開き！」

こうして、今回の話し合いは終わった。

そして暫くして、夢織がロシアに発つ事が決まった。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

開かれる、第２回目の、ＩＳ世界大会。
また、熱狂の嵐が、吹き起こる。
そして、嵐の影で、忍び寄る手が、在った。

呪は月を擁いて　第十四話

『待っていろ！今往く！！』

第十三話　『諸君、時は来た！！』（後書き）

総　帥　再　誕　！！

平穏とは嵐の前の静けさなのさ！

平穏の後、嵐が来て騒動に変わる。そしてまた平穏が訪れる…

まるで終わらない円舞曲（エンドレスワルツ）のように！！

そして夢織は秘書に着任！後光が見えたのは恋のフィルターのせいです。

これも乙女の成せる業！！…恋は盲目って言うしね。

あ、あと勇者数希を人物紹介？＋βにあげときました。

素で忘れてました！すんませんでした！！

第十四話　『待っていろ！今往く！！』（前書き）

やっとこ誘拐の話です。

第十四話　『待っていろ！今往く！！』

あれから一年が経った。

俺と夢織は一学年上がり、一夏と鈴が入学してきた。涙の嵐と一緒に。

比較的簡易相談で済んでいた相談室が、またアレに成った。

偶に惚気け始める奴すら出てきた。勘弁してほしい。

秘書の夢織も勘弁して欲しいと言っている。

相談室が終わった後は何時も愚痴り合い。

「何であの馬鹿は気づかん！」とか「何で泣き止んだら惚気始めるの！？」とか。

「ラブレターぐらい自分で渡せ！」とか「あれはもう女の敵ね！」とか。

「もうヤっちまうか！？」とか「もうヤっちゃいましょう！？」とか。

お互い息が切れるまで言い合い「「帰るか（りましょう）？」」で帰る。

正直やってられない。だが一年の辛抱、もう少しだ。

だがそんな中、一夏に男の友人が出来た。

一人は五反田（ごたんだ）弾（だん）、家が五反田食堂という中華料理店の長男。

もう一人は御手洗（みたらい）数馬（かずま）、勇者数希の弟だ。

この二人は嫉妬に駆られて暴走する事が無い。一夏にとって貴重な友人に成るだろう。

俺にとっても嬉しい事だ。嫉妬に駆られた奴が多少そっちに行くからな。
俺が友人と呼べるのは数希しかいないのに何で一夏は二人も……と嫉妬したが。

鈴も相変わらず一夏に付きまとっている。
色々ハッキリ言う娘なので敵を作りやすいが、弾が旨くフォローしているようだ。
この前ライバルが出来たと言っていたが……誰なんだろうか？
相談室(こんなこと)をやっていると心当たりが有り過ぎて判らない。
だがライバルと言うからその娘はきっと鈴と言い合える、向かい合える娘なんだろう。
良い事だと思う。鈴の言葉を受けて返してくれる友人……とまでいかないだろうが、
そういった同姓の者は、必要だと思うから。何にせよ、頑張って一夏を落としてくれ。
そう言えば、一夏と将来の約束をしたと言っていたが……大丈夫だろうか？
一夏は愚鈍だから何か勘違いしてそうなんだが……大丈夫、じゃないよな絶対に。
何かもう確信出来る。その時に鈴は激怒する、だろうな。俺も加勢しよう。
ビンタ一発じゃ済ません、心まで砕いてやろう。

一夏マインドブレイク計画を考えていると、

「何考えてるのかしら？」

隣に居る夢織に計画構成を中断させられた。

「愚弟の心を粉砕する計画」

「……それは、私も混ぜるべきじゃない？」

「……そうだな」

確かに、こいつも被害者だ。是非参加させなければ。

「でも、それはまた後で、よ。今は……」

「周りを警戒、だろ？」

「ええ、そうよ。確りして頂戴」

「ああ、悪かった」

今は第2回目のＩＳ（モンド・グロッソ）世界大会の最中。俺達はその警備員のような事をしている。

更識と漆月が二人一組に成り、会場の中と周辺に溶け込んでいる。

俺達は会場周辺を歩いている。お祭り騒ぎで会場周辺も人が多い。

その為、周辺の見回りも必要に成る。俺達は一般人の振りをし見回り歩いている。

服装も私服。俺は何時も身に着けている重しも長刀も無い。だが武器は持っている。

手首から肘まである革（かわ）に隠してある。

着てるシャツは袖まで有るタイプなので、外見では判らないだろう。

夢織も同じ様に隠している。

「この辺りは問題無さそうね」

「そう、みたいだな……ところで楯無」
「何？」
「何故、腕を組んでるんだ？」
「ふふ、装(よそ)おうなら徹底的に、よ」
夢織は俺の左腕に抱き付いている。
「……そうか」
「ええ、そうよ」
「……少しくっ付き過ぎだろ」
「あら、コレが嫌なの？」
そう言い強く当ててきた。
「もうまだまだなんて言わせないわよ？」
「……何の事だ？」
「誤魔化そうとしても、駄目よ？」
本当に憶えて無いんだが？
「……まあ良いわ、意識してくれてるから」

……俺は何て言ったんだ？

「ねえ――――――！！」

夢織が持つ携帯に連絡が来た。如何やら、何か有ったようだ。

「どうした？」

「母が呼んでるわ」

「分かった、行くぞ」

「ええ」

そして、俺達は更識頭首の下（もと）へ駆けた。

この時、何か『声』が、聞こえた気がした。

◇◆◇◆◇◆◇

「来たようじゃな」

「ええ」

娘と神威が駆けて来た。

「お母様、何かあったのですか？」

「そうよ」

此の情報は神威に関係する物。話そうとするが、

「何故、我ら二人に連絡を？」

先手を取られた。相変わらず、此の子敏い。

「貴方に関係有る事、だからよ」

だが言う事は変わらない。寧ろ好都合。

「……」

「織斑　千冬の弟、織斑　一夏が誘拐されたわ」

「！？」

驚くのは当然。私自身も驚いた事。

「今、その追跡をしておる」

「そして、此処から然程（さほど）離れてない位置に、怪しい者も居る」

恐らく、此方の監視。

「……」

「今、自由に動けるのは貴方達二人だけよ」

さて、如何動く？

「……助けに行っても構わない、と？」

「ええ」

此れは、織斑　千冬に関係する事に成る。
其れは、日本国に取って痛手と成る、可能性も有る。
だから、避けなければいけない事。

「成らば、怪しい者の位置と特徴を」

「解ったわ」

詳細を教え、促(うなが)せる。

「神威、此れを持て」

「……これは？」

其れは――――

「銘は『夜』じゃ」

「夜……」

――――呪刀(じゅとう)と呼ばれるモノ。

「往け、神威」

「はい！」

「貴方も往きなさい」

「はい！お母様！」

直ぐに二人は駆けて往った。

此れは貸しよ。気づいて入(い)るかしら？

◇◆◇◆◇◆◇

――――駆ける。標的へ、一夏に繋がるモノへ、駆ける。

大地を、踏み潰すように、蹴り砕くように、駆ける。

「いたわ！」

数は三、

「見せしめに一つ潰す」

一つ欠けた所で問題無い。

「どれを？」

「一番でかい奴」

「私は後ね？」

「ああ、往くぞ」

標的に向かって全力で踏み込む。

「――――な！？」

遅い

袋に入れた儘（ママ）の刀で腹を捻じり刺し、壁に叩き付ける。

「げぁ！？」

逃がさない

ずるずる落ちる頭を渾身(こんしん)の膝で突き抜く。

「ぎゅ――――」

後、二つ

動かなく成った標的(ごみ)から次へと狙いを定める。

「ひっ」

手が邪魔だ

銃を持つ右手に、隠した小刀を投擲(とうてき)する。

「え……ああ！？」

左も邪魔

駆け寄り指四本を掴み、圧し折る。

「いぎぃ！？」

足も――――

折った指を引き、力任せに投げ、

「いぃ！？……ぐ！」

――――邪魔だ！

全体重を掛けて、右膝を踏み砕く。

「ぅあああああ！？」

煩い

喚く口を刀で衝き塞ぐ。

「むごっ……ぅ！！」

もう一つに視線をやれば、夢織が組み伏せていた。

ならば、後は情報を搾り取るだけ。

「騒げば、消す……アレのようにな」
朽ちたモノを視界に入れた瞬間、標的は震えだした。
口から刀を抜き、問い立てる。
「織斑　一夏は何処だ？」
「ぅあ……ま、まひ……」
掴んだ儘の指を、背に回す様に引き、
「ぃだあ！！」
腕を圧し折る。
「もう一度だけ聞く。織斑　一夏は何処だ？」
「ま、町外れの倉庫だ！！使われてない！南外れのお！！」
「そうか……」
手を離すと標的は気の抜けた表情をした。
「は……あぁ……」
その面を、
「おぅ！？」

蹴り飛ばした。

「夢織」

「解ってるわ。行って」

「頼む」

「後で付き合ってね？」

「ああ！」

又、俺は駆けた。

「待っていろ！今往く！！」

一夏の下へ、駆け出した――――

◇◆◇◆◇◆◇

走り去った彼から組み伏せるモノに視線を向ける。
「織斑　一夏を攫った理由は？」
「……知らない」
頭を掴み、
「前を見なさい」
動かないモノに向けさせる。
「っ！」
身体が強張るのが判る。
「あのように成りたいの？」
「知らない！知らないんだ！！」
本当に知らないのだろう。が、
「……言えないのかしら？」
責め立てる。捨て駒と判っていても、
「本当だ！信じてくれ！！」
「……質問を変えるわ」

引き出せる情報が、
「何処から頼まれたのかしら？」
有る、可能性が、在る。
「な、亡き国、と言っていた……」
亡き国…聞いた事が無い。
「……他には？」
「そ、それだけだ」
まだ、搾り取れる情報が在る。
「どの様な方法で接触して来たのかしら？」
接触した手段で相手の規模が多少判る。
「……いきなり現れた」
もう一つ、
「その人は日本人？」
何処の者か。
「た、たぶん」

「……たぶん？」

締め上げながら聞く。

「判らなかったんだ！金を貰ってどうでもよかったんだ！！」

「そう……」

もう、取れる情報は無い。

「もう、いいだろ……」

「ええ、もう良いわ」

私は手を離した。

「ほ……」

そして、杖（じょう）を組み、

「さようなら」

「え？……ぐぇ」

首を狩り取った。

嫌な感触が残るが、気にする程では無い。

これは、彼の隣に立つ為に、必要とされる為に、必要な事。

彼が受け入れる者は、恐らく三種。

一つは、彼の背を押し、時に護る者。

織斑　千冬の存在が当て嵌まる。

彼女は、彼の背を折れぬ様に、手折れぬ様に押す。

そして、彼の身を護ろうとしている。彼が受け入れているのが証拠だ。

もう一つは、彼を癒し、支えに成る者。

篠ノ之　箒がその様な存在、だと思う。

未だ見ぬ彼女は、彼の心に確りと存在している。

一度彼女の話を聞いた時、彼は懐かしそうに、穏やかに、話していた。

今も、支えに成っているのが解り、嫉妬したのを憶えている。

私は、そのどちらにも成れない。

だから、もう一つの、彼と共に戦い、闘える者。その存在に成る。

彼は、戦いに身を投じれば、容赦が無くなる。

今此処で一人屠った様に、残酷に、容赦が無い。

織斑　千冬と篠ノ之　箒は戦えるだろうが、相手を殺す事は出来ない、と思う。

出来たとしても、彼を護り、支える存在には戻れない。そう思う。

それに、彼は何人か、殺(あや)めている。

戦いの時、一人では手に負えない時、枷に成らない者が必要だろう。

この先、楔を抜き、鎖を壊す時、共に闘える者が必要だろう。

だから、私は、その存在に、成る。

「お待たせいました、お嬢様」
更識の者がきたようだ。私は得た情報を渡す。
「私は彼を追うわ」
今はまだ、彼の背を追うだけだけど、必ず、
「畏まりました。お気を付けて」
「ええ、ありがとう」
隣に立ってみせる。絶対に。
彼を追い、私も駆け出した――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――駆ける、一夏の下へ。
路を只管(ひたすら)に、駆ける。

――――？

一夏へと、向かう最中、違和感を感じた。

身体が、軽い……？

過ぎる風景が、加速し始め、

……『声』が聴こえる

縛るような『声』が、聴こえた。

これは……

忘れもしない、この世界に堕ちた月夜に、

この『声』は――――

この世界の何処にも無い『場所』で、

――――神威

確かに聴いた、神威（ほんもの）の『声』だった。

――――よろしくおねがいします！

思い至った瞬間、爆発するかの様に、加速した。

そうだ……

感覚すらも、適応した。

そうだったな……

是(これ)は、俺が受け取った、

約束だったな、神威！！

神威(ほんもの)が掛けた、『呪い(ねがい)』だった。

駆ける。純粋な『呪い(ねがい)』を抱いて、駆ける。

一夏(おとうと)の下へ、翔(か)けるように、駆け抜ける――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――翔ける。一夏の、愛する弟(かたわれ)の下へ。

空を真っ直ぐに、翔ける。

くそっ！

悪態を吐けながら、翔ける。

何故、何故気づかなかった！

世界に名を上げる、という事は、

こんな簡単な事に、何故気づかなかった！！

同時に、敵意や憎悪も、集める事に成る。

一夏の誘拐は、間違い無く私が原因。それ以外に、攫う理由が無い。

一瞬、更識の事が頭を過ぎるが、先ず無い。

一夏に手を出すなら、こんな手は使わない。もっと間接的にやる筈だ。

だが今はそんな事より、

一夏……

一夏の事だ。

無事でいて！！

翔ける。一夏（おとうと）の事だけを思い、翔ける。

鳥よりも速く、空を裂く様に、翔け抜ける――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――駆ける。もう目前と成った一夏へ。

大地を、踏み潰しながら、蹴り砕きながら、駆け付ける。

――――！

空から、風が舞って来た。

「千冬姉さん！！」

「神威！！」

お互い、止まらずに交わす。

「一夏を！！」

「ああ！！」

「倉庫だ！！」

「判っている！！」

目の前に、二つの人影。

「左を！」

「右を！」

鞘と峰で、同時に、

「「頼む！！」」

一閃。

「千冬姉さんは一夏を！！」

「ああ！！」

千冬姉さんは、壁を討ち壊し、入って行った。

俺は、その姿を背にし、周囲を見渡した。

倉庫の影に、車を見つけ、歩み寄った。

刀を抜き、獄夜のような、黒い刀身を、光らせながら――――

◇◆◇◆◇◆◇

全てが、一瞬だった。

家を出て直ぐに、囲まれて、銃を突き付けられて、意識を落とされて。

気が付けば、薄暗くて、縛られて、動けなくて。

何が起こったのか、判らなかった。

呆然としていたら、大きな音がして、ＩＳを着た人が居た。

光の影で判り辛いけど、直ぐに判った。

「千冬姉……」

「一夏……無事か？」

心配する千冬姉に、俺は頷いていた。

「そうか……」

安心する様な顔で近づき、縄を解いてくれた。

「立てるか？」

差し出しされた手を、釣られる様に取って、立ち上がった。

「外で神威が待っている」

「神威兄が？」

「ああ、きっと心配して……怒るんじゃないか？」

「げ……」

心配してくれるのは嬉しいけど、怒られるのは勘弁してほしい。

「ふふ、こんな所さっさと出るぞ」

「おう」

千冬姉に続き、外の光を浴びた。

ようやく、助かったのだと、解った。

◇◆◇◆◇◆◇

――――刀を返し、振り切れるように、構える。

尖(とが)った儘の感覚が、位置と数を教えてくれる。

数は、一……

壁の影に、激情を敲(たた)き付ける、的(まと)が有る。

楽には、逝かせない

此方から、打って出た。

先ずは、首……

「げぇ――――」

先ず『声』を殺した。

次は、腕……

「――――っ！？」

峰で左腕を討ち折る。

逆も……

「っ！！」

右の鎖骨を叩き折る。

寝てろ……

「っ！？」

回し蹴りで突き倒す。

こんな……

「うっ！！」

頬を踏みつけ、

こんな奴等（ごみども）に……

「！？」

刀の切っ先を心の臓に押しつけ、

一夏が……！

「！！っ！？」

捻じり始め、

千冬姉さんが……！

「っ！！っ！？」

その儘、力を籠め、

こんな奴等(ごみくず)に……神威(おれ)の姉弟(かぞく)が！！

「っ！！！！」

貫いた。

刀を抜き、付いた汚物(ち)を払い、鞘に収めた。

そして、影から光が当たる壁の向こうに、歩き出した――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――駆け付けた時、全てが終わっていた。

三人は和気藹々とした雰囲気をしていた。

彼は弟の頭を、軽く叩いている。そして言っている。

「間抜けだなぁ？一夏ぁ？」

「うぐぐぐ……」

「……ぷ」

それはもう、楽しそうに。

「囚われのヒロインの積もりかぁ？」

「うぎぎぎぎ……」

「くく……」

本当に、酷いくらい楽しそうに、罵っている。

「――――ダサ」

「うがあああぁぁぁあ！！仕方ねぇだろ！？」

それも、徹底的に。

私に気づいた彼は、此方を見て、

「お？迎えか？」

「聞けよ！神威兄！！」

目でサインをした。

向こうの影に骸が有る。と。

私だけに伝えた彼に、

「ええ、迎えに来たわ」

笑って返した。

全て解っていると、大きく頷きながら。

◇◆◇◆◇◆◇

得た物が大きく成れば、対価を多く払う事に成る。

払う対価は、暫しの別れ。だが、只の別れ成らば、又繋がる。

又、繋がる為に、別れ、そして、旅立つ。

呪は月を擁いて　第十五話

『少しの時間（あいだ）だけ』

第十四話　『待っていろ！今往く！！』（後書き）

更識かーちゃんのカリスマ感が戻んね～（汗
だから台詞が少ない……ぬうぅぅぅ

オリ主がブッ血ＫＩＬＬした！！

次回、千冬はドイツに。
別れにハグシーンは鉄板だと思います！！

黄泉傀儡様から頂いた黒刀・夜はオリ主の愛刀に成りました。

３０万ＰＶ突破記念＆感謝（前書き）

皆様のお陰で３０万ＰＶを突破しました。ありがとう御座います。

で、またまたバカ話です。

今回は壊れてると言うか、変と言うか……まぁそんな感じです。

３０万ＰＶ突破記念＆感謝

一夏
＜３０万ＰＶ突破記念＆感謝の時間です。今回は原作主人公の一夏と＞

鈴
＜原作ヒロインの鈴音でお送りします＞

一夏
＜今回は総帥の神威兄と＞

鈴
＜秘書の更識先輩がやってる相談室。その話です＞

一夏
＜え～と、確かこのグレートモニター・リペアに繋げばいいんだっけ？＞

鈴
＜…取説にそう書いてあるからそれでいいんじゃない？＞

一夏
＜じゃあ挿して【ゴメス！】……って、ゴメス！？＞

鈴
＜……ホントに変な音すんのね＞

一夏
＜あ、映った＞

鈴
＜……ホントにコレで映るんだ＞

秘書
「総帥、次の患者です」↑スーツ＋ダテめがね装備

総帥
「内容は？」↑ゲ〇ドウスタイル＋薄いグラサン装備

秘書
「何時もの病状です」

総帥
「そうか……」

秘書
「準備は宜しいですか？」↑ダテめがねをクイッとあげた

総帥
「……問題無い」

秘書
「では、お通しします」↑ヒールでウォーク！

一夏
＜神威兄、すげぇかっけぇ……＞←きっと目が腐ってる

鈴
＜大哥……なんて凛々しいの……＞←感染してフィルターがかかってる

一夏
＜先輩はスーツにめがねか……なんか似合ってるな＞
※秘書にめがねは鉄板だと思う。

鈴
＜そうね、スタイルいいし……胸も、胸もぉ……【ギリギリ】＞
←歯軋りギリギリ

一夏
＜り、鈴？＞←ビクビク

患者
「うぅ……お兄ちゃん総帥……」

総帥
「君も断想剣にやられた、そうだね？」

患者
「はい……うぅ」

総帥
「ならば、対処方法だが――――」

一夏
＜断想剣？何だろ？鈴、知ってるか？＞←素で疑問顔

鈴
＜……さあ？（気づけ！この鈍感！！）＞←手がプルプル

総帥
「――――であるから、想いを全て十二分に伝えなければならない」

患者
「想いを……全て……」←思案顔に変化

総帥
「解ったかい？」

一夏
＜へぇ……酷い奴がいるんだな＞←真顔

鈴
＜……え？＞←口がポカーン

患者
「そうすれば……あの時みたいに……」←また変化中

総帥&秘書
「「……」」↑嫌な予感がビンビン

患者↓妄想者
「優しい笑顔で……えへへ……」↑飛び始めた

総帥
「……」↑隠れた口が引き攣る

秘書
「……」↑片眉が跳ね上がる

妄想者
「怪我した時「大丈夫か！？」とか言ってお姫様抱っこして、
そして顔が近くなって見詰め合って、それで……それで！！」
↑アイ・キャン・フライ！

総帥
「……」↑口がヒクヒク

秘書
「……」↑眉がピクピク

一夏&鈴
＜＜うわぁ～……これは酷い！＞＞

妄想者
「保健室に運ばれて先生が居なくて二人っきりで、

アクシデントで倒れて重なって見詰め合って……キャーー！！」
↑フライ・ハイ！！

総帥＆秘書
「「ゴッホン！！！！」」↑他所でやれ！！！！

妄想者
「ーーーーはっ！？」↑私は帰って来た！

総帥
「もう、いいかね？」↑目が笑って無い笑顔

妄想者
「はい！ありがとうございました！！失礼します！」↑グラサンで気づかない

総帥＆秘書
「「……はぁ」」↑ダウ〜ン

一夏
＜神威兄ぃ……お疲れ……＞↑労わるような顔のブラコン

鈴
＜大哥ぇ……先輩ぃ……なんて不憫な……＞↑完璧に理解して涙がホロリ

一夏
＜神威兄は何で……こんな目に……＞↑真剣

鈴
＜い、一夏？＞←真剣な横顔にドキッ

一夏
＜神威兄をこんな目に合わせる奴を……断想剣を！俺は許せない！！＞←超マジ

鈴
＜ゑ……＞←ザ・ワールド！！

秘書
「総帥、後一人です……」

総帥
「……解った。通してくれ」

秘書
「はい」

一夏
＜まだ居る……鈴！起きろ鈴！！＞

鈴
＜……え？何？＞←そして時は動き出す！

一夏
＜鈴！次で犯人を見つけるんだ！！手伝ってくれ！！＞

鈴
＜う、うん……うん？＞↑やっと頭も動き出す！！

患者2
「失礼します……」

総帥
「来たか……」

一夏
＜……＞↑ガン見

鈴
＜……（ツッコんだ方がいい……かな？）＞↑指で眉間を揉んでる

総帥
「ああ、そうだ秘書君、書類は「あ、あの！」……ん？」

患者2
「こ、これを……」

総帥
「手紙（ラブレター）か」

患者2
「は、はい」

総帥
「これを、断想剣に渡せばいいんだね？」

一夏
＜また、また断想剣か！！お前は俺を怒らせた！！＞←怒りのブラコンモード

鈴
＜……（大哥ぇ……あたしどうしたらいいの？）＞←迷える子羊

総帥
「確り渡しておこう」

患者2
「ち、違います！断想剣じゃないです！！」

総帥&秘書
「「え！？」」←マジ吃驚

鈴
＜え？……えええええええぇぇぇ

患者2→乙女
「総帥にです！！」

総帥&秘書
「「ええ！？！？」」←二度吃驚

鈴
＜大哥に！？……うんうん、見る目有るわね～＞←自分の事は棚に上げ忘れた

一夏
＜耳がいてぇ……＞←物理的痛み

乙女
「あ、後で読んで下さい！」←顔真っ赤っ赤

総帥
「お、おう？」←理解“は”出来た

乙女
「失礼しました！！」←乙女走りで去る

秘書
「……」←全然ちっとも全く面白く無い

鈴
＜うぅ～～～いいなぁ……ちゃんと解ってくれて＞

一夏
＜やっと治まった……＞

鈴
＜あたしなんて……＞↑横をチラッ

一夏
＜ん？どうした鈴？＞↑断・想・剣！（最弱）

鈴
＜……はぁ＞↑色々散った

一夏
＜？＞↑相変わらず

鈴
＜ま、今はいいか……それより続きよ！！＞↑これぞヒロイン補正！

秘書
「……」↑扉を閉めに行った

総帥
「……」↑開けて読んでる

秘書
「……」↑扉を閉めついでに鍵も閉めた

総帥
「……」↑読み終わった

秘書
「……」↑戻ってきた

鈴
＜……ゴクッ＞↑すっごくドキドキちょっとワクワク

一夏
＜……＞↑超珍しく空気読めた

総帥
「ふう……」

秘書
「……」↑目で訴えてる

総帥
「さて、帰るか」↑スルー

秘書
「……」↑近寄った

一夏&鈴
＜＜……＞＞↑超ガン見

秘書
「総帥……」↑めがねをクイッ
総帥
「ん？何だ……っておい！？」

一夏&鈴
＜＜足の上に飛び乗った！？＞＞

秘書
「ふふふ……」↑ブラウスに手をかけた
総帥
「何して……何故ボタン外す！？」

秘書
「ふふふふ……」↑第三ボタンまでオープン

一夏
＜……ピンク＞↑ブラ見て顔赤い

鈴
＜……【ビキ！】＞↑胸見て青筋が！？

総帥

「おい、止め……おい！？」

秘書

「えい！」↑抱き着きた

一夏

＜うわぁ……つぶれた＞↑真っ赤っ赤

鈴

＜フンガッ！！【ドゴス！！】＞↑モニターブッ壊した

一夏

＜ああ！？モニターが！？＞↑とても続きが見たかった

鈴

＜今日は此処までね＞↑清々しい顔

一夏

＜え！？＞

鈴

＜此処まで見てくれた方々、ありがとうございます＞↑笑顔でスルー

一夏

＜ホントに終わり！？＞

鈴

＜では、また＞↑イイ笑顔でスルー

――――――――プッツン！！――――――――

３０万ＰＶ突破記念＆感謝（後書き）

鈴に出番を！！といった感じで出しました。

楽しんで貰えたなら嬉しいです。

最近、原作が近くなってきたのでエロスばかり浮かびます。

解禁は原作からと決めてるんですけど……でも！でもぉ！！

と言う事で『ちょびっとだけ』でした。

最後に、秘書にめがねは鉄板だとマジで思います！！

第十五話　『少しの時間だけ』（前書き）

また、会う日まで……

第十五話　『少しの時間だけ』

「……着いたか」

「ああ……着いたな」

タクシーから降りる。

此処は空港の入り口。

「荷物、持とうか？」

「そうだな、頼もうか」

「ん、頼まれた」

千冬姉さんのケースを転がしながら歩き始める。

今日、千冬姉さんはドイツに発つ。

一夏が誘拐された時、千冬姉さんは翔け付けた。

一夏の居所はドイツ軍独自の情報網から得た情報を聞き知ったそうだ。

情報の対価は、一年間ＩＳ訓練指導者としてドイツに滞在する事。

「……初めてだな」

「……何が？」

「神威に……見送られるのは」

確かにそうだ。何時も、俺が去り、見送られた。
千冬姉さんは、何時も迎えてくれて、何時も見送ってくれていた。

「……偶には、悪くないだろ？」

「ふふ……そうだな、悪くない」

「あ、そうだ……ビールは程々にしとけよ？」

「それは……約束出来ないな」

言いたい事は他に色々有るが、

「……次会ったら腹が出てた、なんて嫌だぞ？」

「……そうだな、多少は抑えるとしよう」

「……多少かよ」

何故か言えなかった。

「心配するな、軍に居ることに成るんだ。飲む機会なんて中々無いだろう」

「まぁ、そうだな……」
「だから、多少で十分だ」
「……そうかい、そうゆう意味かい」
そして、歩みが止まる。
「身体には、気を付けて」
「ああ、神威もな？」
「俺は大丈夫だよ。今迄風邪すら引いた事無いだろ？」
「……そうだったな」
俺は風邪一つすら引いた事が無い。理由は、この前に判明した。
「そうだ、渡す物が有るんだ」
「渡す物？」
「うん、これ……」
懐から、箱を取り出す。
「……これは？」
「今年は……渡せ無いから。」

「……そう、だな」
「まだ早いけど、誕生日プレゼント」
一夏と二人で用意した物。
「……ありがとう。大切にする」
「……うん、一夏も喜ぶよ」
「一夏にも、伝えてくれ」
「わかった」
「……」
「……」
少し、会話が途切れた。
「……神威、荷物を」
「……ん」
ケースを渡した。渡したくは、無かったが……
「……そんな表情(かお)をするな」
「……」

俺は、どんな表情(かお)してるんだ？

「……全く」

「え？」

抱きしめられた。あやす様に。

「一年、たった一年だけだ」

「……」

「少し、ほんの少しだけだ」

「……そうだね」

俺も背に腕を回すと、抱きしめる力が強く成った。

「少しだ」

「……うん」

「少しの時間(あいだ)だけ」

「うん……」

「……離れるだけだ」

「……そうだね」

ほんの少し、腕を回した儘で、身体を放して、
「だから、行って来る」
「……うん」
こつん……と、額を合わせた。
「……一夏を、頼むぞ？」
「任せてくれ……千冬姉さんも確りと、ね？」
「ああ……わかった」
急かすアナウンスが流れる。
「時間、か……」
「そう、だね……」
そして、お互いゆっくりと、放した。
「……千冬姉さん」
「……うん？」
俺は笑顔で、
「行ってらっしゃい」

「――――ああ！行って来る！！」

見送った。後ろ姿が見えなく成る迄。

◇◆◇◆◇◆◇

窓の外は、もう雲だけに成った。

首から提げた宝物（プレゼント）を手に取り、開く。

中に有る写真は、神威と一夏が肩を組み笑っていた。

「ふふ……」

自然と頬が緩む。

この中に私が居ないのは、中（あ）て付けの積もりだろう。

この仲に入りたければ、ちゃんと帰って来い。と言う事か、神威め……

此れは何か仕返しでもするべきか悩んでいると、

今年は、贈れないのか……

神威に贈り物(プレゼント)が出来ない事に気づいた。だがそれも、

一夏には贈れたのに……帰ってから、か……

一年後。帰ってからだ。

直接、渡したいからな……

今はまだ飛行機の中、ドイツに着くには時間が有る。

何を贈ろうか……

だから、いいだろう。

一夏のも用意しないとな……

今はまだ、弟達(かぞく)の事を想っていても。

ドイツに着けば、想う時間も中々取れないと思うから、

何にしようか……

今はまだ、神威(おとうと)と一夏(たち)の事を――――

◇◆◇◆◇◆◇

「もう見えない、か……」

屋上で見えなく成る迄、見送っていた。

「……帰るか」

振り返り歩き始めようとすると――――

「神威兄！！」

「千冬さんは！？」

「行っちまったんすか！？」

――――一夏と愉快な仲間達が来た。

「ああ、もう雲の上だ」

「あー！！くそ！！」

「そんなぁ……」

「遅かったか……」

仕方ないよな、間に合わなかったんだから。

「アンタ達がボヤボヤしてるから遅く成ったんじゃない！！」

「千冬姉が喜ぶモンが無かったんだから仕方ないだろ！？」

……この二人は放っておくか。

「残念だったな？弾」

「そうっすね……」

「で、実際の所は如何だったんだ？」

「あの二人が、アレでもないコレでもない。と言い合ってたんですよ……」

「で、お前の止めの言葉を聞かずに時間が過ぎた。か？」

「正解です……」

「弾」

「はい」

俺は弾の肩に手を置き、

「お前は良くやった」

と、言った。

「そう言ってくれるのは神威の兄貴だけっす……」

弾は手で目を覆い、上を向いた。

まぁ、気持ちは解らんでも無いな。

苦笑しながら言い合う二人に、

「おーい！お前等！帰るぞ！！」

帰る旨（むね）を告げる。

「え！？帰んのか！？」

「大哥！まだ決着付いてないのよ！！」

……ふむ、そうか。

「じゃあ弾、帰るか？」

「是非！お供します」

俺と弾は帰り始めた。

「ホントに帰ってった！？」

「え、嘘！？」

ふと、からかいたく成った。

「弾」

「何すか？」

「走るぞ」

「うっす！付いて行きます！！」

それも全力で。

「あ！走って行った！？」

「待って大哥！置いてかないで！！」

まぁ、此方の心配は要らないからな？千冬姉さん…

◇◆◇◆◇◆◇

それから数日後。

「ふ～ん……成る程ねぇ……」

俺の部屋での集まり。

「千冬姉さんの事だから大丈夫だと思うけど」

その中に、千冬姉さんの姿は無い。

「ちーちゃんは心配要らないでしょ。何せちーちゃんだからね！」

うんうん、と頷きながら言っていた。

「で、むっくんは週の半分はコッチで過ごせる……だよね、泥棒猫ちゃん？」

「……はい、そうです」

そう、俺は週の半分を家で過ごせるように成った。

理由は、一夏の誘拐が有ったからだ。また、攫われる可能性が在る。

俺が居ることで、少しは牽制出来る。攫う機会を減らせる。

攫う時は、俺が居ない時だろう。その時を、狙う。

「泥棒猫ちゃんは確か……今度の春位に行くんだっけ？」

「……学園が休みに入ってから、ロシアに発ちます」

夢織は次の春、ロシアに発つ。唯(ただ)の一般人、更識　楯無として。

更識の名前で行く理由は、囮(おとり)。そして、餌。

亡き国と言った奴等は、間違い無く更識を知っている。
更識　楯無を名乗る夢織が外に行けば、目を向けるだろう。
その為に更識　楯無の名前で行く事に成った。
亡き国の目が夢織を追うなら儲け物、ぐらいの事だが多少の効果は有るだろう。
楯無が外へ行き手薄に成った。と思ってくれた方がいい。その方が叩くのは容易だ。
何より、夢織に危険が無い。そうであって欲しい。

「滞在期間はどん位の予定？」

「そうですね……短くて一年、長くて二年、位かと」

向こうの事は調べて有るが、やる時は手探りだ。
何事も予定通り、とはいかないだろう。だから二年程時間を取った。

「ふんふん……成る程ね」

「で、帰ってきたらＩＳ学園に通うんだったな？」

「ええ、そうよ」

ＩＳ学園の警備は更識が絡んでいる。
夢織は千冬姉さんと更識の間に入り、クッションの様な役割をやってもらう。

「一応、会長も狙ってみるわ……成れるか解らないけれど」

「会長か……」

ＩＳ学園の会長は権限を持てる。会長に成れたら何かとやり易いだろう。

「……ふむ」

「ん？どうした束姉さん」

「何か思いついたのですか？」

「ん～まだ実行出来ないからねぇ……保留！」

束姉さんがこう言ってるんだから出来ないんだろうが……

「……何か企んでない？」

何故か嫌な予感がする。

「いや～？何も企んで無いよ？」

このにやけた表情（かお）は間違い無い。だから俺は、

「……楯無、抑えて置いてくれ」

「解ったわ」

吐かせる事にした。

「ねえ、むっくん」

「何かな？」

「何でそんなに笑顔なの？」

「……聞きたい？」

「……ついでに両手の握り拳は何かな～なんて、思ったり……」

「これはね――――」

中指の第二関節を顳？（こめかみ）に当てて、

「――――こうするのさ」

捻じりながらめり込ませていく。

「いだぁ！？いだだだだだだ！！」

そして、尋問開始。

「さあ、何を考えたのかな？」

「いだい！！むっくんいだいよ！？」

「さあ、吐け。何を考えた？」

「吐く！吐ぐから！！やめてえ！？」

一旦停止する。

「……で？」

「うぅ～いたいよ～……」

「……ギアを２ｎｄに「直ぐ吐きます！」……サッサと吐け」

「Ｙｅｓ！Ｂｏｓｓ！！」

「さあ、キリキリ吐け」

「むっくんをＩＳ学園に係わる様に出来ないか考えました！！」

「俺をＩＳ学園に？」

「Ｙｅｓ！！」

「篠ノ之博士、それは難しいのでは？」

「なんでさ？」

「男はＩＳを動かせないのですよ？」

この女（あま）……まさか……

「イイ事を教えてあげよう。常識は壊す為に有るんだよ？」

やっぱり！俺を生徒として放り込もうとしてやがった！！

「……楯無」

この事に対する俺の判決は、

「何？」

「絶対に放すな」

ギルティだ！

「解ったわ」

「え！？束さん正直に話したよ！？なんで！？」

悪は滅ぶが世の定め。

「さて、始めようか？」

「泥棒猫ちゃん！！放せ！！」

「……これから楯無と呼んでくれるなら……考えます」

「それ考えるだけで終わるオチだろ！？」

流石天才、解ってらっしゃる。

「では、駄目です」

「ぐぬぬぬ……むっくん！」

「何だ？」

「これは鬼のする事だと思います！！」

「今の俺は鬼だ」

「いやいや束さん知ってるよ！むっくん優しいって！！
学園で総帥してるのも優しいからだよね！？
むっくん色々頑張ってるから束さん影から応援してるよ！！
お兄ちゃん支援友好の会にもちゃんと支援してるよ！！
だから神威の名前に恥じぬ慈悲を！！」

ほほう？あの左翼もどきの支援者だったのか。そうか、そうなのか…
ならば盛大に、容赦無く、全力で、心を籠めてお返しをしよう――

「……さあ、覚悟はイイか？」

――――愁(うれ)いと怒りと憎しみの、俺の拳でなぁ？

「――――神は死んだ」

「束姉さん、イイ事を教えてあげよう」

「……何？」

「――――この世界に神は居ない」

では――――――――Ｄｉｅ！！

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

又一人、又一人と別れ、旅立つ。再会を信じて。

一人は自身を忘れぬ様にと、1人は自身の代役を頼むと、去って往く。

そんな中、切れそうな繋がりが、少しだけ、太く成る。

呪は月を擁いて　第十六話

『何時か約束した……頼み事よ』

第十五話　『少しの時間だけ』（後書き）

千冬、一時離脱。でも一年なんてすぐさ！！

そして鈴に出番を！！でやったら弾が付いてきた！！

でも数馬は置いて行かれた……残念でした！！

第十六話　『何時か約束した……頼み事よ』（前書き）

春が来ました。

第十六話　『何時か約束した……頼み事よ』

学園の門を抜け、多くの人が去っていく。
俺達もその中の一人。夢織と並んで抜ける。
今日は卒業式、この学園を去る日。
俺は当然去り、夢織も通う事は、もう無い。

お互い、最後と成る帰宅路を歩いている。

「……ホント、とんでもない卒業式だったわね？」

「……全くだ…もう懲り懲りだ」

式の内容はとんでもなかった。

「……トロフィーが出てくる卒業式なんて聞いた事ないわよ？」

「……俺だって聞いた事が無い」

俺が卒業代表で壇上に立ったらトロフィーが出てきた。
それからお祭り騒ぎの様に成った。卒業式で胴上げって有りなのか？

「何で私も巻き込まれるの……」

「ああ、一緒に胴上げされたな……」

なんか総帥と秘書はセットで、とか何か言ってた。
その後俺は担がれた儘退場した。お陰で卒業した時の余韻みたいなモンが全く無い。

「それにしても、私服は目立つわね？」

「……言うな、思い出させるな」

俺は今私服。制服は剥ぎ取られた。今頃体育館でオークションをやってる頃だろう。
だが、無料（ただ）ではやらん。取り分は取る。八割は取る。

「一夏君や鈴ちゃんも行ったのよね？」

「らしいな、知ったこっちゃ無いけど」

オークションに一夏と鈴が参加しているらしい。
弾も保護者的な意味で付いて行った。後で愚痴でも聞いてやらねば。

「ふふ、第二（これ）ボタンは私が貰ったけどね」

剥ぎ取られた制服から第二ボタンだけが返って来た。
その時、夢織が欲しいと言ったのだ。特に必要無いのであげただけだ。

「……嬉しいか？ボタンなんて貰って」

「気持ちの問題よ。只のボタンでも貰えて嬉しい時があるのよ？」
「そういう物か？」
「ええ、そういう物よ」
第二ボタンの意味は形見、だったか？
「あ、お返ししないとね」
「しなくて良いぞ？ボタン一つでする必要ないだろ」
「しないと私の気が済まないのよ」
「そうなのか？」
「ええ、そうなのよ」
そう言い、制服のリボンを解いた。
「はい、お返し」
「リボンか」
「ええ、ボタンのお返しにピッタリでしょ？」
「……まぁ、そうだな」
妥当と言えば妥当だな。

「大切にしてね？」
「ああ、わかった」
「私も大切にするからね」
「好きにしてくれ」
「ええ、好きにするわ」
これからロシアへ行き、決して楽ではない日々に成るだろう。
だから、支えに成る物は一つでも多い方がいい。
「で、何処か寄って行きたい所は有るか？」
「……デートのお誘い？」
「……そうだな」
「……え？本当に？」
夢織は目を丸くして驚いている。
今迄帰りに何処かに寄って帰る事は何度もしていた。
だから驚く理由は解らない。
「解釈は任せる。で、有るのか？」
「そうねぇ……」

顎に指を当て、考え始めた。

「……喫茶店、かな？神威君と初めてお茶した所の」

「あそこか、解った」

そして、

「はい」

手を差し出してきた。

「エスコート、宜しくね」

「了解だ、お嬢様」

俺はその手を取り、歩き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

夢織がロシアに発つ前日、俺と束姉さんはラボに居た。

「じゃあむっくん、月下貸して」

俺が持つＩＳ、月下の整備をする為に居る。

「ほほ～……ふむふむ、ゲージが振り切れてますなぁ」

「ゲージ？」

「うん、この子のむっくんに対する愛情ゲージ」

そんなモノが在ったのか？

「で、そのゲージは何の意味が？」

「相性を測る為だよ」

「相性を？」

それとゲージに何が関係しているんだ？

「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の事は知ってるよね？」

「ＩＳと最高状態の相性になったとき発生する固有の特殊能力だろ？

まあ…ＩＳ領域の大半を注げば相性が最高じゃなくても使えるけど」

千冬姉さんの暮桜がそうだ。ＩＳ領域を雪片の制御に全て使っていた。

ただ、裏技や邪道と言える方法が存在するが。

「そうそう、んでこの子の単一仕様能力がね……」
「月下の単一仕様能力……」
「解んないの」
「へぇ、解ら――――――――はあ！？」
設計者が解らない！？
「正確に言えば解らなく成った、だね」
「……何で？」
「この子むっくんの為に成長していってる」
ＩＳが成長……
「単一仕様能力も成長に因って変質したんだ」
単一仕様能力が変質……
「これは私も全く予想出来なかったよ」
「マスターコア、だからか？」
「オリジナル、だしね。普通のコアじゃ…先ず出来無いね」
「そうか……」

「だから、相性調べて発現出来るかな？と思ったんだけど……」
「何か問題があんの？」
覗き込む様に見上げてくる。
「むっくん、今心の底からこの子の力を求める事、出来る？」
それは――――
「……」
――――出来無い
「……この子の単一仕様能力はそれ位しないと発現しないんだよ」
「……」
「一応憶えて置いてね？」
「……わかった」
「愛され過ぎるのも問題だね？むっくん」
「……そうだね」
「愛が重いですな～にひひ」
作ったのアンタだろ。

「でも他のフレームと適合出来る様にはしとくね？」

「ん、頼んだ」

「ラジャ！ついでにバージョンアップもやっときます！グゥレェイトォ！！に！」

「……程々に」

間違い無くタカが外れるだろうが。

「あ、むっくん」

「何？」

「泥棒猫ちゃんがロシア行ったら頼みたい事あるんだけど、いい？」

「……くだらない事だったら却下」

「今回は大丈夫！むっくんも喜び幸せに成れるよ！！」

「……今回は？」

「そう！今回は！！」

詰まり、前回は喜ばない事を解っててやった……と？

月下の整備が終わったら性能を試す必要が有るな……

「！？何か今ゾクッと来たよ！？」

「……気のせいじゃない？」

精々、頑張って整備してくれ、この後の為に。な？

◇◆◇◆◇◆◇

一夜明け、　夢織と二人、空港迄の道を歩く。

「……」

「……」

だが、何時もの雰囲気は無い。

「何か、変な感じね……」

「そうだな……」

空港に着けば別れが待っている。

「ねえ……」

「……何だ？」

帰って来ても、今迄の様な付き合いは、

「……手を」

「……ああ」

出来なくなる。

「……ありがとう」

「……如何致しまして」

きっと、この先が、

「……」

「……」

俺たちの分岐点。

暫く、無言が続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

彼と二人、空港までの道を歩いている。

最初は、タクシーで行こう。と提案されたが、断った。
ただ、歩きたかった。彼と、二人で。

この先に在るのは、別れ。
別離、と迄はいかないが、一緒に歩く事は、粗無い。

正直に言えば、往きたくない。辿り着きたく無い。

彼と、離れたく、無い

でもそれは、出来ない。
そんな事をすれば、彼の隣に立つ資格が、きっと無くなる。

其れだけは、嫌

だから、往く。
そして、此の手の温もりを忘れない為に、手を繋ぐ。

別れ、異国で過ごす時間は、きっと永い。
今迄感じた事が無い程に、永いと思う。
彼から貰った物が、私の支え、私の宝物。きっと、砦
これが在れば、やって行ける。そう、思える。
だけど、心配な、嫌な、在って欲しく無い事が有る。
彼に、忘れられる事、それは、嫌。絶対に、嫌
時間は人を、想いを、風化させる。
会わない時間が永ければ、想いすら忘れる。それが、人。
そしてもう一つ、隣に人が、私以外の女(ひと)が居る事。
彼の隣に、別の女(ひと)が居たら、嫌
我が儘だと解っている。独占欲だと解っている。
でも、嫌なのだ。私を見ない彼を、見たく、無い。
醜い
そう思う。私はきっと、醜い。
でも、嫌
それでも、見て欲しい。
渡したく無い

彼の隣を。

空港(わかれ)が見えて来た。

彼は私を忘れない

そう『ねがい』を籠めて、強く握る。

握り返す手に、叶った様な安堵を感じる。

でも、未だ足りない。もっと欲しい。

空港(わかれ)が近くなった。

想い出した。

――――無理、無茶、理不尽な事じゃ無いならいいぞ

そう言っていた。

――――一つだけなら頼み事を聞くぞ？

確かに、そう言っていた。

「……着いたな」
「……ねえ、憶えてる？」
「……何をだ？」
「何時か約束した……頼み事よ」
「……ああ、憶えている」
「していい？」
「今か？」
「うん、今」
「……わかった、頼み事は何だ？」
頼むのは、無理、無茶、理不尽じゃ無い事。
「目を瞑ってじっとしていて」
「それが頼みか？」
「うん、簡単でしょ？」
「……これで良いか？」
「……うん」

立ち尽くす彼に、近づく。

『ねがい』を籠めて、私をそっと、近づけた。

◇◆◇◆◇◆◇

「ん……」

「――――!?」

な、今……

「えへへ……」

顔を赤くして笑う夢織。

「な……」

口を押さえて絶句する俺。

「じゃあ、往って来るわ！」

「……」

口が動かない。

「……私を、忘れないでね？」

「お、おぉ……」

何とか、動かせた。

「またね！！」

そう言い、駆けて行った。

忘れられる訳、無いだろ……

俺はその場で、口を押さえ、へたりこんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、神威兄お帰り」
「ああ、ただいま」
「遅かったね、如何したんだ？」
「……色々有ったんだよ」
そう、色々だ。
「ふ～ん……あ、束さんから伝言あったんだ」
「伝言？」
「ああ、潜れ！だって」
ラボへ行け、か。
「解った」
「それで解んの？」
「まあ、な」
「すげぇな……あ、風呂どうする？」
「一夏が先でいいぞ」
「俺、浸かるから長いよ？」

「良いって良いって」

「あ、それと冷蔵庫に簡単な物作って有るから」

なんか、主夫が板に付いてきてないか？

「おう、後で貰う」

「んじゃ風呂お先～」

「おーう」

……一夏の将来は主夫か？

「まぁ……とりあえず、潜るか」

自室へ向かい、鍵を閉める。

ラボへの入り口は客間と俺の部屋。

部屋の隅に置かれた物を退け、ラボへ繋がる扉を開ける。

降りた先に［絶対に押せ！絶対に押すんだぞ！！］と書かれた紙が有った。

その下に［Ｄａｎｇｅｒ！　Ｉｔ’ｓ　ｄａｎｇｅｒｏｕｓ！！］と書かれた赤いボタンが有った。

これを押せと？

だが、周りに他のメッセージらしきモノが無い。

「……南無三！」

押した後、爆発音がした。

「なんだぁ！？」

周りを見渡していると、

「あだっ！？」

金盟が振ってきた。

「どうやら、余程死にたいらしいな……フフ、フフフフフ」

向こうにあるモニターが点いた。

遺言と成るモノを見る為、モニターの前に立った。

内容は――――

――――だった。

ちょっくら旅に出ます！探さないでね？

「フフフ……コロス！！」

だが――――

こっから真面目！3・2・1……ホイ！！

――――の後の内容を見ると驚愕に変わった。

本気でアレ作る気か！？

開いた口が塞がらない。

そして最後に――――

最終指令

今から出す携帯で登録してある番号に定期的に連絡せよ！

答えは聞いてない！以上！貴殿に幸あれ！！

――――との後に携帯と日程表が出てきた。

やたらファンシーな兎耳が付いていたので、

「ふん！！」

つい、引き千切った。そして捨てた。

此処は電波が届かないので出る事にした。

討ち捨てられた兎耳を残して。

◇◆◇◆◇◆◇

そろそろ提示された時間。

携帯に入れられた番号に掛ける。

数コールの後、繋がった。

「漆月　神威と申しますが＜え！？＞……！？」

この『声』は――――

＜兄さん！？＞

――――箒！

「箒か？」

＜うん！＞

ずっと、気になっていた存在（ほうき）。

「元気、か？」

＜うん！元気だよ！！＞

「そうか……」

＜兄さんは？＞

「元気だよ……」

＜良かった、無茶してるって聞いてたから……＞

「……大丈夫だよ、心配するな」

＜本当？＞

「ああ、本当だよ」

＜でも兄さん……無茶したよね？＞

「……したか？」

＜したよ！＞

「……どんな？」

＜私達が一緒に居られるのは兄さんが無茶したからだ！って姉さんから聞いてるよ！？＞

「……大した事じゃないよ」

＜嘘だよ！大変な事なんだって解るよ！＞

「……俺の所為、だからな」

＜兄さんは悪くないよ！＞

「……」

＜兄さんは悪くない＞

「……そうか」

＜うん、そうだよ＞

箒は本当に、

「箒」

＜なに？＞

強い。

「ありがとう」

＜うん！＞

そう想う。

＜あ、兄さん。あのね……＞

それから、時間の許す限り、箒の話を聞いていた。

窓に映る、月を見ながら。だが一瞬――――

＜……約束だよ？忘れないでね？＞

――――忘れないでね？

「……」

＜兄さん、聞いてる？＞

「……ああ、聞いてるよ」

――――夢織の『声』が被った、気がした。

俺は、無意識に、唇をなぞっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

周りに居た者が、居なくなり、静寂が訪れる。
只一人、己が持つモノ、その力を確かめる。
だが、その力の往く先は、今は未だ、無い。

呪は月を擁いて　第十七話

『強い力……か』

第十六話　『何時か約束した……頼み事よ』（後書き）

束さんは精神コマンド自爆持ち！！

さらば夢織……また会う日まで！

そして、

箒　再　臨　！

でした。ちゃんと育ってますよ？胸とか、胸とか！胸とか！！

第十七話　『強い力……か』（前書き）

『ＩＳの世界へ』から『呪（じゅ）は月を擁（いだ）いて』に。

宣言どうりタイトル変えました。

第十七話　『強い力……か』

「足取りは、掴めぬ儘か？」

「はい、未だに……」

「そうか……」

目の前には漆月　荒刃。

会談の内容は、

「亡き国……」

織斑　一夏の誘拐を依頼した者。

「矢張り、組織……じゃな」

「はい、それも裏の……」

明らかに、やり手だ。

「規模は……」

「間違い無く大きい……でしょう」

接触手段が、上手い。

「ふむ……」

「何か有りましたら、又」

「そうじゃな……では」

「はい」

漆月　荒刃が去った後、一人思考の海に沈む。
癖と成った。扇子を口元に置きながら。

亡き国……

既に存在しない国、と云った意味だろうか。
裏を悟った気で居る輩(やから)を、操ってみせた。
金に汚い同属と見せ、同類と思わせ、未来(さき)を想わせた。
だが、その詳細は不明。

所在地も……不明

拠点も特定出来ない。
此の国に在る成らば、尾程度は掴める。
だが、此の国での動向が掴めない。

目を瞑り、深くに沈む。

此の国にも、拠点が在る

此れは恐らく、確実。
だが、掴めない。
根が、古い……
此処数年で起きた組織では、無い。
此の可能性は、高い。
では、何時から？
遡(さかのぼ)るが、見付からない。
成らば先代か、其れとも、綻(ほころ)びが生(しょう)じた時。
戦時中……
第二次世界大戦、其の付近が思い当たる。
此の時、日本は蹂躙された。更識も、その波に中(あ)てられた。
其の時成らば……
可能性は、在る。立ち直りに染み込んだ。
そして、共に合わせて、育ち行った。古株の一つ。
今は不可能……ね
今、特定する事は、難しい。
武器の運搬すら許される、今は。
目を開き、扇子を閉じた。

ＩＳ……

Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓと呼ばれる兵器（もの）。
この存在が、邪魔をする。

本当に、やられたわね……

姿を消した篠ノ之　束。その行方は不明。
近い人、神威にすら判らない。

釘も、確り刺して行った……

身内に手を出せば、日本国“のみ”ＩＳを停止させる。
そう、伝えられた。手が出せなく成った。
出来る事は、篠ノ之　束の手配だけだ。それ以上の事は出来ない。

時期も、未だ……

神威を取り込める時期、其れまで約二年半。

でも、貸しが有ったわね……

神威に貸しが有る。此れは使える。

如何、返して貰おうかしら？

ＩＳ関係、が良いだろう。
仕掛けが有るかもしれないが、手を伸ばしておくべきだ。

娘はロシアに発った

楯無を名乗らせてはいるが、継がせた訳では無い。
戻って来た後、判断する積もりだ。

そして、もう一人の娘も……

ＩＳに興味が有る様に思える。

さて、如何しましょうか……

又、思考の海に、沈んで行った。

◇◆◇◆◇◆◇

チャイムの音が鳴り響く。

「ん～……」

背伸びをして身体を解(ほぐ)す。

「……背伸びする程疲れたのか？」

「まぁな」
数希が話し掛けて来た。
「高(たか)が授業で？」
コイツ、俺の苦労を知らんのか？
「数希」
「何だ？」
「俺の腕持ってみろ」
「？良いけど、何でだ？」
「持てば解る」
数希は差し出した腕を掴んだ。
「持ったぞ」
「良し、力抜くぞ」
「え？……重！？」
驚いていらっしゃる。
「解ったか？」

「あ、ああ……お前こんなモン着けてたのか？」
「おう」
「何で？」
「……聞くな」
地獄を思い出すだろ……
「……何と無く分かった」
「……そうか」
「聞いて悪かった」
「いいさ」
だがその生暖かい視線は止めろ。
「……帰ろうか」
「……そうだな」
俺達が通う藍越学園から出た辺りで、
「どっか寄ってこう」
寄り道を提案した。

「そうするか」
「……今日は奢るよ」
「……有り難く、奢られよう」
歩きながら、くだらない話をする。
「あ、そーいや知ってるか？」
「何がだ？」
「光道音がＩＳ学園に通ってるって」
「あのお祭り会長が？」
「ああ」
「ほ～詰まり」
「詰まり？」
「俺は崩れない平穏を手に入れた！そう言う事だな？」
「まぁ、そうだな……たぶん」
「そこは同意しとけよ」
「いや、何てーか……」

「何だよ」
「嵐の前の静けさ？」
「……冗談でも止めろ、マジで」
それがホントに成ったら如何する。
「だって光道音だぞ？」
「……」
「何か有りそうな感じがするんだよなぁ……」
「……何かって何だ？」
「……神威を拉致する、とか？」
「……ＩＳ学園にか？」
「ああ」
「……」
「……」
「……」
何故か、ＩＳで連れ去られる俺が容易に想像出来た。

「……なんか、想像出来ちまったんだけど」

「……俺も」

「……それも、かなりリアルに」

「……俺も」

その後、教壇に立たせられる俺も簡単に想像出来た。

「……その後の事も想像出来たんだけど」

「……俺も」

そして、バカな事言う俺も当たり前の様に想像出来た。

「……最後に神威が何か言って生徒全員が平伏すのが想像できたんだけど」

「……俺も想像出来た」

「……」

「……」

「……悪い、止めようか」

「……是非、止めよう」

「……まぁ、無いよな」
「……あぁ、無いな」
「……ただの想像だよな」
「……ただの想像の筈だ」
「……」
「……」
そんな話をしながら帰って行った。
「……今日、奢るよ」
「……ああ、奢られよう」
得体の知れない不安を抱えながら。
◇◆◇◆◇◆◇

帰宅後、直ぐにラボへと潜った。

今日は俺一人、一夏は弾の家に泊まりに行った。
弾と数馬の三人で夜通しで遊ぶらしい。

都合が良い、だろう。
一夏を気にせず、作業に没頭出来る。

束姉さんが去ってから三ヶ月。ＩＳの整備が出来る様に成っていた。
束姉さんが残してくれた指南書のようなデータのお陰だ。

作りかけの、銃口が二つ付いた大型のライフルを手に取った。

今作っている物は過去に……いや、前世に作りたかった物の一つ。
作りたかった物は、今でも頭に残っている。焼き付いた様に、ハッキリと。

欠けているパーツを組み合わせていく。
データを見ながら、憶えながら、作り合わせていく。

不思議な感じがする。
憶えられるのが、作れるのが、当たり前の様な感じがする。
ＩＳの知識もそうだった。憶えられるのが当然、そんな感じがした。
操る技術も同じだった。雑な部分も有るが、スムーズに操作出来る様に成った。

ライフルが出来上がり、各部の微調整を始める。

此の事は、俺自身が思い掛けた『呪い(ねがい)』の様な気がする。
憶えていないが、そんな気がする。

死ぬ寸前で何考えてんだか……

自分の事だが、莫迦だと思う。
もっと他に考える事、思う事が有るだろう。
そんな事を思いつつも、手が作業を止めない。

微調整が終わり、動作のテストに移る。

右腕を展開し、ライフルを持つ。

先ず、上の銃口……

引き鉄(がね)を引く。

繋いで有る計器に映るデータは正常。

次は下……

こちらも正常。

次は同時……

これも正常。

次は、マシンガンモード……

上、下、同時、どれも正常。

「……ふぅ」

計器を外し、発砲出来る状態にして、ライフルを拡張領域に入れる。

そして、確認の為に、月下を展開する。

展開する部分は両足、腰周り、脇腹部、両腕、両肩、背中、額、のみ。

此れが、部分展開を応用した、俺の我が儘で生まれた、第一展開（ファースト・フェイス）。

飛行する際に必要な反重力力翼は、腰と肩の部分に当たる。

僅かに浮き、搭載された武装を一つずつ展開し、確認して行く。

先ず、足……

三日月　Ｃｒｅｓｃｅｎｔ　Ｍｏｏｎ

足の裏から踵を通り、足首の部分まで刃が展開した。

弧を描（えが）いた様な形状。ビーム刃での展開も可能。

次は、腰……

童子切　Ｏｇｒｅ　Ｃｙｔ

腰の後ろに、大型の片刃ナイフが二本、展開した。

刃の裏は、獲物を削る様な牙が並んでいる。

柄には、人差し指を通す環が有る。

次は、背中……

背負ったバックパックに、ラックが二つ展開した。
ラックに刺さった、指を全て覆うガードが付いた柄を、取り抜く。

長光　ＬＯＮＧ　ＬＩＧＨＴ

柄が伸び、長い刃が展開した。
これも、ビーム刃での展開も可能。

次は、腕に……

割切（わりきり）　ＤＩＶＩＤＥＲ

身体を隠せる程に大きな盾を展開した。
両端には反重力力翼が有り、スラスターも付いている。

盾を開く……

盾が割れ、裂ける様に開いた。
十九の砲口が顔を出した。

そのまま、背に回す……

中央部の大きな砲口を、バックパックに取り付けた。
これで、元々高い機動力を、さらに上げる事が出来る。

そして、

「すぅ……はぁ……」

何度か深呼吸した後、

ぐ……う……

第二展開（セカンド・フェイス）を開始する。

露出していた人の身は無く成り、全身装甲（フル・スキン）の、前世（いつか）で夢見た、形に成った。

そして、俺と月下が一つに成る様な、混ざり合う様な、感じがする。これが、堪らなく…

「――――嫌だ」

――――不快だ

俺が俺じゃ無く成る様な、俺が別なモノに成る様な。

『あの時』の様に、奪われる感じがして、嫌だ。

何より、あの影（くそやろう）を思い出す。

だから、俺が月下を、心の底から求める事が、出来ない。

「はぁ……」

不快感を振り払う様に、展開を解除する。

そして、計器等の電源(ひ)を落し、ラボから出た。

討ち捨てられた儘の兎耳に、奴当たりをしてから。

◇◆◇◆◇◆◇

風呂から上がり、自室へ戻る。

後は寝るだけとなった時、ふと、気づいた。

家(ここ)で一人に成ったのは…初めて、か？

思い返せば、俺がこの家に居る時は、何時も誰かが居た。

千冬姉さん、一夏、箒、束姉さん、夢織、鈴、弾、数希、数馬

だが、今は誰も居ない。

静か、だな……

俺、一人。

「いや、お前が居たか」

首から下げてある月下を手に取り、目の前で揺らす。

そして想い出す、月下と、初めて遇った時を。

――――強い力……あげようか？

「強い力……か」

束姉さんは、言った通りに、月下（ちから）をくれた。

だが十分に、使える道が、無い。

月下を右手に展開し、今日完成させたライフルを展開した。

考え無しに作ったが、使う機会が、無い。

視界に、欠けた月が映った。

窓の外に浮かぶ月に、銃口を向ける。

そして、引き鉄を、

「……」

引かなかった。

「はぁ……トリガーハッピーにでも成りたいのか、俺は」

頭を振りながら展開を解除し、ベットに寝転ぶ。

だが、逃げた感じがして嫌だったので、指を銃の形にして、

「バーン……」

月に向けて、音で撃った。

◇◆◇◆◇◆◇

少しの時が過ぎ、静寂な時間が終わる。

旅立った者の帰郷、空いた時を埋める様に、温もりを確かめ合う。

だが少し、軋(きし)む音が、亀裂を生む音が、在った。

呪は月を擁いて　第十八話

『また、離されたな……』

第十七話　『強い力……か』（後書き）

更識かーちゃん登場。
まだ何かダメだ……如何したら戻るんだ？
あの会長をＩＳ学園に放り込みました。
種が実に成って花が咲くまで、暫しお待ちを。
ｎａｍｅｌｅｓｓ様に頂いた三日月と童子切はこんな感じになりました。
出元はアストレイＢＦ２ｎｄのアーマーシュナイダーです。
踵は月輪に変えて、ナイフはそのまんまの形。
鬼を切る。では無く、鬼の様に切る。といった感じです。
ナイフの裏のギザギザでガリガリと（笑）
村雨の出番は……結構お待ちを。

杉やん様に頂いた長光がＩＳの刀に成りました。
破邪の御太刀は……かなり後になると思います。

ディバイダーは意味からしてこんな感じかな？と。
元々の意味は『仕切る』や『分ける』といった意味なので、
相手との間を『割り仕切る』で『割切』にしました。
ディバイダー自体も割れますし（笑）
もし『こっちの方が良いんじゃない？』てのが有れば是非！

あと、ビームマシンガンなんですが……こいつの名称どうしよ？
最初は短発でも撃てるのでダブル・フェイスにしようと思ったのですが、
『シールドバスターライフルもダブルじゃね？』と思い、ボツに。

てな訳で、何か良い名称が有れば是非！てかホントお願いします！！

４０万ＰＶ突破記念&感謝（前書き）

皆様のお陰で４０万ＰＶ突破しました。ありがとう御座います。

今回は…まぁ……出来心？そんで突っ込み所が満載？

違う意味でイっちゃってるので注意を！

くれぐれも本気にしないように！！

４０万ＰＶ突破記念＆感謝

神威
＜はい、また突破記念＆感謝の時間です。今日は俺と＞

鈴
＜あたしでお送りします。大哥、今回は？＞

神威
＜え～今回は…あ～…何と言うか…ボツネタ以前のダメネタ集？＞

鈴
＜……なにそれ＞

神威
＜今皆散らばってるけど映すとネタバレになるからやらないらしい＞

鈴
＜……だからダメネタ？＞

神威
＜ああ、駄作者は一話に一回はイカレタ事考えて…その事が頭から抜けんらしい＞

鈴
＜……バカでしょ、それは＞

神威
＜ああ、バカだ。そしてダメネタの中でも酷いのと使えないのを出すらしい＞

鈴
＜……いいの？＞

神威
＜わからん。ま、モニター・リペア？に繋いで…【ズッコン！】…何だこの音は＞

鈴
＜…最近エロイ事考えまくってるからじゃない？＞

神威
＜……始めるか＞

鈴
＜うん、そうしよう、それがいいわ＞

飛ばされ、辿り着いた『場所』は、異世界。

「時空管理局執政官、フェイト・T・ハラオウンです。どの様にして此処へ？」

其処は異文化、魔がモノ云う世界。

「ようこそ、機動六課へ…と言っとこか？」

視得る全てが、異質な事ばかり。

「「「「よろしくお願いします」」」」

だが、この世界に取って異質なのは、

「何なんだ、オメーは？」

己、自分自身に他ならない。

「その戦い方……殺す積もりか？」

当然、馴染める訳も無く、

「…医師としては、賛成出来ないわ」

往く当ても無い。

「俺も付いて行くぞ…見張りとして」

其の中で向けられる、

「彼には…興味が有るな…面白そうだ」

悪意在る興味と、

「魔法は、魔導は、守る為に有るんだよ！？」

折れない意思の否定と、

「私は…力が欲しい…強い力が！！」

焦がれる程の切望。

機動魔戦士　マジカル神威

「待って！“また”私を措いて往くの！？」

ＣＯＭＩＮＧ…

「連れて往って！“兄さん”！！」

――――――――――ＯＵＴ！！

鈴
＜……え？何で？何でリリカル？＞

神威
＜ディバイダーの名称考えてたら…こうなった。らしい＞

鈴
＜……どうして？＞

神威
＜解らん。駄作者の頭はマジ解らん＞

鈴
＜……次は？＞

神威
＜あ～…これの続き…じゃないけど、これ関係？＞

鈴
＜どうゆう事？＞

神威
＜サテライトが中々撃てんからリリカル設定でブッ放す。らしい＞

鈴
＜どーやって？施設無いんでしょ？＞

神威
＜何か考えてんだろ？穴だらけだろうけど＞

鈴
＜……そう＞

「終わりにするぞ！月下！！」

＜Ｙｅｓ！Ｍｙ　ｂｒｏｔｈｅｒ！！＞

鎖された翼が開き、長い砲身を担ぐ。

＜Ｓａｔｅｌｌｉｔｅ　ｓｙｓｔｅｍ…＞

四枚の翼が、白く光りを放ち、

＜Ａｃｔｉｖｅ！＞

四散し、砲を芯に回り始め、

＜Ｓａｔｅｌｌｉｔｅ　Ｃｈａｒｇｅ…＞

眩い嵐を起こし、渦が生まれ、

＜Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！＞

辺り一面の魔素が、掻き集められた。

＜Ｂｅ　ｆｉｎｉｓｈｅｄ…９０…８０…＞

そして、見得る姿は、

＜…４０…３０…＞

輝く月を背にした、漆黒の、影。

＜…１０…＞

回転が止まり、

＜…０！Ｆｉｎｉｓｈ！＞

大きく、光りがＸ（クロス）され、

＜Ｍｏｏｎ　Ｓｈｉｎｅ　Ｂｌｕｓｔｅｒ！＞

担ぐ砲身から、

「ディスチャアアアアアアアァァァァァァァァァジ！！」

叫びが、解き放たれた。

神威
＜……この二つが酷いの。だそうだ＞

鈴
＜ムーン・シャイン・ブラスター…＞

神威
＜で、次が使えないの＞

鈴
＜…あたし、何かもうお腹いっぱいなんだけど＞

神威
＜…俺もだ。で、元ネタは銀河を駆けるコマンドチーム＞

鈴
＜リーダーがグラサン掛けて胸に☆を付けてる奴…だっけ？＞

神威
＜そう、格ゲーとかで出てる奴だ。炎出したり雷出したりする奴だ＞

鈴
＜…もしかして、その必殺技？＞

神威
＜ああ、キャプテン・ストームだ＞

鈴
＜…もしかして、あたしも居る？＞

神威
＜ああ、バッチリ居る＞

鈴
＜……あたし、見たくない＞

神威
＜……俺もだ＞

神威
「いくぞ！キャプテン・コールだ！！」
叫び、敵を空高く打ち上げた。
神威
「ラウラ！」
ラウラ
「外さん！！」
黒が翔け、
神威
「箒！」
箒
「任せて兄さん！！」
紅が切り抜け、
神威
「一夏！」
一夏
「おう！！」
白が裂き、

神威
「鈴！」

鈴
「ハイナ！！」

赤が通り、

神威
「夢織！」

夢織
「これで！！」

青が貫く。そして、

神威
「最後は俺だ！」

青白い光が、

神威
「キャプテン・コレダアアアァァァ！！」

敵を飲み込んだ。

神威
「Ｗｅ　ａｒｅ…」

最後、一つに集まり、

「「「「「「brother team!!」」」」」」

敵は背に落ち、爆炎した!!

神威
<……ちなみにタイトルは『I am a captain brother!』だとよ>

鈴
<ちょっと!何であたしだけ台詞が変なのよ!?>

神威
<俺に言われてもな…>

鈴
<う〜〜〜〜がああぁぁぁ!!【バッコン!】>↑モニター破壊音

神威

＜また変な音したし…＞

鈴

＜待ってろぉ…作者！！＞

神威

＜あ、行っちまった…ま、いいか。

え～読者の皆様、お付き合い頂きありがとう御座いました。

今回はこんなんですが次回からまた何時ものに戻ると思います。

それでは、また＞

――――――――プッチプリン！！――――――――

４０万ＰＶ突破記念＆感謝（後書き）

はい、ダメネタでした。

ちょっとスッキリしました！

他にも色々有るのですが…それはまたの機会に。では。

第十八話　『また、離されたな……』（前書き）

まだ一人。

第十八話　『また、離されたな……』

此処は漆月の鍛錬場。

相手は何時ぞやの、難癖つけて来た奴。

「オオ！」

「……！」

鍔競り合い、の状態に持ち込んで来た。

あれからこいつは、死ぬ物狂いで己を鍛えてきた。

俺にぶつけていた難癖も、視線だけに収まっていた。

「っ！！」

「……」

ただ、その視線は、酷く濁っているが。

「はあ！！」

「……！」

力任せに押し切ろうとしてきた。

俺はその流れに乗り、後ろへ跳ぶ。

「くっ……」

前へ、踏鞴(たたら)を踏(ふ)む様によろけるが、

「うおお！！」

其の儘、突いて来た。

「はっ！」

俺は手の甲で、点をずらしながら踏み込み、

「ぐ――――」

刀を逆手に持ち、柄頭で溝を打ち、潜り込むように一歩踏み込み、

「――――おう！？」

顎を拳で真上に打ち上げた。そして、逆手に持った刀を腰を使い、

「ふっ！！」

円を書き、跳ね飛ばした。

「ぐ！……くそっ！！」

相手はまだ、終わってない。

立ち上がり、此方を見る視(め)線は睨んだ儘、生きている。

「はぁ……はぁ……」

だが、息は荒い。終わりは、近い。

「何で……」

視線に、濁りが増した。

「何で、お前なんかに……」

刀を持つ力が、増すのが判る。

「何で、お前なんかに楯無お嬢様が……」

成る程、こいつの濁り、そこに含まれる情は――――

「なんで、俺じゃない！」

――――嫉妬、か……

「くだらない……」

思った事が、口から零れ落ちていた。

「何だと……」

「実に――――くだらない」

今度は、自分の意思で言ってやった。

「お前が、お前がそれをほざくか！？」

面白いくらいに、顔が怒りで赤く成った。それに対し俺は、

「ああ」

煽る様に肯定した。

「……どの面下げて……言っている……」

怒りに震える相手に、

「この面だ」

さらに煽った。

「お前に、お前如きに！俺の何が解る！？」

切れそうな相手に、

「解らん、解りたくも無い」

貶す様に煽った。思った事を其の儘に。

「お前が、お前が居なければ！」

もう、良いだろう。

「くだらないな、本当に」
此の表情(かお)は、見飽きた。
「……！」
それに、忘れていないか？
「第一、振り向く訳が無いだろう？」
「……す！」
今、俺達は、
「お前如きに、なあ？」
「殺す！！」
死合っているだろう？
「あああああぁぁぁぁ！！！！！」
刀を振り上げ、駆けて来る奴に対し、俺は刀を右肩に担ぎ、
「馬鹿が」
左腕を上げ、口を隠して罵った。

「死ね！！」

振り下ろそうとする手に向かい、跳び込み、

「ぐっ！？」

左肘で、指を潰した。そして、

「あ――――」

刀を振り上げ、全力で、

「お前が死ね」

嗤(わら)いながら、振り下ろした。

◇◆◇◆◇◆◇

その後、風呂に浸かりながら考えていた。

先ほど潰した奴と、その取巻きを。
今迄あいつ等から受ける難癖は、僻(ひが)みだと思っていた。
だが今日、違うと解った。
夢織に惚れていたのか……
周りの奴は解らないが、今日叩き潰した奴は間違い無く惚れている。
まあ、容姿は良いし……有り得る事か……
夢織の容姿は良い、これは認める。ただ少し、我が儘だ。
あの後から、だったよな……
共犯者に成った後から、段々と変わっていった様に思える。
いや、自分を出した、のか？
特に二人きりの時は、少し大人気ない。と言うか子供っぽい。
仕方ない事、なんだよな……
夢織は既に、楯無を名乗っている。因って本名を呼ばれる事が無くなった。
俺も二人きり以外の時は楯無と呼んでいる。そう呼ばなければならない。
親の、楯無頭首にも、中々呼んでもらえない。

辛いよな、きっと……

口には出さないが、そうだと思う。

自分の『名』を名乗れない、呼ばれない事は、きっと、辛い。

俺も未(いま)だに、神威と呼ばれる事が辛い時が在る。

過去(むかし)を見る目を向けられると、知らない想いを向けられると、辛い。

呼ばれたい、よな……

そう思う。夢織とは、もう呼んでもらえない。

親にも幼馴染にも、妹でさえ、夢織とは呼ばない。

だから、二人の時は、周りを気にしなくて良い時は、夢織(じぶん)を出すのだろう。

夢織は『名』を呼ばれると、本当に、本心から嬉しそうな、表情(かお)で笑う。

夢織は、夢織(じぶん)を曝(さら)け出せる『場所』を求めているんだろう。

その表情(かお)を見て、俺は少し――――

自分の『名』か……

――――ほんの少し、嫉妬した。

自分の『名』を呼んでもらえる表情(かお)に、夢織に、嫉妬した。

俺はもう、呼ばれる事は無いのに、本当の『名』もわからないのに、夢織はまだ、呼んでもらえる事に、『名』を名乗る事が出来る事に、

少しだけ、嫉妬した。

「はあ……」

頭を振りながら溜め息を吐いた。

もう、如何しようも無い事だというのに、まだそんな事を考えていた。

「出るか……」

風呂から上がり、出て行く。

だが、風呂に浸かっていた所為か、

「長湯しすぎたか……？」

足取りは、少しだけ、重かった。

◇◆◇◆◇◆◇

それから数日、今日は待ちに待った日。

今日、千冬姉さんがもう少しで帰国する。

俺は空港で待っていた。

今此処に居るのは俺だけ、一夏は居ない。
今日は平日の為、学園に行っている。
俺はサボった為、此処に居る。

到着予定時刻まで後少し、もうじきだ。

後少し、後少しだ……

備え付けの時計を見ているが、中々進まない。
一分、一秒がとても永く感じる。

落ち着かない。
待ちどうしくて、早く会いたくて。

未だか……

何時も送る日々は早いと感じるのに、この様な時に限って遅く感じる。

少しの間、その状態が続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

飛行機から降り、外へ繋がるゲートを潜る。

其処に、見知った顔が居た。

此の一年、会いたかった、会いたくて仕方が無かった、最愛の弟が居た。

「神威！」

堪らなく、呼びかけた。

「千冬姉さん！」

直ぐに私を見つけ、早足で歩み寄って来た。

私も同じように、早足で歩み寄る。

近づくにつれ離れた時間の流れが、実感できた。

一年前より、別れた時より、背が伸びていた。

身体つきもまた少し、逞しく成った気がする。

私を呼ぶ声色も少し、低く成っていた。
顔つきも、幼さが抜け、男の顔に成ってきた。
「神威！」
「千冬姉さん！」
其の儘、私達は抱き合った。

此れが……
一年の間、会いたかった、欠片（ひとつ）。
此れが……
一年の間、心配で堪らなかった、欠片（かたわれ）。
此れが……
一年の間、欲しかった、欠片（ぬくもり）。
此れが……此の腕の中が、帰って来れた、証明（あかし）！
長かった、此の一年は長かった。
今迄に感じた事の無い程に、永かった。

だが、もう終わった。今、終わった。そう感じた。

此の温もりをもっと感じていたかったが、それ以上に、見たかった。

「神威……顔を、見せてくれ」

傍で、近くで、顔が見たかった。

◇◆◇◆◇◆◇

少し身体を放し、見詰め合った。

「また、離されたな……」

もう、見下ろせる位に、背は離れていた。

「千冬姉さんが、小さくなったみたいだ……」

「馬鹿、お前が大きくなっただけだ……」

千冬姉さんが頬に手を当ててきた。

「顔つきも、変わってきた……」

此の手が……

「また少し、男の顔に成ったな……」

此の『声』が……

「本当に……大きく成った……」

此の人が、俺を救った、俺を神威(おれ)だと言ってくれた、存在(ひと)。

「千冬姉さん……」

俺はきっと、

「何だ？」

「会いたかった……」

求めていた。

「私もだ……」

神威(おれ)を肯定してくれた、此の『声』と『暖かさ』を。

「千冬姉さん」

だから、感謝も籠めて、

「何だ？」

迎えた。

「おかえり」

「ただいま、神威」

◇◆◇◆◇◆◇

俺達が帰宅した後、少しして一夏も帰って来た。

千冬姉さんが居た事に驚き、嬉しそうに色々と話していた。

そして、夕飯の時間が近づくと、一夏は豹変した。

夕飯の支度をし始める時から、鬼気迫る様な表情(かお)をしていた。
俺も手伝おうとしたのだが……

「今日は俺に任せてくれ！！」

と、台所に立つ事を許されず、追い出された。
千冬姉さんを豪勢に迎えたいという想いが解ったので立ち去ったのだが、
一度様子を見に行った時一夏は、食材相手に無双をしていた。

何と言うか、主夫まっしぐら！な感じがした。
あいつは、将来は主夫に成る積もりなのだろうか？

そうして出来た夕飯は、美味かった。
文句無く美味かった。だが素直に賞賛出来なかった。
何かこう……間違ってる、様な気がしたからだ。

夕飯の後の片付けも一夏がやった。妙に嬉しそうにやっていた。
やはり、何か間違っている、気がした。
あいつは本当に、将来は主夫を希望しているのだろうか？

「……まあ、そんな感じだったよ」

そんな夕飯の時の感想を、

＜一夏は主夫に成りたいのかなぁ……＞

箒に話していた。

「本人は否定するんだけどな……言動が一致してないんだ」

＜一夏は変な人に成っちゃったの？＞

「いや、まだ成ってない……と思う」

＜じゃあ、何時か成っちゃうの？＞

「……大丈夫、だろ。千冬姉さんが許さない……ハズ」

若干（じゃっかん）、主夫に加速しそうな未来（ビジョン）が見えた。のは気のせいだよな？

＜あはは、そうだね、千冬さんは怒るよね＞

「ああ、そうだ、きっとそうだ」

千冬姉さんが鉄拳制裁で何とかしてくれる…事を祈ろう。

＜あ、そうだ！兄さんに聞きたい事が有ったんだ＞

「ん？聞きたい事？」

＜うん、兄さん猫飼ってるの？＞

「猫？」

＜うん、猫＞

「いや、飼ってない、飼った事もないぞ」

＜あれ？泥棒猫って名前の猫が居るって聞いたけど……＞

「……誰から？」

＜姉さんから＞

「……他に何か言ってた？」

＜兄さんが食べられるって言ってた＞

「……他には？」

＜それくらい…かな？＞

「……そうか」

＜あ、もう時間だね＞

「もう、時間か」

＜うん。じゃあ兄さん、またね？＞

「ああ、またな」

＜うん！＞

通話を終え俺は、

駄兎……次ぎ会ったら……

逆襲の計画を立て始めた。

◇◆◇◆◇◆◇

駄兎除去計画を考えていると、

「神威兄、今いいか？」

ノックの音がした。

「ん？……ああ、いいぞ」

扉を開け、一夏が入ってきた。

「如何した？何か有ったのか？」

「うん……」

一夏は深刻そうな表情（かお）で、告げてきた。

「……最近、鈴が変なんだ」

◇◆◇◆◇◆◇

軋む音は、一つの家族が、壊れる兆し。生まれた亀裂は、直らぬ繋がり。

その間に立つ者は、嘆(なげ)きを上げる。

出来る事は、言葉を掛ける事。其れ以上の事など、出来はしない。

呪は月を擁いて　第十九話

『絶対に叶えるわ！！』

第十八話　『また、離されたな……』（後書き）

何を血迷ったのか男の風呂シーンに…ぐはっ！？

そして千冬帰還！離されたのは身長でした！！

亀裂は……

今回のダメネタ。

刀を振り上げ、全力で、

「ベタン！！」

重圧（ベタン）呪文を唱えながら、振り下ろした。

「ポップ！？【ベゴン！】」←めり込んだ音

第十九話　『絶対に叶えるわ！！』（前書き）

前回ぶった切った続き。

第十九話　『絶対に叶えるわ！！』

「……最近、鈴が変なんだ」

「鈴が？」

「うん、何か上の空って言うか……ボーっとしてる事が多いんだ」

一夏の座る椅子が、ギシ……と嫌な音を起てた。

「……他には？」

「偶に何か言いかけるんだけど……」

「……」

「直ぐに何でもない。って言わないんだ」

だが、間違い無く何かが遭った、か……

「……弾は何か聞いてるのか？」

「弾も聞いてないって」

詰まり、誰にも言えない事、か？

「……ふむ」
「神威兄は如何したら良いと思う？」
「まだ事情が解らんから……如何しようにも出来ん」
「……そうだけど」
「俺が今出来る事は、一夏から話を聞く事くらいだからな……」
「神威兄は、鈴が心配じゃないのかよ……」
「……阿呆」
「え？」
全く、こいつは……
「心配しているに決まってるだろ。だからお前の話を聞いてるんだ」
それくらい気づけ。
「……あ」
「確認の為、もう一度聞くぞ？鈴に何かが遭った。
そして一夏と弾はその内容を知らない。……間違い無いな？」
「ああ、間違い無い」

先程とは違う、真剣な表情(かお)で頷く。

「次だ、他に鈴の変化に気づいて……気に掛けた者は？」

「……数馬、それに蘭……ぐらいかな？」

……蘭？

「数馬と……その蘭、という奴は何か聞いているのか？」

「俺達と同じ、何も聞いてないって」

「そうか……」

他には……

「……鈴の両親は？」

俺は会った事が無いが、一夏はよく会っている筈だ。

「……もう少しで収まるって言ってた」

……収まる？

「……そう言っていたのか？」

「ああ、言ってた」

鈴の両親は事情を知っている、のか？

「……他には？」

「そのくらい、かな」

……家庭の事情、なのか？

「……一夏は鈴の店によく飯を食いに行っているよな？」

鈴の家は中華料理店、

「ああ」

「食いに行った時……客の数は前と変わらないか？」

家庭の事情ならば、店の運営も考えられる。

「ん……寧ろ増えてる感じだった」

だが、違う様だ。

「……他に気づいた事は有るか？」

「無い……かな」

「……そうか」

「あ」

「ん？何か有ったんか？」

「……この前食いに行った時、味付けが少し雑だったような……」

……味付けが雑？

「……前も有ったのか？」

「……何年も通ってるけど、初めてだった」

両親が関係しているのは間違い無い……のか？

「ふむ……如何するか」

「……何か解った？」

「いや、最近は鈴や弾に会ってないな……と思ってな」

……先ず、弾に聞いてみるか。

「……そっか、神威兄は久しぶりになるんだっけか？」

「ああ、会いたがっていた。とでも伝えておいてくれ」

「わかった」

「後は弾に、そろそろ吐き出し時だろ？と伝えておいてくれ」

弾とは偶に、個別で会っている。

「……吐き出し時？」

一夏と鈴の保護者みたいな時が有るからな。

「ああ、頼んだぞ」

それに、良く周りを見ている。だから弾の意見が、欲しい。

◇◆◇◆◇◆◇

週末の休み、俺は弾と会った。

「久しぶりっすね！神威の兄貴」

「ああ、久しぶりだな」

「何時も度々（たびたび）、ありがとうございます」

そう言って、礼をした。

「でも、珍しいっすね？」

「ん？何がだ？」

「俺の部屋で聞きたいなんて。初めてじゃないっすか」

「……そうだな」

弾の言うとおり、俺達は何時も外で話していた。
今回は、外で話せる事では無いので、弾の家に居る。

「何か聞きたい事が有るんですか？」

「ああ、まあな」

当然、鈴の事だ。

「何が聞きたいんですか？」

「……実は、す「お兄！」……ん？」

「ら、蘭！？」

蘭？

「貸しっぱなしの漫画、何時になったら返してくれんの！？」

「ちょっと待て蘭！今は来客中だ！！」

「そんな事言って……え？」

如何やら、此方に気づいた様だ。

「……ども、お邪魔してます」

「あ……はい、どうも」

少し、気まずい空気が流れた。

「ったく……ノックくらいしろよ」

「え、と……どちら様で？」

目を、瞬きしながら聞いてきた。

「前に話しただろ？漆月　神威、一夏の兄貴だよ」

「始めまして、漆月　神威だ」

「え？……ええ！？」

今度は、目を見開いて、驚いている。

コロコロ表情が変わっていく。見ていて面白いな。

「あ、あの有名な！？あの伝説の！？」

前言撤回、面白く無い。全く持って面白く無くなった。

「……蘭、自己紹介くらいしろよ」

「あ……うん、五反田（ごたんだ）　蘭（らん）です」

「歳は俺の一個下っす」
「……そうか、宜しく」
「は、はい！宜しくお願いします！！」
「取りあえず……蘭、何か飲み物頼めるか？」
「え、あ……な、何が宜しいですか？」
「……お茶で」
「……ついでに着替えて来い、はしたないぞ」
確かに、随分とラフな格好だ。
「え？……きゃあ！？」
自分の格好に気づくと、慌てて駆けて行った。
「すいません、色々と」
「いや、気にするな……何か大変そうだしな」
弾は家でも苦労してる、気がする。
「ホント、そう言ってくれるのは、神威の兄貴だけっす……」
弾は手で目を覆い、下を向いた。

「まあ、妹さんが来るまで、愚痴聞くぞ？」
「はい、ありがとうございます……うぅ」
俺はこの時、慈愛の表情（かお）をしていただろう。

◇◆◇◆◇◆◇

「ど、どうぞ……」
「ありがとう」
お茶を受け取り、一口含む。
「それで、聞きたい事って何すか？」
「それなんだが……」
言葉を濁しながら視線をずらす。
「……私、失礼します」

「いや、そうじゃない」
「え？」
「君は……鈴を知っているかな？」
「鈴さんですか？知ってますけど……」
「親しい仲？」
「え……親しいと言うか……」
「……成る程、そうゆう事っすか」
弾は聞きたい事が解った様だ。
「解ったか？」
「はい、一夏から聞いたんですね？」
「ああ」
「なら蘭は大丈夫っすよ、鈴の事は知ってる……つーか争う仲ですから」
「へぇ……そうなのか」
この娘がライバルか。
俺と弾の視線に、困惑した表情で質問した。

「お兄、どうゆう事？」

「鈴の事だ、蘭も気づいてるだろ？」

「……元気が無い事？」

「そう、神威の兄貴が聞きたいのは、他から見た印象とか……っすよね？」

「ああ、そうだ」

相変わらず弾は察しが良い。

「蘭ちゃん、と呼んで良いかな？」

「は、はい」

「蘭ちゃんから見た鈴の様子を、教えて欲しい」

同性、しかも一夏を巡って争う仲なら、一夏や弾が受けた印象以外の事も有る筈だ。

「……鈴さんの様子」

「ああ、何でも良いんだ。漠然と思った事で良い」

「え……と、その……」

視線を彼方此方に向けて、言いよどんでいる。とても言い難い事

なのか？

「蘭、もうバレてる。隠そうとしても無駄だ」

「え、ええ！？」

成る程、一夏の事か。確かに知られたく無いよな。

まあ、バラしたのは弾だが……黙っておこう。

「あ、あの！こ、この事は……」

「大丈夫、解ってる。一夏には言わないよ」

「そ、そうですか……ほっ」

「じゃあ、教えてくれるかな？」

「は、はい……私が思った事は……」

思った事を纏める為か、少し間が開いた。

「……迷ってる様に……思えました」

……迷う？

「何か……諦めようとする様な、そんな感じでした」

……諦める？

「蘭、もうちょっと詳しく言えねえか？」

「そう言われても……」

「……弾は、如何思った？」

「俺っすか、俺には……何か我慢してる様な感じに思えたっす」

……我慢？

「……詳しく言えるか？」

「ん～……空をボーっと見た後、一夏を見て……っすかね」

「……蘭ちゃんは？」

「私の時は……ボーっとした後、少し考える様にしてから、私を見ました」

「……成る程」

弾が一緒の時は、空を見上げた後、一夏を見て我慢。
蘭ちゃんが一緒の時は、考えてから蘭ちゃんを見て、迷い諦める。

「何か解ったんすか？」

「……いや、まだだ」

「そうですか……」

少し沈黙した後、弾が口を開いた。

「蘭、他に何か感じた事ねえのか？」
「無いわよ……」
「ほら、同じ女として何か……って女にはまだ早いか」
「如何言う意味よ！？」
そう言い弾の頬を抓る。
「変な事言うのはこの口？」
「いて！？蘭、放せ！！」
……はなす？
騒ぐ兄妹を尻目遣いにし、一つ思い当たった。
「俺はお暇（いとま）するぞ」
「いでで！助けてくれないんすか！？」
「弾、蘭ちゃん、またな！」
「か、神威の兄貴！？」
「はい！また！」

俺は、他の事に目もくれずに駆け出した。

◇◆◇◆◇◆◇

その後、俺は直ぐに鈴を呼び出した。

「大哥、話って何なの？」

呼ばれて来た鈴は、何時もと変わらない口調だが、少し背を丸めて小さく見える。

「最近、如何してるのかと思ってな」

「あたしは、何時もと変わんないわよ」

だが何時も様に、張りが有る喋り方では無い。

「……最近ボーっとする事が多い、と聞いたんだが？」

「！！」

身体をビクり、と振るわせた。

「何か、遭ったんだろ？」

「――――っ」

俺から、逃げる様に視線を逸らし、

「……何も、無いわよ」

自身の身体を抱き、言った。

「……そうか」

もう言う事は無い、とばかりに黙ってしまった。
泣く事を我慢する様に、下唇を噛みながら。

付き合いが長い俺達には、解ってしまう。
俺が鈴の心境を、おぼろげながら分かってしまう様に。
鈴は、俺が事情を察している事を、解っている。

その上で、これ以上聞くな、と言っているのだろう。

「これは、俺が思った事なんだが……」

だが今回は、踏み越えさせてもらう。

「此処から居なく成る……」

「っ！！」

痛みを我慢するかの様な表情。

「……当たり、か」

そして俺は、

「皆に言わないのは……」

抱(かか)えるモノを曝(さら)け出す為に、

「……離れたいから、か？」

酷い聞き方で、問い掛けた。

「そんな事無い……」

それに対し鈴は、俺を睨みつけ、

「離れたく無いわよ！！」

怒鳴り付けた。

「ずっと、ずっと一緒に居たいわよ！！」

抱え込んだモノ全てを、

「一夏と！大哥と！皆と！居たいわよ！！」

ぶち撒ける様に。

「でも無理なの！親が離婚するから、もう駄目なのよ！！」

そして、涙が流れ始め、

「あたしは、あたしは中国にいかなくちゃ……っ！」

嗚咽が出始め、

「此処から、っ！出て行く、っ……しかないっ、のよ！！
もう居れっ……居れ無っ、……皆と、っ！……居たいよ」

しがみ付いて来た。

「っ……大哥ぇっ、……行きたく、っ……無い、よぉ」

だが、俺には、

「此処に、っ……うっ……うぅ……」

あやす様に、頭を撫で、

「うあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

泣かし、叫ばせる事しか、出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「色々ありがと、大哥」

「いや、大した事……無いさ」

鈴に口を割らせた時から、暫くが過ぎた。

「ううん、いっぱいお世話になったんだし」

「そうか？」

「うん、此処に来た時からずっとだしね。だから、お礼くらい受け取ってよ」

「……わかったよ」

「じゃ、改めて……ありがと、大哥」

「如何致しまして、鈴」

「ふふ……なんか、照れるね」

「はは、そうだな」

少しの間、笑い合った。

「鈴、確りな？」

「うん、大丈夫よ」

「後、約束守れよな？」

「約束？」

「ああ、一夏と将来の約束したんだろ？」

「あ……」

鈴は目を見開き、

「な？」

「絶対に叶えるわ！！」

覇気に満ちた表情で頷いた。

「だから、ちゃんと帰って来いよ？此処に」

「――――うん！！」

「よし、良い返事だ」

俺は一つ頷き、鈴の頭を荒っぽく撫でた。

「ちょっと！？止めてよ、髪が乱れるじゃない！」

そう言いつつも、鈴は拒む事をしなかった。

そして俺は屈(かが)み、顔を近づけ、

「俺を大哥と呼ぶ、狙った意味通りに成るし、なぁ？」

からかった。

「な、何の事！？」

「あれぇ？違ったのかなぁ？」

「ち、ちぎゃう！？」

「くくく……」

「からかわないでよ！！」

「はは、悪い悪い」

「もう！」

鈴は、頬を膨らませた顔をした後――――

「……大哥は、一夏と違う意味で酷い男ね。先輩が言ってた通りに」

――――そんな事を言った。

「ちょっと待て、どうゆう意味だ？と言うか先輩って誰だ？」
脳裏に一人、思い浮かぶが――――
「楯無先輩、意味は内緒よ」
――――的中、夢織だった。
「……他に何を話してた？」
鈴は不敵な表情をし、
「それも内緒よ」
ニヤリ、としながら言った。だが、
「如何やら、千冬姉さん直伝の、教育指導が必要、かなぁ？」
指を盛大に鳴らしながら言う、俺の反撃に、
「え！？いや、その……あ！い、一夏達にも挨拶しなきゃ！！」
表情を一変し、逃げて行った。
「鈴、憶えてろよ、なぁ？」
「ひぃ～！！」
悲鳴を上げながら。

鈴は一夏達の所へ着き、直ぐに騒ぎ始めた。

結局、俺は鈴を引き止める事が出来なかった。鈴の両親と、俺は面識が無かった。
因って俺は、唯の部外者でしかない。話を聞いてくれる筈も無かった。
裏から手を回す事も考えたが、しなかった。動けば必ず、更識が関して来る。
それは俺達の今迄を、無駄にする可能性が有る。鈴も、裏に係わる事に成る。
俺達と更識の間で、苦しむ事は確実。だから、動けなかった。
鈴の苦しむ姿を見たくない。その我が儘で、動かなかった。

そして何より、鈴が親を嫌って無いからだ。動けば親子の繋がりは、断たれる。
鈴は同姓同名の別人に成り、その様に奮(ふる)わなければならない。
他所から繋がりを断たれる痛みは、知っている。積もりだ。

だから、可能な限り話相手に成り、気を紛らわす様にした。そして、発破を掛けた。
鈴はフットワークが驚く程に軽い。その内、国を飛び越えて来れる様に発破を掛けた。
この別れは一途の時、永い別れでは無い。そう思わせた。

「大哥ー！！」

鈴が呼び掛けてきた。もう、済んだ様だ。

俺は近づき、一つ提案した。

「写真、取ろうか」

その言葉に、皆も賛同し、取り始めた。

俺、一夏、弾、蘭ちゃんと一人ずつ、二人の写真を。

俺と一夏、一夏と弾、一夏と蘭ちゃん、俺と弾、俺と蘭ちゃん、五反田兄妹との、三人の写真を。

俺と五反田兄妹、一夏と五反田兄妹、俺と一夏と弾、俺と一夏と蘭ちゃんとの、四人の写真を。

最後に、皆で集まった写真をデジタルカメラに収めた。

そのデータを鈴に渡し、

「ちゃんと返せよ？」

と、言った。

鈴は頷き、

「皆！またね！！」

空港のゲートへと、駆けて行った。

振り向く事無く、真っ直ぐと。

◇◆◇◆◇◆◇

鈴が去った後、俺は一人でベンチに座って居た。

一夏達は帰ったが、俺は残っていた。

理由は、

「だ～れだ？」

目隠しする、こいつ。

「俺の待ち人」

夢織が帰って来る日、でもあるからだ。

「待った？」

「ああ、かなりな」

「そこは、今来た所だ。と言うべきよ？」

「仕方ないだろ、長い時間居たんだから」

「……そんなに、待ち遠しかったの？」
呆けた事を言う夢織を、
「いや、違う」
バッサリ切る。
「……少し、考えてくれても良いじゃない」
不満顔の夢織に、事情を説明する。
「今日は、鈴の帰国する日、だからな」
「え？鈴ちゃんが国に帰ったの！？」
「ああ、ちょっと前に、な」
「……そう」
悲しそうな表情をした夢織に、問い掛ける。
「何か、色々と話していたらしいな？」
「……ええ、そうよ。話していたわ」
「どんな事を話していたんだ？」
俺の質問に、含んだ笑みに変わった。

「……予想、出来ないかしら？」

予想出来る事は、

「……一夏、か？」

これだけだった。

「そうよ。……一夏君が鈍感。一夏君が振り向いてくれない。とか、かしら」

笑いながら、在った事を想い出す様に、言っている。

そんな夢織に俺は、

「俺は酷い男だ、とか？」

本当に聞きたい事を聞いた。

「ええ、そう……な筈無いわよ」

夢織は頷きかけて、白（しら）を切った。

だが、俺の答えに、

「鈴から聞いたぞ？」

「……鈴ちゃん、秘密にと言ったでしょ！」

怒り、

「……本当だったんだな？」

「……騙したの！？」

驚き、

「さあな……で、如何酷いんだ？」

「……そう云う所が酷いのよ」

悔しそうな表情に成った。

「さて、帰るか」

「……本当に酷い人」

「行くぞ」

促す俺に、

「……じゃあ、はい」

手を、差し出した。

「あいよ、お嬢様」

俺はその手を握った。

「何処かに、寄って行きましょ？」

「何処にだ？」

「任せるわ」

「ああ、わかった」

何時かと同じように、歩き出した。

此れから先、一緒に歩く事が少ないだろうけど。

「ちゃんと良い所を選んでね？期待してるから」

「あいよ、お嬢様」

今は、いいだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

整い往く舞台。揃いつつ在る役者。未だ見ぬ主賓。

その中、未だ気づかぬ者が、居る。未だ起たぬ者も、居

る。

成らば、気づかせるだけ。起たせるだけ。舞台の為に、無理にでも。

呪は月を擁いて　第二十話

『少し……旅に出てくる』

第十九話　『絶対に叶えるわ！！』（後書き）

鈴は笑って行きました！引き止めは無理でした！！
泣いてお別れは、何か鈴っぽくないな、と思ったので。
再会を約束して笑顔で、またね！

そんで、夢織の帰還。だがタイミング悪し。残念でした。
千冬バリの再会を期待した人、すんませんでした！！

そんでもって次回が三章の最後です。
もう我慢できなーい！！で、飛びます。
だって原作が目の前に……これ生殺しだよ、ホント。

第二十話　『少し……旅に出てくる』（前書き）

久々にシリアス無し！

第二十話　『少し……旅に出てくる』

鈴と別れてから、一年近くが過ぎた。

俺は今、ＴＶを見ている。

「くくく……くぁっはっはっは！！」

笑い転げる神威兄の隣で。

神威兄が爆笑している理由は――――

「藍越学園と、ＩＳ学園を間違えたって……ぶっ！！」

――――なのだ。

「……仕方ねえだろ、間違えたモンは」

「ねえよ！間違えねえよ！有り得ねえよ！！

何処の芸人だお前は！？……だぁっはっはっは！！」

でも、ここまで笑わなくても良いと思う。

「しかも其の儘……ぷっ！試験、受けた、って……っ！ゲホッ！」

そう、俺は其の儘、試験を受けてしまった。

「……仕方ねえだろ、受けちまったモンは」

「はぁ……はぁ……受けて、くく、どーする……くくく、ゲホッ！！」

笑い死にそうな神威兄から視線をＴＶに戻す。

＜……これが、今話題の織斑　一夏君の写真です＞

丁度、俺の顔写真が出てきた。

「ゲホッ！……お、男前じゃねえか……ぶはっ！！」

何処が男前だ。凄く緊張した顔だろ。チクショウめ。

＜彼はこれから、どうなるんだろうね？＞

＜政府としては、あそこに行かせるでしょう……ＩＳ学園に＞

＜初の男子生徒、に成りますね＞

「くく、頑張ってこい、一夏ぁっはっはっは！！」

「……まだ行くと決まった訳じゃ」

「いや、決まったぞ」

「千冬姉！？」

「ほら、制服だ」

そう言って投げてきた。ビール片手に。

「俺、まだ行くなんて「モルモットが好みか？」……う」

「あそこへ行けば三年間は安全だ。その間に身の振りを考えれば良い」

気落ちする俺に、

「まあ頑張れや、な？……くく」

神威兄が肩を叩いてきた。笑いながら。

「他人事だと思って……」

「くくく、他人事だろ？」

他人事だけどさ。チョットは心配してくれても良いと思う。

「神威兄は＜きゅ、急報です！＞……ん？」

何かＴＶの向こうでバタバタし出した。

＜今入った映像をご覧下さい！＞

映し出された映像には、

「神威兄ぃ！？」

「はっはっ……はあ！？」

「……む！？」

神威兄の姿が映っていた。

流れる映像の中で、神威兄はＩＳを身体に装着し始めた。

「え？ええ！？」

「まさか、これ……」

「あいつ、だな……」

そして、動作を確認する様な仕草をして、浮き始めた。

＜驚きましたね……もう一人居るとは、思いませんでした＞

＜彼の名前は？＞

＜ええと……漆月　神威君、と言うらしいです＞

＜これは……専用機ですか？＞

＜ええ、そうでしょう＞

＜個人で、所有しているのですか？＞

＜……恐らく、ですが＞

＜では、彼も？＞

＜ええ、ＩＳ学園に行く事に成るでしょう＞

＜では、この先彼らは……＞

そこでＴＶが消された。俯いた神威兄の手によって。

そして、よろける様に立ち上がり、顔を上げると――――

「こんな……合成で……死なス！」

――――羅刹が居た。

この顔は、一度見た事が、思い知った事が有る。

鈴が転入して来て少したった時の事だ。

家に遊びに来た鈴に、神威兄の事を自慢しいたんだ。

居間の襖（ふすま）に有る表彰状を見せた後、振り返ると、居たんだ。

そして、鈴が帰った後に、思い知ったんだ。恐怖と、絶望を……！

何で、精神的に痛い、辛い思いをしたのか、未だに解らない。

でも、この目は、間違い無い。この感情が抜け落ちた表情は、間違い無い。

神威兄の、羅刹モードだ！しかも本気の、悪鬼羅刹モードだ！！

「千冬姉さん……」

やっぱり！氷の様な声色だ！！

「……なんだ？」

「少し……旅に出てくる」

え？旅！？

「解った……行って来い」

え？許可が出た！？

「一夏……」

「は、はいぃ！？」

まさか……また天獄へ！？逝きたくない！逝きたくないぞ！！

「さっきは、笑って悪かったな……」

「いぃぃぃぃえ！！トンでもないです！笑って当然です！！」

お願いですから！その目で見ないで下さい！！

「そうか、じゃあ、此れからも宜しくな？」

「はい！此方こそ！！」

敬礼しちまったけど変じゃないよな！？

「じゃあ、イってくる」

「イってらっしゃいませ！！」

そう言って、羅刹は去った。

「はあぁぁぁぁ」

俺はその場で崩れ落ちた。

「全く、あいつは……」

ふと気になった事を、千冬姉に聞いてみる。

「……千冬姉」

「なんだ？」

「神威兄、学園の方はいいのか？」

「……今、学園所ではないだろう」

「そうなのか？」

「ああ、このニュースで神威の周りは荒れるだろ。学園は休んだ方が良い」

「そっか……」

神威兄も一緒か。

「はぁ、入学手続きをしないとな」

「神威兄の分か？」

「ああ、入試は終わってるから……推薦でごり推すか」
「……出来るのか？それ」
「まあ、なんとか成るさ」
千冬姉って、どんな職業についてるんだ？
「なあ、千冬姉……」
でも、それ以上に、
「なんだ？」
「神威兄、何処行ったんだ？」
神威兄の行方が気になった。
「そうだな……」
千冬姉は少し考える仕草をして、
「狩り、にでも行ったんじゃないか？」
なんて事を言った。
「……狩り？」
「ああ、予想通りならな」

「狩りって……猪(いのしし)かなんか？」

それとも熊か？

「いや――――」

だが、俺の予想と違って千冬姉は、

「――――兎だ」

と、確信してる様に言った。

俺は、鍋の用意をしていた方が良い……のか？

◇◆◇◆◇◆◇

翌日、俺はまたＴＶを見ている。

内容は昨日の延長の様な物。他に話題が無いのだろうか？

映っている当事者としては、いい加減に変えて欲しい。

「よく飽きないな……」

昨日、姿を消した神威兄とは連絡が取れずにいる。
千冬姉は、神威兄の入学手続きに行っている。

「いい加減、話題変えろよ」

そんな事を言った時、

＜やあ！皆のアイドル、束さんだよ！！＞

ホントに変わった。

◇◆◇◆◇◆◇

＜昨日、送った映像は如何だったかな？＞

「……え？姉さん！？」

ＴＶに映る映像が、突然変わった。

「……束だね、本当に」

隣に座る父さんも同意している。

＜合成映像、だと思ったりしたのかな？＞

昨日のＴＶが、ＩＳを着けた兄さんが、鮮明に思い出される。

＜そんな事は無いのだよ諸君！私が保証しよう！！＞

ＩＳ学園に、私が行く『場所』に、行く事に成ると言ってた。

＜何故ならば！あ奴は＜此処に居たかぁ！？駄兎いいぃぃ！！＞

……ほえ？＞

「兄さん！？」

「本当に神威君だね、大きく成ったなぁ……」

今、想い浮かべた、兄さんの姿が映った。

◇◆◇◆◇◆◇

「大哥！？」

＜お早いお着きだね？むっくん！＞

＜……ああ、急いで来たからな＞

今度は大哥が出てきた。

＜そんなに、束さんに会いたかったのかい？＞

＜……ああ、会いたかった、会いたかったさ＞

嬉しそうな篠ノ之博士とは対極に、大哥は、ヤバイ。

＜いやぁ～……そこまで求められると、流石の束さんも照れちゃうよ？＞

＜……はは、そうか、そうかそうか……そうかぁあ？＞

「煽ってんの気づいてないの！？」

＜よし！その想いを受け止めよう！飛び込んで来なさい！
お義姉ちゃんの胸で受け止めてあげよう！！さあ！Ｃｏｍｅｏｎ！！＞

「……胸」

腕を開いた時に、揺れる胸が視界に入る。

「まさか、大哥……」

あの憎い双丘に、飛び込む積もり？と思っていると、

＜……ふふ、ふふふ、ふはははははははは！！＞

狂った様に笑い出して、

＜ならば、受け止めてみせろ……＞

「うそ！！ホントに持ってるの！？」

右腕にＩＳを展開した。

◇　◆　◇　◆　◇　◆　◇

＜アンタに貰った、この拳をなあ！？＞

ＩＳを展開した神威君を見て、以前言われた事が頭を過ぎる。

――――常識は壊す為に有るんだよ？

「本当だったのね……」

＜お！展開した！！＞

＜……覚悟は、イイかぁ？＞

＜その前にむっくん、あれ見て＞

篠ノ之博士は此方を指差し、

＜……あぁ？＞

神威君が此方を見た。

＜さて、あれは何でしょう？＞

＜……まさか＞

＜ピンポ～ン！そのまさか！だよ！！＞

頬が、ヒクついている。

＜これで全世界にデビューだぜ！！やったね？むっくん！＞

歯が、ガチガチとしている。

＜因みに、生・放・送！視聴率もバッチリＧｅｔだぜ！！＞

目付きが、酷く危ない。

＜今、伝説の幕開けだ！むっくんは……って何してんのさ！？＞

右の掌（てのひら）が画面を埋めて、

＜待って！まだ言いたい事が……＞

破壊音がしてから、ニュース番組に戻った。

＜……いやぁ、驚きましたね＞

「……それは此方の台詞よ」

口を隠す扇子に［驚愕！］と出していた。

◇　◆　◇　◆　◇　◆　◇

握り潰した塵を投げ捨てた。

「華々しい全国デビューが！？」
俺は振り返り、
「もっと派手な演出が有ったのに！！」
獲物を見据えた。
「ダメだよ、むっくん。そんな事じゃ……」
背に、L字の羽を、展開した。
「なら、今から、派手に、イく」
羽がXに開かれ、翼となった。
「え～と……」
全エネルギーを、翼に集める。
「盛大に、やって、ヤる」
右手を、キック握る。
「やっぱ、静かな方が良いかな～……なんて」
そして、俺は――――
「……ダメ？」

「――――ったりめえだあ！！！！！！」

――――爆発させた、全てを。

◇◆◇◆◇◆◇

竹刀を握る手が熱い。

兄さんと、会える！

竹刀を振る腕が熱い。

兄さんと、一緒に通える！

動かす身体が、熱い。

兄さんと、一緒に過ごせる！！

でも一番、胸が、熱い。

◇◆◇◆◇◆◇

失敗した……

あたしは頭を抱えていた。

こんな事に成るなら、試験受けとけば良かった……

でも頭を振り、切り替える。

今からでも、遅くない！

そして、駆け出した。

待ってて、一夏！大哥！

◇◆◇◆◇◆◇

「ふう、荒れそうね……」

会長席に、深く身を沈めた。

隠していたのね……

彼はＩＳを使える事を、隠していた。

除け者に、されていた？

今迄を想い返すと、そう思える。

……不愉快だわ

多少所では無い、多いに不愉快だ。

「ふふ、流石私の上に立っていた人」

共にＴＶを見ていた人が、居た事を思い出した。

「当時は会長、でしたね……副会長？」

通っていた中学の会長だった、

「そうね、当時の秘書さん？」

光道音　麗が居た事を。

◇◆◇◆◇◆◇

「ただいま」

「お、おかえり、神威兄」

深夜、神威兄が帰って来た。

「は、早かったね？」

「ああ、意外と近場だったからな」

サッパリした、と言うかウップンを晴らした様な、清々しい笑顔だった。

その笑顔に、混乱した俺は、

「狩りは終わった？」
なんて言っていた。
「おう」
ただ、答える神威兄の、
「終わらせて来た」
月を背にした、笑顔が、非常に怖かった。

◇◆◇◆◇◆◇

遂に、舞台の幕が上がる。本当の意味で、始まる物語。
主は、本来ならば、一人だけ。だが、此処には、二人。
成らば、始まる物語は、『何か』が違い、壊れているだ

ろう。

呪は月を擁いて　第二十一話

『波乱万丈のプロローグ、か？』

第二十話　『少し……旅に出てくる』（後書き）

こうして神威は旅に出た。全ては兎を狩る為に。
そんで兎は懲りない諦めない。
そんでもって一夏は、なんだかんだでブラコン。

うっしゃあああ！！三章終わり！！

今回は単行本を参考に書きました。

次は人物紹介？上げて、原作開始だす！！

人物紹介？＋γ（前書き）

二十話終了時のものです。

エロス解禁なので今回は古から伝わる『恋のＡＢＣ』を取り入れました。

人物紹介？＋γ

漆月（しつづき）　神威（かむい）　うちのオリ主

ＩＳ使える事を盛大にバラした。おバカさんです。
何だかんだで強キャラになってしまったけど……まあ、いいか。
この度、三度目の一年生をやることになった。
一応、各ヒロインに対してどう思っているのか上げとく。
千冬に対しては、恩人。だが一年離れた結果、大事な人と気づいた。
恋愛感情は微妙にある……かも？
箒は、大事な癒し。連絡取れるように成った後は、大事な大事な癒しに。
だが決して恋では無い……と思う。
夢織は、過去の自分を見てる様でほっとけない。そして一番気が合う奴。
空港でズキュゥゥゥン！され強制的に女と意識させられた。
気になって“は”いる様な存在。以上。
かなり如何でもいいが、兎をブッ飛ばしたイメージはシェルブリットバーストである。

呪いについて

やっと発揮、やっとブーストされた。
頭に響く声を正しく認識し同じ事を真に思うと、こ　う　か　は　ば　つ　ぐ　ん　だ　！
同時に想う気持ちも膨れ上がる為、暴走しがちに成る。てか暴走し

てる。
逆に声を拒むと、とっても辛い。もしくは、とっても痛い。
ちなみに重ね掛けも出来る。やり過ぎると弾け飛ぶが。ボーン！って。…一回やってみるか？

月下について

相変わらずオリ主にゾッコン。愛情ゲージを振り切った。
刃物持たせたのは『ビームだけじゃ白式に勝てなくね？』と思ったから。
第一展開は部分展開の様なものなので使用キャパはホンの少し。
オリ主の為に頑張って育っていった所為で、ワンオフが変わった。
ステキ！抱いて！！の状態なのだが求められず涙目。目なんてねーけど。
だが愛情ゲージは落ちない。まだ愛が足りないと勘違い。そしてまた育って行くのだろう。
そして勘違いも続くのだろう何処までも…。
基本ディバイダーでいくつもり。サテライトは暫しお待ちを。羽だけは登場したけど。
加速に使ったエネルギーはＩＳ自身のエネルギーです。紛らわしくてすんません。
世代は……ぶっちゃけ考えて無かったが第一世代にしておく。
ちなみに、よく束をブッ飛ばす右腕には異名が有るらしい。
なんでも『兎殺し』と書いて『たばねくらっしゃー』と呼ぶとか呼ばないとか。

織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）　ブラコン

ＩＳ選手引退している。出向から帰って来たあたりで。
ブラコン度に関しては、もはや語る事は無い。
一年離れた時、気持ちが微妙に変化した。無くては成らないもの、みたいな感じに。
ブラコンパワーが補充出来なかったからだろう。
オリ主との関係はＡ飛ばしてＢぐらい。
オリ主が憑依して直ぐに一緒にお風呂を経験した為Ｂとなる。
背中流しっこしたとか……書いてて殺意が……！！
ちなみにぬいぐるみは、兎、ライオン、熊、パンダ、ペンギン、コアラ、カンガルー親子、
イルカ、ハリネズミの九つ。なんでも学園寮の自室に一つ置いてあるとか……。

織斑（おりむら）　一夏（いちか）　シスコン＆ブラコン

本格的な出番がやってきた。やっとコイツの時代……にさせるか！
家事能力は非常に高い。特に台所では凄い。もはやヤバイ領域。
こうなったのはオリ主の所為である。
誘拐された後、誰かを守る事に憧れオリ主に相談し「家を守れ」と言われこうなった。
姉の為、兄の為、家で戦い続けた。食材と。そして家事能力もメキメキ上がった。
きっと家事能力も一夏に惚れたのであろう。……原作主人公ってすげぇな。

篠ノ之（しのの）　箒（ほうき）　シスコン＆ブラコン

長い（？）沈黙を破り再登場。花嫁修業の成果は如何なったのか。

それはもう直ぐわかる事。
ちゃんと大きく育っていった、胸が。うん、箒には大きい胸が良く似合う。
その胸は落しの型で大いに役に立つ。だって落す為に必要でしょ？
落しの型は多種多様にある。大きく分けると　起　承　転　結　と分かれる。
何が如何なのかは、ご想像にお任せします。
オリ主との関係だが、当然Aをスッ飛ばしてBを超えC未満。
泊まりに行った時、オリ主入浴時に突撃。そしてスキンシップ。だからC未満。
一番関係が進んでいたのであった。予想出来た人いる？

篠ノ之（しのの）　束（たばね）　シスコン

色々やらかしている兎さん。箒に夢織の事を濁して伝えて、危機感を煽ろうとしたが失敗。
やはり箒が絡むとダメ姉になる。でも姉妹仲は良好。……事件？なにそれ？おいしいの？
お兄ちゃん支援友好の会の支援者。金と作ったモノをあげて援助した。
お陰でお兄ちゃん支援友好の会の行動範囲が増大した。
オリ主をＩＳデビューさせた。お返しにナックルボンバーをくらった。
だがちゃんと胸に、心臓目差して飛び込んでくれた。拳が。良かったね！

篠ノ之（しのの）　柳韻（りゅういん）　親バカ

相変わらず落しの型を教え込んでいた。落しの型を　起　承　転　結　と分けた。
ちなみに最後の結は、結合。などと合体的な意味を考えた人は……ハズレだ。
ドッキングは転。関係の転機の意味だ。解ったかな？
なので教え込んだのは承まで。流石にそれ以上は教えなんかった。
一応、親の面目は保たれたと言えよう。

十六代目　更識（さらしき）　楯無（たてなし）　隠れ親バカ

やっと、やっとカリスマ感が戻ってきた。ツギハギだらけだけど。
隙間風が酷いけど。
貸しはシッカリと返してもらった。如何返してもらったかは、そのうちに。
暫くは裏方作業になるだろう。

更識（さらしき）　夢織（ゆめおり）　十七代目　楯無（たてなし）

性格が弱体化してしまった感じがする。
恋して泣いて、受け入れられて喜んで、別れる時に悲しんで。……
スゲー普通な感じがする。
でも実力は高い。ＩＳ学園でちゃんと会長に成った。
だがあんまりはっちゃけて無い。はっちゃけてるのは……解るよね？
どっちかと言うと……苦労人の方、かも？生徒会に限ってだが。
一夏達とは顔見知り。とゆーかオリ主といて会わない訳が無い。
ロシアに行った時、ボタンは当然持って行った。他にも貰った物……
…と言うか奪った物が有る。
そのお陰で枕を涙で濡らす事が無かった。まあ、そのうち出てくる

だろう。
オリ主がＩＳを使えるのを知らずにいた。ハブられたと憤怒。
そしてオリ主との関係だが、当然Ａ止まり。実は一番遅れているという罠。
体で迫ったりもしているが、過去の経験の所為で効果は薄い。
ので、自分に魅力が無いのかと思い落ち込む事もあった。……やっぱ普通じゃね？
だが安心してくれ。妹との関係にミゾは作っておいた。やる事はやったぜ！

鳳（ファン）　鈴音（リンイン）　チビッ娘

只今中国に帰国中。出番はちと後。
素晴らしいステータスは其の儘【ボゴ！】……褒め言葉だろーが。
猛勉強の末に専用機持ちの代表候補生になった。
世界をまたいで歩くには成っていた方が良い。と良く解らない超理論でなったらしい。
まあ、頭のフットワークも軽いのだろう。その所為でＩＳ入試を受けなかったのだが。
そんな訳で編入準備中。
ちなみに夢織とは愚痴り合う仲だった。片思い同士のガールズトークをしていた。
そしてオリ主には兄の様に甘え、一夏達とギャアギャア遊んでいた。
なんか一番良いポジションに居た、のか？
一夏との関係はＡ未満。バストにも負けて【ベゴン！】……やっちまったぃ。

漆月（しつづき）　荒刃（こうじん）　爺バカ

出番がメッキリ無くなった。
夢織を救おうぜプランが発動しなければ花々しい出番が有った。そして故人になっていた。
一夏誘拐の時にオリ主が脱走して爺様は援護。その後に責任取って暁に散る！ハズだった。
そして、その事を知ったオリ主は更識をデストロイ！の予定だった。
んな訳で持て余してる。どーしよ。何か考えなければ……。

御手洗（みたらい）　数希（かずき）　勇者Ｌｖ１

まだＬｖは上がらない。藍越学園に通う。居なくなったオリ主の身を案じる。以上。

光道音（こうどういん）　麗（れい）　根源

小中時に生徒会長をやっていた。現在ＩＳ学園の副会長。はっちゃけてる。
会長の足りないはっちゃけ分はコイツがカバー。色々やらかいてる。
お兄ちゃん支援友好の会の立ち上げに参加していた。
オリ主がＩＳ学園に来たので……きっとやる。
ちなみに美人です。容姿はご自由に想像して下さい。

五反田（ごたんだ）　弾（だん）　苦労人

一夏と鈴の良き友人。中学から知り合った。そして一夏の紹介でオリ主と知り合った。

なにかと苦労をしている。
一夏の起こす嵐に巻き込まれ、一夏と鈴に巻き込まれ、家で爺と妹にどやされて。
その所為で周りを良く見る癖がついた。てか嫌でもつくだろ、これじゃ。
愚痴を聞いてくれるオリ主を兄貴と慕う。だが汚染されてない貴重種。
嵐の元、一夏が居なくなったので危険は減った。
だが、刺激が有り過ぎた日々が無くなった為、少々物足りない。

五反田（ごたんだ）　蘭（らん）　落ちた娘

弾の妹。バッチリ一夏に落された。一目で落ちた。鈴がライバル。
一夏との関係は言うまでも無いがA未満。
一夏の前ではモジモジしている。んで一夏によそよそしいと思われている。
その時に感じた悲しみが、怒りとなって兄に向かう。
オリ主の事は噂で知っていた。お兄ちゃん支援友好の会により拡張された噂を。
一夏の兄と知って驚いて、会って本人と知って驚いて、想いを知られて驚いた。
だが黙ってくれる事に安堵して、鈴の事を真剣に考える姿に感動してた。
んで感染した。オリ主を噂通りの人と思い尊敬（勘違い）し始めた。
だが、お兄さんと呼びたいが呼べずにいる。恥ずかしいらしい。
本音では、お義兄さんと呼びたいらしい。何故かは……解るだろ？

人物紹介？＋γ（後書き）

では、次から、原作だあ！！

第二十一話　『波乱万丈のプロローグ、か？』（前書き）

キーン　コーン　カーン　コーン

予鈴が鳴りました。

第二十一話　『波乱万丈のプロローグ、か？』

「全員揃ってますねー？ＳＨＲを始めますよー」

今、俺は緊張している。

「一年一組の副担任、山田真耶です」

と言うか、キツイ。

「一年間、よろしくお願いしますね」

理由は、男が俺と神威兄しか居なく。

「え、えっと、最初は自己紹介からにしましょう」

他全員が、女だからだ。

「じゃあ、出席番号順にお願いします」

席も真ん中の最前列。神威兄は一番後ろなのに。

背中に視線を感じるが、振り返れない。

チラリと窓際に居るファースト幼馴染に目を向けるが、ニコニコと笑っているだけだ。

助けて貰えないらしい。と言うか俺を笑って楽しんでるのか？

昔はこんな時、箒は助けて……くれずに笑ってたな。

ならばと、神威兄に助けを求めたいが、振り向けない。振り向く勇気が無い。

「……くん」

如何すりゃいいんだよ……

「織斑　一夏くんっ！」

「は、はい！？」

気づかなかった。周りからクスクスと笑いが聞こえる。

今日は絶対厄日だ。そうに決まっている。

「あ、お、大声出しちゃってごめんね」

「あ、はい」

「お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメン、ゴメンね。

で、でも、次は織斑くんなんだよね。だ、だから、自己紹介してくれないかな？

ご、ゴメンね。や、やってくれないかな？い、嫌かな？ダメかな？」

なんか凄いペコペコと頭を下げている。凄く悪いことをした気になってくる。

「……します、しますから。頭を上げて下さい。謝らないで下さい」

「ほ、本当？」

「はい、本当です。本当ですから落ち着いて下さい。お願いします」

俺の言葉にガバッと頭を上げ、

「良かった。絶対ですよ。約束ですよ！」

手を取って詰め寄る山田先生。

お願いですから離れて下さい。凄い注目浴びてるので。

「じゃあ、お願いしますね」

「……はい」

山田先生は、そのまま手を引き壇上まで歩かせられた。

まるで雛鳥の様に。雛って意味じゃ合っているんだろうけど。

「じゃあ、どうぞ」

振り返ると、無数の視線。

箒は相変わらずニコニコと、神威兄は唯一、生暖かい視線だった。

神威兄の視線に泣きたく成ったが、俺は日本男児。泣くわけにはいかない。

「えー……織斑　一夏です。よろしくお願いします」

礼儀正しく頭を下げ、上げた。だがこの身に刺さる視線が「もっと喋れ」と言っている。

「以上です！」

その視線と空気に耐えられず、つい終わらせてしまった。
ずっこける女子が数名いたが、期待に応えられる訳がない。

「あ、あのー……」

「え？ダメで――――あだ！？」

何か頭に衝撃を受けた。よく知る人物から受ける衝撃と全く同じ。
まさか。と思い、恐る恐る振り向くと、

「げっ！？信長！？」

「誰が第六天魔王だ、馬鹿者。それに私は女だ、大馬鹿者」

千冬姉が居た。なんでここに居るんだ？

「もう会議は終わられたんだすか？」

「ああ、クラスへの挨拶を押し付けて、すまなかったな」

「いえ、副担任ですから。これくらいしないと……」

理解に苦しむ俺を放って、

「諸君、私が織斑　千冬だ」

自己紹介を始めた。その瞬間、

――――――――――――――――――――キャアアア

と言う千冬姉に俺は、

「神威兄は？」

と言っていた。

「……む」

千冬姉は最後列を見て、

「では漆月、前へ」

と神威兄を呼んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

千冬姉さんに呼ばれ、教壇に向かう途中、

一夏覚えてろ！

と一夏に殺意をぶつけて通った。

「っ！？」

ブルッと震える一夏を無視し、教壇に立った。

「では漆月、自己紹介を」

千冬姉さんを見て、

――――無難でいい？

――――ああ、いいぞ

アイコンタクトをした。

「漆月　神威です。歳は皆さんの二つ上に成ります。趣味、特技は体を動かす事です。

本来、この様な『場所』に居ない者ですがこれも何かの縁。ではないか思います。

色々迷惑を掛けるかと思いますが、宜しくお願いします」

言い終え、礼をし、頭を上げた時、

「……兄さん」

ポツリと聞こえた方を向く――――

――――――――――――――――キャアアア

ァァ！！！！

――――事が出来なかった。

「お兄ちゃん！生お兄ちゃんよ！！」

「千冬様と兄様が眼の前に！！」

「お父さん、お母さん、私を産んでくれてありがとう！！」

「伝説が二つも……」

「ここが……理想郷（アヴァロン）！！」

病魔に犯された奴等の所為で。

うんざりしながら、

――――何とかなんねえ？

――――わかった

再びアイコンタクトで救護要請した。

「黙れ、雛ども」

千冬姉さんの一声で静まった。

「戻って良いぞ、漆月」
「はい、織斑先生」
俺は無事に席へと戻れた。
席に戻る途中、
「っ！？」
一夏を目で脅し、
「何をしている織斑」
「いで！？」
復讐する事を忘れずに。

◇◆◇◆◇◆◇

「酷いじゃないか、神威兄」

「俺を立たせたお前が悪い」
一時間目の授業の後、直ぐに一夏は俺の元へ来た。
「何で俺だけ叩かれるんだよ……」
「迂闊な事言うからだろ」
その辺りを守れば叩かれる事は無い。
「それに、郷(ごう)に入(い)っては郷に従え。と言うだろ？」
だが一夏には難しい、のかもしれない。
こいつは考えるよりも行動、または口に出している事が有る。
「そうだけどさ……」
「ま、慣れるまでの辛抱だ」
「う～ん……」
一夏は納得が行かない様だが、逆らえば天誅を食らう。
これはそうゆうモノだ、と割り切った方が楽だと思うのだが。
「兄さん、一夏」
そんな事を考えている時、知っている声が掛けられた。
「箒か、久しぶりだな」

「うん、久しぶりだね兄さん。会いたかった」

「ああ、俺もだ」

電話越しで話は出来たが、姿を見る事は出来なかった。

「……箒、久しぶり。……助けてくれたらもっと嬉しかったぞ」

「うん、一夏も久しぶり。……如何やって助けたら良かったの？」

一夏とも交わし、聞かれた理不尽な事にも、首を傾げながら律儀に答えていた。

「……如何やってって、それは……その……」

まあ、分かる筈が無いよな。俺も分からんし。

「……？」

仕方ない、助け舟を出そう。

「……そう言えば箒、剣道の全国大会で優勝したんだったな？」

「え？うん、そうだよ。兄さん知ってたの？」

「ああ、新聞でな。一夏も知ってるぞ、な？」

一夏も話に乗れ。との意味を籠めて言う。

「……お、おう。去年のだろ？おめでとう」

「うん、ありがとう」

「俺からも、おめでとう。凄いな、柳韻さんも喜んだんじゃないのか？」

「えへへ、ありがとう。うん、父さんも喜んでたよ」

昔と変わらない笑顔で、幼さが抜けつつ有る笑顔で笑った。

「……大きく、成ったな」

本当に、大きく成ったと思う。

「……そうかなぁ？今は二人の方がずっと大きいよ？」

身長の事では無いのだが。まあ、いいか。

「俺より神威兄がでかくなったと思うぞ。１８２ｃｍだっけ？」

「ああ、その辺だったな、確か」

「そんなに有るんだ……前はもっと近かったのに」

箒は少し、拗ねる様な仕草をした。

「仕方ないだろう、伸びたモンは」

これは如何にも出来ない事だ。苦笑するしかない。

「ホント、羨ましいぞ。男としては」

「なら頑張って伸ばせ」

一夏も同じ様な顔をした。

こんな表情(かお)をした二人が、並んだ事が、とても懐かしい。

「でも神威兄、伸ばせって……あ、チャイム鳴った」

だが、もう次の授業の時間だ。

「じゃあ、また後でだな。早くしないと叩かれるぞ？」

「げ、やべぇ！」

一夏は慌てて戻り、

「うん、また後でね」

箒も戻って行った。そして俺も――――

「もしかして……あの娘」

「ご意見番……？」

「え？……あの幻の！？」

――――無視して席に戻った。

◇◆◇◆◇◆◇

「ＩＳの基本的な運用は――――」

さっきの授業もそうなんだが、サッパリ解らない。

教科書は専門用語の嵐。全くついて行けない。と言うか日本語と思えない。

隣は……

チラリと隣の女子を見るが、ちゃんと理解してノートを取っているのが解る。

「……な、なに？」

「いや、何でもない。ごめん、邪魔した」

視線を教科書に戻し、考える。

もしかして、解らないのは俺だけ？

神威兄も同類、と思いたいが思えない。時々、凄まじい理不尽な存在に成る。
今回も、成ってそうな気がする。

「織斑くん、何か解らない所がありますか？」

苦悶する俺に、山田先生が訊いてきた。

「解らない所があれば訊いてください。私は先生ですから」

自信たっぷり、といった感じで言ってきた。この人はちゃんと先生をやってる。
頼りになりそうだ。人は見かけによらない、とはこの事だな。

俺はその言葉に甘え、

「先生！」

「はい、何ですか！？」

「解る所が有りません！」

暴露した。

「……え？」

あれ？頼りになるオーラが無くなったぞ？

「え、えっと……他に今の段階で解らない人って……居ますか？」

あれ？俺だけ？誰も反応しないぞ？

「――――って神威兄も解んのか！？」

神威兄は黙った儘で、頷いた。

やっぱ理不尽だよ、神威兄は……

「……織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

教室の端に居る千冬姉が訊いてきた。

「……参考書？」

「ああ、直接渡しただろ」

……あの分厚い本か？

「あれは確か……ゴミと勘違いしてその儘処分しました！」

「ゴミを態々（わざわざ）手渡すか馬鹿者！」

おう！？拳骨がきました。芯まで響く良い拳です。

「はぁ……後で再発行してやる。一週間で憶えろ」

「一週間はちょっと……」

「やれ」

「……はい」

そして千冬姉は、俺を睨み、説いた。

「織斑、これからお前が学ぶＩＳは……他を超える程の兵器だ。
何も知らずに扱えば、必ず事故が、悲劇が起こる」

事故……悲劇……

「そうさせない為に、防ぐ為に、基礎知識と訓練が有る」

させない為……

「……お前は望んで此処に来た訳では無いのだろうが、戻る道は無い」

戻る道は無い……

「止めたければ、終える事だ……人の生をな」

千冬姉は真っ直ぐ俺を見据え、言った。

「解ったか？」

「はい」

千冬姉は一つ頷き、端に戻って行った。

「え、えっと織斑くん。解らない所は放課後に教えてあげますから、頑張って、ね？」

「はい、放課後は宜しくお願いします」

「二人で頑張りましょうね！……二人？二人きり……」

頬を赤くして、何かブツブツと言い始めた。

「……でも、先生と生徒。で、でも織斑先輩の弟さんなら……」

大丈夫か？この人は……

「山田先生！授業の続きを」

「は、はい」

飛び立とうとした山田先生を、千冬姉が呼び戻した。

そして、慌てて教壇に戻ろうとして――――

「きゃあ！？」

――――こけた。……白い下着を見せて。

「いたたた……」

何か山田先生と二人きりは不安に成ってきたので、

神威兄に教えて貰おう、そうしよう

教わるのは遠慮する事にした。

◇◆◇◆◇◆◇

「神威兄、ＩＳ教えてくれ」

「いや、まあ、構わないが……」

授業が終わった瞬間、一夏が飛んできた。

「山田先生に教わるんじゃないのか？」

先程の授業中、約束してた様に見えたんだが。

「……二人きりは遠慮したい、頼りないし……妄想するし……」

「……」

反論できない。確かに、授業中に妄想する教師は遠慮したい。

「……解っ「少し、よろしくて？」……ん？」

聞こえた方を向くと、私偉いです。といった感じの女が居た。
「……俺にか？それとも一夏か？」
「お二人に、ですわ」
一夏と顔を見合わせた。
「なんですの？その態度は。私に話しかけられたのですよ？」
また、一夏と顔を見合わせた。今度は眉を寄せて。
「まさか、私を知らないのですか？」
「……神威兄、知ってるか？」
「……いや、知らん。自己紹介は途中で終わったからな」
「なんですって？このセシリア・オルコットを知らない？
イギリスの代表候補にして、入試主席のこの私を？」
ああ、成る程。だから天狗に成ってるのか。
「……質問していいか？」
一夏が尋ねた。気になる事が有ったらしい。
「ええ、下々の要求の応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補って、何だ？」

――――！？……危ねぇ、周りの女子の様にこける所だった。

「あ、あ、あ……貴方、本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん」

そうだ、そうだった。一夏はＩＳの知識は全く無かった。

「……」

オルコットは人差し指でこめかみを揉んでいた。

「……信じられませんわ。常識ですわよ、常識。
其方の方も知ってらっしゃるのに……」

「……え？」

俺は眉間を揉んでいた。

「神威兄、知ってんのか？」

「……国、代表、候補。……これで解るだろ？」

「……国のＩＳ操縦者の代表……その候補か？」

「そうです！言わば、国に期待されたエリートなのですわ！」

オルコット、今は、今だけは応援しよう。俺の変わりに言ってやってくれ。

「ほ～……で、それが？」

「……馬鹿にしてますの？」

オルコット、こいつは本気だ。頑張れ。

「いや、エリートなのは解ったんだが……それが俺達と何の関係があるんだ？」

「……ふんっ！貴方には何を言っても無駄のようですわね」

いや、もう少し頑張れ。

「いや、何を言いたいのか解らないんだが？」

「ええ、貴方はそうでしょう。ですから、其方の貴方――――」

残念、タイムオーバーだ。

「くっ！……また後できますわ！」

「何が言いたかったんだ？」

「さあな……で、一夏」

一つ忠告しておこう。

「ん？」

「後ろ、見てみろ」

「へ？……げ！？」

「席に着け、織斑」

千冬姉さんが立っていた。

「は、はい――――いだあ！？」

まあ、当然だな。

◇◆◇◆◇◆◇

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備を説明する」

今迄と違い、千冬姉さんが教壇にたっている。

「ああ、その前にクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そういや、そんな事を聞いた事が有ったな。

「代表者は対抗戦だけでなく、生徒会の会議、委員会への出席などが有る」

その代表者を決める時、偶にもめる事が有ると言っていた。

「因みにクラス対抗戦は、各クラスの実力推移を測るものだ。
そして、一度決まれば一年間変更出来ない。その事を踏まえて決めろ」

今回は、もめるだろう。間違い無く。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

その原因が推薦された。

「はい。私は兄さ……漆月さんを推薦します」

って俺もか！？誰が……箒！？何してくれる！？

「私も賛成です！」

勘弁してくれ。生徒会に係わりたくないんだ。今迄の経験上、碌な事がなかったから。

「候補者は漆月と織斑か、他には居ないか？自推他推は問わない」

「あれ？もしかして俺か！？」

遅れて一夏が気がつき、立ち上がった。

「織斑、席に着け。……さて、他に居ないのか？」

「ちょっと待った！俺やるなんて……」

良し、行け！一夏！！

「他推されたんだ。自推ならとにかく、他推された者に拒否権は無い」

駄目か。……一夏に押し付けるか？

「いや、でも……」

「待ってください！納得がいきませんわ！！」

オルコット？……オルコットか。

「男が代表なんていい恥さらしです！私（わたくし）に「オルコット、自推か？」……え？」

オルコットを代表に……か。

「今、発言を許しているのは、自推他推の推薦だけだ」

煽てれば扱いやすい、だろう。

「ですが！！」

調子に乗れば叩けば良い、手段など幾らでも有るからな。
「もう一度訊く、自推か？」
駒として……使える、か？
「くっ……」
「はい」
「何だ、漆月」
「セシリア・オルコットを推薦します」
使える、だろう。
「……え？」
驚いている。当然だろう。貶した者に推されるのだから。
「……他には居ないか？」
後は、決め方だ。
「では、漆月、織斑、オルコット、この三名から決める」
恐らくは、
「実力を測る為、実践で決める」

ビンゴ。これで手の内が解る。
「対戦は……」
千冬姉さんは一瞬、俺と目を合わせ、
「織斑とオルコット、その勝者が漆月とだ、いいな？」
俺の意図を汲み取ってくれた。
「いや、だから俺はやるなんて……」
後は一夏の説得だが、
「でしたら、棄権なさればよろしいのでは？当日に、無様に」
「……やってやろうじゃねえか」
ナイスだオルコット。手間が省けた。
「そこまでにしておけ。後は当日にやれ。
勝負は一週間後の月曜日、放課後の第三アリーナで織斑とオルコット戦を。
翌日、その勝者が漆月と。でいいな？」
「「はい！」」
「各自、用意をしておくように。では、授業を始める」

後は……一夏のＩＳか。

◇◆◇◆◇◆◇

今は放課後、今日の授業は全て終わった。

「……で、このパッシブなんとかって？」

「パッシブ・イナーシャル・キャンセラー、ＩＳの基本システム。空を飛んだり止まったり、要はＩＳの動作系統に関係してくるモンだ」

周りで女子がキャイキャイ話している中、俺は神威兄にＩＳの事を教えて貰っている。

「……じゃあ、この拡張うんたらって？」

「拡張領域（バススロット）、武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域の事だ。

まあ、武器庫……と言うより倉庫の様なモンだな、出し入れが簡単な倉庫だ」

神威兄は内容を噛み砕いて俺に解る言葉で教えてくれる為、非常に解りやすい。
やはり、神威兄に教えて貰って正解だった。これが山田先生だと、反れるだろう。

「あ、織斑くんと漆月くん、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「山田先生、何か用事が有るんですか？」

その山田先生が来た。何かの書類を持っている。

「あのですね、寮の部屋が決まりました」

そう言い、俺と神威兄に部屋番号の書かれた紙と鍵を渡してきた。
ＩＳ学園は全寮制、生徒は例外無く寮での生活を義務付けられている。

「俺達の部屋、決まってないんじゃ……」

「準備に一週間は掛かる、と聞きましたが？」

「そうなんですけど。事情が事情ですから、部屋割りを一時的に変更したんです。
……お二人は、その事を政府から何か聞いてますか？」

最後の方は俺達にだけ聞こえるように、ずいっと顔を近づけてきた。

日本政府は俺達に、特に神威兄に保護と監視を付けたいようだ。男のＩＳ操縦者、そして神威兄は束さんと関係がある。日本政府は神威兄を押さえたいようだ。そしてあのニュースの後、家にマスコミや各国大使、果ては遺伝子工学研究所の人が来た。「是非とも生体を調べさせて欲しい」とか言っていたんだが……言った後の事は、同情した。

「……はい、聞いてますよ。嫌な程に」

神威兄が、切れたんだ。羅刹モードに成ったんだ。

最初は淡々と脅していたが、向こうの人が騒ぎ出した辺りで、ヤバくなった。鉄で出来た仕切りを、握り潰した。そして、千切ったんだ。その後に「お前ん所、更地に変えてくるわ。物理的に、今直ぐに」と、言っていた。千切った鉄棒で肩を叩きながら言っていた。脅した後、研究所の人は、直ぐに逃げて行った。ちなみに神威兄の眼は、本気だった。絶対に本気だった。

「え……えっと、政府特命もあって寮に入れるのを最優先したんです」

「解りました。でも家に一回帰らないと、荷物の準備があるし」

「……山田先生、明日からでもいいですか？」

「あ、荷物なら――――」

「私が手配した。必要最小限だがな」

千冬姉が来て、荷物を置いた。

「着替えと生活用品、それと携帯の充電器だ」
確かに、必要最小限だ。
「どうも、ありがとうございます」
「ありがとうございます。お手数掛けます」
「後は暇を見つけ、自分で取りに行ってくれ」
まあ、休みの日にでも取りに行けばいいか。
「あ、それと夕食は六時から七時の間です。寮に一年生専用の食堂が有ります。
そこで取ってください。あと各部屋にシャワーがあります。
大浴場もありますが、今はまだ、お二人は使えません」
「え？何でですか？」
俺、大浴場好きだから入りたいんだけど。
「「アホか、お前は。女子が使うだろう」」
「……あ」
そうだった。でも、ステレオで言わなくてもいいだろうに。
「お、織斑くんっ！女子と入りたいんですか！？だ、ダメですよ！」

「い、いや！入り「山田先生、一夏は気づかなかっただけです」
……そ、そうです」

「そ、そうですか。それならいいんです。では、私達は会議があるので行きますね。
ちゃんと真っ直ぐ帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

大して離れてないのに、どう道草くえと？まあ、やろうとすれば出来るけど。

千冬姉と山田先生がいなくなってから呟いた。

「なあ、神威兄」

「何だ？」

「山田先生って、ホントに年上？」

「……さあな」

まだ騒ぐ女子の声が、やけによく聞こえた、気がした。

◇◆◇◆◇◆◇

「神威兄は何号室？」
「俺は……１０２５号室だな。一夏は？」
用意された部屋に、一夏と向かっている。
「１０２６号室。直ぐ隣。良かった、離れてなくて」
「そうだな」
俺と一夏は別の部屋。
「でも何で同じ部屋じゃ無いんだろ」
「……さあな」
一夏の女難騒動が嫌で別室にして貰った。
千冬姉さんに頼み込んだ。土下座する勢いで頼み込んだ。
「お、此処だ」
「じゃあ一夏、また明日な」
「おう、また明日」
一夏が部屋に入るのを見送った後、俺も当てられた部屋に鍵を挿したが、開いていた。
多少疑問に思ったが、其の儘入っていった。部屋に入ると大きめの

ベットが二つあった。それもかなりの上物。

「まあ、当然か……」

各国の大事な雛鳥を預かるんだ。待遇は当然良くなるだろう。

「誰かいるの？」

突然、聞こえた声に、固まった。さらに、聞こえた方向は、シャワー室らしき所から。

「あ、同じ部屋になった人？」

そして、シャワー室から出てきたのは、

「そんな格好でごめんね。私は篠ノ之――――」

「――――箒！？」

「――――兄さん！？」

別れた時より、格段に成長した、バスタオルを一枚巻いただけの妹分だった。

「え、えっと、兄さん……」

箒は、顔を赤くし、もじもじとしながら、

「……私を、お召し上がりに成りますか？」

スッ飛んだ事を言ってきた。

「箒……」

「は、はい」

それに対し俺は、

「服を着なさい！」

つい叱ってしまった。

◇◆◇◆◇◆◇

「……で、私の所に来たのか」

「……そうだよ、千冬姉さん」

あれから、暫く出てくる、と箒に言って此処に来た。

「箒が同室なんて聞いてねぇ」
「まあ、サプライズだ」
ビールを飲みながら暴露した。やはり知ってて黙っていた。
「サプライズの範疇じゃねぇよ」
「ふふ、そう言うな。久々に会ったんだ、ゆっくり話しが出来るだろ？」
「まあ、そうだけどさ……」
「一ヶ月もすれば個室が用意出来る。其れまでの辛抱だ」
一ヶ月か。今直ぐの変更は諦めるしかないか。
「そういや、一夏に厳しくしてるのは……これからの為か？」
「ああ、そうだ。せめて、自分の身は守れる様に成ってもらう積もりだ」
「確かに、その方が良いな。これからを考えると」
「神威も、その積もりも有って今日の対戦を仕組んだんだろ？」
その考えも有った。一夏はまだＩＳについての事が、甘い。政府などの目は俺に向いているが、他の奴等は判らない。誘拐された事だってあるんだ。力を付けさせるのは、妥当だ。
ＩＳの事を知っていけば、他からの目に敏感に成ってくるだろう。

成らなければ、成る様にするだけだ。身体に直接染み込ませる事になるが。

「まあ、それだけじゃ無いけど」

「オルコットの事か？」

「ああ」

実際に襲撃などが有った時、オルコットを動かして向かわせる積もりだ。

代表候補でもあるんだ、良い動きをしてくれる筈だ。

動かなければ、貶せば良い。プライドが高そうな女だ。間違い無く動く。

「旨くやれよ」

「……良いのか？教師がそんな事言って」

「良いさ。代表候補生は何かと目を付けられる。引き抜きや狙われる事だって有る。

私達が守るのは、その身だけだ。それ以上の事は出来ん。

オルコットが騙され使われても、無事ならば何も言えん。本人が気づかんなら、な。

第一、そんな者では代表になど成れないだろ？だから、良いさ」

「成る程ね」

詰まり、騙される方が悪いと言う事か。

ボーダーラインは無事か如何か。だが、自分から向かい傷つけば自

身の問題だろう。

「ああ、それと更識だが……」

「……何か遭った、のか？」

更識頭首が動いたのか？

「いや、この学園の更識の事だ」

「なんだ、そっちの更識ね……で、何？」

夢織の事か。

「神威がＩＳを使える事を知らなかっただろ？」

「……そう言えば、結局教えなかったな」

束姉さんと教えても良いかな？とか話した事もあったが、すっかり忘れていた。

「大分、ご立腹だぞ？」

「……ですよね」

間違い無く怒っている。それは解る。

「それと、箒と同居の件でもな」

「……それは、俺の所為じゃ無いだろ？」

これに付いては被害者、の筈。

「そうか？一夏と別にしてくれと言ったのは、神威だと記憶してるが？」

「……だからって、箒と一緒にしてくれとは言ってない」

一人だと思ったんだよ。同室に成るなんて予想できるか。

「箒が嫌なのか？」

「そうは言ってないだろ。からかわないでくれ……」

「ふふふ……」

この表情（かお）は、からかっている。俺と一夏と箒をからかっていた表情（かお）だ。

「まあ、何にせよ、神威も騒動の原因に成るだろう」

「……女難騒動は一夏の専売特許、の筈なんだけどな」

「此れまでは、だ。此れからは、神威も起こす側に成るだろうな」

「勘弁してくれ……」

「まあ、例えて言うなら……」

「……何？」

「波乱万丈のプロローグ、か？」
「ホントに勘弁してくれ……」
せめて規模は、小さく在ってくれ。
「まあ、頑張れ」
「……戻って寝るわ」
なんか色々と疲れた。
「なんだ、もう戻るのか？一杯付き合わないか？」
「いや、生徒に飲ませるなよ」
「家では飲んでただろ？」
そう、偶に晩酌に付き合っていた。
「そうだけどさ、此処ではダメだろ」
「付き合いが悪いな」
「無茶言うな、箒にばれたら如何するんだ？」
「なんだ、もう亭主気取りか？」
「何言ってんだ……もう酔ってんのか？」

「酒を飲んでるんだ。酔うに決まってるだろ」

「いや、そうだけどさ」

何か今日、可笑しくねえか？

「……まあ、箒はもう嫁の積もりかもしれんぞ？」

「……」

否定できねえ。さっきの事も有るし。

「なあ、神威……」

「……何？」

「シャツに口紅を付けて戻ったら如何なると思う？」

「もう黙れ酔っ払い！！」

◇◆◇◆◇◆◇

「はぁ……」

千冬姉さんが、ああ成ったのは箒の無事な姿を見れたからだ。
千冬姉さんも箒の身を案じていた。だから、元気な姿を見れて嬉しかったんだろう。

でも当時の様に、からかわなくてもいいだろ……

当時、千冬姉さんは、俺と一夏と箒をからかっていた。
特に、篠ノ之家の道場でからかっていた。

「はぁ……疲れた」

部屋に着き、扉を開けて入った。

「あ、兄さん、お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

今日はもう寝よう、そうしよう

そう思い、ベットに近づくが、枕が二つあった。

「……箒、なんで枕が二つ有るんだ？」

「……？一緒に寝る為だよ」

凄く不思議な顔をした。

「……理由は？」

「許婚だからだよ」

ちょっと待て。何時成った。

「……誰が言ったんだ？」

「父さんと姉さん」

うぉい！あの駄親子か！？

「それで夜のお相手しなきゃダメだって言ってたけど……」

頭を抱える俺に、

「え……と、よろしくお願いします」

顔を赤くしながら言ってきた。

「……箒」

そして俺は、

「は、はい」

肩に手を置き、

「今直ぐ元に戻しなさい！」

また叱った。

どうやら、まだ安息には遠いらしい。

◇◆◇◆◇◆◇

一人は、己の無を知り、歩み始めた。先の見えぬ、高みへと。

もう一人は、路を示さず、先をも見せずに、背を押すだけ。

そして刻が過ぎ、対するは、蒼。白を纏い、今、羽ばたく。

呪は月を擁いて　第二十二話

『さあ、踊りなさい！私(わたくし)の奏でる円舞曲(ワルツ)で！！』

第二十一話　『波乱万丈のプロローグ、か？』（後書き）

超鈍足展開に成りそう。

セシリア、台詞を大幅にカット！
授業中にお喋りは出来ませんよｗ

酔っ払い千冬です。
箒が居た頃のようにからかい始めました。
そして箒は……如何してこうなったｏｒｚ

次からは、ちゃんと一話ずつ上げようかと思います。
なので更新速度が落ちます。すんません。

あと、如何でもいいようなアンケート。
千冬の寮室に置くぬいぐるみは、何がいい？
兎、ライオン、熊、パンダ、ペンギン、コアラ、カンガルー親子、
イルカ、ハリネズミの中から選んで下さい。

締め切りは二十三話の投稿までです

第二十二話　『さあ、踊りなさい！私の奏でる円舞曲で！！』（前書き）

やっとＩＳバトルが始まるよー

第二十二話　『さあ、踊りなさい！私の奏でる円舞曲で！！』

一夜明けて、今は朝食の時間。
俺の前の席に神威兄が座り、その隣に箒が座っている。
ただ、神威兄の様子が、なんか変だ。どこか疲れたような感じの顔だ。
箒は昨日以上に嬉しそうと言うか、幸せそうと言うか、そんな感じだ。

「兄さん。ここのご飯、美味しいね？」

「……ああ、美味いな」

昨日、別れてから何かあったんだろうか？
神威兄の表情から何かあったのは解るんだが、箒が嬉しそうなのは何でだ？
何かあったのなら相談に乗るくらいなら出来るのに。と言うかして欲しい。
偶には神威兄の役に立ちたい。何時も俺が助けられてるんだから。
恩返しくらいさせて欲しい。

「なあ、神威兄」

「……なんだ？」

「なんで疲れた顔してんだ？」

堪えられず訊いてみた。

「……お前ん所にも押し掛けて来た奴とかいなかったか？」

「……神威兄もか？」

「……おう」

理由が解った。昨日の俺と同じだった。

部屋に押し掛けて来た女子がたくさんいたんだろう。俺もそうだった。

次から次へと自己紹介されて、顔と名前が一致しない。と言うか憶えられなかった。

「神威兄、名前憶えられた？俺全然憶えられなかったんだけど」

「いや、それがな……」

「私が全員の名前を書いてあげたんだよ」

「へ～……」

成る程、疲れているのは全員の名前を憶えたからなのか。

やっぱ神威兄はえらいな……ん？

「なんで箒が居たんだ？」

「同じ部屋だからだよ」

「へ～……って、神威兄と同室なのか！？」

「あっ馬鹿！」

馬鹿って酷いな……ん？周りからの視線の質が変わった様な？

「はぁ……またかよ」

え、またって……どうゆう意味だ？

「神威兄、またって「何時まで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻すればグラウンド十周させるぞ！」――――やべぇ！」

早く済ませないと！

「ご馳走様」

神威兄！？何時の間に！？

「ご馳走様でした」

箸も！？

「じゃあ、先行くぞ」

「一夏も早く食べた方が良いよ？」

「ま、待ってくれ」

俺は急いで朝飯を平らげて、二人の後を追った。

食べて直ぐのグラウンド十周。絶対に吐くからやりたくない。

◇◆◇◆◇◆◇

で、早いもので、もう昼飯。飯のお供は朝と同じ、神威兄と箒。
俺達は揃って日替わり定食を頼んだ。

「神威兄、ＩＳの事なんだけどさ……」

「なんだ？」

味噌汁を飲みながら訊いた。
先程、俺に専用機が与えられる事が判明した。量産機と違い、専用機はスペックが凄いらしいが、如何凄いのかが解らない。そして、もう一つ解らない事が有るので訊いてみる。

「専用機って、どんなのが来ると思う？」

「……俺が知っていると思うか？」

「まあ、そうなんだけど……何と無く知ってそうな気がしたんだよなぁ」

神威兄は知っててても可笑しくないと思う。
「何でそう思うんだ？」
「神威兄だから」
割と本気でそう思う。
「……お前は俺を何だと思ってるんだ？」
「超人」
理不尽、とは言わない。痛い目に遭うし。
「んな訳あるか。箒からも言ってやってくれ」
「ん～……でも兄さんだから……」
「……箒もか」
俺の思った事は正しいみたいだ。
「はぁ……まあ、予想は出来るがな」
やっぱり、俺の思った事は正しいんだ。
「で、どんな「やっほ～！久しぶり！」……ん？」
神威兄の予想を訊こうとしたが、遮られた。

「……久しぶり、会いたくなかったぞ」

「んふふ～相変わらずね？お兄ちゃん総帥？」

その主は中学の時、会長だった光道音　麗さんだった。

「箒ちゃんは、すっごい久しぶりね？元気だった？」

「はい！お久しぶりです！麗さんもお元気でした？」

「もちろんよ。一夏君も、ね？」

そう言い、ウインクをしてきた。

「はい、お久しぶりです」

「で、何の用だ？」

神威兄は急に不機嫌になった。何でだろ？

「来週、一夏君が代表候補生とバトルじゃない？だ・か・ら！教えてあげようとしてるの」

「そうなんですか……」

光道音さんは三年生、経験豊富な筈。良い話だよな。

「優しく教えてあげるわよ？どう？」

「じゃあ、お願いし「不要だ」……え？」
頼もうとしたら、神威兄が断っていた。
「お前の助けは要らん」
一刀両断、といった感じで。
「……成る程、策が有るのね？」
策？
「博打、だ」
博打？
「勝率は低いんじゃない？」
まあ、低いよな。俺は素人同然だし。
「其れでも、必要な事だ」
……必要？
「ふぅん……」
光道音さんは神威兄をジィッと見てから、
「……流石、私の上に立っていた人ね」

嬉しそうに頷きながら、そう言った。
「今回は、余計なお世話なのね？」
「ああ、そうだ」
「ふふ、解ったわ」
あの遣り取りで何か解ったらしい。
「じゃあ、またね～」
「はい！」
「はい、また」
「もう来んな」
そう言って去って行った。
「神威兄、どうゆう事？」
意味が解らず尋ねるが、
「さてな」
応えて貰えなかった。
「取りあえず一夏、放課後空けておけ」

「いいけど……何で？」

「後で解る。箒も放課後空けておいてくれ」

「うん、いいよ」

この後、何を訊いても「後で解る」の一点張りだった。
俺の為に何かしてくれてるのは解るけど、少しは教えてくれても良いと思う。

そんな事を思っても、飲んだ味噌汁は美味かった。

◇◆◇◆◇◆◇

そして放課後、空けておけの意味が解った。

「メーン！！」

「っ！？」

意味は、箒と剣道の手合わせをさせる事だった。

「ねえ、一夏……」
「……何だ？」
箒が面具を外して近づいて――――
「……弱いよ」
「――――ぐはあ！？」
――――心を砕く一撃を放った。
「くっ……くく」
ギャラリーの一人である神威兄は、笑いたいのを堪えていた。
「どうしちゃったの？」
「いや、それは……」
「一夏は三年間、剣を握ってないからな」
ストレートな質問にどう答えようか迷っていると、神威兄がストレートに暴露した。
「そうなんだ……」
「だから箒、オルコットとの対戦まで一夏を叩きのめしてくれ」
って、待て。

「いいの？」

「ああ、遠慮無く、徹底的に」

ちょっと待て。

「うん、わかった」

箒も待て。

「良し、頼んだ」

待て、頼むな。

「と言う訳で一夏、頑張れ」

「如何言う訳だ！？」

意味が全く解らない。

「其の儘の意味だ」

「いや解んねえよ！？」

神威兄は、訴える俺に、

「だからお前はアホなのだ！！」

吼えた。理不尽に。

「とにかく、言われた通りにやれ」
さらに命令した。理不尽に。
「いやでも、ＩＳの事とか……」
「安心しろ、その為のシゴキだ」
剣道とＩＳが如何繋がるんだ？全く解らない。
「ま、俺を信じろ」
……卑怯だ。そう言われたら、信じるしかないだろ。
「じゃあ箒、頼んだぞ」
「うん、任せて」
神威兄は箒に任せ、出て行こうとしていた。
「あれ？神威兄はやらないのか？」
「ああ、俺に剣道は、もう出来ないからな」
……出来ない？
「……神威兄も剣道やめたんだっけ？」
「まあ……な」

「じゃあ、神威兄もやったほうが良いんじゃないか？」
「いや、そういった意味じゃなくてだな……」
そういった意味じゃない？如何いった意味だ？
神威兄は言葉を切り、少し考える仕草をしてから、
「……やれば解るか」
と言い、箒から竹刀を借りていた。
そして、俺の前に立った。
「一夏、面具を着けろ」
「神威兄は？」
「いらん」
「でも……」
渋る俺に、言い放った。
「今のお前相手には、必要ない」
相手に成らないと。少し、カチンときた。
「……神威兄、怪我するぞ」
「しないさ、絶対に」

そこまで言うのなら、この儘でやってやる。

面具を着け、構えた。

「乞い」

神威兄は、下段に構えた。

足を前に開き、完全に振り上げる構えだ。背を少し丸め、眼が鋭い。

得物を前にした、獅子の様に見える。

「……行くぞ、神威兄」

俺は踏み込み、打ち込んだが、

「――――っ！？」

手が跳ね上げられ、竹刀が飛ばされていた。

呆然とする俺に、神威兄が言った。

「解ったか？」

何処か、冷めた声色で。

「あ、ああ……」

嫌に、響いた気がした。

そして神威兄は、

「一夏」

「な、何だ？」

「避ける事に重点を置け」

助言を残して、

「箒、後は任せた」

「うん」

剣道場を出て行った。

◇◆◇◆◇◆◇

剣道場を出て、寮に向かう途中、

「……久しぶりね？」

「……おう、久しぶりだ」

夢織に捕まった。

「色々と、訊きたい事が有るの。ちょっと、付き合ってくれる？イイよね？」

「……おう」

あきらかに機嫌が悪いと解る。

「神威君の部屋で、お話しましょ？」

「……おう」

扇子にも［不快！不愉快！！］と書いてある。

「じゃあ、行きましょ？」

「……おう」

俺の腕を掴み、引き摺る様に、歩いていった。

掴まれた腕が、非常に痛かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「…で、何から訊きたいんだ？」

夢織はベットに腰掛け、俺は椅子に座っている。

「先ず、ＩＳを使えた事よ」

「ああ、その事か」

「何で黙ってたの？」

嘘は許さない、といった視線をしている。

「あ～……それはな……」

「それは？」

忘れてた。なんて言えない。出任せで凌ぐか？

「……言えないの？」

「いや、そうじゃない」
「じゃ、言って」
「……敵を騙すには先ず味方から、だ」
……行けるか？
「ふぅ～ん……」
半目にして、ジィーっと見ている。……ダメか？
「……まあ、いいわ。そういう事にしてあげる」
良し、通った！
「でも、次は絶対に答えてね？」
「おう、わかった」
ＩＳ以外なら大丈夫だ。
「絶対よ？……箒ちゃんとの同棲は神威君の希望って本当？」
だが質問は、予想の範囲外だった。
「……はあ？」
「まあ、長年離れていたから、一緒に居たいのは解るけど……
……嫌な程に」

「……いや、待て」

最後の方は聞き取れないが、気にしてなんていられない。

「でも、同棲したいなんて……羨ましい」

「……だから、待て」

「まさか、もう済ませた後じゃないでしょうね！？……私は未だなのに」

「待てっつっとるだろがあ！！！！」

何トチ狂った事言ってやがんだ！？

「……何よ？何を待つのよ？何を待てばいいのよ？」

夢織は口を尖らせ、ふて腐れた様に言った。

「お前のトチ狂った発言だ！何時俺が同棲したいと言った！？それに何も済ませてねえ！！」

「……嘘よ。織斑先生が言ってたわよ。神威君はずっと箒ちゃんを想ってたって」

「想うの意味が違う！妹分としてだ！！」

「……許婚らしいじゃない。言ってくれれば少しは……諦めないけど」

「俺とて昨日初めて知ったわ！てゆーかデマだ！！」

「……ずっと花嫁修業してたらしいじゃない……私だって頑張ってるのに」

「箒の親父が言い出した事だ！本気でやってるとは俺も思わんかったわ！！」

「……じゃあ、なんで部屋が一緒なの？……私に言ってくれれば良いのに」

「知るか！俺の方が訊きたいわ！！俺は一夏から離れたかっただけだ！！」

なんでだ！？なんでこうなってる！？俺が何した！？

「……そこまで言うなら、信じてあげるわ。少しは」

「少しかよ！！」

「……そうよ」

夢織はそう呟いて、ベットに寝転んだ。

「そうかい……って、おい。何してる？」

脱力しかけたが、夢織の行動が目についた。

「なんで枕を抱いてるんだ？なんで頬ずりしてるんだ？」

「マーキング」

「はあ？」

「私の匂いとエキスを染み込ませてるのよ」

「んな事して如何するんだ？」

「決まってるじゃない」

「何がだ？何がきまってるんだ？」

「箒ちゃんとの仲を裂く為よ！」

なんか、真面目に返すのが馬鹿らしくなった。

「……好きにしろ」

「ええ、好きにするわ」

こんな事して何になるんだろうか？

まあ、夜中に箒が俺のベットに忍び込んだ事は黙っておこう。煩くなりそうだし。

◇◆◇◆◇◆◇

夜、ベットに仰向けに寝転んで、思い返す。

久しぶりだ、こんな気持ちは……

内容は、剣道場。箒に叩きのめされ。見ていた人に、

――――織斑君て、結構弱い？

打ちのめされた。そして、

手が、まだ痛い……

神威兄に慢心を、打ち砕かれた。

昼に、神威兄が言ったのは、

――――必要な事だ

この事だったのだろう。お陰で、自分の立ち位置を、理解出来た。

俺は、弱い……

気づいた。気づかせてくれた。神威兄が。

……やろう、頑張ろう

そう思い、目を閉じた。

――――！――――！？

隣の部屋の音が、少し気に成ったけど。

◇◆◇◆◇◆◇

週が明け、対戦の日が来た。此処は第三アリーナ・Aピット。

「なあ、神威兄」

「何だ？」

今更だが、気になっている事を訊いてみる。
「ＩＳ教えてくれるんじゃなかったっけ？」
俺は今日この日まで、剣道とトレーニングしかやってない。
「ああ、教えてやるぞ。俺の試合が終わったらな」
返って来た答えは、酷いモンだった。
「……初耳だぞ？」
「……そういや、初めて言ったな」
今気づいた。と、ばかりに頷いていた。
「まあ、結局変わらんから……いいか」
酷いよね？俺、泣いていいかな？
「箒からも、何か言ってやってくれないか？」
試合前に鬱に成りそうだったので、箒に援護要請した。
「ん～……兄さん」
「……何だ？」
お、頼れる幼馴染――――

「明日はどっちと戦うの？」
「……オルコット、だろ」
――――じゃ無かった！追撃する悪魔だった！！
「……あのさぁ、普通は励ます所じゃね？嘘でも」
「はぁ、解ったよ」
俺の悲願は通じたみたいだ。
「一夏……」
神威兄は真剣な顔で、
「当たって砕けろ、だ」
俺のハートを砕いた。
「一夏……」
箒は笑って、
「負けたら残念会しよ？」
砕けたハートを踏み潰した。
なんかもう、負けた気分だ。試合前なのに。

「……誰か、俺を救ってくれ」

「お、俺斑くん織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生！あなたが俺の救世主だったのか！？でも四回も呼ばないで下さい。不吉なので。

「き、来ました！来ましたよっ！」

確かに来ましたね、山田先生が。

「織斑くん専用のＩＳが来ましたよっ！！」

ああ、ＩＳか……

「――――って、来たってＩＳ！？」

驚く俺に、背を押したのは、

「ったく、何だと思ったんだ？早く行け」

神威兄……

「やっとだね、一夏」

箒……

「早くしてくださいっ！」

山田先生……

「時間が無い。ぶっつけ本番でものにしろ」

千冬姉も……背を押すように言ってくれた。

ピットの搬入口が、重たい音を上げて、口を開いた。

そして中には、

「……白い」

純白が、座って居た。

「これが……」

「はい！俺斑くん専用ＩＳ『白式（びゃくしき）』です！」

……俺を、待っていた、のか？お前は……

「織斑、直ぐに纏え。フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ、負けるだろう」

急かされて、白いＩＳに触れた。

「……え？」

馴染む。白式（こいつ）が、馴染む事が、当たり前の様に感じる。

「……そうだ、背を預ける様に……そう、座る感じで良い。後は勝手に最適化される」

自分の一部の様な、俺が白式（こいつ）の様な、一つに成る感覚。

「ハイパーセンサーは問題無く動いているな……」

とても鮮明に、解る。

「一夏、気分は……悪くないか？」

……空気が、震えている？――――あ、心配してくれてるんだ。千冬姉が……

「……大丈夫、心配無いよ。千冬姉」

「……そうか」

安堵の溜め息を吐く様に言った。

「一夏」

箒は、

「やっちゃえ！」

センサー越しでも、変わらなかった。

「……一夏」

神威兄は、
「やるだけやって来い！」
センサーが必要無い程に解り易く、笑った。
俺は、開くゲートから、
「やってくる」
真っ直ぐに、飛んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「漸く、ですか……待たせ過ぎですわよ？」
優雅に聳え立つ、蒼を纏った、敵が居た。
「これでも、急いで来たんだけどな」

俺は、合わせる様に言った。
「そう……では、最後に訊きますわ」
敵は、髪を払いながら言った。
「何をだ？」
「棄権しなさい？惨めに負けたく無いのでしたら」
最後の慈悲、と言った。
「悪いが……御免蒙る」
「……ふふ」
俺の応えに、薄く笑い。
「この国で、貴方の様な人は……」
――――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。
「……確か、ブシドーと言うのでしょう？」
――――セーフティのロック解除を確認。
「そして、見つける事は――――」

――――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「――――死ぬ事でしたわね！！」

「うお！？」

運良く、避けられた。

「あら？避けられてしまいましたわ」

これは神威兄の、

――――避ける事に重点を置け

助言のお陰だ。

「では、これは如何かしら？」

続く射撃、その雨が降った。

「ぐ……武器、武器は！？」

雨を受け、減り行くシールドエネルギー。その中で、一つしかない武器を展開した。

「ブレードだけ……馬鹿にしてますの？」

雨の中、少しでも、

「さあ、な！」

可能な限り、避ける。

「何にせよ、結果は変わりませんわ……」

――――警戒！

「――――！な！？」

四枚の羽が、散らばった。そして、

「さあ、踊りなさい！私（わたくし）の奏でる円舞曲（ワルツ）で！！」

四方からの射撃、その雨が降った。

◇◆◇◆◇◆◇

衝突する、白と蒼。蒼は、数多（あまた）の雨で、白を追い詰める。

白は、雨の中で輝き、殻を破る。そして、勝敗が決まる。

だが、戦いは終わらない。未だ、敵は居るのだから。

呪は月を擁いて　第二十三話

『次は、俺の番だ』

第二十二話　『さあ、踊りなさい！私の奏でる円舞曲で！！』（後書き）

ＩＳバトルが始まった所で終わったよー

前回、箒が無双しかけたんで今回は引っ込ませました。

んで、お祭りちゃんと夢織が少し出ました。

第二十三話　『次は、俺の番だ』（前書き）

はい、続きです。

第二十三話　『次は、俺の番だ』

「くっ……！」

降り注ぐ、射撃の雨に撃たれる。

「確りと避けて下さい」

上下左右と、普段意識しない所から。

「くそっ！」

「此方も忘れないで下さい」

雨の合間に、手の持つライフルが撃たれる。

全て、では無いがこの身に受ける。

開始から、僅かしか経ってないが、防戦一方。辛うじて、生身の部分は避けれているが。何時まで持つのか解らない。更に、相手との距離が縮まる事が無く、逆に開くだけ。状況は絶望的、逃げ回る事しか出来ない。

「く――――ん？」

雨が収まり、羽が収納された。

「如何(いかが)でしたか？ブルー・ティアーズのお味は」

今度は、手に持つライフルからの射撃。

「俺の口にはっ！……全然合わないな」

軽口を叩きながら、避ける。

「それは残念ですわ……」

だが表情(かお)は、真逆。

「……でも、折角ですから――――」

また――――

「――――もっと味わって下さいな！」

――――来た！

「いらねえよ！」

悪態をつきながら、逃げる。

「ふふ……慣れれば美味しいですわ、きっと」

畜生っ！完全に――――

「慣れるまで持てば、の話ですが」

――――遊ばれている！

◇◆◇◆◇◆◇

モニターに映る一夏は、

「遊ばれてるな……」

オルコットに踊らされている。

「そうだな」

俺の呟きに、千冬姉さんが答えた。

「でもまあ、時間は稼げるか……」

相手が侮ってくれているなら、今はそれに乗った方がいい。

「そうだな」

また、千冬姉さんが律儀に答えた。
「時間？」
「ああ、一夏専用に成るまでの時間」
箒の質問に暈かしながら答えた。
「ただ、それまで生かして貰えれば、な」
時間が来れば勝率は上がる。生き残っていれば、の話だが。

◇◆◇◆◇◆◇

「――――二十七分、よく持った方ですわ」
相手は無傷。しかも一歩も動いて無い。
「……そうか？」
対して俺はボロボロ。更にアリーナ中を逃げ回った。
だが、攻撃パターンが段々と解ってきた。同時に弱点らしき事も。

「ええ、初見で……さらに初心者の方が、ここまで持った事は無いですわ」

ビットを愛犬の様に撫でながら言った。

「お褒めに預かり、どーも」

俺の返答に薄く笑い、

「ですがそろそろ、終わりにしましょう」

右手を横に翳した。

「ちいっ！」

すぐさまビットが二機、砲口を向け、上下に挟む様に迫ってきた。口から光線が放たれるが、何とか避け、受けた。

「これで、閉幕（フィナーレ）ですわ！」

ライフルが俺に向けられる。

「させるかあ！！」

俺は、狙う銃口に突っ込み、無理矢理方向を変えた。

「なっ！？――――でも！」

相手は、待機していたビットを呼び寄せ、俺に向かわせる。

「おせえ！」

だが、至近距離。ビットを一つ、撃破する事に成功した。
その儘の勢いで切り込むが、

「く……悪足掻きを！」

後方に跳び、右手でビットを呼び寄せた。が、

「見える！」

光線を紙一重で避け、切り裂いた。
ビットの軌道は大体解った。人の反応し難い所に飛び、撃ってくる。

「そんな！？」

箒との特訓のお陰かもしれない。妙に頭がクリアに成ってきた。
それに慣れてきた所為か、身体が軽い。開始直後より、動作がずっと楽だ。

――――必要な事だ

神威兄も、言っていた事は、

――――俺を信じろ

きっとこの事だ。

さっき飛び込んだ時に、相手は迎撃出来なかった。近距離での武

装は無い。
有ったとしても、間に合わないだろう。
要は、飛び込みさえすれば……勝てる！
漸く、勝ちが見えてきた――――

◇◆◇◆◇◆◇

「はぁぁ……凄いですねぇ、織斑くん。ＩＳの機動が二回目とは思えません」
山田先生が、溜め息混じりで褒めるが、
「……千冬姉さん、如何見える？」
「浮かれているな、間違い無く」
「やっぱり、か」
俺達には、不安が有った。

「兄さん、何でわかるの？」
「一夏の左手を見てみろ」
「左手？……閉じたり開いたりしてる」
これは一夏の悪い癖。
「何か意味があるんですか？」
「昔からの癖だ。あれが出る時、大抵は簡単なミスをする」
継ぐ山田先生の質問に、千冬姉さんが答えた。
千冬姉さんの言う通り、あの癖が出るとミスる事が多い。今回はミスった瞬間、負けに成る可能性が高い。だが此れも必要な事。
一夏に限らず俺もそうだが、判断を間違え失敗すれば嫌に頭に残る。そして学習する。次は間違いを起こさない様にと。だから今回、あの癖が出てくれて良かった。
「へぇぇ……さすがですねー。そんな細かい所までわかるなんて。お二人共よく見てるんですねー？」
「まあ……一応、弟だからな……」
「……弟分ですから」
言葉を濁す俺達に、
「あー、照れてるんですかー？あれー、漆月くんもですかー？」

山田先生がからかった。だが一夏関係は、俺達には禁句(タブー)だ。

「「……」」

先ず千冬姉さんが、

「いたたたたたたっ！」

ヘッドロックをし、俺は、

「いたたたっ！し、漆月くんはっ、何で手を……」

山田先生の両腕を掴んだ。

「織斑先生、これで山田先生はギブアップ出来ません」

「でかした、漆月」

地獄に送る為に。

「そ、そんな～！？許してください～……あうぅぅっ！」

「箒……口を塞いでくれ。いいですよね？織斑先生」

更に、どん底に落す要請と許可を求めた。

「ああ、許可する」

千冬姉さんの許可が下りたので、

「と、言う訳だ。箒、頼む」

「はーい。山田先生、ごめんなさい」

「え、ええー……むぐ!?むごむご……〜〜〜〜!!」

箒は実行に移した。

「……何してるの？」

入ってきた夢織には、誰も気づかなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

――――これで

最後のビットを切り捨て、

「終わりだあ!!」

切り込むが、

「それは――――」

腰部のアーマーが外れ、

「――――貴方ですわ！」

二つの牙が、放たれた。

まずっ……

◇◆◇◆◇◆◇

「ちょっと！一夏君が爆発したわよ！！」

「「「え？」」」

「～～～～ぷは！？」

山田先生から離れ、慌ててモニターを見ると、黒煙が漂っていた。

「更識、何故早く言わない！」
「そうだ、何で黙ってた！」
「ダメですよ、ちゃんと言わないと！」
「え？何で怒られるの？お礼じゃないの？」
だが、黒煙は直ぐに吹き飛ばされ、
「……無事じゃないか」
「……人騒がせな」
「……一夏、爆発してないですよ？」
先程とは違う、白が在った。
「……もう、いいわよ」
「さ、更識さん！ふぁ、ファイトですっ！」

◇◆◇◆◇◆◇

――――初期化(フォーマット)と最適化(フィッテキング)が終了しました。確認ボタンを押して下さい。

……？

流される儘に押すと、膨大なデータが流れ、在るべき所へ往った。そして、白式の形が変わり、武器も変わった。

……雪、片

千冬姉が使っていた刀を、雪片を強く握る。俺の憧れの一つ。その一つが、手の中に在る。

同時に、何か、力が発動したのが解る。

「一次移行(ファースト・シフト)……今迄、初期設定だけで……」

雪片(憧れ)を構え、相手を見据える。

「でも、まだ！」

そして、迫り来る二つの牙に向かい、跳んだ。

不思議と、恐怖が無い。在るのは、憧れた思い。

「これで、俺も――――」

一閃で薙ぎ払い、蹴散らす。

三年前、千冬姉に、神威兄に、護られた様に。

「――――守れる！」

その勢いで、返す刀で、

＜試合終了。勝者――――セシリア・オルコット＞

振るう前に、終わった。

「「え？」」

俺の負けで。

◇◆◇◆◇◆◇

俺の前に、二人の鬼が居る。

「まあ、こんな所か？」

前鬼、神威兄。

「そうだな、こんな所だな」

後鬼、千冬姉。

「……やっと、でございますか」

先程から俺は、

「今日は、だ。負け犬」

虐待に近いイジメと、

「暇が有ったらＩＳを起動しろ、いいな？」

説教という苦行を受けていた。

「……ご指導、ありがとうございました」

正座で。しかも硬い床で。足は当然痺れている。

「今日はもう帰って休め」

更に、痺れた足で歩けと仰った。

終わりと言いつつ、終わってなかった。

「箒、一夏を送ってやってくれ」

「……兄さんは？」
「俺は明日の準備」
お？鬼が去って――――
「あ、箒、規則の資料は持たなくていいぞ」
――――いなかった。
「うん、わかった」
優しい姉と兄と幼馴染は何処に行ったのだろうか。
溜め息を出しながら痺れる足を進めるが、ピットの外へ出る時、
「「一夏」」
「……何？」
「「お疲れ」」
「！？……ありがと」
掛けられた言葉に、落ちていた気分が、良くなった。
自分でも現金だと思うが、仕方が無い。
「一夏、お疲れ様」
「おう、サンキュ！箒」

こんな事で、元気に成れるんだから。

◇◆◇◆◇◆◇

「はあぁぁ……やっぱりお二人共、織斑くんが大事なんですねー」

「「……」」

山田先生が、また何か言い出しそうだった。ので、

「……織斑先生、後は宜しくお願いします」

「……解った。任せておけ」

千冬姉さんに頼み、

「よし、行くぞ楯無」

「……良いの？アレは？」

俺達もピットを後にした。

「え？ええ～！またですかぁぁぁ！？」

後ろを気にせずに。

◇◆◇◆◇◆◇

織斑　一夏……

熱めのシャワーに当たりながら、手を胸に当てて、想い浮かべる。この一週間を、もう記憶と写真にしか残ってない、過去を。

始めは、ＩＳが使えるだけの情けない男だと思っていた。しかし、それは違った。

特訓をしていると聞き、興味本位で覗きにいった時に、判った。

彼は篠ノ之　箒に叩きのめされていたが、引くことは、しなかった。

打たれても、下がらずに。倒れても、立ち上がった。

不思議と目に付いていた……

授業でも、少しでも理解しようと、齧り付く様に教科書を見てい

た。
休み時間でも、彼が兄と慕う人に、教えを請っていた。

それから……

真っ直ぐに進む姿。女に媚びない姿。その姿を、何時の間にか目で追っていた。
そして、向かう先が自分だと気づいた時、胸が熱く成ったのは、記憶に新しい。

今日……

今日の試合。この日が楽しみに成った。アリーナでは、彼が来るのを心待ちにしていた。
ブレード一本で挑んでくるとは思わなかったが、今となっては、それも魅力的だ。実際、ブレードだけで負けそうに成った。彼は、強い。

あの目が、似ていた……

もう居ない、父と。

父は、情けない男。何時も周りにを気にしていた。たった一つを除いて。
その一つをしている時は、母にも負けない、媚びない目、だった。
母は、そこに惚れたのだろう。惚気に近い事も言っていた。
「この様な男に惚れては駄目よ？」と言っていたのは、本心かどうかは、もう確かめられない。
ただ、その言葉を真に受けて「情けない男とは結婚しない」と返した事は憶えている。

私(わたくし)は結局……

母の娘だった。

あの媚びない目に、遣られてしまった。もう、溺れてしまった。

恐らく、母もこの様な気持ちだったのだろう。そんな気がする。

謝罪しましょう……

馬鹿にした事を、情けない男と思った事を、彼に。

でも、それは……

明日の試合が終わってからだ。戦ってからだ。漆月　神威と。

漆月　神威……

間違い無く強い、筈だ。無知では無い事が、その証明に成る。

何より、篠ノ之博士とＴＶに映った時、難無く部分展開をしていた。

アレを、入れておきましょうか……

使う事が無いに等しかった武装、シレーヌを。

そう思い、シャワーノズルを閉めた。

◇◆◇◆◇◆◇

此処は寮の屋上。

「付き合せて悪かったな」

「良いわよ、後で付き合って貰うから」

此処で、私達は軽い手合わせをしていた。

「で、明日は如何なのかしら？」

明日、彼はセシリア・オルコットと対戦する。

「さあな、まあ……やるだけやるさ」

彼は、如何でもよさげに答えた。

「……やる気が無いの？弟分の一夏君が頑張ったのに？」

その返答には、大いに不満だ。

口に出した事も有るが、それ以上に彼の事が、ＩＳの事が気に成る。ＩＳの詳細は、伝えられて無い。武装も如何いった物が有るのかもわからない。私個人としても、更識としても、知りたい。知って置かなくてはならない。

「まさか、一夏が根性見せたんだ……」

彼は、ニッと笑いながら、

「次は、俺の番だ」

力強く、言った。

「うん、宜しい」

彼の返答に、満足して頷いた。

やる気が在る事は解った。後はどれだけ見せてくれるのか、其れだけだ。ＩＳを、闘う姿を。

どうせなら、格好良く魅せて欲しい。と思う。

「さて、飯食ってシャワー浴びて寝るか」

「む……」

今日、彼の晩御飯は箒ちゃんが用意しているらしい。何でも、明日の為に、との事らしい。

彼が餌付けされる事は無い、無いと信じたいが。不安が、不満が有る。

彼は箒ちゃんに、甘い。大甘と言って良い。長年離れていたから、しょうがないと思うが。納得出来ない物が有る。納得出来ない事は添い寝。箒ちゃんと添い寝したらしい。

彼は昔の延長と言うが、私にはそう見えない。あの新妻っぷりは。箒ちゃんは彼の後を付いて歩き、甲斐甲斐しく世話をやく。特に、昼食の時に。弁当を作るのは当然。そして、弁当箱は重箱。中身の

出来も良い。更に、一夏君の分も用意するといった気の利き様。

マーキングは逆効果だったのよね……

一悶着あったのだが、それが箒ちゃんの添い寝権に変わるのは予想出来なかった。

「はぁ……」

「どうした？」

「何でも無いわ……」

後、三週間の我慢だ。間違いは起こらない。

起こした時は、と釘を刺した。大丈夫、大丈夫な筈。

「本当に、酷い人」

「誰がだ？」

「貴方が、よ」

流石、一夏君の兄貴分ね。

◇◆◇◆◇◆◇

一夜明け、今は放課後。
モニター越しに、神威兄とセシリアが向かい合っているのが見える。
神威兄のＩＳは、白地に青が入っていた。背中には、二本のフィンガーガードの付いた柄が有った。他に武装らしき物は無い。まだ出してないだけかもしれないが。

「「「「……」」」」

それを俺、千冬姉、箒、楯無先輩がジッと見ている。

「え、えっと……そ、そんな力まなくても……」

山田先生が何か言っているが、気にしていられない。

試合開始まで、後僅かだ。

◇◆◇◆◇◆◇

目の前に居るオルコットに、違和感を感じた。
初日の、突っ掛かって来た時の様な、刺々しさが無い。
「始まりましたわ……宜しいですか？」
「……ああ」
だが、遣ることは変わらない。ラックに刺さる柄を抜き、刃を展開する。
「やはり、同じですか……」
「……ああ」
そして、オルコットは右腕を水平にし、
「では、踊って頂きますわ！」
ビットを放つが、
「お前がな！」
それよりも早く、ある物を左腕から銃身に打った。
「な！？これは！？」
「フィッシュ、てな？」
俺と銃身を繋ぐワイヤーを掴みながら言った。

「今回は、お前に踊ってもらう」

◇◆◇◆◇◆◇

白の奇策を打ち、翻弄させる。蒼は嵌り、踊らさせられる。

だが、決め手と成るモノは、お互い信じ、掛けた、一。

そして、決した後に在るモノは……

呪は月を擁いて　第二十四話

『此れで決めよう』

第二十三話　『次は、俺の番だ』（後書き）

まあ、一夏は原作通りに。そして、セシリアは一夏に惚の字ｗ
夢織のマーキング効果は、箒との添い寝にｗ
んで、また開始で終了。

釣りに使ったのはＭＳパイロットとかが持っているアレです。
ガロードが一話でＭＳハントに使っていたアレです。
コックピット近くに打ち込んで、シュルシュルッと昇っていくアレです。
正式名称がわからないのでアレで通しますｗ

ぬいぐるみアンケートを締め切ります。
結果はオール１なので……アミダで決めるか。

第二十四話　『此れで決めよう』（前書き）

バトルって難しい……

第二十四話　『此れで決めよう』

「はあああぁぁ！」

「くっ！」

敵の切り込みを銃身で受け、流す。
ブルー・ティアーズで迎撃しようとするが、

「ふん！」

横に引かれ、集中出来ない。スターライトｍｋ？に取り付かれたモノ。これが邪魔をする。
この武装を知る為に検索するが、該当する物が無い。詰まり、対処方法が判らない事に成る。恐らくコレは、漆月　神威が造ったモノ。若しくは、武装ですら無いモノ。そのどちらかだろう。

「ならば！」

ブルー・ティアーズを放った箇所から狙い撃つ。
方向転換と射撃、単純な操作なので高い集中力は要らない。

「甘い！」

しかし、当たらない。前方に有るから避けやすく成るのは当然。
だが、その間にスターライトｍｋ？を撃とうと銃口を向ける。が、

「――――っ！？」

ワイヤーを鞭の様に撓(しな)りを走らせ、照準をぶれさせられた。
其れにより、トリガーを引く指がワンテンポ遅れ、避けられた。

「ふっ――――――！」

また切り込み。受け撃つ為に銃身を回すが、その儘の勢いで引かれ、体勢を崩され、

「くっ――――――な！？」

その隙にビットを一つ、落された。

「先ず、一つ」

◇◆◇◆◇◆◇

「すげぇ……」

一夏君の呟きに言葉にせず、同意する。とてもＩＳの戦闘が始めてとは思えない。

「更識、アレは……」

「……流星錘が元に成ったモノ、かと」

「……そうか」

「千冬姉、流星錘って？」

「縄の先端に金属製の錘を付けた中国の武器だ。流星鎚とも呼ばれる。そして、錘が１つしかない物を単流星。縄の両端に錘を付けた物を双流星と呼ぶ。今、神威が使っているモノは単流星の方だな。まあ、本来の使い方は錘をぶつけたり、捲き付けて動きを封じたり、なんだが」

そして、彼が生身で使うモノは縄？と呼ばれる流星錘から派生したモノ。錘の代わりに短剣状の？を付けた、殺傷能力を上げたモノ。

「へぇぇ……神威兄、そんなモン使えるんだ」

そう、今モニターに映る事を、私もやられた事が有る。その時は、錘は袋に入れられていたが。

「……恐らく、攻撃にも使えるだろう」

「え？アレでダメージを与えられんの？」

「ああ、威力を上げられれば、な」

そう、威力の問題だ。威力が有ればＩＳでも使える。
錘を重くすれば威力は上がる。または、刃物を付ければ殺傷能力を得る。
そして、それを受ければシールドエネルギーは、減る。
「ただ、使うか如何かは、わからんが……」

◇◆◇◆◇◆◇

「これで――――四つ！」
射撃型ビットを全て落とした。残るビットは、弾道型のみ。
「？……何の積もりですの？」
俺は刀の刃を消し、ラックに戻した。そして、
「……ショート、ブレード？」
童子切を展開し、抜いた。

「何を……――――っ！？」

◇◆◇◆◇◆◇

「……使った、か」

彼は腰からナイフを抜き、右腕から出るモノに、接続した。
そして、ワイヤーを伸ばし、掴み、回し始めた。

この後が、酷いのよ……

遣られた記憶が蘇る。私の時も双流星を使い、追い込まれた。
片方を腕に捲かれ、もう片方でネチネチと、容赦無く討ってきた。

悪魔、に見えたのよね……

その事を口に出したら「なら、悪魔らしくヤらせてもらおう」と
言い、討ってきた。
楽しそうに、とても楽しそうに、笑いながら討ってきた。

彼女には、如何見えるのかしら？

◇◆◇◆◇◆◇

刃を付けたモノを、少しずつ伸ばしながら回している。
そして、此方に向けて、鋭く投げた。

「く――――うっ！！」

同時に引かれ、刃をこの身に受ける事に成った。
貫通こそはしなかったが、シールドエネルギーが減った。

また……

回し始めた。冷たい笑みを浮かべながら。
回る刃が鎌に、私(わたくし)を刈り取る鎌に見える。

来る……ですが！

残った二機のブルー・ティアーズを発射する。が、

「そんな――――！？」

発射直後に切られ、爆発に飲まれた。
爆煙で視界が塞がれるが、容赦無く追撃が襲って来た。

オーガ……

鬼の様に、死神の様に思えるてきた。少しずつエネルギーを、戦う生命線を、刈り取る姿が。
精神的にも、くるモノが在る。自由に動けず、弄られる、この状況が。鎌を回す、姿が。

「最初の勢いは如何した？」

そう言いつつ、攻めて来る。そして、反応する瞬間を狙らわれ、引かれ、ずらされる。

上手い……！

戦い方が上手い。手馴れている。
最初もそうだ。アレを発射した時にアラートが無かった。マニュアルで発射したのだろう。お陰で反応が遅れ、今に至る。

シレーヌは……

まだ使えない。今使っても、流れを変えられない。
今は未だ、伏せの時だ。インテルメッツォの筈だ。この後に大きく変わる。その事を信じて、待つ。
此の兇器の、僅かでも途切れる瞬間を、待つ。

まだ、まだ――――

◇◆◇◆◇◆◇

やっぱり、こうなったわね……

モニターに映る様子が想像通りのもので、溜め息が出た。

彼はまだ、ネチネチと攻めている。非情に。だが、長くは続かないだろう。

「目が、死んでないな」

そう、相手の目が死んでいない。耐えている。

「更識、何時まで続くと思う？」

「……判りません。ですが、そう長くは続かないと思います。……勘、ですが」

「そうか」

恐らく、ある程度まで弄ったら変える。気がする。

「ただ……」

「何だ？」

「酷い事に成る、かもしれません……」

◇◆◇◆◇◆◇

――――まだ、まだですの！？

攻め方は同じだが、多少変わった。ワイヤーの部分をぶつけて来る様に成った。

此方を絡め取る様な投げ方だ。

「くっ……この！」

回避しつつ撃つが、避けられる。ブルー・ティアーズを撃っても引かれ、集中出来ず、上手く操れず、アリーナの防壁に当たり爆散した。

落ち着いて、落ち着くのです……

これ以上焦れば、間違い無く呑まれる。そして、終わる。

だが、自分を落ち着かせる為に、出来た隙に、

「え――――」

接近を許し、右手に持ち直したショートブレードで、

「――――ああぁ！？」

懐を切られ、絶対防御を発動させられた。

◇◆◇◆◇◆◇

……頃合いか？

オルコットから離れ、童子切を回しながら考える。

「はぁ……はぁ……」

息は荒いが、まだ目は死んでない。

もう少し、続けるか……

◇◆◇◆◇◆◇

――――逃した！

流れを変えるチャンスを。シレーヌを使う瞬間を。
相手は、また回し始めた。鎌を、刈り取る兇器を。

これ以上は……

持たない。精神的にも。エネルギー的にも。
そしてこれ以上待っても、もう来ない。チャンスは無い。

……でしたら！

攻めよう。次に仕掛けて来た時に、掛けよう。
覚悟を決めた。スターライトｍｋ？を盾にし、狙う。

さあ、来なさい！

相手は此れまでと同じ様に、投げ、引いてきた。

此処は――――

その儘引かれ、流される。そして迫り来る兇器を、

此れで――――

スターライトｍｋ２で受け、捨てる。

――――今です！

瞬間加速（イグニッション・ブースト）で近づき、

「はあああぁぁぁ！！」

シレーヌを展開し、切り付けた。

「……残念だったな」

左手に持つショートブレードで受け止められた。が、

「……いいえ、成功ですわ！！」

ブルー・ティアーズを撃つ。避けられない距離で。

――――当たった！！

目の前の爆発に、勝利を確信した。

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

「神威君！」「神威兄！」「兄さん！」

おもわず悲鳴を上げるが、試合終了のアナウンスが無い事に気づく。

「どうやら、無事のようだな……」

次第に爆煙が晴れると、無事な姿が見えた。

「あれは……」

彼は、防いでいた。身を隠せる程の大きな――――

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

「――――盾！？」

危なかった。サーベルを持っているとは思わなかった。だが、もう射撃武装はビットだけ。

左手に持つ童子切を腰に戻し、割切を左手に持つ。

伸ばした儘のワイヤーを引き上げ、右手に童子切を持つ。

「此れで決めよう」

割切を横に構え、両端に有るスラスターを点火させ、

「くっ……え！？」

体当たりをする為に、加速した。

◇◆◇◆◇◆◇

「くうぅぅ！！」

巨大な盾での体当たりを、シレーヌで何とか受け止める。

……不味い！

これではシレーヌを使えない、本領を発揮出来ない。

「此の儘では……え？」

盾が……割れた？

割れた中から、此方を狙う銃口が、在った。

「閉幕（フィナーレ）だ」

そして、無数の光が、身を貫き、

「あああああぁぁぁぁぁ！！」

此処で、私（わたくし）の意識は途絶えた。

◇◆◇◆◇◆◇

＜試合終了。勝者――――漆月　神威＞

「やったぁ！」「さっすが神威兄！」

箒ちゃんと一夏君がはしゃいでいるが、私は素直に喜べなかった。

アレ、下手したらトラウマ物よ……

最後の攻め手が、酷かったからだ。そして、

何でお姫様抱っこしてるのよ……！！

意識を失った相手を、抱きかかえているからだ。

戻って来たら……って、ああ！？

向こうのピットに行ってしまった。

「全く、アイツめ……」

「あれー？織斑先生、安心したような顔ですねー？」

「……」

「どうし……いたたたたっ！いたいですっ！」

戻って来たら覚えておきなさい！

◇◆◇◆◇◆◇

「う、うん……？」

「気づいたか？」

ピットに着いて直ぐ、オルコットが目を覚ました。

「私（わたくし）……きゃ！？」

「今降ろす。暴れないでくれ」

「は、はい……」

顔を赤くするオルコットを降ろし、試合結果を告げる。

「そうですか……解りましたわ」

すんなりと結果を受け入れるオルコットに、試合開始した時と同じ違和感を感じる。

「ふふ、素直に受け止める事が意外でしたか？」

「……まあな」

騒ぐかと思っていた。オルコットの性格からして。
「昨日、目を覚まさせて頂きましたわ。一夏さんに」
「そうか……ん？」
ふわり、と笑うオルコットに、当たって欲しくない懸念を感じた。
「……オルコット、まさか一夏に……？」
「……はい」
顔を赤くして頷いた。
「アイツ、また……」
「また？何の事ですの？」
「いや、気にするな。いずれ解る事だ」
「はぁ……そうですか」
あの馬鹿、またやりやがった。今回はどうやったんだ？
「あの、漆月さん……」
「ん？」
頭痛のする俺に、オルコットは真剣な表情で、

「今迄の非礼、お詫びしますわ。申し訳ありませんでした」

そう言い、頭を下げてきた。

「……いや、此方こそ。だ」

頭を下げるオルコットにそう返しつつ俺は、

「……一夏にも謝るのか？」

最早無い希望を確認したが、

「はい！もちもんですわ！」

結果は当然、駄目だった。

あの馬鹿！お陰で手駒計画がパーじゃねえか！！

◇◆◇◆◇◆◇

オルコットの謝罪を受けた後、色々あった。

先ず、夢織に怒られた。理不尽に怒られた。対戦相手に優しくするな！とか。抱きかかえるな！とか。あの儘落ちたらどうすんだ？と返したら、絶対防御が有るわ！と豪快していた。
その後は、勝利＆残念会。箒と夢織で豪勢な夕食を作っていた。一夏に残念だったな？とのからかいに、箒と夢織も乗り反応が面白かった。
そうして騒いでいるとオルコットが来た。来た理由は一夏への謝罪。
一夏は謝罪を受け取り許した。そして、一緒にもってきた手作りのサンドウィッチを一夏が口にしたんだが、直ぐに余裕の無い表情に変わった。此方にも薦めてきたが、俺達は危険を察知し辞退した。
「一夏の為に作ったんだろ？なら俺達は食う訳にはいかない」と。オルコットは真に受け「皆さん……！」と何か勘違いして感動していた。一夏は「絶望した！！」と言いたい表情をしていたが、感想を求められた時に「美味い」と返していた。俺には出来ん事だ。気が付いたら拍手していた。

まあ、そんなこんなで一夜明け、今はＳＨＲの時間。

「……そして、一年一組の代表は織斑　一夏くんに決まりました。皆さん拍手をー」

拍手の中、一人手を上げた。

「はい先生、質問です」

「はい、織斑くん。なんですか？」

「俺、負けましたよね？なんで代表になってるんですか？」

「それは「それは私達(わたくし)が辞退したからですわ！」……です」

そう、俺も辞退した。一夏の為に駒を仕立てようといたら、一夏に潰された。また何か考えても一夏に潰される気がする。ならば一夏自身を鍛えるようにした方が良い。そんな建て前で自分を納得させた。

本音は、正直やってられん。だ。

「なんでさ！？」

「私(わたくし)とお兄様は話し合い、決めたのです！一夏さんに実戦を糧とし、成長させようと！」

そう、そんな事言ったような……ん？お兄様？

「だからなんで……あれ？神威兄の事、お兄様って？」

「ええ、この国の事を調べて解ったのですわ。女に負けず、人の上に立つ男が居たことが！そして驕る事が無く、人々に救いを与えていると！その者は神如き者と！！」

……おい

「私(わたくし)は、その気高く厳しく、そして優しい心に触れましたわ。お兄様は一夏さんに大きく、立派に成長して欲しいと、そうおっしゃっておりましたわ！」

……いや、それは建て前だ。本音は欠片も無い

「私(わたくし)は感動しましたわ……素晴らしい兄心に」

「……そっか、神威兄が」

――――って、それで納得すんのか！？

「お兄様、私(わたくし)の事はセシリアとお呼び下さい」

「……ああ、わかった」

シッカリ感染してる事が解った。嫌な程に解った。

「やっとセシリアもわかったのね！」

「これでクラス一丸となって……」

「そう！私達は、一つよ！！」

知ってるか？この病原体、死滅しないんだぜ？

「静まれ、雛ども」

千冬姉さんの一言に、皆静まる。

「クラス代表は織斑　一夏、異存はないな？」

はーい。と俺を除く全員が返事をした。

「では、ＳＨＲを終わる」

どうせなら、この悪夢も終えて欲しい。

◇◆◇◆◇◆◇

お互い持った熱は冷め、手を取り、歩み寄った。

だが、次の熱が、嵐が、直ぐ其処に、迫っていた。

渦の芯は、約束。廃れた為に、嵐が噴いた。

呪は月を擁いて　第二十五話

『ただいま！！』

第二十四話　『此れで決めよう』（後書き）

？：手裏剣や小剣の事。

ネチネチと攻めました。んで最後にドカン！

シレーヌの本領発揮ならず、残念でした。

セシリアを救ったのは一夏。さすが原作主人公！

悪魔の手からヒロインを救ったのであった！んで、感染ｗ

手駒計画がパーな理由は、

セシリアピンチ

←

一夏駆けつける。

←

意味なくね？

だからです！！

第二十五話　『ただいま！！』

今は実践の授業。

「……では、これよりＩＳの基本的な飛行操縦の実践をしてもらう」

俺達、専用機持ちは前に出て実演させられている。

「漆月、織斑、オルコット、ＩＳを展開して飛んでみせろ」

「「「はい」」」

俺は右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。

これが俺にとって、一番展開をイメージしやすい格好だ。

来い、白式……！

刹那、薄い膜が右手首から全身に広がり、粒子が放たれ、集まり、ＩＳとして形成された。

左右を見ると、神威兄とセシリアは展開を終え、浮いていた。

「よし、では飛べ」

千冬姉が言って直ぐに、神威兄とセシリアは急上昇し、遥か上で止まった。

俺も続くが、比較にならない程に遅かった。

「何をしている。さっさと行け」

仕方ねぇじゃん。急上昇、急降下は先日習ったばかりなんだから。

「自分の前方に角錐を展開するイメージ……ってどんなんだよ」

そんな事を愚痴りながら二人の所に着いた。

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。自分に合ったやり方、イメージを持つ方が良いですわよ？」

「と言ってもなぁ……どうやって浮いてるのかも解んないだよな……」

羽が有るだけで飛べるんだ。どんなＳＦだ？これは。

「反重力力翼と流動波干渉の話になるが……理解出来るのか？」

「……出来ません。もう訊きません」

「そうか、残念だ。理解に苦しむ様が見れないとは……」

ひでぇ。鬼だ、神威兄は。

「ふふ……仲がよろしいのですね、本当に」

セシリアは、そんな俺達を楽しそうに見ていた。

あの試合後、謝罪をしに来た時から俺達に対する態度が変わった。

それに、俺のコーチを買って出てくれた。ありがたい事だ。そのお

陰で神威兄は教えてくれないけど。

＜次は急降下と完全停止だ。目標は地表から十センチだ＞

「はい、ではお先に」

先ず、セシリアが行った。

「俺も行くぞ。お前は俺達が止まったら来い」

そう言って、神威兄も行った。

「二人共うまいなぁ……」

難なくクリアー、次は俺の番。

イメージは背中からロケットファイヤー！脳内ＢＧＭはスピードキング！

そして、一気に地上へ――――

◇◆◇◆◇◆◇

――――撃墜したか。

目の前で、轟音が響き、土煙が上がった。

「い、一夏さん！大丈夫ですの！？」

セシリアが飛んで行った。

「全く、あの馬鹿は……」

聞こえた方を見ると、千冬姉さんが頭痛そうにしていた。

「おい、そこの二人。いちゃつくのは後にしろ」

視線を戻すと、二人はラブコメもどきをしていた。

「い、いえ、これは！」「え？いちゃつく？」

「さっさと上がれ」

「「は、はい！」」

叱られ、一目散に上がってきた。

「次だ。織斑、武装を展開しろ」

「はい！」

一夏は、白式を展開した格好で呼び出した。

「遅い、最低でも０．５秒で出せるようになれ」

「……はい」

まあ、唯一の武装だからな。早く出せる様にしないとな。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは腕を真横にし、一瞬で展開した。展開した銃に視線をやり、ロックを外した。

「流石だな……だが、そのポーズは止めろ。横に向け展開し、誰を撃つ積もりだ。正面に展開出来る様にしろ」

「で、ですが！これはイメージを纏める為に……」

「直せ。お前の母国の人間が、銃口の先に居ても同じ事をするのか？」

「あ……」

「だから直せ。いいな？」

「……はい」

確かに、母国の代表候補が母国の人に銃を向ける。有ってはならないだろう。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」
「え？あ、はい」
銃を収納し、俺との試合で使ったサーベルを展開した。
「……オルコット、此方に有るデータではそれは近接用の武装と出てないが？」
……近接用じゃない？
「ぐ……わかりました」
サーベルを収納し展開しようとするが、
「くっ……」
光が漂うだけだった。
「まだか？」
「す、すぐです――――ああ、もうっ！インターセプター！」
叫び、ショートブレードを出した。
成る程、そうゆうことか。近接武装は使わない為に、呼ばないと出せないのか。
「何秒掛かっている。実戦では使えんぞ？」

「……はい」

思い当たる節が有るのだろう。と言うか俺達の時の事だろう。

「では、漆月……時間か」

時間切れ、俺まで回らなかった。

「今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドの穴を片付けておけ」

「……はい」

そう言い残し、千冬姉さんは去って行った。

「神威兄……」

縋る様な一夏に、

「頑張れ、お先に」

エールを送り、グラウンドを後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

「ここが……」

一人の影が、ＩＳ学園前に在った。

「ここに……」

小柄な身体に、不釣合いなボストンバッグ。

「帰って、きたよ……」

手に持つ、データスティックを両手で包み、

「……一夏、大哥」

ＩＳ学園に歩み入った。

◇◆◇◆◇◆◇

そして夜。

「ではでは！織斑　一夏君のクラス代表決定を祝って――――」

≪≪≪≪≪≪≪≪≪≪カンパァァァァーーーーーーイ！！！！≫≫≫≫≫≫≫≫≫≫

グラスをぶつける音が木霊した。

壁に『織斑　一夏クラス代表就任パーティーだぜ！ヒャッハァー！！』と書かれていた。

「ヒャッハァーって何だ？ヒャッハァーって」

皆がワイワイと騒ぐ中、一夏がボソッと呟いた。

「気にすんな、気にしたら負けだ」

昔に悟った暴論を説いてやる。

「一夏、皆お祝いしてくれてるんだよ。嬉しくないの？」

「いや、まあ、嬉しいけどさ……」

「箒の言う通りだ。喜べ、騒げ、そして気にするな。そうすりゃ勝ちだ」

「んな事言われてもなぁ……でも、あれは気になるぞ神威兄。かなり」

一夏が指差した物は、

「何で王座があんの？」

俺が視界に入れない様にしていた、張りぼて王座セット。

「一夏のためだ。きっとそうだ。お前があそこに座るんだ」

「いや、俺より神威兄「一夏だ。一夏に決まっている」……ぜってー違うと思う」

「私も兄さんだと思うよ？」

「……よし、俺はもう帰る。二人はタップリ楽しめ。じゃあな」

さっさと逃げようとするが――――

「はいはーい！新聞部でーす。話題の新入生、織斑　一夏君と漆月神威様に超！特別インタビューに来ましたー！！」

――――――――――――――ワアアア

なんか俺の前で膝をついてきた。

「……今日の主賓は一夏だろ。俺では無い筈だ。俺はついでだ」

「な、なんて深い思い遣り……噂以上の……」

……コイツ、重度の感染者だ。間違い無い。

「……では、失礼して。織斑　一夏君、代表に成った気持ちは？」

「え～……まあ、頑張ります」

「……それだけ？……セシリアちゃんは？何で辞退したの？」

「それは……お兄様と話し合った結果、辞退したのです」

居たのか、セシリア。

「話し合い？何て言ってたの？」

「お兄様は、一夏さんに大きく成長して欲しいと。これを糧とし強くなって欲しいと。そう、おっしゃっていましたわ……」

「な！？……織斑君、本当なの？」

「あ、はい。そうらしいです」

「……成る程、だから頑張るとしか言えないわけね」

黛は、何度も頷いていた。俺、若しかして致命的なミスしたのか？

「……私は新聞部。この話を、この美しい話を伝える義務がある！！」

しかも手遅れっぽい。

「最後に、写真を撮りたいのですが……よろしいですか？」

「……もう、好きにしてくれ」

「私の好きに……な、なんて大きな器……私、感激しました」

此処まで来たら、好きにさせようがさせまいが結果は同じだ。

「では……皆の集！」

黛が指を鳴らしたら、此処に居る全員が、王座の前で割れて膝をついた。

「あ、織斑君とセシリアちゃんは王座の右。箒ちゃんは左に立ってね」

「「「はい！」」」

三人は言われた通りに王座を挟んで立った。

「どうぞ、あちらに」

幽鬼の様な足取りで向かう。脳内ＢＧＭは　魔　王　だ。

「では……撮らせて頂きます」
俺が座った後、絶望の光が広がった。

◇◆◇◆◇◆◇

「楽しかったね、兄さん」
「……ああ、そうだな」
俺以外は、だ……
そう思いながらベットに堕ちる。
「兄さん、あの……」
箒は少し顔を赤くしながら、
「私、着替えるから……」
見るなとおっしゃった。

「オーケイ、後ろ向いてる」

「……うん」

何か言いたげな顔をしていたが、突っ込まない。色々大変な事になるからだ。

衣擦れする音が、耳に入る。その音を聞きながら、想う。箒は大きく成った。と。

俺達と別れてからの、空白の時間。如何過ごしていたのかは、大まかには聞いている。

だが、如何思っていたのかは、聞いてない。辛かったのか、苦しかったのか、解らない。

それでも、根が変わってない事は、嬉しい。

「兄さん、もういいよ」

「おう……ん？」

振り返り、箒を視界に入れる。

「その帯、新しいやつだな」

「あ、気づいたんだ」

嬉しそうに笑う。

「いつ買ったんだ？」

「この前の休みに、セシリアと買い物に行ったんだよ」
「その時に買ったのか」
「うん、似合うかな？」
魅せる様に、くるりと回った。
「ああ、良く似合う」
「えへへ、ありがとう兄さん」
嬉しそうに、ふにゃり、と笑った。
「さて、そろそろ寝ようか」
「うん、そうだね」
そして、俺の寝転ぶ隣に、いそいそと入ってきた。
「お休み、兄さん」
「お休み、箒」
そう言い合い、
「ん～……」
抱き枕（俺）を堪能しながら、

「すう……すう……」

即、寝た。俺はカーテンの隙間から見える月に、

「Ｉ　ｗｉｎ　！」

ガッツポーズをしてから、寝た。

◇◆◇◆◇◆◇

次の日の朝。

「ねえ、知ってる？二組の……」

「確か代表……」

ある話で持ちきりだった。

「兄さん、転校生だって……」

「お兄様、中国の代表候補生の事ですが……」

「神威兄、転校生だけどさ……」

俺の周りでもそうだった。

「「「どんな人か知ってる（ますの）？」」」

本気で訊いてる訳でもないのだろうが、一応確認しておく。

「……俺が知ってると思うか？」

まあ冗談だと返して――――

「うん」「はい」「おう」

――――本気だった。

「お前ら、俺を何だと思って……」

「兄さんだよ」「お兄様ですわ」「神威兄だぞ」

そういう意味ではない。

「……俺を何だと認識しているんだ？」

「兄さんだよ」「スペシャルですわ」「超人だぞ」

何でそうなる。訳解らん。特に箒、お前の中の俺は何なんだ？

「……あのなぁ、流石に今回はわからんぞ」

「「「え？」」」

何故驚く。

「おい、何だその反応は。第一中国の知り合いなんて……ん？中国？」

「「「やっぱり知ってた（ますの）？」」」

中国で年齢的に知ってる奴は一人しかいない。が、

「いや、違うな……」

「「「どっち（ですの）？」」」

流石に……無いだろ。

「まあ、そのうちにわかるか」

「あれ？」「自己完結」「したぞ」

焦る事は無いだろ。

「それで兄さん、知ってるの？」

「知らないのですか？」

「どっちなんだ？」

「ん？いや、俺が思い浮かんだのは……」

「「「思い浮かんだのは？」」」

「一年前に中国に行った鈴「やっぱり大哥にはバレちゃうのね」――――って、鈴！？」

振り返ると思い浮かんだ本人が居た。

「久しぶり、一夏、大哥」

一年前と、同じ笑顔で。

◇◆◇◆◇◆◇

そして昼。此処は食堂。

「それにしても久しぶりだな。元気してたか？おばさんも元気か？」

「もちろん元気よ。あんたこそ、元気だった？」

鈴はラーメンをズルズルと食べている。

「おう、元気だ。それで、いつ日本に帰ってきたんだ？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにＩＳ使ってんのよ。ニュース見てびっくりしたわよ？」

最近、食堂で食べる事が増えた。理由はセシリア対策の為だ。一夏の悲願でもある。

「ああ、俺もびっくりした。使えると思わなかったし。でも俺より神威兄の方がびっくりしなかったか？」

「あ、うん。びっくりした。凄くびっくりした。何か色々と凄かったしね。大哥はいつからＩＳ使えたの？」

「俺か？……いつだったか憶えて無いな」

「そうなのか？神威兄は「一夏さん、そろそろ此方の方との関係を説明して頂けます？」……あ、ああ。わかった」

お、もう参戦したのか。

「それで、どの様なご関係で？」

「鈴とは幼馴染の関係だ」

「……そうね。まだ幼馴染の関係ね」

お、何か棘々しいな。
「兄さん、そうなの？」
「ああ、箒が引越して直ぐに鈴が引っ越して来たな」
因みに俺と箒は安全圏。
「……一夏、その娘は？」
「篠ノ之　箒。前に話した事あっただろ？俺達が通っていた剣術道場の娘だ」
「うん、そうだよ。よろしくね？」
「こちらこそ、宜しく。……敵じゃなさそうね」
「ん？敵？鈴、敵ってなんだ？」
「一夏には……関係有るけど無い話よ」
「なんだそりゃ？」
やはり安全圏だ。
「ンンッ！……私（わたくし）の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生の凰　鈴音さん？」
「ゴメン、忘れてたわ。で、あんた誰？」

「兄さん、出し巻き一個貰っていい？」「ああ、いいぞ」

「な！？私(わたくし)をご存知でない！？イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！？」

「うん、全く。あたし他の国に興味無い……と言うか、そう言った事に全く興味無いし」

「箒、その鯖を少しくれ」「うん、いいよ」

「なっ……いいでしょう。私(わたくし)の名を刻んであげましょう。貴方の敗北で！……此方でも」

「おいしいね」「ああ、美味いな」

「あっそ。悪いけどあたしが勝つよ。だって強いもん。……こっちでも」

そう言って、二人は一夏を見た。

「ん？……俺が戦うのか？」

「「はぁ……」」

「……違うのか？」

「兄さんの味噌汁は何？」「なめこ汁」

「ま、いいわ。……ところで一夏、あんたクラス代表なんだって？」

「ああ、そうだぞ」

「箒のは何だ？」「私のは蜆汁（しじみ）だよ」

「あたしが見てあげよっか？ＩＳの操縦」

「鈴が？そりゃ助か「一夏さんのコーチは私（わたくし）がしております。貴方は要りません」……え？」

「味噌汁、少し貰っていい？」「ああ、いいぞ」

「あたしは一夏に言ってんの。関係無いのは引っ込んでてよ」

「私（わたくし）と一夏さんは一組、貴方は二組。関係無いのは貴方ですわ」

「俺も少し貰うぞ？」「うん、いいよ」

「そして、もうじきクラス対抗戦が有りますわ。今日の放課後、その特訓の約束をしておりますの」

「……あれ？そうだっけ？」

「おいしいね」「ああ、美味いな」

「ふーん……ま、いいわ。じゃあ一夏、それ終わったら時間空けといてね」

「お、おう？」

「じゃ、またね。大哥と……えっと、箒もね」
「おう」「うん、またね」
鈴はラーメンを完食し、去って行った。
「では一夏さん、放課後にタップリと特訓しましょう」
「お、おう？」
そして、セシリアに威圧される一夏。
「「ご馳走様でした」」
そんな中、俺と箒は安全平和に食べ終えた。

◇◆◇◆◇◆◇

放課後、俺はセシリアにしごかれた。

「今日は、これまでにしましょう」

「お、おう……」

疲労困憊の俺に対して、セシリアはけろりとしている。

「では、また明日、ですわ」

「お、おう……お手柔らかに、お願いします」

「ふふ、わかりましたわ」

そう言い、向こうのピットに去って行った。

「ふう、汗で気持ちわりぃ……」

タオルの一つでも持ってくれば良かった。顔に付く髪が鬱陶しい。

「一夏、おつかれ！」

腕で汗を拭っていると、鈴が入ってきた。

「はい、コレ！タオルとスポーツドリンク。ぬるいのでいいんだよね？」

「ああ、サンキュ。鈴」

久しぶりに会った幼馴染は優しさのスキルを持っていた。しかも欲しい物を二つ持っていた。感激だ。鈴と幼馴染である事に感謝しよう。誰に向けるわけでもないけど。

「……はぁ、生き返るなぁ……」

ぬるい飲み物の方が吸収率が高い。そして熱を持った身体にも優しい。逆に冷えた飲み物など自殺行為に近い。だが、神威兄は平気で飲む。ガブガブ飲む。

「変わってないね。若いのに身体の事ばっか気にするとこ」

「当たり前だ。今から不摂生したら癖になるだろ？後で泣くのは自分と自分の家族だ。なんで神威兄は解んないんだ……」

「あはは、そんなとこも変わってないね。何だかんだ言っても大哥を心配するとこ」

「う、うるせーよ……」

懐かしむ様に笑う鈴に、少しドキリとし、顔を背けた。

こいつ、こんな表情（かお）で笑ってたっけ？

「ねえ一夏、あたしが居なくて寂しかった？」

「え、ああ、そりゃそうだろ」

「そっかぁ……」

なんか安心した様な感じだ。

「遊び相手が居なくなったら誰でも寂しいだろ？」

「……そうだ、そうだった。一夏はこうゆう奴だった」

あれ？溜め息ついて肩を落したぞ？

「？……神威兄や楯無先輩も同じなんじゃないか？」

「いやいや、大哥や先輩は……え？先輩？」

今度は目が丸くなったぞ？

「先輩がここに居るの！？」

「ああ、居るぞ。知らなかったのか？」

「知らないわよ！」

怒られた。怒る程の事か？

「そういう事は早く言いなさいよ！！」

怒鳴られた。優しさのスキルはどこ行った。

「……まあ、いいわ。今夜、あんたの部屋行くから」

「へ？なんでだ？」

「色々積もる話もあるでしょ？大哥に返すモノもあるしね」

「俺と神威兄は部屋一緒じゃないぞ」

「え？そうなの？」

「ああ、神威兄の部屋は隣だ」

「ふ～ん……じゃ、個室なんだ」

「ああ、俺はな」

「……うん？俺は？」

「ああ、俺だけだ。神威兄は箒と同室だ」

「……は？」

鈴は口をポカーンと開けた。

「まあ、たぶん幼馴染だからじゃね？」

「そう……幼馴染だから、ね」

鈴は思案する様な顔になった。何考えてんだろ？

「とにかく、後で行くから。じゃあね！」

そう言い残し、去って行った。

「何なんだ？」

俺は訳も解らず見送った。

◇◆◇◆◇◆◇

「というわけだから、よろしくね」

「はあ！？」

夕食後、宣言通りに鈴が来た。そして、ここに住むと言っている。

「神威兄も何か言ってくれ！」

鈴が俺の部屋に来るので神威兄と箒が居た。お茶をいれ、完全くつろぎモードで。

「……何か」

全くやる気無く言った。凄くどうでもよさげに言った。

「そういう意味じゃねえ！！箒、鈴に何か言ってやってくれ！」

「ん～……鈴、荷物はそれで全部？」

箒は相変わらずだった。
「そうよ。あたしはボストンバッグひとつ有ればどこでも行けるからね。大哥のおかげでね」
神威兄、なんて事を！？
「そうなんだ。よかったね、鈴」
「ええ、ホントよかったわ。大哥様様ね」
ほんわかムードに入りやがった。
「で、いいよね一夏？」
だがそれも一瞬、すぐ押しかけに戻った。
「約束だってしたじゃん」
約束……あ、あれか？
「「約束？」」
「……うん、約束。憶えてる、よね？」
神威兄と箒の視線に、恥らう様にしていた。
「あれだろ？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――――」
「うん、うん！」

「――――奢ってくれるってやつだろ？」

「……え？」

あれ？なんか空気が止まったような感じがする。

「ちゃんと憶えてるぞ？俺に毎日無料で――――――――え？」

頬を叩かれた。いきなりの事で思考が停止した。箒も目をぱちくりしていた。

神威兄は、険しい顔をしていた。

「最っっっ低よ！！」

鈴の、涙混じりの怒鳴りに引き戻された。

「なんで、なんでちゃんと憶えてないのよ！！あんたなんか……犬に噛まれて死ね！！」

そう言い放ち、バッグを掴み、飛び出して行った。

「――――鈴！悪い箒、頼んだ！」

「うん！」

神威兄は、鈴を追い、駆けて行った。

「……一夏」

箒は、俺に向き直り、

「――――死んじゃえ！！」

部屋に有った竹刀で、俺を叩き伏せた。

◇◆◇◆◇◆◇

此処は屋上。

「全く、一夏君は本当に馬鹿ね」

「ああ、馬鹿だ」

「……っ……っ！」

神威君と、鈴ちゃんを挟む様にして座っている。

鈴ちゃんを見つけたのは偶然だった。

昨日、鈴ちゃんが転入してきた事を知り、今日、会いに行こうとして廊下でバッタリ会った。
そして、泣いていた。直ぐ後から来た神威君に事情を聞き、今に至る。

「どうしようかしら」

「流石に今回は、な……」

私の腕の中で、泣き続ける鈴ちゃんをあやしながら考える。
流石に今回は、弁護のしようが無い。と言うより、私も怒っている。

「少し、お仕置きが必要よ」

「そうだな……」

鈴ちゃんを泣かせた、一夏君に怒っている。

「一夏は、っ……あたしの事……っ」

私の服を握り締め、言おうとする事を、

「「それは無い（わ）」」

私達は、言わせなかった。

「――――っ！」

身体を一度、大きく震わせた。

「ねえ、鈴ちゃん……」
私は背中を撫でながら、
「仕返し、しない？」
そっと、呟いた。
「……ぇ」
鈴ちゃんは、会って初めて、視線を合わせてくれた。
「約束を破った一夏君に、仕返ししない？」
「……仕返し」
「ええ、仕返し」
私の問いに、少し巡廻する様に視線を漂わせ、
「……うん、する」
小さく、頷いた。
「ふふ、決まりね」
「……うん！」
少し覇気が、私の知る鈴ちゃんが、戻って来た。

「さて、如何しましょうか……ねえ神威君？」

そして、彼も巻き込む。

「……俺もか？」

苦笑する彼に、

「当然よ。ね？」

「うん、大哥も」

鈴ちゃんと結託し、畳み掛ける。

「……了解」

彼は両手を上げ、降参をした。

「……あ、大哥」

「どうした？」

鈴ちゃんはバッグの中からデータスティックを出し、

「これ……」

「ああ、約束だったな」

彼に渡し、その手を握った。

◇◆◇◆◇◆◇

月を見ながら、話を聴いてくれた。
手を握る大哥と、抱きしめてくれる先輩に、挟まれて。
あたしの為に、捌け口相手になってくれた。

「鈴……」

そしてあたしは、

「鈴ちゃん……」

やっと帰って来れた。

「「おかえり」」

ずっと来たかった、

「ただいま！！」

居たかった『場所』に帰ってこれた。そんな気がした。

◇◆◇◆◇◆◇

擦れ違い、重ならない二人。だが思いは違えど、想う事は同じ。

重なる為に、想いを吐き出す為に、ぶつかり合う。

もう一度繋がり、笑い合う為に。

呪は月を擁いて　第二十六話

『覚悟はいい？』

第二十五話　『ただいま！！』（後書き）

鈴、帰還しました。

さてさて、仕返しはどうなることやら……

第二十六話　『覚悟はいい？』（前書き）

嫌な時は飲むに限る！で、スタート。

第二十六話　『覚悟はいい？』

「……てな訳」

「……そうか、あの馬鹿者め……」

鈴と会った日の事を千冬姉さんに話した。酒を飲みながら。
今日は土曜。時刻は夜九時。此処は自宅。外泊届けも出して有る。
何も問題無い。

「それで、お前は如何するんだ？」

「……如何するんだろ」

夢織と鈴から何も聞いてない。因って何をするのかも判らない。
何をしたら良いのかも解らない。夢織もまだ何するのか決まってない、のかもしれないが。

「如何したら良いと思う？」

「私が知ってると思うか？」

「ですよね」

ホント、如何したら良いんだろか。

「ふふ、大変だな」
「千冬姉さん、変わるか？」
「遠慮しておこう」
「……ですよね」
レッド・アイを飲みながら考える。
「だが、神威はそれを利用する積もりなんだろ？」
「ん……まあね」
如何いった形にするかは、未だ決まってない。仕返しの内容が解らないと決めようが無い。
「何にせよ、今回は旨くやれよ」
「……おう」
前回は……ああ成るとは思わなかった。セシリアが感染した事も含めて。
なので今回は一夏の糧にする事だけにする。一応、鈍感さの改善も狙ってみるが……こっちは無理のような気がする。いや、無理だ。
「まあ、如何するかは明日次第か」
「明日？」

「明日は楯無と鈴に付き合う事になってる。憂さ晴らしだと思うけど」

内容はショッピングモールでの買い物。買い荒らす積もりだろうか？

「箒は居ないのか？」

「箒には一夏を扱いてもらってる。遠慮無しで」

口では無く剣で語れ。でやらせている。箒も怒っていたので二つ返事で了承した。

それに、一夏は考えて動くタイプでは無い。動く前は考えるが、動き出したら一直線。だから、今はその感覚を鋭くさせる方が良いだろう。

「打鉄の貸し出しも、その一環か？」

「おう。やるなら実戦に近い方が良いしな」

グビリと飲みながら答える。

「そうだ、例の件だが」

「ん？」

「受理しといたぞ」

「お、マジで？サンキュ。……あ、無くなった。次は少し塩でも入れようかな？」

空になったグラスを揺らしながら呟く。
「ついでに私の分も持ってきてくれ」
「あいよ」
冷蔵庫を開けて取り出して、いそいそと作る。
「お待たせ」
「おう、待たされた」
ビールを渡し、同じにグビリ。
「うん、タバスコが良い仕事している」
作ったレッド・アイを自画自賛した。だって美味いし。
「塩じゃなかったのか？」
「タバスコが目に入って、つい入れた」
今の俺には、塩よりタバスコの方が魅力的だ。
「どんな感じなんだ？」
「飲んでみる？」
「そうだな、一口貰おう」

千冬姉さんはグラスを受け取り、一口飲んだ。

「……成る程。まろやかな口当たりの後に辛味が効いて、洗い流す様な感じか。これはこれで良いな」

「美味いだろ？」

「ああ」

この晩、酒が尽きるまで酒盛りが続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「じゃあ、次はコレで」

「……おう」

「ねえ先輩、ソレの方が良いんじゃない？」

「……」

今日は日曜、此処はショッピングモール。
「ん～……でもソレだと下との組み合わせが……」
「あ、ホントだ。なんか合わない……ん～」
「……」
俺は、夢織と鈴の着せ替え人形と成っていた。
「あ、このアクセも着けようかしら？」
「でも形がイマイチじゃない？……コッチの方が良いんじゃ……」
ついにアクセサリーが入り始めた。服だけで良いと思う。てか服だけにしてくれ。
「神威君はどっちが良いと思う？」
「……どっちでも良いんじゃね？」
「ダメ！ちゃんと選んでよ、大哥」
「……じゃあ、コッチ」
「コッチかぁ……じゃあもう一回、服を選び直しね」
「うん、じゃあ今度は向こうから見ていかない？ほら、大哥も！」
「……おう」

さっきからこんな感じだ。最初は二人が自身の服を選んでいたが、終わったら「「次は神威君（大哥）の番ね」」でこうなった。
選び出した直後はもっと意見を言っていたんだが、とても面倒に成った。言っても無駄だったし。
一緒に出掛ける事はご無沙汰だったので軽い気持ちで了承したのだが、少し後悔している。と言うか、こんな約束をした過去の自分をボコッてやりたい気分だ。エイリアルコンボを決めてやりたい。俺式無限闘舞を存分に喰らわせたい。そんな気分だ。

「ねえ神威君、ドッチのシャツが良い？」

夢織は右に白地のシャツを、左に黒地のシャツを持っていた。

「……右」

理由は先に目に入ったからだ。

「先輩、右だとズボンに合わないわよ？」

「……もう適当で良くね？」

悲願に近い要望である。もうかなりの時間、コレの繰り返しだし。

「「ダメよ」」

「……左様で御座いますか」

解ってた、解ってたよ。俺、本当は解っていたよ。訊いてみたかっただけだ。在りもしない希望に縋ってみたくなっただけなんだ。

「もうちょっと待ってて」
「先輩、次はアッチのを……」
こいつ等のちょっとは何十分なのだろうか？
「……あ、アレが良いわね」
「でも、アレだと……」
なんで二日酔いに成ってくれなかった、俺の体……
そんな事を思いながら、二人の後に続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

買い物を終え、私達はカフェで寛いでいる。
「ん〜〜〜満足したわ！」
「ホントホント！大満足よ！」

「……だろうな、お前等は」

本当に満足した。神威君には、目に付いた服を片っ端から着てもらった。

そして、私達が気に入った服を贈った。

「でも良いのか？結構高かったんじゃないのか？」

「いいのよ、去年も一昨年も何も贈れなかったんだから」

「あたしは今迄の分のお礼も含めて、だから受け取ってよ」

これは、遅れに遅れた誕生日プレゼント。二年分を籠めた贈り物。

そして鈴ちゃんのお礼も籠もっている。貰ってくれなくては。

「解ったよ、貰っておく。ありがとな、二人共」

「「どう致しまして」」

お礼を言う私達に、彼は何か考える仕草をし、

「……俺も、何かお返しをしないとな」

嬉しい事を言ってくれた。

「別に良いわよ？気持ちだけで」

「うん、あたしも」

これは本心。私達は、かなり楽しんだ。彼の色々な格好を見れて満足している。

「そうは行かないだろ。俺は何も贈ってないんだし」

「ん～……じゃあ次の時に、ね？」

だが、彼の気持ちを無碍にしない。次のデートの予約も出来るから。

「今じゃなくて良いのか？」

「ええ、次の方が良いわ」

此処だけは譲らない。幸せな時間を減らす訳にはいかない。

「あたしは遠慮しとくわ」

「いいのか？」

「うん、あたしは逆に足りないぐらいだし。だから、先輩と二人で楽しんできてよ。ね？」

ナイスよ鈴ちゃん。

「……解ったよ」

「「イェ～イ！」」

鈴ちゃんとハイタッチ。片思い同盟の絆は錆びれてないわ。

「……で、そろそろ本題に移っても良いと思うんだが？」

彼はコーヒーを飲みながら、さっさと本題に入れと言ってきた。

「そうね、鈴ちゃんも良いかしら？」

「うん、いいわよ」

彼の言う本題は仕返しの事。私にとってはどれも本題本命だけれども。

「それで、如何するんだ？」

「幾つか考えて有るんだけど……」

仕返し方法は幾つか有る。だが案を出す前に、

「……鈴ちゃんは如何したい？」

鈴ちゃんの希望を訊く。

「あたしは……」

鈴ちゃんは少し考えてから、

「……一回ガツンとやれればいいかな。何時までもこの儘なのは、嫌だし」

そう言った。詰まり、後腐れ無くしたい。そういう事だろう。

そうなると選べるのは、

「鈴ちゃん、精神的に痛いのと肉体的に痛いの。どっちが良い？」

直接本人が、鈴ちゃんが仕掛けるものになる。

「う～ん……」

「私は――――――――精神的にも肉体的にも痛いの。を勧めるわ」

「おい、最初の選択肢にねえぞ」

悩む鈴ちゃんに、私個人のお勧めを付ける事も忘れない。彼が何か言っているが、聞こえない。気にしない。

「……じゃあ、精神的にも肉体的にも痛いので」

「そしてそれを選ぶのか」

流石は鈴ちゃん、解っている。彼がまだ何か言っているが、全く聞こえない。気にならない。

「ふふふ、了解よ。で、その方法だけど……」

彼の方を向き、

「神威君の協力が必要ね」

「大哥の協力？」

「ええ、そうよ」

彼を混ぜた。先程から何か言っているのは、話に入りたかったのだろう。きっとそうだ。

「何させんだよ……」

凄い嫌な表情(かお)をしているが、協力する事を了承している。だから、逃がさない。

そして、一夏君に教えてあげなければならない。

「ふふ、それはね――――」

女を怒らせると、怖いって事を。

◇◆◇◆◇◆◇

五月。鈴を泣かせてから、数週間が経った。俺は未だ、謝れずに居る。

鈴は、食堂で会っても廊下ですれ違っても、露骨に避けている。ただ神威兄には、普通に接しているが。
鈴が泣いた訳を神威兄に訊いても「自分で気づけ」の一点張り。教えてもらえない。
箒は、何か察しているみたいだ。だが何も言わない。目で責めてくるだけだ。

「……」

今もそうだ。俺に目で訴えている。

俺が悪い事は、もう解ってる。流石に理解できた。だが悪い理由。何処が、が解らない。泣かした理由を見つけなければ謝れない。謝っても意味が無い。そう思い、今に至る。

「……一夏さん、聞いてますの？」

「――――え？」

「来週にはクラス対抗戦が始まりますわ。明日にはアリーナの調整が始まり、使えなくなるのです。今日で実質特訓は最後ですよ？その様な有様では困りますわ」

「あ、ああ。悪い……」

首を振り、持ち直す。

「最近、ボーっとする事が多いですわ。体調が悪いのですか？」

「いや、大丈夫だ」

目の前にある、第三アリーナのピットの入り口へ歩きながら返事を返す。

今は特訓だ。鈴の事は、特訓が終わってから……

そう思いながら、ドアのセンサーに触れた。ドアが開くと、そこには、

「待っていたわよ、一夏」

腕を組んだ、鈴が居た。

「何故、此処に居るのですか？まさか、盗み聞きでもする積もりですの？」

セシリアは鈴に棘々しく言った。

「ただの宣戦布告よ。あんたは黙っててくれる？」

対する鈴は軽くいなし、

「それで一夏、反省した？」

俺に問い掛けてきた。

「ああ、反省はした」

悪い事をした。とは思っている。
「反省はした……か」
「でも、まだ謝れない」
「なんで？なんで謝んないのよ」
「まだ理由を見つけてない。だから謝れない」
ただ謝るだけでは、駄目な気がする。
「ふ～ん……」
目を細くして俺を見て、
「ま、いいわ。邪魔したわね」
出て行こうとして、
「あたしも特訓が有るしね。大哥と」
そう言った。見せびらかす様に。
「神威兄、と……？」
「そうよ。大哥はあたしと特訓してたのよ。知らなかったの？」

知らない
「特訓自体は終わってるけど、最終調整が有るからね」
全く聞いてない
「大哥のＩＳの装備、貰っちゃったし」
なんだそれは
「じゃあね、一夏」
そう言い、鈴は去って行った。
「それ程の事なのかよ……」
俺は拳を作り、握り締めていた。
「……一夏さん、今は特訓に集中しましょう。何にせよ戦うことには変わりありませんわ。それに、お兄様が何の考えも無しに手を貸すとは思えませんわ」
「……そうだな。ありがとう、セシリア」
「どう致しまして、ですわ」
ただ、この時俺は、
「じゃあ、今日も頼む。セシリア、箒」

「ええ、お任せください」

「……うん、わかった」

後悔と、向けようの無い怒りが在った。

◇◆◇◆◇◆◇

試合当日。

大型モニターに、対峙する一夏と鈴が映る。

「で、漆月、篠ノ之、オルコット、何故此処に居る」

此処は第二アリーナの制御室。目の前に千冬姉さんと山田先生が居る。

「俺がモニター室に入ったら、俺が酷い事に成ったので此処に来ました」

千冬姉さんの質問に、嘘偽り無い本音を言う。決して出任せでは

無い。本当の事だ。

「……いいだろう。ただし騒ぐな。いいな？」

「「「はい、ありがとうございます」」」

若干、労わりの入った視線だったが、気にしない。俺の心の平穏の為に。

＜それでは両者、規定の位置まで移動して下さい＞

アナウンスが入った。試合開始まであと僅かだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「……逃げずに来たわね」

目の前に居る一夏に、不敵に言ってやる。

「……当たり前だ」

一夏は、苛立ちを含んだ返答をした。

「で、あたしが怒る理由は解った？」

「いや、まだだ……けど」

「けど？」

「今は、関係無い」

むかっ。なによそれ……

＜それでは――――＞

「……そう、なら。叩き潰して、這い蹲らせて、平謝りさせてやるわ！」

「……じゃあ、俺が勝ったら、教えて貰うぞ、神威兄の事を含めてな！」

お互いに一基、武装を出し、

＜――――試合開始して下さい＞

「「はあああぁぁぁ！！」」

試合開始のブザーと共に、ぶつけ合った。

「初撃を防げたんだ……愚鈍のくせに」

「鈴こそ……チビのくせして」

そして、言葉でもぶつけ合う。

「でも、甘いわ！！」

双天牙月をもう一基出し、下から撃ち付ける。

「くっ……！！」

一夏は、挟むような斬撃を身を捩り避けた。が、

「本命はコレよ！！」

「ぐ、があ！？」

見えない拳で、殴り飛ばした。

◇◆◇◆◇◆◇

アリーナの壁に、叩き付けられた一夏さんが映る。

「……衝撃砲」

「セシリア、衝撃砲って何？」

私（わたくし）の呟きに、箒さんが問い掛けた。

「空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、余波で生じる衝撃自体が砲弾に成り、撃ち出す……私（わたくし）のブルー・ティアーズと同じ、第三世代の兵装ですわ」

「そうなんだ……兄さんは知ってたの？」

「ああ、鈴から聞いた」

やはり、お兄様は知っていた。それも対戦相手から直接聞いたと言った。

「……お兄様」

そしてお兄様に、

「なんだセシリア？」

「コレは、一夏さんの為ですの？」

ずっと思っていた事を訊いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「へぇ……起き上がれるんだ」

「ああ……大した事ないからな」

これは強がり、実際は効いている。

「でも、これで解ったでしょ？あたしのＩＳも絶対防御を突破して本体に直接ダメージを与えられる攻撃力を持つって。さらに、あんたのと違ってシールドエネルギーを使わない。燃費良いわよ？あたしの甲龍（シェンロン）は」

「ご丁寧にご説明どーも、随分詳しいな？」

やたら雪片の事を詳しいが、情報源は、

「雪片の事は、大哥に教えて貰ったからね」

やはり、神威兄だった。

そして、鈴の俺を見る視線。まるで捨てられた者を見る視（め）線が、イラつく。

「じゃあ、一夏……」

鈴は、二つの青龍刀の柄頭を繋ぎ、

「覚悟はいい？」

回し、構えた。

「……本気で行くぞ！鈴！！」

「はんっ！格の違いを教えてあげるわ！！」

俺達はまた、ぶつかり合った。

◇◆◇◆◇◆◇

自分の怒りを、想いを、ぶつけ合う二人。

重なる間（ま）は、突然の乱入者により、壊される。

だが、向ける先が同じならば、思う事も同じに成る。そして――――

呪は月を擁いて　第二十七話

『月が隠れる位置は何処？』

第二十六話　『覚悟はいい？』（後書き）

夢織＆鈴とショッピングゥ！んで、作戦会議。
そんで仕返しのジャブ開始。
箒の視線で居た堪れない感じになってます。
ちなみに、一夏がイラついているのは捨てられた経験が有るからです。
鈴の「あんたより、あたしを選ぶのよ！」視線でプンプンです。
ブラコンに良く効くジャブです。そしてストレートは……なんでしょね？

セッシーが薄いので、ちと入れましたが……薄い！何故だ……ｏｒｚ

誤字を修正しました。

第二十七話　『月が隠れる位置は何処？』

「成る程、そういう事ですの……」

やはりお兄様は、一夏さんの事を確りと考えていた。

箒さんが特訓に参加した時から、疑問に思っていた。

特訓に参加した理由はあやふやで。特訓が始まれば苛烈な攻め。何かを狙っているようだった。

ＩＳの操縦タイプは、大きく分けて二つ。

一つは、ＩＳ動作の理論を理解し、的確なイメージで操縦するタイプ。

もう一つは、ＩＳ操作を身体で理解し、感覚で操縦するタイプ。

一夏さんはどちらかと言えば、後者の感覚で操縦するタイプだ。

これまでの特訓は、先ず私（わたくし）が動作説明をし、その後に実践を行（おこな）った。

箒さんを含む実践は、考える暇を与えないものに成った。容赦無しの責めに近い攻め。

一夏さんに聞こえないように非難したが、お兄様の指示と聞いて矛を治めた。

納得は出来なかったが、何か狙いが有る事は解った。

そして今、その狙いが解った。ただ、やり方が酷だと思うが。

「……本当に、大切なのですね」
「……さあ、如何だかな」
おそらく、照れ隠しなのだろう。
「少し、羨ましいですわ」
「……一夏が、か？」
「はい、そうですわ」
私（わたくし）には、そこまで想ってくれる家族は、もう居ないのだから。

◇◆◇◆◇◆◇

「よくっ！付いて来るわねっ！！」
「はっ！舐めんなっ！！」
一夏は、かなりの速度で回す双天牙月を、捌いている。
そして、上手く立ち回っている。

「こ、のおぉ！」

「んな、くそぉお！」

衝撃咆が避けられた。唯一の死角が解っているのだろう。

衝撃咆自体に死角は無いが、あたしが死角を作ってしまっている。

「離れ、ろぉ！」

「嫌だ、ねえ！」

あたしが持つ双天牙月が、その死角。

衝撃砲は身体から撃つ。だが、一夏との間に双天牙月が有る。因って、中々撃てない。

「この、変態ぃぃぃ！！」

「誰が、変態だああ！！」

それなら、大きく薙ぐ様に、

「はあぁぁ！」

「そんな大振り――――！？」

見せ掛け、大哥に貫ったアレを撃った。

◇◆◇◆◇◆◇

撃ち出されたモノを、咄嗟に左腕で受けた。

「コレは……」

神威兄が、セシリアと戦った時に使った、モノだ。

鈴に視線を戻すと、腕に青のラインがあった。

「何ボーっとしてんのよ！」

「は――――――がぁ！？」

また、見えない拳で吹き飛ばされ、壁に叩き付けられた。

「ぐ、く……お！？」

左腕が引かれ、鈴の方へと引き寄せられた。

鈴は青龍刀を振りかぶり、

「くらえっ！！」

思いっきり、投げた。

「うおおぉぉ！！」

俺は、なんとか避ける事が出来た。が、

「一夏、よく見なよ」

青龍刀の通った後に、ワイヤーがあった。

そして、ワイヤーは、

「後ろ、危ないよ？」

鈴へと、引き戻されていた。

「くそおお！！」

振り向き、雪片弐型を振り、青龍刀を弾くが、

「後ろ、見せない方が良いよ」

背中を撃たれ、吹き飛ばされた。

◇◆◇◆◇◆◇

「順調ね、鈴ちゃん」

手を止め、モニターを凝視する。

「会長、手を止めないで下さい」

「……わかったわよ」

だが、生徒会会計であり幼馴染でもある布仏（のほとけ）虚（うつほ）ちゃんに叱られ、手を動かす。

「頑張ってね、楯無会長？」

「ぐ、ぐぐぐ……」

副会長の麗さんが激励するが、喜べる訳が無い。怒りが募るだけだ。

今、処理しているのは、麗さんが起こした事の始末書。

アリーナの客席を指定席として売ろうとしていた二年生。さらに、その者達が教員にばれるかどうかの二重の賭博をしていた。親元は当然ながら麗さん。結果は、ばれた。

ただ、見つけた教員が織斑先生だったので、始末書を書く羽目に成った。係わった人数と同じ枚数を。

「私は無関係なのに……」

「会長、残念ながら副会長が係わったので生徒会が企画したと見られました。諦めて下さい」

「そう言う事よ。そして、始末書は副会長の私が書くわけにはいかないのよね、残念ながら。だから頑張ってね？」

怒りで、憎しみで人が殺せたら……！！

「会長、手が止まってます」

「早くしないと試合が終わるわよ？」

「わかったわよ。書けば良いんでしょ、書けば……」

コレ終わったら、愛しの彼に会いに行こう、そうしよう……

「……？別の書類が紛れ込んで……え？」

神威君が茶道部に入部……生徒会に引き込む予定が……パー！？

◇◆◇◆◇◆◇

「粘るわね……」

「当然、だあ！！」

鈴はワイヤーに繋いだ儘の、回った儘の青龍刀を振り回し、ぶつけてくる。

隙だらけの攻め方だが、その隙を衝撃砲が無くす。そのお陰で近づけない。

左腕に繋がれるワイヤーを斬ろうとしても、

「そこ」

「ちっ！」

邪魔される。だがワイヤーを左手で握る事で、僅かな振動を感じ取る事が出来て、何と無く攻めのタイミングが解る。が、捌けない攻めが有る。

「もう、いい加減に……」

青龍刀を手に戻し、

「落ちてよ！！」

投げつけてくる、この攻めが捌けない。

「くそ、がああ！！」

引き寄せられながら青龍刀を弾き飛ばすが、

「あぐっ！」

その直後を撃たれ、地面に叩き付けられた。

◇◆◇◆◇◆◇

「くそ……」

一夏は、辛そうに立ち上がる。

倒れてればいいのに……

そうすれば試合が終わる。

ガツンと言って、殴って、終わりなのに……

「なんで、立つのよ……」

「勝ちたいからに決まってんだろ」

何よ、それ……

「それに、勝てば解るだろ……」

何が解るのよ……

「お前を、泣かせた訳が、解るだろーが！」

……え？

「一夏、あんた――――！？」

あたしの言葉を遮る様に、落雷が落ちた様な音が響いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「何だ、何が起こった！？」

轟音と共に『何か』が落ち、煙が上がった。

≪一夏！試合は中止よ！直ぐにピットに戻って！早く！！≫

鈴がプライベート・チャンネルで叫ぶと同じに、ハイパーセンサーが警告を伝えてきた。

「――――鈴！危ねえ！！」

ワイヤーを全力で引き、

「え――――きゃっ！」

飛んできた鈴を抱きかかえた。

「間に合って良かった……」

鈴の居た所を、熱線が走っていった。

「アレは……」

「……ＩＳよ」

煙が晴れて在ったのは、人の姿をしてない、人が操縦しているとは思えないＩＳだった。

≪織斑くん！凰さん！直ぐに脱出してください！！≫

山田先生がプライベート・チャンネルで退避しろと言ってきた。

「鈴」

「……何よ」

俺はチラリと客席を見てから、

「逃げられるか？」

鈴に問い掛けた。

「……逃げられる訳無いじゃない。それと、離せ！」

「ああ、悪い――――っとお！？」

鈴を離して直ぐ、俺達の間を熱線が通った。

≪直ぐに先生達がＩＳで制圧に行きます！だから二人は脱出してください！！≫

焦っるように言う山田先生に、

「いや、先生達が来るまで俺達で食い止めます」

「先生は他の生徒の避難をして下さい！」

俺と鈴は武器を構えながら断った。

≪だ、ダメですよ！生徒にもしもの事があったら――――≫

山田先生の言葉を無視して敵に集中する。

突進してくる敵に、俺は右に鈴は左に避け、ワイヤーに引っ掛けようとしたが、避けられた。

「あんた、武器はそれだけなんでしょ？」

「ああ、そうだ」

振り向き、対峙しながら、言葉を交わす。
「あたしが援護してあげるから、突っ込みなさいよ」
「俺は猪かよ……」
「猪の真似以外出来るの？」
「……いや、出来ねえ」
「じゃあ、いいわね？」
「……おう」
「それと……」
鈴は俺の左腕に付いてたモノを外し、背中に取り付けた。
「危なくなったら引っ張ってあげるから」
「その時は任せた」
「任せれたわ――――行くわよ一夏！！」
「おう！！」
そして、俺達は翔け出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「織斑くん！凰さん！聞いてますか！？」

山田君は必死に、一夏と凰に掛け合っていた。だが、

「……山田先生、やらせるしかないだろう」

今は、二人の集中力を切らせる訳にはいかない。

「で、でも「これを見ろ」……え！？遮断シールドがレベル４！？扉もピットも全部ロック！？こ、これってあのＩＳが！？」

そう、今は何も手出しが出来ない。

「ああ。今は、二人には耐えてもらうしかない」

だから、集中力を切らせる訳にはいかない。

「そんな――――」

「……山田先生、質問があります」

山田君を遮る様に、神威が質問をした。

「俺達もこれから避難しますが。もし、避難途中に動けない生徒を見つけたら、助けても構わないですか？」

動けない生徒――――

「え？そ、それはもちもん構わないです！むしろ見捨てちゃダメですっ！！」

「わかりました。それでは失礼します」

「「失礼します」」

――――まさか！？

「漆「ちゃんと避難してくださいねー！」……遅かったか」

取り合えず、山田君には黙っていてもらおう。

「山田先生」

「は、はい！なんですか！？」

「貴方は少し落ち着いた方が良い」

「え、で、でも「このコーヒーでも飲んで落ち着け」……あ、あの、今それ「どうぞ」……塩を入れて「飲め」……い、いただきます」

「熱いので一気に飲むといい」

「え、ええ～「何か言うのなら、飲み終わってからにしてくれ」……そ、そんなぁ」

これで暫く黙るだろう。

だが、こんな時に……

現在システムラックには、ほぼ三年の生徒がやっている。本来やるべき教師が、今は居ない。

教師の殆んどは、アリーナ調整に休日を潰し、今はその代休で居ない。

この時を狙った様な……！

「――――山田先生、生徒会長の更識　楯無に連絡を」

「……え、まだコーヒーを「至急、連絡を！」――――は、はい！」

全く、何時までコーヒーを飲んでいるんだ。

「さ、更識さ～ん……うぅ」

◇◆◇◆◇◆◇

「……解りました」

涙目の山田先生からの通信を終えた。

今、此処に居るのは私と虚ちゃんだけ。

麗さんは避難箇所に行ってもらった。そこで騒ぎが有った時の為の保険だ。

「虚ちゃん」

「はい、解ってます。お嬢様」

依頼された内容は、襲撃してきたモノの痕跡。その足跡が無いか調べる事だった。

「行くわよ」

「はい」

足跡を探す為に、私達は生徒会室を飛び出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「くっ、また！」

一夏はまたもや斬撃を外した。

「一夏！来なさい！」

「う、おおっ！？」

一夏を引き、衝撃砲を撃つ。

「……また防がれた」

だが、これまでと同じく防いだ。

一夏の斬撃は、全身に付いているスラスターを噴射し、瞬時に離脱する。

あたしの砲撃は、腕を振り回し、防がれる。

「なあ鈴。なんかあいつ、機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ？」

「人から感じるモノが……無い」

「……何が言いたいのよ」

「あいつ、ホントに人が乗ってるのか？」
「……ＩＳは人が乗ってないと動かないわよ」
そう一夏に答えつつも、否定しきれない。
一夏は四回避けられ、あたしは七回防がれた。
寸分違わぬ行動、体勢を崩しても関係ない機動。人の出来る動きじゃない。形からしても、人が乗っているとは思えない。
「仮に人が乗ってない無人機だとしたら、如何なのよ」
「全力で行ける」
「当たらないのに？」
「次は当てるさ」
一夏は、自身満々の表情（かお）で言い切った。
「……へぇ、言うじゃない。何か案が有るの？」
「ああ、有る」
「そ。あたしは如何したら良い？乗ってあげるわよ」
何にせよ、作戦案が有るならやるべきだ。
「全力で衝撃砲を俺に撃て」
「はあ！？」

だが、作戦と呼べる物では無かった。
「その勢いで、跳ぶ」
「……本気？」
これは博打に近い。衝撃砲を利用し敵のスピードを超える。というもの。
「ああ、本気だ。乗ってくれるんだろ？」
「わかったわよ。全く……」
「じゃ、早速――――」
始めようとしたが、
＜一夏っ！＞
呼び止められた。
「――――箒！？」
誰も居ない筈の中継室に、笑っている箒が居た。

◇◆◇◆◇◆◇

＜兄さんから伝言だよ！＞

神威兄から？

＜太陽が私、地球が相手＞

敵の視線が箒に向いた。

＜じゃあ、私から……＞

敵の腕が上げらてゆく。

＜月が隠れる位置は何処？＞

敵の腕が上がりきる前に、

「鈴！撃てえ！！」

「言われなくても！！」

俺は、爆発的な瞬間加速（イグニッション・ブースト）で跳んだ。

「おおおぉぉぉぉお！！」

そして、敵の右腕を斬り、飛ばした。

「――――ぐっ」

だが、残った左腕で、首を?まれ、

「一夏っ！」

掌に熱を感じ始める。が、

「如何だ?神威兄」

「完璧(パーフェクト)だ。一夏」

俺達の方が早い。

「合わせろセシリア！！」

神威兄の割れた盾と、

「お任せ下さい！！」

セシリアのビットと狙撃銃の無数の光線が、敵を焼いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、一夏！？」

落ちる一夏を慌てて引き上げる。

「よ……っと」

一夏を抱きとめ、様態を見るが、

「……気絶してるだけ？」

大きな怪我は無さそうだった。

散々あたしに吹っ飛ばされて、さらに最大主力の龍砲を受けた筈なのに。

＜凰、織斑をAピットに運べ。担架を用意して有る。それに寝かせろ＞

千冬さんの言葉に従い、Aピットに向かった。

「全く、無茶して……」

一夏の顔を見ながら――――

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

怒りが鎮火すれば、後は言葉で交わすだけ。
だが、交わした約束が果たされるかは、分からない。
そして、影に潜むモノも、まだ判らない。

呪は月を擁いて　第二十八話

『……違う、気がする』

第二十七話　『月が隠れる位置は何処？』（後書き）

初、オリ主サイド無し。
そしてストレートは、まだだ！

ブラコン千冬は無敵に素敵に。
夢織は前回に良い思いをしたのでｗ
マヤヤンは、いじられてこそ魅力が……！！

第二十八話　『……違う、気がする』（前書き）

いっちーのお目覚めです。

第二十八話　『……違う、気がする』

白い……天井？

「起きたか」

……千冬姉？

「もう放課後だぞ」

……神威兄？

「俺、なんで寝て、るんだ……？」

頭がはっきりとしない。靄（もや）が掛かったような感じがする。

「気絶したからだ。憶えてないのか？」

「……気絶？」

「俺とセシリアがＩＳを撃った後、直ぐに気絶したぞ」

そう言われれば、そんな気が……

「具合はどうだ？」

「……具合？」

「お前の身体の具合だ、寝ぼ助」

「……なんか、いてえ」

それも彼方此方（あちこち）が。

「凰の攻撃を彼方此方に受け、最大主力の衝撃砲を背中に受けたんだ。当然だろう。怪我は背中を除き、軽い打撲が殆んどだ。背中は内出血する程の打撲だがな」

確かに、背中が一番痛い。

「お前、瞬間加速に鈴の衝撃砲を利用しただろ？しかもＩＳの絶対防御をカットして。普通、死ぬぞ？よく死ななかったな」

……そんな事、したっけ？

「……何にせよ、無事で良かった」

あ、この顔……

「全くだ。一夏、二度とすんなよ？」

二人の、この表情は……

「――――うん。心配かけて、ごめん」

――――安堵だ

「……今は、休め。動けるようになったら、自室に戻り、確り休め。いいな？」

「うん……」

「荷物は此処に置いておくぞ。後で迎えが来るからな？それまで寝てろ」

「うん……」

なんか、凄く眠くなってきた

「千冬姉、神威兄……」

「「なんだ？」」

「……少し、寝る」

二人は小さく笑い、

「「お休み、一夏」」

俺は心地良く、

「うん、お休み……」

目を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇

あたしの前に一夏が居る。

「幸せそうな顔しちゃって……」

ただ、スヤスヤと寝ているが。

「どんな夢見てるのよ」

小さく聞いてみるが、当然返事は無い。

「全く、人の気も知らないで……」

そう言いつつも、頬が緩むのが解る。

理由は一夏の寝顔。しかも、こんな寝顔は見た事が無い。だから、

あたしは、

「撮り合えず一枚」

つい、携帯のカメラで写真を撮ってしまった。

「うん、良く撮れてる」

去年、あたしは一夏達と別れる時に写真を撮った。この一年、あたしを支えてくれた写真に成った。それから、残して置きたいモノは写真に収めるようになった。この前、大哥と先輩と出かけた時も、三人で写真を撮った。

今、目の前の寝ている一夏も、残して置きたいものだ。

「あ……！！」

そして、写真を撮った事で、閃いた。

あたしは、一夏に覆い被さり、横に携帯を構えた。そして、ゆっくりと近づき、

「ん……鈴？」

もう一寸の所で、失敗した。

◇◆◇◆◇◆◇

起きると、目の前に鈴の顔があった。
「……何、してるんだ？」
「にゃ、何もしてないわよ！」
鈴は顔を赤くしながら、素早く離れた。
「なら、なんで近くにいたんだ？」
「え！？……け、怪我の様子をよく見る為よ！」
怪我の様子？変な言い回しだな。それに、随分と焦った感じだ。
何でだ？
「……俺の容体って事か？」
「そ、そうよ！」
焦ってたから間違えた、のか？
「そっか……ん？その携帯は？」
鈴は、俺の質問に、手をバタバタと忙しく動かしながら言った。
「こ、これは！……い、一夏の様子を大哥に伝えようとしたのよ！」
神威兄に伝える程に心配かけたのだろうか。なんか悪い気がする。

「……悪いな、心配かけたみたいで」
「い、いいわよ。……気にする程の事じゃないわよ。ホントに」
安心するような溜め息だった。
そこまで心配していたのか？大した怪我じゃないのに……
「あ、試合……どうなったんだ？」
「……無効よ、あんな事あったし」
無効か。そうなると……
「……泣かした理由、訊けないか」
「……それは」
鈴を泣かせた訳を、訊けなくなる。
「約束は……料理の腕が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？……で合ってたと思うんだよなぁ」
「もういい……へ？」
中一の時に、そう約束した。そう思っていた。
「なんか、毎日味噌汁を～……みたいな感じだったけど……」
ただ、鈴の家が中華料理店だったので、毎日無料で酢豚を食える

と思い直した。

「え、一夏、あんた……」

「……やっぱ違ったんだよな。きっと「ちゃんと憶えてるじゃない！！」――――おごっ！？」

な、殴られた！？グーでスクリューに殴られた！！神威兄にも殴られた事無かったのに！？

「なんでちゃんと言わなかったのよ！！」

「……え？怒ってた理由って、もしかして……それ？」

ズキズキと痛む頬を擦りながら訊く。

「そうよ！それ以外何があるのよ！？」

つまり、言われたとおりに言わなかったから怒った、のか？

「……すみませんでした」

何にせよ、漸く謝れた。

「全く！……怒り損したじゃない」

「……本当にすみませんでした」

心から謝罪した。

「で？答えは？」

顔を先程より赤くして逸らし、視線だけを俺に向け、訊いてきた。

「いいぞ」

「ほ、ホントっ！？」

鈴は弾かれた様に俺を見て、

「ああ、鈴の店の酢豚は美味いからな。毎日無料で食えるなんて断る訳な「なんでそうなるのよ！？」――――ぐおっ！？」

俺の顎をガゼルなパンチで打ち上げた。

「二回も、二回も殴った！？」

「殴るわよ！！」

「な、何故！？約束は合ってたんだろ！？」

「約束だけが合ってたのよ！！」

約束だけ？まさか、

「……若しかして、毎日味噌汁を～……か？」

本当に、これなのか？

「……もし、そうだったら、如何なのよ」

鈴は不貞腐れた様に顔を背け、視線だけを俺に向けた。顔を真っ赤にしながら。

「……約束しちまったし、応えるさ」

約束は守るべきだ。そう思うが、

「……はぁ。それで、あたしが喜ぶと思う？」

相手が喜ぶか？と訊かれれば、

「……いや、思わない」

喜ばないと思う。

「……やっぱり、一夏は一夏の儘か」

鈴は、苦笑するような、困ったような、怒ったような顔をした。

「如何いう意味だ？」

「その儘の意味よ」

意味が解らない。俺が俺以外に居るのか？

「まあ、いいか。それより、約束の意味は教えてくれないのか？」

鈴は俺の問いに、少し考えてから、

「自分で考えなさい」
教えないと言った。
「……ヒントは？」
「無しよ。今度間違えたら大哥も激怒するわよ」
「マジか……」
神威兄のお仕置きは、勘弁してほしい。
「ま、落第点だけど……許してあげるわ」
「……おう」
鈴は苦悩する俺を暫く見て、許してくれた。だが、なんかスッキリしない。落第点だし。
「取り合えず、ご飯食べに行かない？もう直ぐ日が落ちるし」
「そうするか……あ、そうだ」
鈴に言いそびれていた事が、言いたかった事があった。
「どうしたの？」
「今更だけど……」
「何？」

本当に今更になってしまったが、言っておきたい。

「おかえり、鈴」

この言葉は、言っておきたかった。

「――――うん。ただいま、一夏」

鈴は笑顔で、返してくれた。

◇◆◇◆◇◆◇

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

夕食を食べ終わり、箸を置いた。

「今日も美味かったよ」

「えへへ、ありがとう兄さん」

箒は嬉しそうに空いた食器を提げ、洗い始めた。

「……偶には俺がやろうか？」

何時も準備から片付けまでしているので、代わろうか？と言っても、

「ううん、兄さんは座っててて。これは私の仕事だよ」

何時も断わられる。しかも、楽しそうにやっているので、代わり難い。

と言うか、一度だけ洗い物を済ませた事があったのだが、涙目で怒られた。

涙目で怒られて以来、手が出せずにいる。

「……そうか」

しかし、この儘では、馴染んだらマズイ気がする。何と言ったらいいのか解らないが、兎に角マズイ気がする。致命的にマズイ気がする。

「兄さん、お茶が入ったよ」

「ああ、頂く」

「はい、どうぞ」

何とも言えない危機感を感じながら、お茶を飲んでいる時、扉をノックする音が聞こえた。

「漆月くん、篠ノ之さん、いますかー？」

ノックした人、山田先生が入ってきた。

「はい、います」

「先生、どうしたんですか？」

「あ、はい。お引越しです」

……誰がだ？

「先生、誰がお引越しするんですか？」

箒も同じ事を思ったようで、首を傾げながら訊いていた。

「お引越しするのは漆月くんです。部屋の用意ができたので、今日から同居しなくてすみます。漆月くん、今度の部屋は一人部屋なので思いっきり羽を伸ばせると思いますよ」

……やっと、やっとか。どれ程、どれ程に今日この日を待ちわびた事か！！

「これが新しい部屋の鍵です。失くさないでくださいね？」

「はい、わかりました」

そうと決まれば引越し準備だ。この時の為に荷物は纏めて置いた。

「兄さん、私が準備するよ」

筈だったのだが、部屋の収まるべき所に散って行った。箒の手に因って。

「私も、お引越しのお手伝いをしましょうか？」

「先生、私一人で大丈夫です」

「そうですか？でも、一人じゃ大変でしょう？」

「私が兄さんの荷物を片付けましたから」

「まあ！そうなんですか？」

「はい、そうなんです」

「篠ノ之さんは偉いですねー」

「そうですか？」

「はい。きっと良いお嫁さんに成れますよー」

「えへへ、ありがとうございます」

「うふふ、どう致しましてです」

……何この会話。なんか居心地悪いんですけど？

「では、私は失礼しますねー。漆月くん、しっかりしないとダメですよ？」

山田先生は、めっ！と俺を叱り、去って行った。

「……箒、俺がやるよ」

よく解らない執念、と言うか危機感に駆られ、申し出る。

「大丈夫だよ。兄さんは座ってて」

が、却下された。

「――――わかった」

真っ白に燃え尽きる、事になりそうな勢いで座る。

「あ、兄さん」

「……なんだ？」

「お泊りに行っていい？」

「……駄目だ」

それでは一人部屋に成った意味が無い。

「一緒に寝て良いって約束したよ？」
「……毎日は、駄目だ」
何でこんな約束したんだ、俺は。
「うん！じゃあ、明日行くね？」
「……ああ」
一夏の部屋に寄って行くか……
「あ、これって通い妻になるのかな？」
酷く、男に会いたく成った。

◇◆◇◆◇◆◇

「一夏ぁ～あ？」

神威兄が、ノックした後、入ってきた。が、

「……邪魔したな」

「邪魔してくれ！頼むから！！」

直ぐに出て行こうとし、俺は慌てて引き止めた。

「今度は何だよ、何したんだ？隠さず全部話してみろ。怒ってやるから。ほら、言ってみな？拳骨、落してやるから」

そして、俺を悪だと決め付けた。

「俺は何もしてねーよ！今度はマジで！！俺が悪いの決定かよ！？」

俺は無実を訴える。今度はホントに俺じゃ無い。寧ろ被害者だ。

「んじゃ……アレは何だ？」

神威兄の視線の先に、

「「……」」

睨み合う、鈴とセシリアが居た。

「取り合えず、言ってみな？……原因お前だったら教育指導してやるが」

神威兄は、拳をバキバキと鳴らしながら脅してきた。

「げ、原因は……「さっさと吐け」――――ハッ！原因は神威兄です！！」

羅刹モード、その数歩前の神威兄に向かって、敬礼しながら言い放った。一歩間違えれば、天獄が待っている返答で。

「あぁん？」

「神威兄が箒と同居してる事が原因です！！」

恐怖に負け……てるが、包み隠さず暴露した。

「……マジかよ」

俺の返答に、通常モードに戻った。掌で顔を覆い上を向いたが。だが何にせよ、天獄への階段は昇らずに済んだ。

「あ、大哥！！」

「え？お兄様！？」

鈴とセシリアが神威兄に気づいた。

「……よう、俺が原因なんだって？」

神威兄は、酷く疲れた様子だった。何でだろ？

「大哥！同居するならあたしでしょ！？」「お兄様！同居するのなら私（わたくし）でしょう！？」

「主語を入れて言え。……意味は解るが。序でに落ち着け」
勢いに任せて言う二人に、神威兄は適切？に突っ込んだ。
「でも！こいつが！！」「しかし！この方が！！」
「……黙れお前等。千冬姉さん直伝の教育指導、受けたいかぁ？」
「「黙ります！！」」
神威兄は拳を、ゴキリ！ベキリ！と鳴らして黙らせた。如何やら神威兄は、ご機嫌斜めらしい。
因みに、千冬姉の教育指導は神威兄の三倍凄いらしい。
「取り合えず、同居は無理だ」
「「え！？」」
そして、バッサリと切り捨てた。
「俺も箒との同居は終わりだ。今日から一人部屋だ」
「「「ええ！？」」」
そして、これには俺も驚いた。
「如何しても。と言うなら、千冬姉さんに直談判しに行け」
「「……諦めます」」

それは、無理だろ。絶対……

「一夏、これで良いか？」

そして、サラッと解決した神威兄に、

「はい、一切の文句も不満も御座いません」

俺は痺れて憧れた。

「じゃあな」

「はい、お疲れ様でした」

去る神威兄を、俺は敬礼で見送った。

「うぅ～……」

「むぅ……」

唸る二人に、

「取り合えず、部屋に戻ったらどうだ？」

神威兄の様に、サラッと解決しようとしてみた。

「「――――っ！！」」

だが、睨まれた。神威兄（あこがれ）の背中は遠い、か……

「一夏には無理よ！」

「タイプが違いすぎますわ！」

思考もバレた。なんでさ！？

◇◆◇◆◇◆◇

深夜。

今日、襲撃してきたＩＳの事を話し合おうと、

「千冬姉さん、入るぞ」

千冬姉さんの部屋に入った。

「待てっ！」

「え？」

そこには、ハリネズミを抱えた、千冬姉さんがいた。

「「……」」

俺は扉を開けた体勢で、千冬姉さんはハリネズミを抱えた儘で、固まった。

「……失礼しました」

何とか体を解凍し、扉を閉めた。

アレ、俺が贈ったやつだよな？

贈った物を、大事そうにしてくれてるのは、嬉しい。更に、寮にまで持ち込んでくれてるのは、正直嬉しい。が、見てはいけないモノを見てしまった気がする。

如何するよ、俺……

もう一度、直ぐに顔を合わせなければならない。だが、気まずい。

「あら？何してるの？」

「……いや、何もしてないぞ？」

「……ノックする体勢で？」

「……おう」

夢織は［怪しさ爆発］と扇子に出していた。

「ふ～ん……ま、いいわ。……で、ノックしないのかしら？」

「……今しようとした所だ」

唾を飲み込み、ノックした。

「……入って良いぞ」

「……失礼します」

扉に手を掛け、ゆっくり開く。

「何でそんなにゆっくりなのかしら？」

「……ゆっくり開けたい気分だからだ」

開けた先に、千冬姉さんの姿だけが在った。

「「……」」

千冬姉さんと目が合い、

――――何か見たか？

――――いや、何も見てないぞ

お互いに一つ頷き、無かった事にした。

「……早く始めない？」

夢織は扇子で［何で見詰め合ってるのよ］と突っ込みながら言った。

「……そうだな。まあ、二人共、その辺に座れ」

「……おう」

「……何か、変な空気ね」

扇子の［後で訊きたい事が増えたわよ？］なんて見えやしない。

「それで、今日の事だが……更識、何か掴んだか？」

千冬姉さんは、強引に空気を変えた。

「……まだ、洗っている段階ですが、一つ有ります」

……よし、夢織も乗った。

「言ってみろ」

「はい。学園より２０ｋｍ離れた海面から、『何か』を打ち上げた者が居ました」

「楯無、そいつが仕掛け人の可能性が高い、と？」

「そうね……現段階では、ね」

「……網は？」

「潜り抜けたわ」
網を抜けた、か。
「千冬姉さん、例の無人機は？」
「……ＩＳもどき、だった」
「ＩＳもどき？」
「……如何いう意味ですか？」
「以前、束が作ったＩＳコアもどきを憶えているか？」
「……はい、憶えています」
確か、嫌がらせで作ったモノ。だったか？
「アレがコアとして使われていた」
「……あんなモノをコアに使っていたのですか？」
「ああ」
「アレは……動かすだけなら出来る、な」
「そうね。確かに動いたのよね……」
「流石に、手は加えられていたがな」

アレはバグとウイルスの塊。だが、ブラックボックス部は、無い。バグとウイルスを除去出来れば、コアの代わりには、出来る。ただ、性能等は格段に落ちるが。

「……楯無、更識頭首は？」

「動いているわ」

「どの様に動いている？」

「篠ノ之博士の仕業、が半分……」

妥当、と言えば妥当な判断だろう。

「……もう半分は？」

「亡国機業よ」

「……あいつ等か」

「更識、そいつ等は一夏を攫った組織、だったな」

「はい。確か……私がロシアに行っている間に、神威君にも手を出した筈……よね？」

そう、俺にも手を出してきた。当然、撃退させた。が、

「……神威、私は聞いてないが？」

今は言わないで欲しかった。
「……言ってなかったっけ？」
駄目元で惚けてみる。
「後で詳しく教えろ」
駄目が元だと駄目だった。
「楯無、後で覚えてろ」
「茶道部を辞めて生徒会に入るのなら、覚えておくわよ？」
何が［いらっしゃ～い］だ。
「生徒会は断固拒否する」
「そう言うと思ったわ。でも、諦めないわよ」
俺とて諦める積もりは無い。
「お前等、話を逸らすな」
逸れた原因は千冬姉さんだ。
「更識、他に心当たりは無いか？」
「今はまだ、ですね」

「そうか。……神威」
「うん？」
「束が犯人だと思うか？」
犯人は束姉さん……
「……違う、気がする」
……では無い、気がする。
「……矢張りか」
「……でしょうね」
「……束姉さんはシスコンだからな」
あの無人機は、箒を狙った。シスコンの束姉さんが、そんな事を許す訳が無い。
「そういや……更識頭首も解ってるんじゃないのか？」
「……解ってて、やってるのよ」
「……成る程、仕立て上げる気か」
「はい、間違い無いでしょう」
ＩＳコアを作れるのは束姉さんだけ。となっている。仕立て上げ

るのは簡単だろう。

「でも、元が判らない内は……出来ないでしょうね」

「だろうな。亡国機業も、まだ可能性の段階だ。他にも怪しい者も居るのだろう？」

「はい」

「狙いも判らんしな。まあ、データ取りは確実だろうけど」

標的は一夏と俺のデータ、稼動データ、そして学園の防衛データ。それ以外の狙いが判らない。

「……今日は此処までか」

「そうですね」

「ああ、お開きだな」

終わったのなら、今日はもう寝よう。

「じゃあ、俺は部屋行って寝るわ」

「待て神威。訊きたい事が有る」「待って神威君。訊きたい事が有るの」

え？

「更識、調べまわって疲れただろ？もう寝ろ」

「織斑先生こそ、解析でお疲れでしょう？お休みになられては？」

おい……

「生徒はもう寝ろ」

「神威君も生徒ですよ？」

「……なあ、また今度でよくねえ？」

「「駄目だ（よ）」」

「……そうかい」

今日は、厄日か？

「神威に決めて貰おうか？」

「ええ、そうしましょう」

本当に、厄日だ。ちくしょう……

◇◆◇◆◇◆◇

戦い、争い、競い合うばかりが日々ではない。
偶には、休息も必要である。例え、僅かの時間でも。
また、来たる者が、迫る者が、居るのだから。

呪は月を擁いて　第二十九話

『私は認めない』

第二十八話　『……違う、気がする』（後書き）

物理的のストレートで〆でした。
んでお引越し。念願の一人部屋です。

箒とマヤやん絡ませたら、こうなりましたw

千冬の部屋には現在ハリネズミが鎮座しております。
アミダの結果こうなりましたw

更識かーちゃんは裏で奮闘中です！

第二十九話　『私は認めない』（前書き）

やっとこ二巻に突入です。

第二十九話　『私は認めない』

六月頭。一夏と鈴との喧嘩騒動から一ヶ月が経った。
現在、一夏と鈴の間柄は良好。一年前の様に言い合い、笑い合いを繰り返している。

一夏は約束の意味を間違えたが、約束の意味に気づこうと、考え唸っている姿を、偶に見る事が有る。鈴はそんな一夏の姿を、楽しそうに見たり、又は何時気づくのかと、緊張する様に見ていた。

鈴は一夏の特訓にも、参加する様に成った。
一夏の特訓は、主にセシリアが相手をしていた。だが、セシリアは接近戦も出来るが中距離が主、一夏は接近戦しか出来ない。だから、鈴の特訓参加は渡り舟、といった感じの所がある。それに、鈴とセシリアの戦い方は違うので、良い経験にも成るだろう。

因みに、俺と箒はの参加は偶にだ。
俺が参加する時は、鈴とセシリアから得た技術と知識を、俺で試すのが大体。
だが、一夏は瞬間加速に頼る事が多いので、必勝パターンがある。
瞬間加速の通路上に、割切を出し激突させ、崩れた瞬間を狙うというもの。
この前は、割切を警戒し中々近づいて来なかったが、割切から体を見せる様にした瞬間に、瞬間加速と使い近づいてきた。そして、用意していた足の裏に、顔面から突っ込んで自爆した。

箒が一夏の相手をする場合は、粗接近戦のみに成る。
箒と一夏の、剣の捌き合いは、昔を思い出させる。何故なら、凄い形相で切り結んでいるからだ。何故あんなにも白熱するのだろうか？未だに理由が解らないが、何故か知る気になれないので放置している。

俺は一夏の相手が殆んどだが、稀に鈴やセシリアの相手をする。二人は一夏と違い、あの手この手で攻めてくる。此方としても、良い経験に成る。
その時に一夏を見稽古として参加させ、感想を言わせる。見て考える事も大切だからだ。ただ、碌な事言わなかった時は、俺と鈴とセシリアの集中砲火の刑にしている。だが俺の狙った、精神的タフネスは付いた様に見える。

特訓に参加しない時は、殆んど自己鍛錬と組み手に当てている。組み手の相手は夢織。付き合いも長く、俺の業を知るのは夢織しか居ないからだ。これは、夢織も望んでいたようなので、二つ返事で了承してくれた。まあ、頼み事を聞く破目に成ったが……碌でも無いモノだったら突っぱねる積もりだ。

この一ヶ月は、そんな感じで過ごしていた。

そして今日は日曜日。

「よう、神威。久しぶり」

「ああ、久しぶりだな。数希」

俺は、友人の数希と会う約束をしていた。
会う理由は何と無くだった。一夏が弾に会いに行ったので、何と無

く数希と連絡を取ったら「んじゃ会うか？」といった感じで約束した。

「まあ、立ち話も何だし……その辺の店に入るか」

「おう。昼も近いし、そうするか。……あそこで良いか？」

ただ、急な約束だったのでノープラン。適当に過ごす事になるだろう。

「パスタか、良いぞ」

「よし、さっさと行くぞ」

そして、店に入り注文する時に、

「俺はナポリタンとコーヒーで。神威は？」

「俺はカルボナーラとコーヒーで」

「私はボンゴレ・ビアンコと紅茶で」

何かが、居やがった。

「……なあ、神威」

「……何だ？」

「……何で光道音が居るんだ？」

「……俺に訊くな」

そう、俺に取って悪の根源、光道音　麗が居た。

「理由は、そんな気がしたからよ」

「「お前は何モンだ！？」」

「普通の副会長よ」

コイツが普通なら、世界の殆んどは普通の人になるだろうか？

「どこが普通だ！？それにお前は会ちょ……え？副会長！？神威、これマジ？」

「ああ、マジだ。コイツはホントに今は副会長だ」

「そうよ、今の会長は当時の秘書さんよ」

コイツが副会長と知った時は、本気で驚いた。そして、なんでコイツを副会長にしたんだ？と夢織の正気を疑った。

そんな俺に対し夢織は「……手遅れだったのよ」と、悲痛な顔で返した。恐らく大半が感染されていて、手遅れだったのだろう。

「へ～……って事は、神威は今、若しかして無事？」

「……ああ、まだ無事だ。まだコイツの悪巧みに巻き込まれて無い」

そう、まだ、だ。その内コイツはきっと、遣らかす。

夢織には頑張って抑えてもらおう。俺の為に。

「失礼ね。私が面白半分でやってるみたいじゃない」
「「違うのか？」」
「私は皆が楽しむ為に全力でやってるのよ？ただ、その中に私が居るだけよ」
「「結局楽しんでんじゃねえか！」」
「ええ、楽しまなきゃ損じゃない？」
「「……はぁ」」
コイツは相変わらずだった。
少しは変わって欲しいと思う。が、変わったら俺に取って大変な方向に、変わりそうな気がする。
「……で、何で光道音が居るんだ？」
「……そうだな、何で居やがるんだ？」
「……なんとなく？」
「「おい」」
コイツは新人類に覚醒してるのか？
「だって久しぶりじゃない？この三人で居るの」

そう、中学の三年間。俺達は同じクラスだった。
「まあ……確かにそうだけど」
「俺はお前と居る事を一度も望んだ事が無い」
「ふふ、そう言われるのも久しぶりね」
学園に居る時、他と会わない時は、この三人で居る事が多かった。
感染者を省いていったら、こうなった。だが何でコイツが残るんだ？
「お待たせしました」
「取り合えず、食うか」
「……そうだな」
「ええ、そうしましょ」
俺は釈然としない儘、食べ始めた。
「この後の予定は？」
「いや、特に無いな」
「ノープランだ」
「じゃあ、付いていってもいいわね？」
「……神威」

「……どうせ言っても無駄だ」
「今日は休日よ？何もしないわ」
「……確かに、休みに遣らかした事は無かったな」
「……何故平日にもそれが出来んのだ」
「さあ？何故かしらね？」

結局、この日は三人でブラブラとしていた。

◇◆◇◆◇◆◇

――――同刻――――

此処はカフェテラス。
テーブルを囲っているメンバーは、鈴ちゃん、セシリアちゃん、箒ちゃん、私の四人。

「ふ～ん……それで惚れた訳ね」
「ええ、そうですわ」
「一夏は相変わらずなんだね」
「そうね、一夏君は変わらないわね。……少しは変わって欲しいけど」
話している内容は、恋話。丁度セシリアちゃんから、一夏君に惚れた理由を聞き終えた所。
「鈴さんは、どの様にして一夏さんの事を？」
「……あたしは、転校した時だったわ」
鈴ちゃんは、懐かしむように話し始めた。
「確か、四月の……新学期の始まりだったわ」
「鈴は私と入れ替わりだったよね？」
「そうなるわね。それで最初の日に、こう……ね」
コロッと、とでも言うように指を回して見せた。
「では、鈴さんはその時から、ずっとですの？」
「そう、なるわね」

「……進展は、無かったのですか？」

「……訊かないで」

「……すみません。酷な事を訊きてしまいましたわ」

「……いいわよ。きっと……あんたも通る道だから」

「……そうですわね、きっと」

二人は溜め息と吐き、項垂れた。暗い影が見える。

「ねえ、鈴」

「……何よ」

箒ちゃんが鈴ちゃんに問い掛けた。空気を変えようとしているのだろうか？実際、空気を読んでるのか如何か判らないが。

「告白しなかったの？」

直球でのエアブレイクだった。率直な疑問だったようだ。

「う……出来なかったのよ」

「でも、告白に近い事はしたのよね？」

告白と言うか、逆プロポーズだけど。

「うん、したけど……やっぱり一夏は一夏だったわ」

あの鈍感め……と、溜め息を吐きながら言った。

「……お兄様は、何か援助をしてくれませんの？」

「大哥は……相談には乗ってくれるけど、手出ししないわ。」

「そうね。神威君は手出ししないわ。そういった事は本人同士で。と思ってる筈よ」

本音は……――――係わりたく無い。だと思うけど。

「兄さんは昔からそうだよ」

「そうですか……力になって頂けるのでしたら、心強いのに……残念ですわ」

セシリアちゃんは溜め息を吐きながら、アイスティーをストローでクルクルと回していた。

「大哥は……よっぽどの事が無いと、口出さないのよね……」

鈴ちゃんはストローを銜え、プラプラと振っていた。

「兄さんだから……」

箒ちゃんはチューッと、アイスティーを飲んでいた。

「神威君も色々と考えているのよ。色々あったから……」

私はグラスを揺らしながら、相談室を思い出していた。
「そう言えばセシリアって……偶に大哥をミョーな熱視線で見てるけど、アレ何？」
鈴ちゃんが思い出した様に言った。
「あ、それ私も思ってたんだ」
それに箒ちゃんが乗っかり、
「それは私も聞きたいわね。セシリアちゃん、教えてくれるかしら？」
更に私も続いた。これは聞いておくべき事だ。
セシリアちゃんは、一夏君に惚の字だけど……まさか、の可能性もある。
「え、それは……」
「「「それは？」」」
身を乗り出す様な私達に対し、セシリアちゃんは顔を赤くしながら小さくなった。
「……それは、その……」
「セシリア、言いなさい」

「うん、言って」
「セシリアちゃん、吐きなさい」
益々小さくなりながら、
「……わ、笑わないで、いただけます？」
と、上目使いで言った。
「「「ええ（うん）」」」
「ほ、本当ですの？」
「「「ええ（うん）、本当よ（だよ）」」」
「ぜ、絶対ですよ？」
「「「ええ（うん）、絶対よ（だよ）」」」
そして漸く、話し始めた。
「……じ、実は」
「「「実は？」」」
「……実は、わたくし、一人っ子でして……」
「「「知ってるわ（よ）」」」

「……幼馴染は居るのですが……」

「「「ですが？」」」

「……きょ、兄弟や姉妹に……」

「「「兄弟や姉妹に？」」」

「……少し、ほんの少しですが……」

「「「少し？」」」

「……その、あ、憧れていまして……」

……読めた。私と鈴ちゃんはニヤニヤと、箒ちゃんはニコニコとし始めた。

「……箒さんと鈴さんを見ていて……」

詰まり、

「……お二人の様に、その……」

兄や姉に憧れていて、今は兄と呼べる人が居る。

そして、鈴ちゃんと箒ちゃんのダイレクトアタックを見て、

「大哥に甘えたいのね？」

「兄さんに甘えたいの？」

「神威君に甘えたいのね？」

自分も、と思っていたのだろう。

ただ、セシリアちゃんの性格上、二人と同じようには出来なくて視線で訴えるだけ、なのだろう。

「……はい」

セシリアちゃんは、蚊の鳴くような弱々しい肯定をした。

「箒、先輩」

「うん」

「解ってるわ」

鈴ちゃんの言わんとしている事は解っている。

「セシリア」

「は、はい」

「あたし達に任せなさい」

「え、ですが」

「大丈夫だよ」

「ですが、わたくし」

「セシリアちゃん、私達が付いてるわ」

「み、皆さん……」

この後、セシリアちゃんを言い包め、意思を固めさせる事に成功した。

全ては未知への一歩の為に、セシリアちゃんの為に、私達は背を強引に押した。

私達も立ち会う事に成ったが、その時の様子を見たい。とかでは無い。更に、その時の神威君の顔が見たい。とかは全く無い。

「じゃあ、大哥が帰ってきたらね」

「うん、そうだね」

「セシリアちゃん、頑張るのよ」

「は、はい！」

そう、全てはセシリアちゃんの為に。

◇◆◇◆◇◆◇

数希達と別れ、今は自室に居る。

「お、お兄様……」

そして目の前に、セシリアが居る。顔を赤くして。

「あ、あの……」

更に視界の端に、夢織と鈴と箒が並んで居る。グッと拳を握って。

「あ、あの、その……」

さっきから、こんな感じだ。何がしたいんだろうか？

「「「セシリア（ちゃん）！ファイト！！」」」

何かエールを送っている。何だこれは。何かの儀式か？

「は、はい！……お、お兄様！」

「……何だ？」

「あ、あ……」

「あ？」

「「「もう一寸よ（だよ）！」」」

だから何が？何がもう一寸なんだ？

「あ、あ……頭を撫でて下さい！！」

……はあ？

「神威君！」「大哥！」「兄さん！」

「……何だ？」

「「「撫でてあげて！」」」

「……何で？」

「「「いいから！！」」」

「まあ、いいけどよ……」

いったい何なんだ？

「ほ、本当ですの！？」

セシリアが、ズイッと一歩踏み込んで来たので、

「あ、ああ……」

俺は、仰け反る様に、一歩後退してしまった。

「では、どうぞ！」

セシリアは、更にズズイッと頭を出してきた。

「あ、ああ……」

恐る恐る、セシリアの頭に手をのせる。

これ、詐欺的なセクハラとかじゃないよな？

「……これで良いのか？」

セシリアの頭を撫でながら、ギャラリーに確認を取る。

夢織は［完璧満点花丸！！］と扇子に出していた。

おい、何でサムズアップしてる。歯が光ってねえぞ。……はあ？光らない仕様だあ？んな仕様あるか！？ボケッ！！

鈴は、写真を撮っていた。

おい、何で写真撮ってる。……記念写真？何の記念だ、何の。……はあ？第一回甘えた記念？どんな記念だ。頭のフットワークも軽いな！？チビッ！！

箒は、ニコニコニコニコニコニコしていた。

おい、わたしのじまんのおにいちゃん！てな作文書いた時みたいな顔してんな。あん時は一夏と内容かぶって怒られただろ？……忘れたのか！？天然めっ！！

「……セシリア、もういいか？」

「まだですっ！！」

そして、

「大哥、次あたしね」

「あ、私も」

「……私も、頼もうかしら」

鈴と箒、夢織にまで撫でる破目に成った。

一夏が夕飯に誘いに来るまでの三十二分間、ずっと撫で続けていた。

休日では無い休日、そんな日だった。気がした。

◇◆◇◆◇◆◇

月曜の朝、クラスの女子はＩＳスーツのカタログ片手に談笑している。
そして、山田先生の説明を聞きながら、からかっている。
「へ～……ＩＳスーツって、あーやって選ぶんだ」
「らしいな。ま、俺達には縁の無い話だな」
確かに、俺と神威兄には関係無い事だ。あたふたしている山田先生の事も。
「そう言えば神威兄のスーツって、俺みたいにどっかのラボの特注品？」
神威兄のＩＳスーツは黒くて鋭利な感じだ。俺のと同じ様な感じだが、所々尖っている。
触れば刺さるぜ！みたいな感じがする。刺さる事なんて無いけど。
「まあ……特注、だな。一応は」
「何処の？」
「……兎印」
「兎印？そんな所あったっけ？」
ラビット社？いや、聞いた事が無い。また神威兄の謎が増えた。
相変わらず謎が多い。

「諸君、お早う」

そしてもう一人、謎が多い我が姉が遣って来た。俺が出しておいた夏服用スーツを着て。

「「「「「お、お早うございます！」」」」」

「チャイムが鳴るぞ、席に着け」

「「「「「は、はい！」」」」」

どたばたと自分の席に、俺と山田先生も同じように戻って行った。

「今日よりＩＳを使用しての実践訓練を行う。各自、ＩＳスーツが届くまで学校指定のものを使うので忘れないように。忘れた者は、学校指定の水着でやれ」

まあ、ＩＳスーツも水着も、見た目は似たようなもんだしな。

「では、山田先生。ＨＲを」

「は、はい」

山田先生は眼鏡を拭いていた。千冬姉は先生相手に出席簿でスパーンッ！をやらないらしい。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「「「「「えええええええっ！？」」」」」

「黙れ」

「「「「「はい！」」」」」

浮かび上がった瞬間、鶴の一声で黙った。流石は千冬姉。

「では、入ってきてください」

「失礼します」

「……」

あれ？若しかして男？

「自己紹介をどうぞ」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。此方に僕と同じ境遇の方が居ると聞いて、本国より転入をして来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

おお、やっぱり男だった。俺や神威兄も居るし、驚く事は――――

「「「「「きゃあああ「黙れ雛ども」――――はい！」」」」」

――――あるわな。そして千冬姉、お疲れ様です。

「……」

そしてもう一人は、生徒を下らなそうに見ていた。受ける印象は、冷たい軍人といった感じだ。

「あの、自己紹介を……」

「……」

山田先生の言葉に反応しなかったが、

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬姉の言葉には素直に応え、敬礼した。

「私はもう教官では無い。そしてお前も此処では一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「はい、了解しました」

そんな遣り取りをした後、

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

名前だけを言って、口を閉ざした。

「あ、あのー、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生の問いに、ピシャリと答えた。おい、山田先生が泣きそうになってるぞ？

「――――！」

ん？こっちに来た――――

「私は認めない」

――――っ！？

「貴様があの人の弟、家族であるなどと――――認めるものか」

……俺は今、殴られた？

遅れて動いた思考と同じく、遅れて頬も痛み出した。

◇◆◇◆◇◆◇

一人は、憎しみ狙う者。一人は、探り狙う者。

根底こそ違うが、狙いは同じ、二つの的（まと）。

だが、それは同時に、的の懐に飛び込む事にも、成る。

呪は月を擁いて　第三十話

『あいつも誘って良いか？』

第二十九話　『私は認めない』（後書き）

久々に数希が登場。ダン＆ランはカット。

セシリアに出番を！でやったらこうなった。

うちのセシリアは甘える事がとても下手。

ついに、ついにシャルとラウラが！！

第三十話　『あいつも誘って良いか？』（前書き）

ラウラビンタ炸裂！その後です。

誤字修正しました。

第三十話　『あいつも誘って良いか？』

「何しやがる！」

一夏の怒鳴りが響く。

「ふん……」

だが、ラウラ・ボーデヴィッヒは一夏を相手にせず去り、

「貴様が、漆月　神威か」

俺の前に立った。如何やら俺も標的らしい。

「……だったら、如何する？」

俺は挑発気味に返すが、

「貴様もだ」

相手は構わずに、続けた。

「貴様も認めん」

「それで？殴るのか？」

「……」

言う事は言った。とばかりに去ろうとする。

「遣らないのか？教官の前で遣った様に」

「貴様――――」

だが、俺の挑発に、拳を握るが、

「教官の前、だぞ？」

「――――っ！」

続けた言葉で押し黙り、ギリッ…と歯を食い縛り、空いている席へ去って行った。

アレが、千冬姉さんが気に掛けていた存在（モノ）、か……

千冬姉さんがドイツから帰った来た後、一人だけ特別に厳しく、更に面倒を見た者が居た、と言っていた。特殊な産まれ、とも言っていた。

……だから、何だ？それが、如何した？

正直、好感は持てない。初対面で殴る奴に、好感など持てる筈が無い。

だが、此れで俺に向く、だろう……

あの手の者は、最終的に実力行使で来る、確率が高い筈だ。
漆月でも、同じ様な輩が居た。同じ様に挑発し、潰した輩だ。ただ、そいつは、ある時を境に姿を見なく成ったが。

「全く……では、ＨＲを終える。各自、着替えて第二グラウンドに集合しろ。今日は二組と合同で行う。では解散」

千冬姉さんは手を叩き、さっさと動けと急かす。
呆気に囚われていた者達は、思い出した様に動き出した。

「漆月、織斑、デュノアの面倒を見てやれ」

三人しか居ない男、そうなるのは確定してるようなもの。憤怒していた一夏も、気持ちを入れ替えて同意した。

「始めまして、面倒を掛け「待った、移動するぞ」・・・・・・え？「そうだな。一夏、先に連れて行け」・・・・先？「解った。行くぞ！」・・・・・え、え？「囮は任せろ」・・・・・囮？「神威兄・・・・・御武運を！」・・・・ゴブウン？「往けい！一夏ぁ！！」「生きて、生きて会いましょうぞ！」・・・・ちょ、ちょっと、引っ張らないで！」

一夏とデュノアは、ドタバタと駆けて行った。

「さて、俺も行くか」

俺は、別ルートで第二アリーナ更衣室に向かう。

一夏、悪く思うなよ？

新しい餌が付いた、本当の囮である二人に、心の中で謝った。

ククククク……

笑いながら。

◇◆◇◆◇◆◇

只今逃亡中。

「者共〜！出会え出会えぃ！！」

「うお！？法螺貝吹いてる！？」

「「「「「お呼びですか！？」」」」」

ええい！この路は駄目か！

「……ニンジャ？」

まだ逃亡中。

「こっちよ！突入準備……」

「隊長！それは兄神法典の質問攻防の章に触れてしまいます！！」

「くっ、ならば――――写撃班！」

「写撃だと！？」

撃たれる訳には！？

「……写真、だよね？」

未だに逃亡中。

「追い付いたわ！」

「写撃班、来ました！」

「そんな……！？」

「写撃角よ～し……てぇー！！」

くっ、光が、広がっていく……！！

「……ただのフラッシュだよ？」

絶賛逃亡中。

「あ！残弾が！？」

「今だ！押し通る！！」

「弾幕薄いよ！何やってんの！？」

信じる！自分の中の可能性！内なる神を！！

「……撮られただけだよ？」

やっとの思いで撒く事が出来た。

「ふう、此処まで来れば大丈夫だろ」
「な、何で、皆は追いかけて来たの？」
「何でって……男の転校生が来たからだろ？」
「……？」
……何で解らないって顔してるんだ？
「男の操縦者って俺と神威兄とお前だけだろ？だから珍しくて追いかけて来たんだろ」
「――――あ、そっか……そうだね」
うん？……まあ、いいか
「ま、男が増えるのは嬉しいな。やっぱ肩身狭いし。宜しくな？」
「うん、宜しく。……えっと、織斑君」
「一夏でいい……ん？名前言ったっけ？」
俺、名乗って無い……よな？
「だ、だって、有名だよ？」
「あー……そっか、そりゃそうだな」
確かに、知ってても可笑しく無いな。

「んじゃ改めて、織斑　一夏だ。一夏って呼んでくれ」
「うん。僕の事もシャルルでいいよ。宜しく、一夏」
「おう。宜しく、シャルル」
そんな事を話している間に、第二アリーナ更衣室に到着した。
「よーし、到着！」
「遅かったな」
が、俺より後に出た神威兄が居た。しかも、ＩＳスーツに着替え終わっていた。
「……何でもう居んの？」
「お前が遅いからだ。それより、時間ヤバイぞ？」
「……げ、ホントだ」
「俺は先に行くぞ。デュノアも急げよ？」
「あ、うん……」
神威兄はそう言い残して、先に行ってしまった。
「俺も急がないと……」

そう言いながら制服とTシャツを一気に脱いだ。
「わあ！？」
「どうした？」
シャルルは顔を赤くしていた。
「あ、その……あっち向いて、着替えてくれる？」
「うん？いいけど……恥ずかしいのか？」
「う、うん……」
まあ、男でも着替えを見られるのが、恥ずかしいって奴は居るからな。別に変じゃないが……何か変だな。
「あ、シャルル」
「な、何？まだ着替え終わってないよ！」
「いや、そうじゃなくて……シャルル何歳？」
「え？十五歳だよ。……何でそんな事訊くの？」
「いや、神威兄みたく年上かもしれないかな？と思っただけ」
「……神威兄？」
「ん？……ああ、もう一人の男のＩＳ操縦者。さっき居た人。俺の

事知ってたんだから……知ってるだろ？」
「う、うん。……漆月　神威……さん、だよね？」
「ああ、やっぱり知ってたか」
「うん。確か……――――篠ノ之博士が直接作ったＩＳを持ってる人、だよね？」
「え？そうなのか？」
「……え！？ち、違うの！？」
「いや、俺は知らないんだ。神威兄は秘密主義だから教えてくれないんだよなぁ……シャルル、他に何か知ってる？」
「ぼ、僕が知ってるのはそれくらいだよ」
「そっか……と、着替え終了。シャルルは？」
「終わってるよ」
振り向くと同時に、時計が視界に入る。
「げ！もう始まる！？シャルル、急ぐぞ！」
「う、うん！」
出席簿スマッシュは勘弁だ！

◇◆◇◆◇◆◇

無理でした。間に合いませんでした。スマッシュされました。俺だけされました。

「朝に続いて、災難でしたわね」

「……ホントだよ」

隣に居たセシリアに、溜め息混じりで返す。

「……所で一夏さん」

「ん？」

更にセシリアは、深刻です。とでも言うような顔で訊いてきた。

「……ボーヴィッヒさんとは……どの様な関係で？」

「初対面だぞ」

あれ？半目になった。信じて無い？

「……では、何故叩かれましたの？」
「いや、それは俺が訊きたい」
「……またバカやったんじゃない？……また」
「してない。俺は無罪――――誰だ？何処に居る？」
「此処よ、バカ」
視線を下げると、鈴が居た。
「で、何の話？」
聞いてて答えたんじゃないのか？
「鈴さん、一夏さんが今日来た転校生に叩かれましたの」
「……はあ？」
「……なあ、二人とも」
「それでいて、初対面と仰いましたわ」
「それは無いでしょ」
「……それは後に」
「やはり鈴さんも、そう思いますの？」

「当たり前よ。どうせ一夏がバカやったんでしょ？バカだし」

した方がいい。と言おうとしたが、

「――――馬鹿はお前達もだ」

間に合わなかった。そして、

「「いたっ！？」」

どんな装甲でも叩き壊せそうなスマッシュが撃たれた。そして更に、

「織斑」

「はい――――いてぇ！？」

俺にも撃った。なんで！？

「気づいていたなら、さっさと注意しろ」

「……はい、申し訳御座いませんでした」

今日の俺、悪くないよな？

◇◆◇◆◇◆◇

「では、訓練を開始する」

千冬姉さんは、痛みを耐える三人を放って始めた。
ＩＳを使った訓練は初めてだから、今日は余計に厳しいのだろう。

「始めに、戦闘の実演をしてもらう。……凰、オルコット、前に出ろ」

「「はい？」」

「早くしろ」

「「は、はい！」」

「今回は、代表候補生の二人に実演してもらう」

……成る程、そう言う事か。
代表候補生は基礎が出来ている、筈だ。その二人を、物差し代わりにする、のだろう。
物差しが有った方が、色々と測りやすい。測るものは自分、周りとの差。

「凰、オルコット、ＩＳを展開して準備をしろ」

そして、代表候補生も、それに含まれる。

「「はい……」」

が、二人はダウン気味だ。

「……全く、おい――――――――」

「「！！」」

……ん？

「お任せ下さい！イギリス代表候補生、セシリア・オルコットに！！」

「実力を見せる良い機会ね！専用機持ちの！！」

行き成りやる気が最高まで上がった。

「兄さん、何言ったのかな？」

「……魔法の言葉だろ、間違い無く」

小声で訊いてきた箒に、小声で返す。

「……魔法？」

だが、箒は解らなかった様で、首を傾げた。

「それで、相手は鈴さんですか？」

「ふふん、返り討ちにしてやるわよ」

セシリアと鈴は、既に対戦を始めていた。視線で。

「慌てるな、対戦相手は「ど、退いてくださーい！」――――――む？」

空気を裂く音と同時に、悲鳴が聞こえた。その主は、

「あわわわわ！？」

山田先生だった。そして落下先は、

「お、俺ぇ！？」

一夏だった。着弾まで、あと僅か。

「一夏！？」「一夏さん！？」「びゃ、白式ぃー！！」

弾頭山田号、着・弾！一夏は、星の屑に……

「……星の屑は、長寿したのか？」

「……一夏の事？一夏なら転がってるよ？」

箒の指差す先に、弾頭山田号を下敷きにして、居た。

「……還ってきたのか」

「……？うん」

星のく……一夏は、弾頭山……山田先生の胸を鷲掴みしていた。

「一夏さん！！」

「うお！？」

怒りに駆られたセシリアのヘッドショットを、一夏は避けた。頭を山田先生の胸に埋めて。

「一夏ぁ！！」

「あ――――！？」

嫉妬に駆られた鈴の投擲を、山田先生が撃ち、軌道を変えた……。

「流石は、元代表候補生だな」

……そう言われれば、納得できる。

回転している双天牙月の刃を撃ち、回転軸を一時的にずらし、軌道を変えた。それも、鈴が投げてから武装展開した射撃で。更に、体勢が崩れた儘で、正確な精密射撃。

「い、いえ、そんな……む、昔の事ですよ。候補生止まりでしたし……」

成る程、そういう事なのか。

山田先生は、教師としては新米だが、ＩＳ操縦者としては熟練者。

「何時まで呆けている。始めるぞ」

「え、二対一で……ですか？」

「それは、流石に……」

その山田先生を二人にぶつける、と言う事は、

「安心しろ。今のお前達では、勝てん」

「「な！？」」

其れだけの強者、なのだろう。

「では、始めろ」

◇◆◇◆◇◆◇

セシリアと鈴と山田先生が、飛び立った。

「手加減はしませんわ！」
「本気でいくわよ！」
「は、はい！」
メラメラと闘志を燃やす二人に対し、山田先生は、言葉遣いこそ何時も通りだが、目が鋭く冷たい。
「では「織斑先生」……何だ？漆月」
神威兄が、千冬姉の言葉を遮った。
「ＩＳを、ハイパーセンサーを機動させて観戦しても良いですか？」
「……良いだろう、許可する」
「有難う御座います」
神威兄は、そんな遣り取りをしてから、ＩＳの額の部分を展開した。
「それでは……デュノア」
「――――え、は、はい！」
俺と同じ様に神威兄を見ていたシャルルは、少し裏返った返事をした。

「今、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「はい。山田先生が使われているＩＳはデュノア社製ラファール・リヴァイヴです。第二世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので――――

へ～……後付武装かぁ……白式は無いからなぁ……そう言えば、神威兄のＩＳは有るのか？如何なんだろ？有るとしたら……何か理不尽なやつだろ、多分……いや、絶対だ。絶対理不尽なのに決まってる。きっと、全てを薙ぎ払う様なブッ飛んだモノ、かな？……いや、流石にソレは無いか。普段の神威兄は、遣り過ぎってのは余り無いからな。だから……うん？普段？普段の神威兄じゃないと……如何なんだ？例えば、羅刹モード、だった時は……有りえる。ヤる……絶対、ヤる。てゆーか……ヤろうとした、よな？遺伝子工学研究所の人に、ヤるって……更に、更地に変えるって……あ、更に更地って旨いな！

――――そして、山田先生が使われているラファール・リヴァイヴは射撃タイプです」

「デュノア、そこまでいい。……織斑！百面相している織斑！！」

「――――へ？」

「何を考えていた」

あれ？目の前に修羅が！？

「人の話は聞け！」
「へぶっ！？」
縦！？出席簿を縦にして叩かれた！？
「はぁ、全く……余所見してると終わるぞ」
視線を上げる千冬姉に、釣られて上を見ると、
「あ、爆発した」
終わってた。
「くぅ……」
「うぅ……」
そして、セシリアと鈴が落ちてきた。
「……それでＩＳ学園職員の実力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接する様に」
千冬姉は手を叩きながら言い、意識を切り替えさせた。
「では、専用機持ちの漆月、織斑、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰を各班の班長とし、出席番号順に班を作れ。では、分かれろ」
言い終わると同時に、それぞれの班に分かれて行った。俺とシャルルの所は、群がる様に……と言うか、食われそうな勢いだ。逆に、

セシリアと鈴の所は、平和で楽しげな感じだ。……羨ましいな。
そしてアイツの、ラウラ・ボーデヴィッヒの班は、

「……」

通夜の様な雰囲気を、醸し出している。

……あ。あの娘、泣きそうだ。……ん？神威兄？

神威兄がアイツに近づき、何か言っていた。
神威兄は言った後、直ぐに去った。アイツはその背を睨んでいたが、直ぐに止め、班長として動き出した。恐らく、神威兄が言い包めたんだろう。

流石は神威兄、俺には出来ない事を――――――へ！？

神威兄に視線を戻すと、班員は綺麗に整列していた。ただ、

目がキラキラしてる！？

箒を含む班員全員が、目を輝かせていた。例えるなら、餌を待つ犬の様な感じだ。尻尾が有ればブンブン振っているだろう。間違い無く、絶対に。

「皆さーん。訓練機を取りに来てくださーい。打鉄、リヴァイヴ共に三機ずつ有ります。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

俺は唖然としていたが、山田先生のお陰で帰ってこれた。山田先生が何時もと違い、自信が有り溢れていたからだろう。

山田先生の指示に従い、班員とどちらのＩＳを使おうか決めようとする。が、

「あ、織斑君。私は打鉄がいい！」

「え～リヴァイヴにしよーよ。織斑くんもリヴァイヴがいいよね？」

意見が真っ二つに割れた。如何しようかと考えてると、

「おりむーはどっちが良い～？」

のほほんさん（仮）が選択権をくれた。

「そうだな――――」

だが、チラリと訓練機が有る方を向くと、

「――――打鉄にしよう」

打鉄しかなかった。

「所で、のほほんさん」

「なに～？」

「ＩＳスーツ忘れたの？」

「わすれてしまったのだー」

のほほんさん（仮）は水着だった。

◇◆◇◆◇◆◇

「……午前は此処までだ。午後は今使った訓練機の整備を行う。各人格納庫に判別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散」

千冬姉さんは連絡事項を伝えると、山田先生と一緒に去って行った。

「……神威兄」

一夏は肩で息をしていた。

「おう。お疲れ、一夏」

「……お疲れ」

「カート搬送もお疲れ」

「……何で俺だけ一人なんだよ」

「さあ？」

一夏の班だけが、一夏一人で運んでいた。最初は、布仏妹が手伝おうとしていた。だが、悲しい事に、戦力になれなかった。足を引っ張る結果になった。物理的な意味でも。

「あ、神威兄。今日の昼飯だけど……」

「ん？」

「あいつも誘って良いか？」

そう言いながら、一夏はデュノアの方を向いた。

デュノアは、居心地悪そうにしていた。

「ああ、良いんじゃないか？」

「シャルル、良いって」

「……あ、ありがとう」

……何か、違和感がする……何だ？

「よし、んじゃあ着替えようぜ」

「あ……ぼ、僕、機体の微調整してから行くよ。先に行ってて」

「待ってようか？」
「い、いいよ！先に教室に行ってて！ね？」
「……わかった。一夏、行くぞ」
「ああ。シャルル、先行ってるぞ」
「うん」
俺と一夏は更衣室に、デュノアは格納庫の方に向かって歩き出した。
「……何か、焦っていたな」
「あー……何でだろ？」
一夏は少し唸ってから、
「……恥ずかしかったから？」
なんて事を言った。
「……何で恥ずかしいんだよ」
「いや、着替える時も見るなって言ってたし……恥ずかしがり屋なんじゃ……」
「……そうか？」

……違う。先程感じた違和感は、其れじゃない

「……じゃあ、神威兄の方がでかいから……恥ずかしい、とか？」

「――――そうか」

――――其れだ。デュノアは、欧州人の男にしては、華奢なんだ。

「あ、そうだ」

「……如何した？」

「神威兄のＩＳって束さんが作ったんだって？」

「……誰から聞いたんだ？」

月下の製造者、製造に関する事は、一夏には何も言っていない。

「シャルルから」

……デュノアから？

「……他には、何か言ってたか？」

「いや、知ってるのはそれ位だって」

「……そうか」

シャルル・デュノア、デュノア社……探りに来た、のか？

◇
◆
◇
◆
◇
◆
◇

的に、少しずつ溶け込みつつ有る、探り狙う者。
的に牙を起て、向かい吼える、憎しみ狙う者。
同じ的を見据えても、お互いは、邪魔な者同士。

呪は月を擁いて　第三十一話

『随分と沸点が低いんだね？』

第三十話　『あいつも誘って良いか？』（後書き）

ラウラ、神威をロックオン！
シャルル、一夏をロックオン！
そして、アホの子一夏、復活！

次はランチタイムで始まります。

第三十一話　『随分と沸点が低いんだね？』（前書き）

手作り弁当持参です。

第三十一話　『随分と沸点が低いんだね？』

昼休み、屋上。

今、昼飯を食べ始めようとしているのだが、

「わたくしも作ってきましたわ」

「「「「……え？」」」」

「……？」

セシリアのＢＴＬサンド？らしき物の登場で、場が凍った。

デュノアは、解らないといった顔をしている。

俺達は至急、対策会議を視線で始める。

――――兄さん、如何するの？

――――俺と箒は逃げられる。問題は鈴とデュノアだ

――――俺は！？

――――大哥、あたしは……コレを使うわ

――――鈴、いいのか？

――――だから俺は！？

――――背に腹はかえられないわ

――――解った、フォローは任せろ。あとデュノアには話を振るな

――――俺は無視！？

――――？一夏はセシリアのを食べるんだよね？

――――またか！？

会議終了、作戦名［真心ヲ曲ゲテ］決行。

「セシリア、あたしも作ってきたんだけど……」

鈴は、セシリアから見えないタッパーの裏でサインを出した。

「鈴さんもですの？」

タッパーを叩いた。つまり、

「鈴は何を作ってきたんだ？」

何を作ってきたか聞け。と言う事だ。

「酢豚よ、ほら」

そう言い、鈴は手に持つタッパーを開けた。

「ほお、美味そうだな……ん？箒、今日は……」

自然と気になった様に装い、箒の方を向く。

「私は和がメインだよ」

箒は重箱を開け、中身を見せた。

「和中洋か、食い合わせが悪るそうだな……鈴、悪いが……」

強引に理由をでっち上げ、すまなそうな顔を装い鈴を見る。

「そうね……セシリア」

鈴は、仕方ないといった顔で溜め息を吐き、セシリアの方を向いた。

「はい？何ですの？」

「今回は、あんたに譲るわ。一夏に食べてもらって」

鈴は、少し残念そうな作り笑いで言った。

「……良いのですか？」

「良いのよ、あたしは付き合い長いし」

慈悲深い作り顔で言った。

「鈴さん……」

感動するセシリア。慈悲の笑みを浮かべる鈴。傍観する俺と箒。疑問顔のデュノア。絶望し、指で十字を切る一夏。この場はよく解らない空気を発していた。

「一夏さん、どうぞ」

「……ありがとう、セシリア」

［真心ヲ曲ゲテ］作戦終了ヲ此処ニ宣言ス。

幸福と絶望が見事に割れた風景から目を逸らし、此方も食べ始める。

「デュノア、待たせたな」

「さっさと食べましょ」

「遠慮無く食べていいよ？」

俺達は、先程の事は忘れた。と言わんばかりに態度を変えた。

「え、あ、うん。ありがとう……？」

困惑するデュノアに、簡潔に説明をする。

「セシリアの料理は食わない方が良いぞ」

「え、何でですか？」

「見た目だけの模造品だからよ。何使ってるか判らないし」

「お腹壊しちゃうよ？」
「そうなんだ……そうみたいだね。うん、気をつけるよ」
デュノアは、笑顔で脂汗を流す一夏の顔を見て、即納得した。
「あ、大哥。酢豚も食べてよ」
「そう言や鈴の作った物食うの初めてだな。……お、美味いな」
「ふふん、当然よ」
「鈴、私も貰って良い？」
「良いわよ。あんたも食べたら？」
鈴はデュノアにも薦める。が、
「うん。……あ」
デュノアは箸が上手く持てずに、もたついていた。
「……箸、フォーク有るだろ？デュノアに渡してやってくれ」
「うん。……はい」
「あ、ありがとう。良く解りましたね？」
「ああ、セシリアも同じだったからな。あと、敬語は要らないぞ？」

「でも、目上の方ですので……」

……どういう積もりだ？本気で探る気が有るなら乗って来そうなもんだが……俺の思い過ごしか？其れとも、コイツの地か？

「大哥が良いって言ってるから良いんじゃない？あたしの時もそう言ってたし」

「兄さんはそう言う事気にしないよ？」

「そう言われてもね……」

昼間から思っていたが、手馴れて無い感じがする……素人？

「まあ、好きにしてくれ。無理強いはしないさ」

「はい、わかりました」

装っている？……いや、違う気がする。判らん、保留だ。判断材料が足りん。

「固いわね～」

「何言ってんだ、鈴も最初は渋ってただろ？」

「あ、わたしは少しだけだったじゃない！」

「ふふ……」

「あはは……」

「ちょっと、笑わないでよ！」

「ご、ごめん。ふふ……」

取り合えず、様子見だな。

因みに、一夏とセシリアは、

「一夏さん。今日はグリーンティに挑戦しましたわ」

「あ、あああありがと……これ、茶柱が凄いんだけど？」

「はい。茶柱を立てると吉兆だと聞いたので、立つようにしましたの」

「そう、なんだ……」

こんな感じだった。

◇◆◇◆◇◆◇

「じゃ、任せた」

「ええ、任されたわ」

夜、私は神威君の部屋に居る。
頼まれた事は、シャルル・デュノアのデータ。ただ、データと言っても大した物ではない。多少突っ込んだ履歴書のような物。

「もう一人の方はいいの？」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。神威君に喧嘩を売った奴。

「技能が解らなければ……まあ、必要無いだろ」

「理由は？」

必要無い。その理由は解るが訊く。

「理由は「軍人だから」……解ってるなら訊くなよ」

と、見せかけて先に言う。理由など、私達には解りきっている。
軍人は枠に縛られる。それは個よりも優先されるもの。学園(此処)では、行動はパターン化するだろう。情に走る時は、限られてくる筈だ。

「確認は必要よ？」

「確かに、そうなんだがな」

「一応、来た目的も訊いておこうかしら？」

「……訊く必要が有るか？」

「……正直言うと、無いわね」

目的は、間違い無く千冬さん。それ以外の目的が考えられない。

「で、如何する積もり？」

「放置」

「でしょうね」

そう、動く理由も必要性も無い。動く時は相手が此方に害を与えた時、ぐらいだろう。

目的が果たせない事は解りきっている。千冬さんに以前のような貸しが有れば、引き込める可能性は有る。だが、もう貸しは無く行く理由も存在しない。相手は、もう詰んでるような状態だ。大きな荒事を起こせば、詰み終わる。

「ドイツに帰すまでの辛抱だけどな」

そして、相手をドイツに帰せば、この件は終わりだ。此れが任務だとすれば、相手も無能のレッテルを貼られ、表では二度と顔を合わす事も無くなるだろう。

「そうなると、もう一人の方よね。どの様な感じだったの？」

「よく判らん」

「……何よそれ」

「いや、探りに来たのは分かるんだが……」

そう言い言葉を濁す……と言うより、言葉を捜している感じだ。彼にしては珍しい。

「何て言うか……素人？」

「……冗談、かしら？」

信じられない。探りに来た人が、素人な筈が無い。

「受けた印象が、だ。だから……如何しようか考え中」

探りに来たのなら、多少はその訓練なり何なりをやってから来た、筈。

「そう成ると、面が割れた時の事を考えた方が良い……かしら。確か、一夏君と同室よね？」

「ああ、そうだ。何か、一夏がやらかして……割りそうな気がするが」

……有りえる。当たってそうな気がする。

「……一夏君に期待しとく？」

「……そうするか？」

こんな事、一夏君に期待する時が来るなんて……

「……教育する時間、無かったのかしら？」

「……資金面、かもしれないぞ？」

「……若しかして、デュノア社の経営状況、良くないのかしら？」

「……かもしれん」

「「……」」

訓練の時間や資金が無い。という極端な考えが、私達の頭に浮かんでいた。

「……取り合えず、暫く様子見でいくのね？」

「……取り合えず、暫く様子見でいく積もりだ」

取り合えず、私達はその考えを捨てた。

「……違う、筈よね？」

「……違う、筈だ」

しかし、染み付いた様に離れなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「クシュッ」

「シャルル、風邪か？」

「ううん、違うよ。鼻がムズムズしただけ」

「そっか。ならいいんだ」

「ふふ、ありがとう、一夏」

そう言い、シャルルは笑った。

「お、おう」

男の笑顔にときめくな、俺。

「あ～……で、なんだっけ？」

「漆月さんの事だよ」

「あ、そうだった。神威兄が怖かったって所だったっけ？」

「……うん」

シャルルは、朝の件で神威兄に苦手意識を持ったらしい。猛禽類の笑みで挑発した辺りで。
まあ、確かにゾク…っとする表情だった。

「でも、実際そんな事無かっただろ？」

「そうなんだけど、ね。最初が最初だったから…」

と言うシャルル。これはイカンと思う。
神威兄の弟たる俺は、この苦手意識を無くさなければなるまい。

「神威兄は優しいぞ」

大抵はピンチに陥った時だけど。

「わかるよ、お昼の時も気に掛けて貰ったし」

「神威兄は周りを良く見てるんだよなぁ」

見た上で放っておく事も有るけど。

「うん、そうだね。……あ、一つ訊きたいんだけど。いい？」

「ん？おお、いいぞ」

「漆月さんは皆にお兄ちゃんって呼ばれてるけど……何でなの？」

「……理不尽だから？」

シャルルの質問に、ポロッとこんな言葉が出た。

「……そうなの？」

「若しくは……神威兄だから？」

実は、考えた事が無い。だから分からない。

「それ、答えになってないよ」

シャルルは苦笑しながら言うが、理由が分からないんだから仕方がない。

また一つ、神威兄の謎が増えた。何でだろ？

「シャルルは何でだと思う？」

「一夏、訊いてるのは僕だよ？」

若しかして神威兄は……知れば知るほど謎が増えるのか！？我が兄ながら恐るべし！！

「神威兄って謎だよな？」

「……一夏も負けてないと思うよ？」

俺も、神威兄と同じく、謎が有る？……マジで！？

「……何で嬉しそうなの？」

何故シャルルには解らない！？この喜びが！！……そうだ！これなら苦手意識も無くなる筈！

「なあ、シャルル」

「……僕の話、全然聞いてないよね？」

シャルルは溜め息混じりに言うが、今の俺には気にならない。

「神威兄の事、お兄ちゃんって呼べば？」

そう、兄と呼ばせれば解決するのだ。

「一夏、人の話は……え？ええ！？」

「そうすりゃ苦手意識も無くなるだろ？」

兄と呼べば、苦手意識など持つわけが無い。うん、我ながら名案だ。

「よ、呼べる訳ないよ！！」

シャルルは顔を赤くして否定する。

「恥ずかしいのは最初だけだ」

「で、でも！」

「取り合えず一回、一回だ。一回言ってみろ」

「う、あ、うぅ～……」

モジモジとし出したが、気にならない。

「お……おにぃ……」

「もうちょっとだ！」

「お……お兄ちゃん」

顔を真っ赤にして言ったシャルル。俺は一つ頷き、歩き出した。

「神威兄の所に行ってくる」

神威兄に報告をする為に。

「ま、待って！行かないで！言わないで！！」

「何でだ！？」

「恥ずかしいじゃない！！」

結局、シャルルの激しい抗議と引き止めにより、断念する事になった。

◇◆◇◆◇◆◇

土曜日の午後。

一夏達は第三アリーナで特訓をしている。

俺も、遅れたが参加する積もりだ。今、扉を潜った所だ。

「……その能力って織斑先生の――――初代ブリュンヒルデが使っていたＩＳと同じだよね？」

どうやら、説明中らしい。

「仕様も同じらしいだよな……やっぱ姉弟だからか？」

「あまり関係無いと思うよ。ＩＳは操縦者との相性が重要だから……意図的に再現できるとは考えられないよ」

……探る視線。探りに来たのは間違い無いんだが、遣り方が温い。一夏が知識ゼロなのは解っているのだから、もう少し突っ込んで行っても良いと思う。

この間、一夏が俺に何か言おうとしてデュノアに止められる、なんて事が有った。一夏が逆にデュノアの秘密か何かを知ったのか？

「ふ～ん……ん？神威兄、居たのか？」

「おう、今来た所だ。デュノア、一夏のお守りご苦労」

「いえ、僕から言い出した事です。気にしないで下さい」

こいつ、大丈夫なのか？色々な意味で。

「俺はお子様扱いかよ……」

「なら、教わらなくていいんじゃないか？」

「……はい。俺、お子様です」

「ふふ、一夏はこれからだよ。……一夏、実際に射撃武器を使って特性を知っていこうか？」

「ああ……って他の奴の武器使えないんじゃなかったっけ？」

「普通はね、でも使用者が使用許諾（アンロック）すれば使えるようになるよ。……今、一夏と白式に使用許諾したから。はい、これを撃ってみて」

「空でな」

一夏が渡されたアサルトライフルを構える前に、一言いっておく。

「お、おう」

案の定、周りに人が居る事を忘れていやがった。

「デュノア、頼んだ」

「あ、はい。わかりました」

上がる二人を視界から外し、傍に居る箒、鈴、セシリアの方を向く。

「で、一夏はどんな感じだ？」

「う～ん……」「話に成らないって言うか……」「それ以前、ですわ……」

「……何故？」

「一夏が話をね？」「理解してない所じゃないのよ」「全く食い違っていましたわ」

「……そうか」

ただ、疑問に思った事が有る。俺が居ない時、この三人はどうやって教えているのだろうか？と。非常に気に成ったので、訊いてみる事にした。

箒の場合。

「ん～……えいっ！やあっ！……かな？」

意味が全く解らん。感覚どころか感性でやっているのか？

意味が解る様に……の前に、言葉に出来るように頑張りましょう。

鈴の場合。

「こう、何となく？……まあ、感覚よね。感覚」

こう、何となく。とは何だ？そこが重要じゃないのか？
何となく、では無く意味が通じる言葉にしましょう。

セシリアの場合。

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ」

細か過ぎだ。そして角度が全てか？
もう少しかみ砕いて、角度以外の言葉を使える様にしましょう。

結論、俺も解らん。
これは一夏だけの問題では無かった。寧ろ、この三人に問題が有った。因って、三人には説得と言う名の説教をする事にした。

暫くして、一夏とデュノアが戻ってきた。

「……神威兄、何やってんだ？」

「……漆月さん、三人とも泣きそうですよ？」

「俺式指導と説得だ」

俺の目の前に、ＩＳ装備で正座する三人。そして、ＰＩＣと補助動力をカット。更に、武装を背負わせた。箒には、特別に俺のライフルを貸してやった。

「神威兄、セシリアが死にそうなんだけど……」
「だぃ……じょう、ぶ……ですわ……」
「漆月さん、他の二人も……」
「にぃ、さん……」
「だぁ、げぇ……」
まあ、そろそろいいか。
「反省したか？」
「「「はぃ……」」」
「よし、もう終わりにしてやる。楽にしていいぞ」
「「「はぃ……」」」
三人は、よろよろと起き上がろうとするが、無理のようだ。
「……神威兄、やり過ぎ」
「……漆月さん、やっぱり怒ると怖いね」
後ろで何か言っているが、序でに何か騒がしいが知ったことか。
「おい」

「あん？」

呼び掛けにられた方に振り返ると、ラウラ・ボーデヴィッヒが居た。

「私と戦え、漆月　神威」

そして、挑戦状を叩きつけてきた。

「何故だ？」

「目的の為だ。その為に貴様を……超える」

暈かした言い分だが、意味は解る。

「其れでお前に、本当に向くと思うのか？」

だが、コイツのやっている事は、無意味。寧ろ遠ざけるだろう。

「黙れ！黙って戦え！！」

聞きたくない。とばかりに叫びながら、肩の実弾砲を俺に向けた。

「ＩＳを展開していない人間を撃つ気か？其れが教官に教わった事か？」

「――――ならば戦いたくしてやる！」

俺に射殺す様な視線を向けながら、

「避けろ一夏！」

砲身を一夏に向け発砲した。

「こんな密集空間で撃つなんて……ドイツの人は何考えてるの？」

横から割り込んできたデュノアが、一夏を護っていた。

「随分と沸点が低いんだね？」

「貴様……」

更に挑発までし始め、ボーデヴィッヒの意識を自分へと向けさせた。

「それとも、頭がビールの泡みたく弾けているのかな？」

デュノアはアサルトカノンを出し、ボーデヴィッヒはデュノアに向き直った。

「ふん……煩い奴だ。舌だけは回る様だな」

「舌だけか如何か、試してみる？」

「フランスの第二世代型（アンティーク）如きが……貴様から始末してやろうか？」

「出来るの？未だに量産の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）で」

お互いの砲口を向け合い、放つ体勢に成った。

＜そこの生徒！何をやっている！＞

だが、割られた。

「また、邪魔が入ったか……」

興を削がれたのか、ボーデヴィッヒはＩＳを解除し、

「……漆月　神威。教官の大会二連覇を、偉業を『そんなモノ』と言わせた貴様を――――貴様の在り方を、私は認めない」

そう言い捨て、去って行った。

「一夏、無事か？」

俺は直ぐに、一夏の安否を確認した。

「おう、シャルルのお陰で無事だ。シャルル、ありがとな？」

「如何致しまして。一夏が無事で良かったよ」

「俺からも礼を言わせてくれ。一夏を護ってくれて、ありがとう」

見通しが甘かった。そんな謝罪も含めて。

「い、いえ、当然ですよ。その、友達ですし」

「……そうか」

返答は本心だろう。

ただ、その言葉通りに受け取れない、受け取る訳にはいかない俺自身に、嫌気がした。

「取り合えず、また有るかもしれないから注意しろよ？」

「おう」「はい」

狙われているのは、俺と一夏。

「お前達もな？」

だが、飛び火する可能性も有る。

「「「は～い……」」」

未だに動けずに居る、三人にも注意を促した。

◇◆◇◆◇◆◇

僅かな油断で、探り狙う者の面が割れる。

割れた中身は、情を誘い、怒りを覚えるモノだった。

そして、憎しみ狙う者の怒りは、他へと向かう。

呪は月を擁いて　第三十二話

『気が向いたらで良い』

第三十一話　『随分と沸点が低いんだね？』（後書き）

一夏のブラコンモード発動。ブラコン一夏は強力です！！

シャルは汚染攻撃を受けた！

じわじわと染まって行くでしょう。

ラウラって、ぶっちゃけ最初から詰んでるよね？

第三十二話　『気が向いたらで良い』（前書き）

長くなっちゃった。

第三十二話　『気が向いたらで良い』

「……はぁ」

自室へ戻りドアを閉めたと同時に、溜め息が自然と出てしまった。

嬉しそうに手を握って……

先程の事。週に二回大浴場が使えると山田先生に言われて直ぐ、一夏は山田先生の手を握りはしゃいでいた。

何で、こんなに苛々するんだろう……

少し乱暴に手荷物を置いてしまった。何時もはしない事に自分でも少し驚いた。

「はぁ……嫉妬、だよね……」

そう、此れは嫉妬だ。仲の良い同居人を取られた様に思い、嫉妬した。

先程の一夏に対する態度が、それを見ていた漆月さんの表情が、その証拠だ。

胸に溜まるモノを振りほどく様に、縛っていた髪を解いて備え付けられた鏡を見た。

「シャルル・デュノア……」

その映る者と掌を合わせた。ＩＳ学園に来る前に隠す事に成った者と。

二年振りなんだ……

母が死んでから、自分を取り巻くモノ全てが変わってから、初めて物では無く人として接してもらった。自分の手を引き、暖かい輪に連れて行ってくれた。

だから今、一夏達と出会って五日が経った今、嘘をつく事が少し辛い。

羨ましい……

明け透けな位に、素直に自分を出せる一夏達がとても羨ましい。

少しは隠してよ、漆月さんみたいに……

漆月　神威。あの人は、ある一定以上は踏み込ませない。そんな印象を受けた。

怒りもする、からかったりもする、呆れもする、驚きもする、笑ったりもする。これは全部、本心だと思う。

でも、あの表情（かお）を見ていない……

初日に見た、嗤う表情を。

もし、ばれたら……

自分にも向けるだろう、あの表情を。そして、一夏達も……。

シャワーでも浴びて、気分を変えよう……

先程とは違う、胸に溜まる苦いモノを払う様に服を脱ぎながら、シャワー室のドアを開けた。

◇◆◇◆◇◆◇

夕暮れ時、男の手洗い場から戻る途中の事。

「何故ですか！？何故こんな所で教師など！」

先程喧嘩を売ってきた奴、ラウラ・ボーデヴィッヒと、

「何度同じ事を言わせる気だ。私は此処でやるべき事が在る」

千冬姉さんが居た。

「此処で、この極東の地で何が在ると言うのですか！？」

何時もの冷徹仮面を剥ぎ、感情を露わにするボーデヴィッヒの目は、嘆きに近い。

「教官、我がドイツで再びご指導を！此処では教官の能力は半分も生かされない。此処は教官が居るに相応しい所ではありません！」

対する千冬姉さんは少しだけ目を細くしただけで、表面上は然程変わらない様に見える。

「大体、此処に居る者達は教官が教えるほどの者が居るとは思えません！ですから――――」

「――――其処までにしておけ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「――――っ」

悲願する様なボーデヴィッヒを、千冬姉さんは切り伏せる様に言った。

ただ、ボーデヴィッヒを見る目が、少し遠い。

「もう一度だけ言っておこう。私は此処でやるべき事が在る。そして、今此処に居る事は私自身の意思だ。もうドイツに指導しに行く事は……無い」

「な……」

ボーデヴィッヒは一度は絶句したが、震えが解る声色でせがむ様に言った。

その姿は、只の十五歳の少女の様に見える。

「……何故です。教官は、私を……」

「ドイツを去る時に言った筈だ。私はもう必要無い、と」

自分は用済み。そんな答えにボーデヴィッヒは俯き下唇を噛み、

「――――私は諦めません！」

そう言い放ちながら去って行った。

「やれやれ、困った駄々っ子だ。……お前もそう思うだろ？そこで覗いている男子」

千冬姉さんは苦笑しながら俺に同意を求めた。

「……全くですね」

ばれている事はわかっていたので、同意しながら出て行った。

ただ、今回は見逃して欲しかった。

「あれが、ラウラの根底に在るものだ」

ボーデヴィッヒが先程見せた表情（かお）、その奥に在ったモノ。

俺も一度味わったモノに似ていた。

「何故、俺に？」

だが、知りたくなどなかった。

「知っておいた方が良いと思ったからだ。でないと遣りすぎる気がしてな？」

「……慧眼（けいがん）、感服します」

千冬姉さんは口の端を吊り上げながらそう言った。如何やら確信犯らしい。

まあ、読みは当たっているので言い返せない。

「頼んだぞ？」

「……何で俺なんだよ」

正直、荷が重いと思う。

「一番執着しているからな」

させた本人が何を言う？と言いたかったが言った所で今更だ。

「……約束できねえぞ？」

ただ、約束出来る事ではない、余計に荒れる可能性も有る。

「気が向いたらで良い」

だが千冬姉さんは、大丈夫と確信している表情（かお）をしていた。何か確証でも有るのだろうか？

◇◆◇◆◇◆◇

頭を掻きながら去る神威を見送りながら、想い出す。

同じ様に見えたからな、あの時と

ラウラのうち捨てられた姿が、助けを求める姿が、十年前の神威を想わせた。

それに、少し抑えも必要だ

神威は、少々遣り過ぎる節が有る。更識に出向いてから、その傾向が出始めた。

漆月で何をしていたのか詳しくは知らないが、決して治まる方向には行かないだろう。

手遅れでなければいいが……

そう思いながら、背が見えなく成るまで見送った。

◇◆◇◆◇◆◇

「ただいま〜」

白式受理の為に酷使した右手を報いながら、部屋に入った。

「シャルルは……ん!?」

「あ……」

目の前にタオルをまいた、シャルル似の女の人が居る。手にボディーソープを持っている。ボディーソープが切れているので新しいのを使おうといているのだろう。だが、その事を知っているのは俺とシャルル……って事は!?

「――――シャルル!?」

「……」

え? 何で胸が膨らんでる? シャルルは、女!?……いや待て、落ち着け。落ち着くんだ俺。こんな時は落ち着いて深呼吸だ。ヒッヒッフー……よし、そしたら後は――――

「神威兄ぃー!!」

「あ、待って！」

――――駆け出すだけだ！！

◇◆◇◆◇◆◇

現在、一夏の部屋。そこで頭を掻き毟りたい衝動に陥った。俺と夢織は、デュノアの面を割ることを一夏に期待した。そして一夏は期待通りにやってくれた。これは良い。だが割った中身が――――

「……女、だったんだな」

「……はい」

――――これだ。一夏に文句は無い。俺達が勝手に期待しただけだ。割り過ぎだ！などと言える訳が無い。だがこの狙った様なタイミングは何だ？千冬姉さんと一夏が裏で糸引いてる様な錯覚を感じる。……良く似た姉弟だな。

「あー……頭いてぇ」

「……ご免なさい」

「いや、デュノアじゃない。……別件だ」

毀れてしまった呟きに、頭を下げるデュノア。勘違いさせてしまったので否定する。そして頭を切り替える。

「理由を話してくれるか？」

「……はい」

デュノアは頷き、語り始めた。

「僕はデュノア社の社長、父からの命令で此処に来ました」

「……命令？」

一夏が疑問顔をしているが、

「一夏、後にしろ」

「……わかった」

今はデュノアの話を聞くべきだ。

「命令内容は……一夏と漆月さんと接触し、機体と本人の生体データ取れ。です」

これは予想通り。寧ろそれ以外の理由が無い。

「男装していたのは接触し易く成るからか？」
「はい。広告塔の意味も有りますけど……」
……広告塔？男装し、広告しなければならない理由が有るとすれば……。
「……デュノア社の経営は、良くないのか？」
「はい、その通りです」
……夢織の言うとおりだった。
「何でだ？デュノア社の量産ＩＳのシェアは世界第三位なんだろ？」
「でもね、結局は第二世代型なんだよ」
デュノアは、疑問顔の一夏に苦笑しながら説明を続けた。
「今求められてるのは第三世代型。でもデュノア社は形に出来なかった。第二世代型も最後発でデータも時間も足り無すぎたの。簡単に言っちゃえば……デュノア社は世間の波に乗り遅れたんだよ」
「経営が良くないってのは？」
「第三世代型が出来なかったからだよ。政府からの援助は大幅に削減され、イグニッション・プランのトライアルで選ばれなかったら援助は打ち切り、ＩＳ開発許可も剥奪されるの。だから……あの人は僕に一夏と漆月さんのデータを盗んで来いって命令したんだよ」

言う事は言った、そんな表情だった。

「この後……デュノアは？」

「僕は……フランス政府に呼び戻されると思います。デュノア社は、潰れるか他の企業の傘下に入るか、でしょう。……もう、僕には如何でもいい事ですけど」

「……呼び戻されて、如何なる？」

「恐らく代表候補生を降ろされて……良くて牢屋でしょう」

悪くて尋問、その後は……。

「悪いのはシャルルじゃないだろ！？」

諦めを見せるデュノアに、一夏が否定した。

「第一親は、親は何やってんだよ！」

そして拳を作り、怒り吼えた。

「あの人は、僕なんて如何でもいいんだよ。愛人の娘なんて、何とも思ってないんだよ」

「――――え？」「愛人の、娘？」

驚く俺達を他所にデュノアは語りだした。溜めていたものを吐き出すように。

「会った事は二回しかないし、話した回数なんて両手で足りる。本妻の人にだって――――泥棒猫の娘が！なんて言って殴られたよ。お母さんも言ってくれれば「何だよそれ！」――――っ！？」

崩れる様な笑みで語るデュノアを、一夏が止めた。

「産んだ親が、産んだだけの奴が、そんなに偉いのかよ！」

「い、一夏……？」

滅多にする事の無い、本気の怒りで。

「産んだだけで！何したって良いなんて事、そんな事……ふざけるな！自分に必要な時だけで……玩具の積もりか！！」

「ど、どうしたの？」

肩で荒い息をする一夏にデュノアが問い掛ける。

「……悪い、抑えられなくなっちまって」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺と千冬姉は――――捨てられたんだ。産んだ人に塵みたく」

「あ……」

デュノアは思い当たる節が有るのだろう。申し訳なさそうに顔を伏せた。

「一夏、その……ごめん」

「いや、俺が勝手に怒っただけだ。気にしないでくれ。俺には千冬姉と神威兄が居る。親と呼べる人だって居たんだ。それより、シャルルのこれからだ」

怒りを散らすように、頭を振りながら言った。

「……僕に選択権なんて無いから如何しようも無いよ」

「……だったら、此処に居ろ」

「……え？」

また、諦めようとするデュノアを、一夏がたたみ掛ける様に言う。

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

……驚いた。一字も間違えず暗記しているとは思わなかった。

「――――詰まり、此処に居れば手出しが出来ないって訳だ。三年有れば考える時間なんて十分だろ？」

「……いいのかな」

「いいんだ。シャルルは、此処に居て、いいんだ」

「……うん。ありがとう、一夏」

漸く、笑顔を見せるデュノア。

「お、おう」

照れくさそうに頷く一夏。そんな一夏を見て俺は、笑い出したくなった。

――――神威で、いいんだ

千冬姉さんとよく似た言葉を贈った事が嬉しくて、懐かしくて。

「……本当に、よく似た姉弟だよ」

緩む口を掌で隠し、必死に抑えた。

同時に少し刺さる物が在ったが、気に成らない程に嬉しかった。

「ま、まあ……俺も出来る事が有れば手伝「一夏さん、いらっしゃいます？」――――うえ？」

ノックしたのはセシリア。だが、今入れるのは不味い。

「デュノア、ベットに入ってろ「は、はい！」……一夏、お前はデュノアの看病役「お、おう？」早くベットの傍に行け！「サー！」……俺に話を合わせろ、いいな？「「はい！」」……よし」

ドタバタと二人を動かした後、扉を開けた。

「一夏さ……お兄様。いらっしゃったのですか？」

「ああ、デュノアの体調が崩したと一夏に知らされてな。セシリアは如何して此処に？」

「そうでしたの……わたくしは、一夏さんとお兄様が夕食をお取りになってない様でしたので……その、体調でも悪いのかと思ったので……」

誘いに来た、と普通に言えば良いと思うが、

「それで、様子を見に来たのか」

「……はい」

今は好都合、誘導し易い。

「一夏にはデュノアの看病を頼んでしまってな……俺が二人の食事を取りに行こうとしていた所なんだ」

「そう、ですか……」

「悪いな、セシリア」

俺が申し訳なさそうに言うと、セシリアは肩を落した。が！

「い、いえ！……あ、でしたら、わたくしがお作りしましょうか？」

「「「！？」」」

流石は代表候補生、ただでは転ばなかった。とんでもないカウンターを打ってきた。

尻目で一夏とデュノアを見ると、

「シャ、シャルル、大丈夫か？」

一夏は、冷や汗を流していた。

「う、うん……ごほっ……今はね」

デュノアは、掛け布団を握る手が震えていた。

「如何しましたの？」

「い、いや……」

キョトンとした顔のセシリアに対し、俺は脳を総動員で動かし回避する手段を探す。

「セシリア……」

……何か、何か無いか！？

「何でしょうか？」

「その、だな……」

「はい」

……！有った！！

「……病食の食材は有るのか？」

「あ……」

良し、この儘押し切る！

「今回デュノアには俺達日本人が食べる病食を用意しようと思ってな。デュノアも食べてみたいと言ったからな……だよな？デュノア？」

「は、はい！……ご、ごほっ」

おい、音量落せ！元気すぎだ！

「それで一夏も一緒に済ませる事にした……だよな？一夏？」

「お、おう！……シャルル一人だとアレだしな」

おい、思い付かないんなら言うな！バカ！

「そうでしたの……」

「ああ、だから今回は遠慮してくれないか？」

幸いセシリアは気にしてないので、下手なフォローは入れずに終わる方向に進めた。

「……解りましたわ」

回避、完了……

「……お兄様も病食を？」

……してなかった。

「俺は……作ってもらう間に済ませる積もりだ」

「そう、ですか……」

苦し紛れの言い訳で、何とか成った様だ。

「……すまんな」

「いえ、此方こそですわ。出過ぎた事をしてしまいましたわ」

「互い様、にしておこう」

「はい、解りましたわ」

……危なかったが、今度こそ回避完了だ。

「と、言う訳だ。一夏、デュノア、待っていてくれ」

「お、おう」「は、はい……ごほっ」

「一夏さん、わたくしも失礼しますわ。デュノアさん、大事無い様に」

「お、おう」「あ、ありがとう……ごほっ」

そして、俺とセシリアは廊下に出て、扉を閉めた。

食堂に向おうとする時、

「お、お兄様、わたくしもご一緒しても……」

セシリアも付いて来た。

「ん？……ああ、いいぞ」

「はい、ありがとうございます！」

セシリアの様子に苦笑しながら歩き始めた。

「あ、大哥発見」

暫く歩くと、鈴が飛び出てきた。

「あら？鈴さん」

「如何した？」

「大哥達はご飯食べた？」

如何やら夕食の誘いらしい。
「いや、これからだ」
「じゃ、あたしも一緒にいい？」
「ああ、いいぞ」
「ええ、構いませんわ」
「よし、じゃあ……」
俺達の返答に頷き、
「とおっ！」
俺の後ろに回り、跳び付いてきた。
「り、鈴さん！何して……」
「おんぶ」
「お、おんぶ……ですか……」
鈴は偶に、この様な事をする。
大体は、叱った後に遣ってくる。
「あんたもする？」

「で、できませんわ……そんな事……」

小突いた後に擦り寄ってくる猫、みたいな感じがする。

「相変わらず損な性格してるわね……あれ？一夏は？」

「一夏さんはデュノアさんの看病をしていますわ」

「看病？」

「デュノアさんが体調を崩していまして、一夏さんはその看病をしてますの。お兄様は食事をした後、病食を届ける予定ですわ」

ぷらぷらと足を揺らしながら訊く鈴に、悔しそうな顔をしたセシリアが答えた。

「ふ～ん……」

「如何した？」

「なんか……こんな時、大哥も看病しそうな気がしただけ」

珍しいと言う鈴に、セシリアも続く。

「そうですわね……お兄様、如何してですの？」

セシリアの所為、と言えなくは無いが、

「さあ？何でだろうな？」

俺が居るのは、場違いに思えた。
「大哥、誤魔化さないで」
「そうですわ。教えて下さい」
「何となくだ、何となく」
そうしている内に食堂へ着いた。そして、
「……兄さん、遅いよ」
頬を膨らませた箒が待っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

二人が出て行ってから暫くして、
「……もう大丈夫かな？」

「……もう大丈夫だろ」

一夏と確認し合い、掛け布団を退けた。

「……危なかったね」

「……ああ、危なかったな。色々な意味で」

そう、正体がばれる意味でも、命の危機の意味でも。

「神威兄を呼んでて良かった……」

「そうだね……」

安堵の溜め息を吐く一夏に、心の底から同意した。

ばれた直後は、あの表情で問い詰められるものだと思っていた。

でもそんな事は無かった。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「漆月さんの事、教えて？」

今迄、漆月さんの事は主にＩＳ関係しか訊いてなかった。

だから、今更ながら気になってしまった。

「おう、良いぞ。何から聞きたい？」

「そうだなぁ……一夏は何時から漆月さんの事、神威兄って呼んで

るの？」

直ぐに思いついたの事はこれ位だった。しかも漆月さんの事じゃない。

「三、四年前……だったと思う」

「それまでは名前で呼んでたの？」

「いや、兄貴って呼んでた」

兄貴……一寸言ってみたいかも。

「その前は？」

「その前は……あ～……」

「……？」

言いよどんでいる。言い難い事なのかな？

「……お兄ちゃん」

……お兄ちゃん！？

「……ぷっ」

幼い一夏を想像出来なかったので、今の一夏が呼んだ姿を想像してしまった。

「……そんなに可笑しいかよ」

「ううん、そうじゃなくて……なんか、可愛いなって思ったの」

そう、今の照れた様な、不貞腐れた様な一夏が。

「かっ……！？」

今度は顔を真っ赤にして絶句した。うん、やっぱり可愛い。

「ほ、他に訊きたい事は？」

「ふふ、そうだなぁ～……一夏と漆月さんは何時から一緒に暮らしてたの？」

本当は、何でお兄ちゃんと呼ばなくなったの？と訊きたかったけど、訊かなくても解ってしまったので止めた。

「十二年前、だった」

「え？そんなに前から？」

「ああ。俺達が捨てられた日から、一緒なんだ」

「あ……」

考えてみれば簡単な事だった。十二年前に捨てられて、子供二人で生きていける訳がない。

「その……ご免」

「いや、いいんだ。あの時、俺達は……救われたんだから」
僕の謝罪に首を振りながら言う一夏は、陰りは無かった。
「そっか……その時から一緒なの？」
ただ、少し遠くを見ていたのが気に成った。
「ああ、そうだな」
「じゃあ、一夏の親って漆月さんの？」
「……ああ、龍我さんと絆さん、俺と千冬姉にとって本当の親だ」
「……良い両親なんだね。きっと」
一夏の顔から解る。
「うん、良い両親だった」
「……だった？」
……過去形？漆月さんの両親は、確か――――
「……十年前に、事故で亡くなったんだ」
――――故人。
「あの時俺、ホントにガキだったからなぁ……」

「……」

「俺達の苗字も、漆月に成るって喜んで見送って……」

「一夏……」

「神威兄達が居ない間に、漆月って漢字で書ける様に筞と練習して……」

「一夏！」

「でも――――！？」

止めたい、そう思っただけだった。

「一夏……ご免」

「シャル、ル？」

一夏の頭を抱き込んでいた。

「ご免、ご免ね……」

これは、訊いちゃいけない事だったんだ。

「俺の方こそ、ご免。なんか、止まんなくて……」

「ううん、一夏は悪くないよ」

悪いのは、間違いなく僕。

「ご免ね一夏、嫌な事訊いて」

「いや、多分……聞いて欲しかったんだと思う」

誰かに聞いて欲しい。その気持ちは解る。僕もきっと、そうだったから。

「そっか……ねえ、一夏」

「ん？何だシャル「俺だ、入るぞ」――――るぅ！？」

ノックの音がして、漆月さんが入ってきた。

「シャルル、放れ――――え！？」

一夏は慌てて放れ様としたけど、

「――――きゃあ！」

僕はベットに腰掛けた状態で一夏の頭を抱いていたので、

「如何し……た」

漆月さんが入る時には、一夏が僕を押し倒した様な状態になっていた。

「「「……」」」

少しの沈黙の後、漆月さんは何も無かった様に動き出し、

「……此処に置いておくぞ。鍋と食器は明日の朝返せばいい」

持っていた鍋と食器を机に置いて、

「どうぞ、お楽しみを続けてくれ」

ニヤリ、と笑ってドアを閉めた。

「か、神威兄！誤解だ！！」「し、漆月さん！待って！！」

慌てて二人で追いかけたが、

「おう、何だ？」

直ぐにドアが開いたので、二人でヘッドスライディングをしてしまった。

その後、お粥を食べ終わるまで、漆月さんはニヤニヤとしながらからかっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

あたしは今、第三アリーナに向かって歩いている。理由はトーナメントに向けて特訓する為だ。
その途中で、
「あら？」
セシリアと出くわした。
「セシリア、あんたも特訓？」
「ええ、鈴さんもですの？」
「そうよ」
セシリアも特訓、と言う事は、
「……若しかして、あんたも聞いた？」
「……ソレを聞くと言う事は、鈴さんも？」
お互い目差すのは優勝、その賞品。
「「優勝者には大哥（お兄様）からのご褒美」」
これは手に入れなくては。
「鈴さん、その事なんですが……」

「何？」

セシリアは周りを気にしながら、小声で喋り始めた。

「わたくし、優勝しましたら……お兄様に一夏さんとの仲介をお願いしようと思いますの」

「っ！？」

こ、この女……

「そして、その為には……お兄様にも勝利する必要が有るでしょう」

な、なんて――――

「ですから鈴さん、わたくしのパートナーをして頂けませんか？」

「――――乗ったわ！」

――――なんて素晴らしい事を考えるの！！

「本音を言えば一夏さんと組みたいのですが……」

「……接近しか出来ない上に燃費が悪いから、確実性に欠けるって訳ね？」

セシリアは笑いながら頷いた。多分、私も笑っていると思う。

「わたくしと鈴さんは、普段から一夏さんの特訓でお互いを知っています。そして、この間の実践でお互いの組んだ時の弱点が判りま

したわ」
「……そうね。あの時は、あんたが固定砲台であたしが陽動で動き回った」
先日の実践では、お互いが役割に徹し過ぎたのがいけなかった。
先を読まれ、潰され、落された。
「はい。ですので今回はお互いが陽動もして……」
「お互いに砲台もする訳ね？」
「はい、そうですわ」
そう話し合っている間に第三アリーナに着いた。
「じゃあ、今日はどうする？」
「そうですわね……今日はお互いの追究にしませんか？」
「まあ、先ずそれよね」
お互いにＩＳを展開し、武器を構えた。
「「では――――！？」」
始めようとした所で、あたし達の間を弾丸が通過して行った。
跳んできた方角を見ると、

「あいつは……」

「……ラウラ・ボーデヴィッヒ」

漆黒に身を包んだ、銀髪の敵が居た。

◇◆◇◆◇◆◇

憎しみ狙う者より、放たれるモノは炎。

停めに来た者が持っていたモノは、冷では無く炎。

炎と炎が混じれば、荒れる様な業炎と成る。

呪は月を擁いて　第三十三話

『此の時を待っていた』

第三十二話　『気が向いたらで良い』（後書き）

シャル、バレる＆一夏の地雷を踏むの巻。

千冬は神威のストッパーに。

これでラウラの安全はだぜぇ～……最低限だけど。

何にせよシャルの神威に対する苦手意識は無くなりそうだから……

いよいよ感染するかもw

何て呼ばせようかな～？

第三十三話　『此の時を待っていた』（前書き）

今回はＯｕｔ　Ｓｉｄｅを入れてみました。

あと、ちと残酷で酷いかも……なので注意を。

第三十三話　『此の時を待っていた』

目の前に二つの獲物。

「何の積もりよ。行き成りぶっ放すなんて」

中国の甲龍。操縦者、凰　鈴音。

「それが、ドイツの礼儀とでも言うのですか？」

イギリスのブルー・ティアーズ。操縦者、セシリア・オルコット。

「……ふん、どちらも大した事は無さそうだな。データ上での方がまだ強そうだ」

こいつ等は、漆月　神威を呼び込む為の餌。

「「何ですって！？」」

此方を向かなければ、

「相手に成ってやろうか？……まあ、私には慣らしにしかならないが」

向かせるまで。

「……言うじゃない。ボコられに来たくせに」

「……わたくしと鈴さん、どちらにやられるのがお好みで？」

「二人がかりできたら如何だ？　量産機に負ける程度しかない腕前だ。丁度良いハンデだろう？」

其の為の贄だ。

「……なん」

「ですって……？」

「言い直してやろうか？　お零れで専用機を貰った貴様等では私に勝てんと言ったのだ。其れすらも解らぬ下種なのか？」

必ず引き摺り出す。

「……あの種馬共を追い回しているのだったな。下種なのは当然か」

「……ぶっ殺す」

「……躾けが必要ですわね」

待っていろ――――

「来るならさっさと来い。勝てんだろうがな」

「それはぁ！」

「貴方ですわ！」

――――漆月　神威！

◇◆◇◆◇◆◇

対峙する二人と一人、先に動いたのは二人。

「先手必勝よ！」

「覚悟なさい！」

鈴は衝撃砲を撃ち、その周りをセシリアがビットで埋める。

対するラウラは衝撃砲に向かい、突撃した。

「何を――――え！？」

衝撃砲はラウラの翳した右手の前で止まり、ビットから発した光線はラウラを囲う様に通過した。

「……ふん」

下らん、とでも言うような見下した目で、ラウラはレールカノンを鈴に向けて撃つ。

「くぅっ！」

鈴は双天牙月を交差させ砲撃を防ぐ。だが衝撃は殺せず後ろへ下がる破目に成った。

セシリアは追撃をさせまいとスターライトｍｋ?を撃つが、避けられた。

「邪魔だ」

ラウラは避けると同時にワイヤーブレードを放ちセシリアを狙う。だが、刃がセシリアに届く前に鈴の斬撃により弾かれた。

「セシリア、あれってやっぱり……」

鈴はセシリアの横に並び、確認する様に問い掛ける。

「ＡＩＣ……ですわ」

そう返すセシリアの目は厳しい。欧州連合のトライアル以上のものを肌で感じ取ったからだ。

「……厄介ね」

そして、鈴には厄介所ではない。光熱兵器が無い甲龍に取って天敵と言っていい程だ。だからといって鈴は逃げの選択はしない。

「逃げ出す算段は終わったか？」

ラウラは見下す目で二人を煽る。
「私には勝てんのだから仕方ない事だ。……種馬のどちらかでも連れて来ればいい。負けたと惨めに泣き付いてな」
「「――――上等！！」」
二人はそれに乗せられ、向かって行った。

◇◆◇◆◇◆◇

今日は一夏の特訓に付き合う日。
先にアップを済ませようとして第三アリーナへと着いたのだが、人溜りが出来ていた。
……何だ？
逸早く様子を確認する為、観客席へと駆けた。そこで見たものは、
「……ラウラ・ボーデヴィッヒ」

暴虐に近い攻め。
見せしめの積もりか……！
俺は直ぐに振り返り、ピットへと歩き始めた。
……売られた喧嘩、買ってやる！
爆発しそうなモノを、抑えながら。

◇◆◇◆◇◆◇

「如何した、その程度か？」
「まさか、此処までっ！」
鈴の撃つ衝撃砲が、ラウラが掲げた手の前で停止した。
「無駄だ。この停止結界の前ではな」
ラウラは衝撃砲を消すと同時に両肩のワイヤーブレードを放ち、鈴の迎撃射撃を毒蛇の様に潜り抜け、鈴の足へと絡みついた。

「鈴さん！」

セシリアはビットを放ち援護射撃をするが、狙いを外す破目に成った。

ラウラがもう一つのワイヤーを鈴の首に絡みつけ、盾として振り回したからだ。

「うぐっ！」

そして、ビットから撃たれた光線に晒し、更に呻く鈴を鈍器として振り回して、ビットにぶつけ始めた。

「そんな「隙だらけだ」――――きゃああっ！」

ラウラは鈴に気を取られたセシリアを、大型レールカノンで狙い撃つ。

残ったビットも鈍器と成った鈴で落して行く。加減など全くせずに。

「貴様はもう用済みだ」

ビットを落し終わったラウラは両肩の龍砲をレールカノンで潰した後、砲口を鈴の腹に刺し、

「がふっ――――」「鈴さん！！」

容赦無く、撃ち放った。

「返してやる。受け取れ」

その後ラウラは、血を吐き意識を落した鈴を投げつけた。
そして、セシリアが抱えると同時に鈴の背にレールカノンを向け、撃ち放った。

「く――――っ！」

セシリアは鈴を庇う様に背を向け、砲弾を浴びた。
ラウラはその様子に一瞬止まる。だが直ぐに、もう一発レールカノンを撃ち込んだ。

「貴様も……」

瞬間加速で迫り、プラズマ手刀で突き刺す。
今自身が感じた事、それを否定する様に。

「ぅあ、ああっ！」

ラウラは止まらない。鈴を抱え動けないセシリアに、プラズマ刃を鋸の様にして嬲った。
それでも鈴を離さず護るセシリアを、ラウラはいらつきが分かる表情で、

「貴様も落ちろ！」

地に向けて蹴り飛ばした。

「セシリア！」

だが、地に着く前に、

「……来たか」

神威が抱き止めていた。

◇◆◇◆◇◆◇

騒ぎを聞き駆けつけて来た時、神威君がセシリアちゃんと鈴ちゃんをアリーナの壁際に降ろす所だった。

「お兄様……」

「巻き込んで、すまない」

気にしないで、と首を振るセシリアちゃんから視線を外し私を見た。

「楯無、二人を頼む」

「……貴方は？」

決まっている、と言うかの様な目付き。

「私は止めに来たのよ？」

駄目だ、この目は止まらない。もうブレーキが壊れている。

「……周りに被害を出さないで。それが最低条件よ」

「ああ……」

と、答えた後、辛うじて聞き取れる声音で、

一人しか出ない……

ゾッとする冷たさで続け、飛んで行った。

「……セシリアちゃん大丈夫？　鈴ちゃんは……」

だが今は二人の安否が優先。

「わたくしは大丈夫です。鈴さんは意識がありませんわ。直ぐに運ばないと……」

大丈夫と言うが、無理をしているのが丸分かりだ。

そして、セシリアちゃんの腕の中にいる鈴ちゃんは、

「……あたしも大丈夫」

意識を取り戻し、同じ様に言った。

「二人とも無理は駄目よ、直ぐに医務室へ……」

行くわよ。と言う前に、

「いやよ。あたしは見てる」

「わたくしもです。あの方が負ける姿を見届けますわ」

拒否された。そして絶対動かないと目で言っている。

「はぁ……何で私の周りはこうなのかしら……」

本当に言い出したら聞かない人が多い。

「……動いたら駄目よ」

アクア・クリスタルを展開し、二人を包むようにヴェールを敷いた。

「先輩、ありがと」

「ありがとうございます」

二人は笑顔で礼を言うが、私は苦笑しか出来ない。

「……ジッとしてないと医務室へ強制連行よ」

◇◆◇◆◇◆◇

空で二人は、得物を構え睨み合っていた。

「……今日は逃げないのか？」

「……ああ、必要無い」

神威の答えを聞いたラウラは、

「待っていた……」

身体を震わせ、嗤った。

「此の時を待っていた」

狂喜、その一色に染まった表情（かお）で。

「……そうか」

対する神威は無表情。だが眼だけは、

「言い残した事は無いな？」

凶器と成っていた。

そして、僅かな沈黙の後、

「「はあああ！！」」

己の刃を叩き付けた。抱えた熱と一緒に。

二人はその熱を冷ますものかと言うように一合、二合と打ち付け合う。

だが直ぐに変化がおきた。神威の動きが止まったからだ。

「間抜けだな、漆月　神威！」

ラウラはＡＩＣで神威が握る長光を捕まえていた。

大きく振りかぶりプラズマ刃で貫こうとするが、

「お前がな！」

手前に展開された割切で防がれた。そして割切のスラスターが点火し、ラウラを押し退ける。

ラウラは直ぐに身を捻り割切から離れるが、ＡＩＣから解放された神威が展開したライフルでその瞬間を狙い撃った。

「ちっ……」

ラウラはプラズマ刃で光線を受けつつワイヤーブレードを放ち、神威の刀を持つ右手に絡ませ引き寄せ近づく身体をＡＩＣで拘束し、レールカノンの狙いを付けた。だが、

「後ろだ、阿呆」

「な――――！？」

弧を書いて戻って来た割切がラウラを後ろから襲った。
そして、背を割切に貼り付けられた様な状態でラウラは向かう、長光の切っ先を真っ直ぐ向ける神威へと。

「ぐ、おおぉっ！」

ラウラはそれを阻止する為、神威の右手に絡ませた儘のワイヤーブレードを振り上げた。
切っ先は上へと向いたが、代わりに二つの銃口が腹に刺さった。

「かはっ――――あ、あ……」

更に、背を押す割切がより深くへと沈めて行く。

死　ね

そう呟く眼にラウラは本能的に危機を感じ取り、持てる力全てで今の状態から暴れる様に逃れた。その直後、ラウラの横腹の直ぐ傍を光線が通過した。

「……外したか」

難を逃れたラウラは距離を取り、左目を隠していた眼帯を外し金の瞳を曝して睨む。『出来損ない』その烙印を捺されたヴォーダン・オージェ（オーディンの瞳）で。

「貴様が居なければ……」

ラウラは残るワイヤーブレード五本を放ち神威を襲う。
神威は右腕を絡むワイヤーをライフルで焼き逃れるが、その先をレールカノンの砲撃が封じた。
そして逃げる先を潰す様にワイヤーブレードが立ち塞がり、上半身を伽藍締めするようにワイヤーが巻かれ締め付けた。目に付く割切もＡＩＣで封じ、レールカノンの照準を合わせ、撃った。

「ちっ……」

だが、煙が晴れると左足を上げ、三日月を展開した神威が在った。
ならば、とラウラは神威を引き寄せる。

「先程の礼だ」

そして、レールカノンの砲口を神威の腹に刺し、鈴にした様に撃った。

「ぐ、お……」

神威の頭が垂(た)れる。
ラウラはレールカノンを腹から外し、満足そうに笑いながら、

「矢張り、私の方が相応しい……」

そう呟いた。その後、神威の頭を掴み血を吐く面を上げさせた。
負け犬と罵る為に。
だが見えた面に不可解なモノが在った為、笑いが止まる。

「……何だそれは」

神威の左眼に、淡い緑のクリアプレートの様なモノが在った。

「……起動」

神威がそう呟いた後、二人を割るように光熱が振ってきた。
光熱原は割切。ラウラは神威に執着していた為、ＡＩＣを解いていた。

「往生際が悪い……」

ラウラは距離を取り、悔しそうに呟く。
そして、ワイヤーが全て焼かれ自由の身と成った神威の背に、割切が装着された。

「速さを上げたか……だが、結果は変わらん。変えさせん！」

ラウラは距離を詰め、ＡＩＣで捕らえ様とするが、

「何！？」

神威は避けた。解っていた様な自然な動作で。
ラウラは直ぐに持ち直し、手刀、砲撃、ＡＩＣと組み合わせ攻め続けるが、受け、避けられる。

神威が起動させたモノは、マスターコアの機能。

シュヴァルツェア・レーゲンのコアに強制アクセスし、情報を強奪するというもの。ラウラがＩＳに送る指令、その情報を奪う。因って普通にＩＳが感知する機能よりワンテンポ早く成る。
更に得た情報、攻撃先を展開したクリアプレートに映し出し、先を取る事が出来る様に成る。

だが、ラウラは攻め続ける。今持てる手札を全て使って。
だが、全て読まれ、当たらない。

「猪口才なっ！」

それは、何度遣っても同じだった。

「無駄だ」

何度遣っても、結果は変わらなかった。

「糞……糞ぉ！」

そう、何度遣っても……。

◇◆◇◆◇◆◇

「何か、気分悪いね……」

「そうですわね……」

ポツリと言う鈴ちゃんにセシリアちゃんが同意した。
その理由は彼女の、ラウラ・ボーデヴィッヒがしている表情(かお)。

現在、彼は受けと避けに徹している。攻めるのは彼女だけだ。

彼が受けに回った当初、当たらない攻撃に驚愕した顔だった。だがそれも、少しの間だけ。
次第に眉を顰め皺を作り、下唇を噛み、そして、

「何で、泣きそうなのよ……」

「……解りませんわ」

今では眉尻も下がり、泣き顔の様に見える。

「ざまあみろ」と笑っていた鈴ちゃんも「いい気味ですわ」と罵ってセシリアちゃんも、次第に罵倒する事をしなく成った。

だが、終わる気配がし始めた。
段々と、カウンターを取る形で攻め始めた。

まさか……！

彼は、根底から壊す積もりかもしれない。
今の様な事が出来るのなら、先の一撃は受ける必要が無い筈だ。受

けたのは恐らく、潰す為。
受けたのは、一度勝利を確信に至る迄に昇らせ、其処から一気に叩き落す為。憎い相手に遣られるのだ、堪ったものではない筈だ。

あの男の様に……する積もりなの？

◇◆◇◆◇◆◇

何故だ、何故通じない！？

「無駄だ」

私は力を得た筈だ！強く成った筈だ！

「お前では届かない」

私は届いた！部隊最強に！！

「お前では無理だ」

無理じゃない！私は教官の様に！！

「お前は弱い」

違う！

「お前は無力だ」

やめろ！言うな！！

「お前は――――」

やめろ！それは――――

「――――無意味だ」

――――出来損ないが！

「――――言うなあああああ！！！！」

◇

◆

◇

◆

◇

◆

◇

突然、奴から放たれた電撃に吹き飛ばされた。

「っ！　何だ、何が……！？」

視線を戻すと、奴のＩＳが溶ける様に変質していった。
液体にも似た黒いモノが、奴を包み込んでいった。

「何だ、これは……」

そして、ＩＳの形を作り直していった。

「あれは、雪片……？」

奴の右手に在るモノは、千冬姉さんが使っていた雪片だった。

「まさか、これは！」

束姉さんが「不細工、美しくない」と言っていたモノ。

「Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍ……」

千冬姉さんと同じ構えで、千冬姉さんと似てもいない姿で、

≪私は、私は……≫

ラウラ・ボーデヴィッヒだった者が居た。

◇◆◇◆◇◆◇

嘆きの果てに、手にした力は偽り。その衣を剥ぐのは、
輝く一刀。

自分で立ち、覚ました目で、歩く事を始めるが、
追い求めた者は、手の届く所へは、居なかった……。

呪は月を擁いて　第三十四話

『何処へ……』

第三十三話　『此の時を待っていた』（後書き）

戦闘時の羅刹モードはこんなんです。
なんでうちのオリ主はこーなんだろか……普通に悪モンだよね？
ラウラ頑張れ、もう一寸だぞ。もう一寸で感染するから頑張れ。

第三十四話　『何処へ……』（前書き）

「僕の心が消えていく……」ｂｙカリス・ノーティラス

第三十四話　『何処へ……』

――――ラウラ・ボーデヴィッヒ、貴様には失望した

やめろ……

――――いや、貴様には名前など必要無いな……

やめてくれ……

――――遺伝子強化試験体Ｃ－〇〇三七、これで十分だ

見せないで、くれ……

――――貴様に幾ら掛かったと思っている。この不良品の……

言わないで……

――――出来損ないが！

私は、私は……

◇◆◇◆◇◆◇

「ちっ……」

神威は迫る斬撃を捌く。
自身が覚える事が無かった剣、その真似事の剣を捌く。だが真似事と言っても太刀筋は鋭い。千冬の動きを再現しているのだから当然の事だ。だからライフルは疾うに消し、今は長光だけで受けている。

平時の神威ならば、相手がもどきで無ければ、剣を合わせる事を喜んでいただろう。
だが目の前に居るのは、意思が感じられない千冬もどき。そして、

≪私は……≫

ラウラの『声』が聞こえ、見えてしまっている為に喜べる訳が無い。

「……煩い」

因って神威は悪態をつきながら捌く。
悪態をつく訳は、相互意識干渉（クロッシング・アクセス）に似た事が起りラウラの『声』が聞こえてしまっているからだ。

神威のＩＳである月下は、シュヴァルツェア・レーゲンのコアにアクセスしている。それは同時に、コア同士が繋がっている事に成る。そして、繋がったＩＳから指令の情報を奪うという事は操縦者の思考を読み取る、という事にも成る。

ＩＳに送る指令とは主にイメージ。今ラウラのイメージは、

≪私は、出来損ないじゃ……≫

耳を塞ぎ、闇の中で小さく蹲る姿。

「糞、遣り辛い……」

頭を振り泣く寸前の姿が、神威の左眼に見えてしまっている。

このアクセスは相手側のコアを待機状態、又は破壊しないと切れない。

現在シュヴァルツェア・レーゲンはＶＴシステムを起動している。これが邪魔をして待機状態に出来ない。

因って神威は、今のラウラを戦闘が終わるまで見続ける事に成る。

≪私は――――≫

そして、頭に響く『声』も……。

「……だったら最初からそう言え、阿呆」

◇◆◇◆◇◆◇

僕と一夏と篠ノ之さんは、観客席から漆月さんとボーデヴィッヒさんの戦闘を見ていた。

一夏はボーデヴィッヒさんがあの姿に成り、刀を出して振るった辺りから様子が変わった。

「あれは、あの剣はっ！！」

「い、一夏！？」

一夏は拳を作って、怒りながら怒鳴った。

「あの野郎……許さねぇ……許さねえっ！！」

左手で右腕を握り白式を呼び出す格好をして、

「――――！！　……はあぁぁ……」

怒りを散らす様な息を吐いた後、光が四散した。

そして掴んでいた腕を離し、

「ふんっ！」

近くの席にドスンッ！　と腕を組んで座った。

「い、一夏……？」

訳も分からずに居る僕達に、一夏は怒りを抑える様に深呼吸をしてから話し出した。

「あれは、千冬姉の剣なんだ」

「千冬さんの？」

僕も映像を見た事が有る。
あのあり得ない事をやったＩＳは織斑先生が現役でしていた動き、それそのものだった。

「……俺に、俺だけに教えた、教える事に成った……」

ギリッ！　と噛み締めてから、

「……大事な剣なんだ」

指を組み、自身を抑える様にして言った。

「……兄さんは教わらなかったの？」

それは僕も気になった。
一夏と一緒に暮らしていたなら教わっていてもいい筈。

「……俺には振るえない。そう言ってた」
振るえない？教わらなかったって事？
「何で？」
「……分からない」
何か、遭ったのかな？　それとも、教わる事を拒否したのかな？
「けど、あいつは……あいつはっ！」
また飛び出そうとする気配がした。
「い、一夏、落ち着こう？　ね？」
僕は危ない感じがしたので落ち着かそうとしたけど、
「じゃあ何で一夏は行かないの？」
篠ノ之さんが、素で煽った。
それに対し一夏は、深い深呼吸をしてから、
「……神威兄が戦ってる。俺が行ったら……駄目だ」
そう言った。　如何いう事なの？
「神威兄……負けんなよ……」
一夏はそれから口を閉ざしてしまったので、首を傾げるしか出来

なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

俺は長光の刃を消し、距離を取った。

≪……もう、嫌だ≫

俺が離れると、敵は構えを解いた。その動作はプログラムされたもの。

右に見える物は左に見える阿呆とは別物。

≪ラウラ・ボーデヴィッヒ！　≫

成らば先に煩い阿呆を片付ける。その為に深く繋ぐ。

≪え……どこ？≫

阿呆は辺りを見回し探しているが、俺は構わずに怒鳴った。

≪黙ってろ！！≫

≪っ……≫

左に見える阿呆は身を竦ませ、響く『声』が止んだ。
後は、右に見える物を始末するだけだ。阿呆が騒ぎ出す前に。

俺は刀身の無い長光を腰から抜刀する様に構え、

――――頼んだぞ？

瞬間加速で近づきながら緑に光る刀身を抜き、

「約束はしてねぇっ！！」

叫びながら斜め上に振り切った。

≪ああ……≫

◇◆◇◆◇◆◇

落ちるボーデヴィッヒさんを漆月さんが捕まえた。漸く終わったみたい。

「ん、よし……」

一夏は大きく頷いて立ち上がったけど、顔は不満が残っているのが分かる。

「一夏は不満なの？」

相も変わらず篠ノ之さんがズバッ、と言った

「……ぶん殴ってやりたかった」

やっぱり。不完全燃焼……と言うより燃焼も出来なかったんだから仕方ないと思う。でも、どうにかして発散させた方が良いよね。でも簡単に発散出来なそうだし……どうしたらいいんだろ？

「一夏、トーナメントでやれば？」

あ、その手が有った。

「……ナイスだ箒！」

一夏は善は急げと特訓する為に駆け出そうとしたけど、

＜本日は第三アリーナの使用を禁止します＞

と、アナウンスが入って、

「ちっくしょおおおおお！！」

その場で崩れ落ちた。

◇◆◇◆◇◆◇

脇に敗者を抱え、降りてきた彼に労いの言葉を掛ける。

「お疲れ様」

「おう」

でもその顔は不満顔。煮え切らないものが有るのだろう。

「……鈴とセシリアは？」

彼の問いに指を差しながら答える。

「あっちよ」

彼は私が指差す方向、其処には担架で運ばれて行く二人が見える。

決着が着いた直後、秘かに待機していた人を呼び運ばせた。

「で、脇に抱えた荷物はどうするのかしら？」

そして微動だにしない、両手足と頭をだらりと下げるラウラ・ボーデヴィッヒを指差す。

「こいつは「精密検査だ」……ん？」

聞こえた方を向くと、１７０ｃｍ有るＩＳ用接近ブレードを担いだ千冬さんが居た。
その平然と担ぐ姿は、とても同じ人間とは思えない。

「漆月、負担が掛からない様に担いで運べ」

「……はい」

千冬さんは指示を出すと、彼は渋々と抱え直した。

……また、またなの！？

以前と同じお姫様抱っこで。そして歩き出す千冬さんの後に続いた。
抱えられたラウラ・ボーデヴィッヒは意識が無いくせに、彼の手を握っていた。
それを見た瞬間、私にあった同情の欠片が消し飛んだ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ、貴方は私を怒らせた。この怒りは「会長」……何よ、虚ちゃん」

溢れる怒りを極致まで上げ様としたら、何時の間にか居た虚ちゃんに阻まれた。

「処理してない書類が有ります。生徒会室に戻って下さい」

「処理してない書類……有ったかしら？」

書類は全て処理し終わっている。もう何も無い筈。いくら考えても出てこない。

「はい、書類と言うより始末書ですが……」

「始末書……――――まさか！？」

頬が引き攣るのがわかる。始末書と言ったら、一つしかない。

「そのまさかです。今回は発見が早かったのでまだ少ないです」

「くっ……往くわよ虚ちゃん！」

「はい、お供します」

今度は何やったのよぉっ！？

◇◆◇◆◇◆◇

――――何をしている

これは、夢だ。初めて、あの人と出会った時の……

――――立てるか？

そう言って引き上げてくれた。私の手を掴んで……

――――なんて顔をしている

嬉しかった。力強かった。だから憧れた……

――――全く、何時かのあいつを見てる様だ

そして何より、温かかった……

「う、ぁ……」

……なんだ？　眩しい

「何だ、もう起きたのか」

ぼやける頭を聞こえた方へ向けると、教官が居た。

「今精密検査を終えた所だ」

「私は……」

「お前は全身に過剰な負荷が掛かり筋肉疲労と打撲、多少の火傷が有る」

言われてみれば、体が少し熱く、重い。だが歯を食い縛り、体を起こす。

「……ラウラ、ＶＴシステムを知っているな？」

「はい、知っています」

ヴァルキリー・トレース・システム。過去モンド・グロッソの部門受賞者（アルキリー）をトレースするシステム。現在、ＩＳ条約であらゆる面に置いて禁止されているもの。

「それに手を加えたモノがお前のＩＳに積まれていた」

「手を加えたモノ？」

「ああ、ＶＴシステムを起動させると操縦者よりＶＴシステムが優先される。そして操縦者は身を委ねる様に意識を落す」

だが、私は意識があった。

「お前のＩＳに積まれていたモノは負の感情で起動し、操縦者を催眠状態に落し……」

私は戦闘の途中から、周りが暗くなり……。

「意思を壊し傀儡とさせるモノだった」

冷たい床に打ち棄てられた時、そしてその後を、あの時の思いを、淡々と見せ付けられた。

あの儘、名前を呼ばれなかったら……恐らく、喰われていた……

塗り替えられる様な感覚を思い出すと、無意識に握っていた手に力が籠もる。

「現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近々強制調査が入るだろう。だからお前にも訊いておかなければならない。……お前は、このシステムの事は知っていたか？」

首を振る。知っている訳が無い。こんなモノを知っていたら即排除している。

「……だそうだ、神威」

「……神威？」

教官の視線を追い反対側を向くと、

「……そうかい」

不機嫌そうな顔をした漆月　神威が座って居た。

「……おい」

「な、なんだ？」

そして私の方を見て、

「いい加減に離せ」

そう言うが意味が解らない。離せとはなんの事だ？

「何時まで握っている積もりだ？」

漆月　神威が私の目の高さまで手を上げると、其処には、

「な……」

私の手が、漆月　神威の手を握っていた。

「離せ」

「あ、ああ……」

手を離そうとするが、

「……何故、力を入れる」

体が言う事を聞かず離そうとしない。

漆月　神威は更に不機嫌な顔に成り反対の手で剥がそうとするが、

「……おい」

もう片方の私の手が上から押さえていた。

何だ、私は何をしている！？

自分でした行動が信じられない。何を考え、何をしたいのか解らない。

「ふ……」

きょ、教官に笑われた……

私がショックを受けた瞬間、漆月　神威は剥がそうとした手を抜いた。

私の体はもう片方を離さない様に両手で握るが、直ぐに離す事に成った。

「つぅっ！？」

頭に拳を落され、その痛みで離してしまった。

「な、何故……」

頭を押さえる私に、

「自分で考えろ」

漆月　神威はそう言い放ち、出て行ってしまった。

「ふふ……」

また教官に笑われた。そんなに私が可笑しいのだろうか？

「お前が可笑しくて笑っていた訳では無い。だからそんな顔をするな」

私は今どんな顔をしているのだ？

そう思い手で面の形をした。そんな私を見る教官の目は、どこか優しい感じがする。

「ラウラ、あの時言った事をもう一度言おう」

あの時……

「お前はもう一人で立ち、歩ける筈だ。私はもう必要無い、寧ろ邪魔なだけだ」

あの別れの日、教官は確かにそう言った……

「そして見詰め直してみろ、自分の『ねがい』を。それはきっと……私では無い筈だ」

その後一言を言い、去って行ったが、私は否定した……

「現にお前は、私以外に執着しているだろ？」

「それは……」

切欠と成ったのは、教官が宝と言ったペンダント。

その中の二人に向ける表情が、私に向けない視線が、凄く悔しかっ

たからだ。そして、その後に続いた言葉でその思いを黒く加速させる事に成った。

「ふ……まぁ、悩む事だ」

教官はそう言い、出て行こうとするが、

「ああ、そうだ」

扉の前で止まり、

「自分以外の誰かになど成れはしないぞ？」

表情は見えないが解る声色で、

「確り悩め、ラウラ・ボーデヴィッヒ。……神威に叱って貰った事も含めてな」

あの時と同じ、別れ際の最後の言葉。それに一言を付け足して去って行った。

「悩め、か……」

呟きながら、倒れる様に寝台へと身を預けた。

同じ事を言われた……

詰まり、あの時から変わっていない。若しくは酷い方向に変わったと言う事だ。思い返せば当然だと思える。

私は、見失っていた……

初めは、温もりの為だった。その為に走っていた。
教官は私が出来損ないと言う事を利用し、特別に厳しい訓練をつけてくれた。その訓練自体は辛かったが挫ける事は無かった。気に掛けてくれる事が嬉しかったからだ。その想いが、温かかったからだ。

教官が去ってからだ……

力が全てと思い込む様に成ったのは。
実戦部隊で求められるモノは力。階級を上げられたのも力。任務を達成出来たのも力があったからだ。何かを得る為には力が必要、力が全てと思うように成っていた。

そして、憎み始めた……

教官が力を示せ、周りに知らしめる事が出来る場を奪った織斑一夏を。
その事自体を『そんなモノ』と言わせ、教官に『無力』と言わせた漆月　神威を。

だから、示そうとした……

教官のお陰で得た力で。誇りと思っていた、そう勘違いしていた穢していた力で。
その力で二人を倒し私が正しいと、相応しいと証明しようとした。

とんだ道化だ……

笑えてくる。自分の馬鹿さ加減に。
そんな事で教官の様に成れると思っていた、自分の愚かさに。
だが、思い出せた……
私が欲しかったモノは、温もり。私を見てくれる人。
「だから、離さなかったのか？」
自分の手を凝視する。ずっと握っていたと思う手を。
握っていたのは私に悪夢を見せた人物。同時に、思い出す切欠をくれた人物。
「自分で考えろ、か……」
血は繋がっていないというのに、教官と同じ様な事を言う。
「この様な罰の受け方は初めてだな……」
拳を落された所に手を置いた。
「漆月　神威……」
そして、もう憎しみが全く無い事に気がついた。

◇◆◇◆◇◆◇

学園の裏門、そこで月を見ながら夢織を待っていた。

これから行うのは面倒な事の処理。

「お待たせ」

「おう」

待ち人が来たようだ。

「遅かったな」

「色々あったのよ……」

その表情から、何があったかは大体解ってしまった。

「まぁ、今は横に置いておくぞ」

「ええ、そうしてちょうだい」

「とっとと外れまで行くぞ」

「其処で迎えが来る手筈よね？」

「ああ」

そうして俺達は、ＩＳ学園から出て行った。

◇◆◇◆◇◆◇

事情聴取を終え教室へ向かうが、もうＨＲが始まる時間帯だ。
そして歩きながら考える。昨日から考えていた事、拳を落された理由を。

何が理由だったのだ？

今迄の態度の事、凰　鈴音とセシリア・オルコットとの戦闘、織斑　一夏を殴った事等。
どれなのか、それとも全部なのか判断出来なかった。

何故叱ったのだ？

叱るという行為はそれなりに親しい間柄で行われる行為と聞いている。
だが、漆月　神威は私を良くは思って無い筈だ。寧ろ憎んでいるだろう。

そもそも如何いった男なのだ？

考えれば考える程に解らなくなっていった。

これが、教官が言っていた嵌まるという事か？

織斑　一夏には惚れるかもいれない、漆月　神威には嵌まるかもしれない、そう言っていた。

確かに昨日から漆月　神威の事を考えてはいる。

わからん……

こうなってしまったら本人に訊くしかないだろう。昨日から考えていただけに興味も出てきた。

だが素直に教えて貰えるとは思えない。

先ず謝罪……いや、礼か？

考え事をしてる内に教室に着いていた。教室の扉を開け中に入る。

「早かったな、ボーデヴィッヒ」

「いえ……」

何時もなら教官しか見ないが、自然と教室の後ろの方を見ていた。

……空席？

だが、漆月　神威の姿が無かった。

「……漆月なら居ないぞ」

「何処へ……」

私と同じく事情聴取？　いや、する理由が無い。成らば単なる遅刻？

「数日間休むそうだ」

「……休み？」

……私との戦闘の所為か？　いや、其処までダメージを負ってない筈だ……

「兎に角席に着け」

「はい……」

席に着いてからも頭が考える事を止めなかった。

何故だ、何故居ない？

この日初めて、教官の言葉が聞こえない程に考え込み、

「ボーデヴィッヒ！」

「っ！？」

初めて頭を叩かれた。

◇◆◇◆◇◆◇

人が欠けたとしても日々は進む。そして始まるトーナメント。

その初戦は、牙を向ける筈だった者同士。

本来の、因縁とも言える者がぶつかり合う。

呪は月を擁いて　第三十五話

『此処で全て吐き出すだけだ』

第三十四話　『何処へ……』（後書き）

これでラウラは真っ白になりました。まぁ次回には……w

ぶっちゃけ今回は『俺の声が聞こえるか！』にしようかと思ってました。

でもキャラが違うな～と思い止めました。

第三十五話　『此処で全て吐き出すだけだ』（前書き）

今、染まる時！

第三十五話　『此処で全て吐き出すだけだ』

――――ドイツ――――

夜、ラウラが属しているＩＳ配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ、その副隊長であるクラリッサ・ハルフォーフはラウラと交信していた。

「これが我々が調べた漆月　神威に関する全てです」

交信内容は、漆月　神威のデータの受け渡し。

＜手間を掛けさせた。……礼を言う＞

「……いえ、当然の事です」

礼を言うラウラにクラリッサは表情こそ変えなかったが、内心驚いていた。

ドイツの冷氷、そう呼ばれるまで孤立していたラウラが礼を言ったからだ。

「……隊長」

＜なんだ？＞

だから訊いてしまった。

「何故今更取り寄せたのですか？」

憎んでいた相手、そのデータが必要な理由を。

＜それは……だな、その……＞

だが、対するラウラは恥らう様に言葉を濁した。

その様子にクラリッサは一つ思い当たる事が有った。それは……。

「――――気になるから、ですか？」

――――恋！

＜なっ、何故それをっ！？＞

ラウラの驚愕が解る返答にクラリッサは確信した。

愛読する少女漫画に同じ様な展開があった。主人公のツンデレ少女が同じ学園の年上の少年に恋をし、親友の少女に言葉を濁して訊く場面、それそのものだ。

「隊長、話して下さい。私は貴方の副官であり貴方を支える者です」

クラリッサは聖母の様な笑みを浮かべて言う。自分を親友役に置きながら。

＜クラリッサ……＞

ラウラはこんな事も気づけなかったのか、と思いつつも細い声で

話し始めた。
つっかえながら進む話にクラリッサは確信を深めていった。
愛読する魔法少女漫画に同じ様な展開があったからだ。主人公の魔法少女が力に溺れ始め取り返しのつかない事に成る直前、渇を入れ正気を取り戻させた魔剣士ブシドー、その場面に似ている。

「……成る程」

話を聞き終えたクラリッサは頷き、脳を回転させ始める。

日本では惚れた相手を嫁にするという風習がある。だが隊長は気に成り始めた段階、これを発言させるにはまだ早い。……待て、親友の少女はなんと言っていた？　そうだ、素直になれと言っていた。そしてゆっくりと自覚させた。今隊長に必要な事はゆっくりと自覚させる事だ。良し、これでいこう！

クラリッサは方針を決めるとラウラに話し始める。

「隊長、素直になりましょう」

＜素直に……？＞

「はい。そして目を閉じて思い浮かべるのです。相手が応えてくれた瞬間を」

＜目を閉じて……＞

ラウラは言われるが儘に実行した。そして少し間が空き、

＜――――クラリッサ、礼を言う＞

妙に力の入った礼を言った。

「――――当然の事です」

クラリッサも同じ様に力の入った返答をする。少し鼻息を荒くしながら。

だがそれも束(つか)の間、続くラウラの言葉で頭を切り替えた。

＜ところで、強制調査の件は……＞

現在ドイツは、ＶＴシステムもどきを開発した疑惑が掛けられている。

その調査が明日から開始するのだ。

「ご心配無く、十分に対処可能です」

＜……そうか、重ね重ね面倒を掛ける＞

気にする事は何も無い、そんな気遣いにラウラは感謝する。

そして数回言葉を交わした後、交信を終えた。

「ふぅ……」

クラリッサは軽く吐き、目を閉じて思考を巡らす。明日から開始する強制調査の舵(かじ)を取り、膿を排除する為に。

先ず調査隊が始めに目を付けるのは、部隊のＩＳ研究施設。次に部隊のＩＳを調査する。そうクラリッサは予測する。

だが、その順序では旨く無いのだ。最初に自分達のＩＳを調べさ

せた方が色々と都合が良い。

出迎えるか？

強制調査と言うだけあって調査は向こうの都合、ドイツ軍は受け入れの準備が出来ていない。因って到着を待つだけだ。迎えに行く者は只の一卒兵。

調査隊が狙われる可能性を進言し、自分達が出向く事は可能。

先に個別接触し、誘導する。

ＶＴシステムは自身のＩＳにも搭載されてる可能性が有る。その事を臭わせ、先ず此方に注目させる。そうすれば最初の調査対象と成るだろう。

ＴＶシステムは危険だから禁止されたのだ。起動条件もラウラと同じとは限らない。不透明なモノを調査隊が放って置く訳が無い。搭載して有れば被害者として、無ければ協力者として、護衛も含め同行を申し出る。

その時に一滴、染み込ませれば良い。

狙いが膿に行く様に、臭い輩を狩る様に誘導すれば良い。後は勝手に調査隊が遣ってくれる。そして、駆除出来る様に手助けすれば良い。

その為にも、最初だ。

最初に白と証明し、疑惑を他へと移す。そして味方として接し護衛する。

調査する者は敵視する者に敏く、外から来る為に味方が居ない。

後は……ナノマシン移植を強制された、とでも知れば同情を買えるだろう。

後押しするカードが弱いが他に無い。用意する時間が無いのだから仕方ないだろう。

方針を決めたクラリッサが目を開けたと同時に、近くに居た隊員が話しかけてきた。

「副隊長、隊長はなんと？」

対するクラリッサの返答が、

「隊長は――――男に恋をした」

「「「「え、えええ～！？　あの隊長があっ！？」」」」

兵舎を揺らした。

その後、なんだかんだでラウラに対する壁をブッ壊し、応援する程迄に至った。

因みに、

「我々は此れより眼帯を着ける事にする！　異議は有るか？」

仁王立ちするクラリッサも、

「「「「「有りません！　副体長（お姉様）！！」」」」」

敬礼する隊員も、全員が裸であった。

◇◆◇◆◇◆◇

神威兄が休み始めて数日経った朝、俺達は何時もの様に集まっていた。

ＶＴ事件で傷ついた鈴とセシリアもＩＳと共に全快し、トーナメントを待つだけ……なのだが、

「賞品がぁ……」

「何故ですのぉ……」

目の前でうな垂れていた。他にも同じ様な女子がわんさか居る。

「残念だなぁ……」

箒は残念と言ってる割には元気そうだ。他に比べてだが。

「賞品ってなんだったの？」

「……あんたには要らなそうなものよ、シャルロット」

「そうですわ。同居してたのですから……」

シャルは先日、正体を明かし本名のシャルロット・デュノアとして再入学をした。

実家とも決別し、学園に残る事を決意した。自分を偽るのはもう嫌、そう風呂で言っていた。

「若しかして……」

それからシャルは良い顔をする様に成ったと思う。が、

「……漆月さん関係？」

まだお兄ちゃんと呼ばせる事が出来て無い！　俺は与えられたミッションを……って、今なんつった！？

「うん、優勝者には兄さんからご褒美……だったんだよ」

神威兄からのご褒美ですと！？

「あ、だから皆うな垂れてるんだね……一夏みたいに」

知らなかった、知らないで終わってた……こんな事が、こんな事が許されるのか！？

「一夏、仕方無いよ。僕も知らなかったんだし……」

知らなかった上に知ったら終わってたのダブルショックはキツイと思うぞ？

「でも終わっちゃってたんだよ？」

そう言っても……あれ？　俺、何も喋ってないよな？

「分かりやすいのよ、あんたは」

「そうですわ」

「うん、一夏だからね」

なんでこんな時だけ復活するんだ？

「あはは、僕も同意見かな……」

シャルも！？　でも楽で良い……か？

「面倒臭がってんじゃないわよ」

……駄目か？

「当然ですわ」

「兄さんが知ったら……指導だよ？」

「そいつは勘弁！！」

やっぱ言葉で通じ合うのが人ってもんだよな！

「あはは……ところでご褒美ってなんだったの？」

「あ、俺も気になる」

ご褒美といっても中身が分からない、気になるのは当然だ。

「ん～……大哥に頼み事を聞いてもらえる。あたしはそう聞いたわよ」

「わたくしもです。お兄様の出来る範囲で、との事ですわ」

「へぇ……で、神威兄に何を頼もうとしたんだ？」

鈴とセシリアは顔を見合わせてから、

「「秘密よ（ですわ）」」

含んだ顔で俺を見た。

「……そういう事なんだね」

シャルは何か察したようで、二人と同じ顔に成り俺を見た。……なんだ？

「……まぁいいか。箒は何を頼む気だったんだ？」

俺の問いに箒は、

「婚前交渉だよ」

「「「「――――婚前交渉ぉ！？」」」」

花咲く笑みで爆弾を落とした。

「あれが、ご意見番の発言力！？」

「なんという豪胆さ！！」

「しかも当然の如く言い放った！！」

「これが幻と呼ばれた……理由なの！？」

「篠ノ之　箒……恐ろしい娘！！」

周りだって戦慄してるだろーが！！　なんで驚いてるの？　みたいな顔は止めぃ！！

「それがあったか……盲点だったわね」

「わたくしは……お兄様がそこ迄引き受けるとは思えませんわ」

「……そうだね、僕もそう思うよ」

なんか、また割れそうな雰囲気がする。

「待て、落ち着け。神威兄が休んでから起きた騒動のような事に成るぞ」

あんな騒動なんてご免だ。クラス代表と言う事で俺が怒られたんだから。

「あれは……セシリアが悪いんだよ？　兄さんの机にあんなモノ置くから」

「箒さん、他に雄々しく美しいモノが在ったとでも？」

「漆月さんの様に……とはいかなかったけど存在感は在ったよね」

「だからって……あんなモノ置かないでよ。大哥の机に花なんて置いてあったら勘違いするわよ」

神威兄が休んで数日経った日の朝、セシリアが机の上に花を置いたんだ。花瓶に入った花では無く鉢に生えた花々を。それも豪勢な花々を。

花を置いた直後に大騒動が起こり、派閥争いに成った。

箒と鈴が属する『勝手に殺すな！　花なんて置くな！』派とセシリアとシャルが属する『花瓶は置いてない！　鉢だから問題無い！』派に真っ二つに割れ口論と成っていた。

俺はどちらにも属して無かった。理不尽な神威兄が死ぬか？　と思ったからだ。決してどっちの意見も選べなかった訳では無い。絶対に乗り遅れた訳では無い。俺は神威兄を信じただけだ。

そして騒動が治まった頃にＨＲが始まり怒られた。

因みに治まり方は、

「……あ、ラウラ」

今登校して来たラウラ・ボーデヴィッヒが起こした事で治まった。

あいつは騒動が起こった時は、何をしているんだこいつ等？　みたいな顔をしていたが、直ぐに教室を出て暫くして戻って来た時には、顔面蒼白で別人の様に成っていた。

危ない足取りで神威兄の机に行き、震える手で鉢を持とうとして……落して割ってしまったんだ。

そして割れた鉢を追うように崩れて座り込み、肩を落していた。

悲劇の一部始終を見ていた周りは、如何しよう！？　みたいな感じに成り騒動が治まった。

その後来た千冬姉に蚊帳の外だった俺が説明し、何故か俺が怒られて、何故か俺が割れた鉢の片付けまでさせられた……酷くね？

頭痛そうにしていたから取りあえず俺で収拾つけたんだと思うけど……何故俺？

「また兄さんの机を見てる……」

そしてこれだ。

あいつは神威兄の事を気にしている。よく机を見ている。

「……でも、休み続けてるから僕だって心配だよ。一夏は何か聞いてないの？」

「鈴さんも平然としてらっしゃいますが……何か知ってますの？」

シャルとセシリアの問いは、俺と鈴に取って慣れたもの。

「何も聞いてないけど……前もあったからなぁ」

「そうなのよね……何時も平然と帰ってきたから心配するだけ無駄よ」

神威兄が理由不明で休む事は中学の時もあった。

初めて知った時は俺も鈴も弾だって心配したんだけど……何時も何食わぬ顔で帰ってきたので心配するのが馬鹿らしくなったんだ。

「……そうなの？」

「ああ、心配するだけ無駄だ」

「……本当ですの？」

「本当よ。絶対帰って来るわ」

俺と鈴の、根拠は無いが絶対的な自信に二人は納得してくれた。

ただ箒は、

「兄さん、無茶してないといいけど……」

と呟いていた。

◇◆◇◆◇◆◇

一日も終わり、日は疾うに暮れた。
今は見回りの最中。ここ数日、最後に回していた所。

「あっ……教官」

神威の部屋の扉。そこに背を預け待つラウラを部屋に戻す為に。

「……もう部屋に戻れ」

「しかし……」

「今日は……帰って来ないだろう」

「……はい」

ラウラは気落ちした返事をし、自室へと歩いて行った。
その後ろ姿が見えなく成るまで見送り、私も自室へと戻る。

何時まで掛かっている……。

私も心配はしている。今回のＶＴ事件は臭い気がするからだ。
ドイツだけで済めば良い。だが、それだけでは済まない気がする。

束と連絡が取れない事も気に成る……。

連絡が取れなく成ったのは四月に入ってからだ。それ以降、一切

繋がらない。
束は何かしているのか、それとも動けないのか判らない。
自室に着き携帯を取り出す。そしてここ毎晩やっている事をする。
……掛かった？
一切繋がらなかった束の携帯に繋がった。
＜グッドイィィィッブニング！！　だぜ、ちーちゃん！＞
「……相変わらずだな、お前は」
＜いやいやちゃんと変わってるよ？　具体的に言うと昨日と着ている服が違います＞
束は相変わらず変わってなかった。
「そうか。……束、ＶＴシステムの件だがお前は噛んで無いな？」
だが付き合わず先に進める。
＜ちーちゃんこそ相変わらずの切れ味だよ……で、この間あった事件だっけ？＞
「そうだ」
＜ふっ……束さんがあんな礼節を欠いた美しく無いモノに係わる訳無いじゃんか＞

「そうだろうな」

＜ってゆーか今から施設をデストロって来るよ。影も形も残さんぜよっ！＞

「……穏便にやれ」

＜おっけぃ、豪快にだね？　任しとけぃ！！＞

近くに居れば殴り聞かせるのだが、今は出来ない。

「……程々にしろ」

＜おうさ！　準備は出来ている、後はやるだけだ！！＞

「……後で覚えておけ」

＜覚えてたらね？　んじゃ、まったね～＞

「……切れたか」

初めて束から切った事に違和感を感じながら携帯を置いた。

妙だな、何か急いでいた……。

束を急かす原因はＶＴシステムの施設だけとは考え難い。他に原因が有る筈だ。

ＶＴシステムに手を加えた者が居る、か？

だが、それだけで急ぐ束では無い。

……なんだ？

結局、幾ら悩んでも答えらしい答えは出なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

――――トーナメント初日――――

＜さあ、やって参りました一年生のトーナメント！　進行役は私、黛　薫子と！＞

＜副会長の光道音　麗が勤めさせてもらうわ！＞

＜では、選手入場ー！＞

薫子が言った後にピットが開き一夏とシャルロット、箒とラウラがアリーナに入ってきた。

＜約一名、元気が無さ過ぎね……予測通りに＞

＜そうですね……予測通りに＞

一番覇気が無いのはラウラ。三人に遅れて規定の位置まで飛ぶ。

＜試合開始の前に……副会長、どうぞ＞

＜この放送を聞く生徒諸君！
以前流れたデマを信じきり落ち込んでいた為、今の君達は悲しみに溺れているだろう。
その姿を見る……私も悲しい……だから私は！　宣言する！
お兄ちゃんのご褒美！　これを現実とさせる事を！　此処に宣言する！！＞

麗が宣言した瞬間、

――――――――――――――――キャアアア

ラウラは神威のデータを見た時、幼い時に総帥と成った事実に衝撃を受けた。
不透明な部分が多かったが、データにあった偉業に驚愕した。そして、神威を知りたいという気持ちが加速した。
だが鉢騒動により、負の方向へ行ってしまっていた。
クラリッサにより机に花を置く意味を知り絶望しかけ、鉢を割った事でどん底に落されていた。

＜何を呆けているラウラ・ボーデヴィッヒ！＞

今、そのどん底に、一本の蜘蛛の糸が垂らされた。

＜貴方も勝てば得られるのよ！＞

ラウラはその糸に、

＜求めろラウラ・ボーデヴィッヒ！！＞

「っ！！」

蜘蛛付きの糸に飛びついた！

＜では、定位置に……着いてますので副会長、合図を！＞

今か今かと待つ四人。

＜ふふ、良い感じに滾ってきたわね……試合開始よ！！＞

「「「「はあああっ！！」」」」

開始のブザーと共に四人は飛び出した。
「お前の相手は俺だ！」
「ふっ……来い！」
ラウラへと飛ぶ一夏。だが直ぐにＡＩＣに捕まる。
「その程度か織斑　一夏！」
ラウラはレールカノンを一夏へと向け、開始早々仕留め様とする。
「僕も居るよラウラ！」
シャルロットは左手のマシンガンで弾幕を張り右手のアサルトライフルでラウラを狙い撃つ。
ＡＩＣを解き離れ様とするラウラをその儘追うが、
「させないよ！」
箒の斬撃により足を止めた。
シャルロットは直ぐに反転し銃口を箒に向け発砲する。
箒は弾を打鉄の盾で防ぎながら距離を取るが、
「俺を忘れんな！」
一夏が箒を挟む様にして突撃した。
一夏とシャルロットは先に箒を倒そうと決めていた。
一夏は突きで、シャルロットは左をショットガンに変えて箒を狙

う。

「私も忘れるな」

そこへ割る様にワイヤーブレードが降ってきた。

二人は箒から離れかわす。

ラウラが箒の隣に並び、定位置に居た状態に戻った。

全員構えた状態でプライベート・チャンネルで交し合い始めた。

≪おい、貴様は勝ちたいか？≫

≪一夏、気づいた？≫

≪当たり前だよ。貴方は？≫

≪……やっぱりか？≫

≪当然勝ちたい。だから……援護してやる≫

≪うん、ラウラが助けたよね≫

≪うん、わかった。……あ≫

≪……だよな≫

≪なんだ？≫

≪作戦、どうする？≫

≪私は箒だよ、ラウラ！≫

≪先に狙おう≫

≪！！　……ああ≫

≪……うん、先に落さないと不味いね≫

交信を終えお互い見据える。
「……そう言や、まだ殴られた礼をして無いな」
「……そうだったな」
「だからそれも含めた鬱憤を……」
一夏が雪片弐型を構え直すと、
「此処で全部吐き出すだけだ」
ラウラが応じる様に構え、
「だが私……私達が勝つ」
他の二人も続く様に構え直した。そして、
「行くぞシャル！！」
「来るぞ箒！！」
お互いのパートナーを呼び、
「「うん！！」」
向かって行った。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ、織斑君とボーデヴィッヒさん、篠ノ之さんとデュノアさんの対戦に成りましたね」

教師と権利を持つ者だけが入る事を許されている観察室で観戦しながら真耶は呟いた。

「さて、如何なるか……」

同じ様に呟く千冬に真耶が訊く。

「専用機同士ならわかりませんが……訓練機で専用機に勝てないと思いますよ？」

だが千冬は返答はせず、呆れた視線で返した。

「……わ、私、変な事言いました？」

「……自分がやった事を忘れたのか？」

「え？　え、ええっと……」

答えを出せずに居る真耶に、千冬は呆れながら答えを言った。
「……訓練機で専用機の二人を手玉に取っただろう」
「――――あ！」
そう、今月の初めに真耶はリヴァイヴで鈴とセシリアに勝っている。
詰まり、立ち回り次第で専用機とも渡り合えるのだ。
「あの時に自信を取り戻したのでは無かったか？」
「あ、あは、あははは……」
「……まぁ、出来るかどうかは別だがな」
笑って誤魔化す真耶に、千冬は溜め息を吐きながらモニターに視線を戻した。

◇◆◇◆◇◆◇

「くっ！」

箒はシャルロットを押していた。
シャルロットの翻弄する様な攻めをものともせず、真っ直ぐに打ち込んでいた。
マシンガンは盾で防ぎ、アサルトライフルは射撃線上に刀身を置き、

「またっ！？」

平地を鋭角、又は鈍角にし逸らしていた。
刃を上にした突きの型でやっているので身体のぶれは無く、

「はあっ！」

その儘突きに行ける。

「く……このっ！」

シャルロットは盾で防ぎ弾き飛ばす様に振り、ショットガンを構えるが、

「嘘っ！？」

箒は振る流れに沿う様に舞い、銃口を越えて眼前に迫る。
その儘薙ぐ様に振るうがシャルロットのブレードに防がれた。
流れを止めたシャルロットは盾を構え、体当たりで箒と距離を取りショットガンを向けるが、

「――――くぅ！」

一夏の相手をしているラウラの砲撃に因り防衛に回る事に成った。

「おまけだ！」

「一夏っ！？」

更に飛んできた一夏を抱える事に成った。

「……悪い、シャル」

「ううん、いいけど……」

体勢を直す二人の表情は優れたものではない。

「ありがとうラウラ」

「……大した事では無い」

対する二人は自然体で並び、また定位置の様に向かい合う形に成った。

≪……シャル、相手を交換しよう≫

≪恐らく相手を変えるぞ……雪片に注意しろ≫

≪……そうだね、隙を見て援護するよ≫

≪うん、わかってる≫

そして構え直し、

「行くぞシャル！！」

「来るぞ箒！！」

お互いのパートナーを呼び、

「「うん！！」」

交差し向かって行った。

◇◆◇◆◇◆◇

日が出る日常を表とするのなら、日が無い夜は裏と成る。

潜みながら、隠れながら進む者達は、過去と贄に出会う。

そして宇宙（そら）から落ちる一条。それは呼び水であり、餌でもある。

呪は月を擁いて　第三十六話

『月は出ているか？』

第三十五話　『此処で全て吐き出すだけだ』（後書き）

染まった原因は副隊長でした。
後押ししたのは副会長でした。

シャルはサクッと縁切りましたがデュノア社問題は片付いてないです。
切ってから問題起こるパターンです。

タッグ戦は『箒とラウラが協力したらかなり強いんじゃね？』と思って書きました。

んで次回ですが……今度は騙しは無しです！
言える事はこれだけです。これ以上は語る舌を持たん！！

第三十六話　『月は出ているか？』（前書き）

お待たせしました。

今回は残酷な描写が有ります。そして酷いです。
なので注意を。

第三十六話　『月は出ているか？』

「覚えてたらね？　んじゃ、まったね～」

束はテンション高い通話を終え、即座に電源を落した。

「あっぶな～……きゃつは先が見えるのか？　お二人さんはどう思う？」

そう言いながら後ろを見るが、

「アホか」

「同感です」

神威と夢織が容赦無く切り捨てた。

「なんで電源入れたんだよ」

「待ち受け画面を箒ちゃんに変えて眺めて愛でる為さ！」

神威は呆れ顔で問うが兎は跳ぶだけだった。

「後にしろ」

「箒ちゃん分が足りないんだよぉ……」

束は箒の形をした人形を抱きながら許しを媚びるが、神威は頑として頷かない。
成らば、と束は別の人形を取り出した。
「むっくんにこれあげるからさぁ……許して？」
出てきた人形は神威と箒が手を繋いでいた。タキシードとウェディングドレスで。
人形を神威に渡そうとするが、
「ほら、二人の未来「後にしませんか？」――――未来図ＤＸ（デラックス）がっ！？」
夢織の蛇腹剣（ラスティー・ネイル）が手の繋ぎ目を切り裂いていた。
束は裂いた夢織を睨むが、
「泥棒猫ちゃんめ――――！？　……よし、説明に移ろうか！！」
神威が月下の右腕を展開した為、即座に態度を変えた。
「では、このモニターをご覧なさい」
モニターの左側に『的』と、右側に『他』と文字が出て、その二つを繋ぐ様に線が引かれていた。
「これから襲撃する施設を『的』として線の先、通信先を『他』とするよ。いい？」
頷く二人を確認すると説明を続ける。

「私は一時的に間に入り通過点となる」

二つを繋ぐ線の中間に『束』の文字が出る。

「で、私が通信を受け持つ間に二人は襲撃する。ここまでで質問は？」

「……間に入るのは調整の為か？」

「そうだよ。実行時間はジャミングで間に合うけどタイムアップが読み難くなる、そして焦りも出るしね。それに“もし”が有る。だから時間だけでも確実性を増したい。他には？」

「……通信を押さえるだけで大丈夫ですか？」

「大丈夫、とは言い切れない。でも何に対してもデメリットは付き物だよ？　泥棒猫ちゃん。

先ず、この手の施設は隠す事が前提に作られる。そして頑丈さ以上に外観と防音、人と物の出入りに気を遣う。んでこーいった事、禁止されてる事をしてるから人目に付かない所、それか一見じゃ判らない所に有るのが大体。今回は後者だね。ここまでは解るよね？」

「はい」

「んでこっからが通信だけ押さえる理由。こーいった連中は親元と距離が有る。そして伝手だと急対応が出来ない。だから通信がメインに成る」

「だから通信を押さえてしまえば袋の鼠、と？」

「そうそう……あ、防衛システムも黙らせとくから」
「間に居るから問題ない、か？」
「そゆ事。他には……無いね？　んじゃ次」
束はモニター画面を切り替え、施設内部構造を映す。
映し出された内部にＴａｒｇｅｔと書かれてた箇所が有る。
「二人が狙う部屋はこの二つ。一つは研究資料室、こっちは泥棒猫ちゃんが担当の方がいいね。そして此処で“愚痴”を見つける事」
「……“愚痴”ですか」
「そう、研究資料なんて要らない。欲しいのは“愚痴”が有るもの……個人的な日記とか有ればベストだね」
「解りました」
「で、もう一つは研究室兼実験室、こっちはむっくんね。ここで“繋がって無いデータ媒体”が有ったら知らせて。怪しそうなものもね？」
「……解った」
束は頷く二人を確認するとモニターを消した。
「そろそろ予定時間けど……準備は良い？」

そして心構えを確認をする。

「ああ」

「はい」

「じゃあ、ミッションスタートだ」

束の言葉の後に二人は動き出した。

◇◆◇◆◇◆◇

深夜。

ドイツの黒い森（シュヴァルツヴァルト）と呼ばれる地方、その中のフェルトベルクに私達は居る。

ドイツ軍は強制調査中、狙い時は今。

≪確かに、一見じゃ判らないな≫

≪そうね、只の別荘に見えるわ≫

目の前の襲撃施設、その外見は大きな別荘。リゾート地から外れ

た所に隠れ建っている。
人影が無い事を確認し、搬入口に近づく。
≪束姉さん、頼む≫
≪おし、開けるよ≫
一部が開いた。開くと同時に彼が踏み込み、
「「な――――――!?」」
見張りの喉に短剣を突き刺し、私が心臓を突いた。
≪閉めてくれ≫
≪あいさー≫
躯を捨て、扉を閉める。
此れで外に音は漏れない。外壁を壊さない限り、何をしても。
≪行くぞ≫
≪ええ≫
彼の後ろを音無く駆ける。邪魔な音も亡くしながら。
彼と組む時は此れが基本。彼の後に私が続く。
彼が先に仕掛け私は補助、又は止め。

暫くして階段が見えた。

≪私は上ね≫

≪何か遭ったら呼べ≫

≪神威君もよ？≫

≪ああ≫

彼と別れ上へと上がり気配を探る。見張りは……居ない。

身を低くして奥の資料室まで駆ける。

そして、扉に耳を当て中を探る。恐らく……一人。

扉を音無く開け、振り返る前に迫る。

「誰「動くと死ぬわよ」――――！？」

白衣の背に、ほんの少し刃を刺して脅す。

「欲しい物が有るのだけれど……」

刃越しに振るえが判る。

「貴方達が書き殴った物は……“愚痴”が書いて有る物は在るかしら？」

「な、なんでそんな物を「有るのね？」――――あ、有ります！」

少しだけ、刃を深くに入れる。

「案内して貰えるかしら？」

刃で促して歩かせる。

「は、はい……「両手を上げなさい。生きていたいでしょう？」――――っ！？」

糾し警告はする。そして白衣に手を入れ警報装置を取り出す。

「死にたいのならお好きにどうぞ。もう訊きたい事は終わってるのよ？」

既に用済み。そう伝えながら警報装置を相手の前に垂らし、

「これを取って死ぬ？　取らないで生きる？」

生死の選択をさせる。

「……と、取らない」

答えを聞いた後、

「そう……なら、よろしく」

刃を押し付けて歩かせる。

歩いて直ぐにある机の引き出しからメモリチップを出した。

渡そうと振り返るが、

「こ、これが「ありがとう」――――ぁっ！！」

受け取る前に突き刺した。

落ちたメモリチップを拾い、他にも無いか付近を捜すが……無い。

これ一つのようだ。

此方は終わった。この事を伝えようとするが、出来なかった。

「やっと終わりましたか？」

「！？」

話し掛けられたからだ。

聞こえた方を向くと、

「お久しぶりですねぇ、楯無お嬢様？」

漆月から消えた男が居た。

◇◆◇◆◇◆◇

これで静かに成った。
俺は手に持つ刀、夜を躯から抜き血を払う。
直ぐに目当ての物を探すと、クリアケースに入ったディスクが在った。
ケースにはＶＰと書かれていた。
≪束姉さん、見つけたぞ≫
≪いよっし。どんなの？≫
≪データディスクだ≫
≪ふむ……悪いけどそこで中身披いてくんない？　データ引き上げるからさ≫
≪分かった≫
言われた通りに近くに有った機器で披く。
≪へぇ……成る程、こんな事やろうとしてたんだ≫
中身は、人を端末としてＩＳを操ろうとしていた計画と詳細。
≪ヴァルキュリユル・プロジェクト……ふざけた計画だね≫
ヴァルキュリユルは戦乙女の複数形。
こいつらは命令を下す主神にでも成る積もりだろうか。

≪最初の実験体は……ＶＴ事件の娘か≫

遺伝子強化試験体Ｃ－〇〇三七、ラウラ・ボーデヴィッヒ……か。

≪引き上げは終わってるから実験室の方も見てくんない？≫

≪分かった≫

ディスクを取り出し、ケースに入れ回収する。

そして俺は実験室へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「捕まえましたよ、楯無お嬢様」

男は夢織のマウントを取り、組み伏せていた。

夢織の腿（もも）を足で挟む様に乗り、腕を頭の上で片手で押さえていた。

男は姿を消した後、自身を嬲る様に鍛え抜いていた。復讐の為に。

「俺、強く成ったでしょぉ？」
獣臭さを漂わせながら笑う。
「……薬でも使ったのかしら？」
対する夢織は平常心。この状態でも亡き者に出来るからだ。
だが、聞き出さなければならない事が在る為に、出来ない。
「いえいえ、使ってませんよ」
力、其れだけを求めた結果だと言う。
「もうあんな事にはさせませんよ？」
消える前の敗北。
勝ちが見えた瞬間、無様に転げ落ちた。焦がれた想い人の目の前で。
「もう頭首も認めてくれるでしょう……俺の方が相応しいと」
「……お母様はなんと言ったのかしら？」
その気に成っている男に、夢織は不快感を隠しながら訊く。
「強く成れば代われるかもしれない。そう仰ってました」
男は女を見る目に、欲情が解る獣の目に成り。
「楯無お嬢様は俺を迎えに来たんでしょう？」

「！？」

空いた手で愛おしそうに、夢織の乳房を撫で始めた。

「……此処へ手引きしたのはお母様？」

夢織は鳥肌が立つ程の嫌悪を感じながら訊く。

「違いますよ……力を求めていたら辿り着きました」

楯無お嬢様が着てくれるとは思いませんでした。と、指を下へと滑らせながら言う。

「そう。ところで貴方――――」

夢織の判別は終わった。

もう訊くことは無い。始末して良い。

だが、只で遣るだけでは気が治まらない。

「――――下手糞ね」

男の指が臍（へそ）の下で、笑いと共に止まった。

「彼だったら、私はもう達しているわよ？」

続けられた言葉は、男に取って信じられない、信じたくないもの。

「私は……彼じゃないと満足出来ないもの」
もう心身を染められた。夢織は女の表情(かお)を偽る。
「貴方では……駄目ね」
だがそれも一瞬、直ぐに見下したものと成る。
「彼の足元にも及ばないわ」
此れで最後、とばかりに嗤う。

「――――此方の腕も」

男の顔が歪む。怒りと憎しみが混ざる嘆きの顔に。
「あいつぅぅ……ガァア――――」
全て吐き出す様に叫ぼうとして、
「――――あ？」
崩れ落ちた。
夢織は男が落ちてくる前に逃れて立つ。
夢織の手には蛇腹剣が握られていた。
蛇腹剣が作る高圧水流の一滴を撃ち込み、男の体中を破壊したのだ。

鉄すら切れる高圧水流は、凶悪な殺人兵器。受けた時の衝撃の波が、体内を破壊して行く。
指先に掠っただけでも終わりなのだ。受けたら最後、助かる術は無い。

「……冗談じゃないわ」

溜め息を吐きながら神威に繋ぐ。

≪神威君……≫

躯に成った漆月の男が、何かを洩らした可能性が有る。
洩らしたのならば、何処まで洩らしたのか。
だが一々訊き回る訳には行かない。そんな手間暇を掛けられない。

≪……全部、掃除するわよ≫

因って、夢織は全て亡くす事を決めた。

◇◆◇◆◇◆◇

≪……そうだな、全部消すぞ≫

目の前に横たわる少女を抱き上げながら応える。

この少女も、端末する積もりだったのだろう。

ボーデヴィッヒの様にＩＳを通してでは無く、直接の手段でやる積もりだった様だ。

≪合流するわよ≫

≪ああ≫

そして、束姉さんに繋ぐ。

≪束姉さん≫

≪おっけぃ、撤収だね？≫

≪月は出ているか？≫

訊くと同時に月下を展開した。

≪じゃあさっさと……え？≫

◇◆◇◆◇◆◇

彼が来た。ＩＳを展開した姿で銀髪の少女を抱えて。

「展開しろ！」

「わかったわ」

私も展開し隣を飛ぶ。

「外に出るぞ」

「外に？」

理由が解らない。

片付けるのなら外に出る訳にはいかない筈。何か方法が有るのかしら？

≪……本当にいいんだね？≫

≪元々は俺が餌の筈だろ？≫

チャンネル越しで話す内容が理解し切れない。

餌は篠ノ之博士。これは知っている事。

元々の餌は彼。これも知っている事。

だが、この事を確認する様な話しをする事が解らない。

≪……半分コならいいよ≫

≪ああ、解った≫

何をする気なのかしら。

≪ん、ならさっさと出ちゃって≫

進入した所から飛び出すと、扉が閉まった。

≪これで袋の鼠だよ≫

その儘少し離れたら、彼が少女を渡してきた。

そして施設に向き直った。

「離れていろ」

その言葉に従い離れる。

「はぁ……っ！」

深い呼吸をした後に、光出した。

「……全身装甲（フル・スキン）！？」

この姿は見た事が無い。これが月下の本当の展開（姿）だとすれば、今まで彼は部分展開で戦ってきた、事に成る。

それに背負うL字のモノも、長い砲身も見た事が無い。

「発信（アクセス）……」

そう言った後、L字のモノをX字に開きながら砲身を右肩に担いだ。
そして開いたモノの中、プレートの様な部分を反転させた。
「何を、始めるの……」

◇◆◇◆◇◆◇

「始めるんだね……」
束はラボで呟いた後、パネルを操作し始めた。
神威は今、ある施設へのアクセスしているが、施設は起動しない。
足りないモノが在るからだ。
初回起動時に、あるパスワードを認証させなければならない。
「ほいほいほいほいほいほいのほい！」
うち込むものは、始めは冗談の積もりだった、何時からか本当に成った言葉。
「いっけぇー！！」

贈る言葉(パスワード)は……。

『貴方に力を』

月に有る大きなクレーター、その内の一つが言葉(パスワード)を受けてから割れた。中から出てきたモノは、何かを送信する様な施設。
その施設の先端部が発信元へ向き、一本の路(みち)を作り始めた。

路が雲を割り神威へ向かう。

月との路が出来上げると同時に波紋を起こす音が聞こえた。そして、

「――――来る」

路を強大な力が駆け始め、X字に開く四枚の翼が根元から光り出

した。

溜める音が、月下が唸る様な声に聞こえる。

「なんて、エネルギー量……うっ！？」

光りが翼を満たすと路は消えて、翼は輝き出した。

銃口上部のカバーがスライドし、撃鉄を起こす様な音を上げる。

神威はグリップを握り締め、渾身の力で引き鉄を……。

「――――往けぇっ！！」

――――引いた！！

◇◆◇◆◇◆◇

「くぅっ！！」

目の前の光景に顔を顰めた。腕の中の少女を護りながら。

何よ、これは！？

ＩＳが悲鳴を上げる様に警告を続ける。

なんてモノを……！！

ＩＳを展開してなかったら、間違い無く余波で吹き飛ばされていた。

止んだ……？

暫くして警告が止み、目に入った後景（もの）は……。

「な……」

そして、振り返り、月を背にした彼の姿は、まるで――――。

◇◆◇◆◇◆◇

「なんだこれは……」

私達、シュヴァルツェ・ハーゼに出動命令が下ったのは、月からの光が落ちた後。
強制調査の最中で対応が遅れてしまった。
思惑通りに事が進んでいた時に起こったので、内心で舌打ちしながら現場に急行した。
だが、目の前に在る風景に愕然とした。

「何が遭った……」

大地が抉れ、横に筒を描く様に続いている。

調査の為に筒の中を歩いていると、ディスクが入ったクリアケースを見つけた。
だがクリアケースに、

「……『貸し』だと？」

『Ｉｃｈ　ｌｅｉｈｅ　Ｉｈｎｅｎ　ｄａｓ！！』と書かれた紙が有った。
この貸しの意味は、入っていたディスクを解析した時に判明出来た。

「……確かに、これは『借り』だな」

これは膿を排除する為の、強力なカードと成る。

「何処の誰だか知らないが、今は感謝しよう」

私は薄暗い月に向かい、そう呟いた。

◇◆◇◆◇◆◇

夜の、裏での戦いは終わり、日常での戦いも一つ、終わりを見せる。

勝利を掴んだ者は、その味を噛み締める。

だが伝えたい相手は、未だ帰らない。

呪は月を擁いて　第三十七話

『先ず、一つだ』

第三十六話　『月は出ているか？』（後書き）

嫉妬の戦士が散りました。
最後まで名前が有りませんでした。なんて不憫な……。

それはそうと、漸くぶっ放せました。
本当にお待たせしました。

そして、皆様のお陰で１００万ＰＶ突破しました。ありがとう御座います。
なので、久々に突破記念＆感謝でもやろうかと思います。
で、今回は超感謝と言う事で内容を募集しようと思います。

1，♂×♀のカップリング話。
今迄に登場した人物の男と女を選んで、更にシチュエーションを決めていただきます。
簡単な例をあげると
「〇〇と〇〇でほのぼのした〇〇デート風景」
といった感じです。

2，野郎だけの井戸端会議。
男だけでくっちゃべるだけです。
これは議題を決めていただきます。議題は複数可です。

3，上記以外。
これは……ネタとか？

とまぁ、こんなところです。

応募してくださるのでしたらメッセージボックスに放り込んで下さい。
感想ですとネタバレになってしまうので。
件名は『1』『2』『3』のどれかでお願いします。
では、お待ちしております。
締め切りは12月10日の23時59分です。

第三十七話　『先ず、一つだ』（前書き）

三十五話の続きです。

第三十七話　『先ず、一つだ』

粗全てが旨く行った。

書類を眺めながら北叟笑(ほくそ)む。

今見ているものは報告書の類。内容は膿の排除が決まったというもの。

それもコレのお陰だが……。

手にしたモノは『Ｉｃｈ　ｌｅｉｈｅ　Ｉｈｎｅｎ　ｄａｓ！！』と書かれた紙。

本来ならばこの紙も提出しなければならないのだが、隠した。

隠した理由は、捜査の方向性が変わる可能性。私達が他所と繋がっていると見られる可能性。膿共が言い逃れる可能性。等が有るが咄嗟の行動だったので、勘に因るところが大きい。

要求はなんだ……？

『貸し』と言うからには『返せ』が有るだろう。だが相手が見えない上に要求も不明、全く判らないのだ。

敵の可能性も有るが、恐らく低い。敵であれば抉れた大地など見せない。何か“強大な兵器”を使った後を見せない筈だ。因って利用する程度だろう。

利用する度合いは分からないが、敵では無いのなら此方に害は少ない……だろう。

今は、いいか……。

考えても答えなど出ない。

溜め息を吐きながら卓上に置いてあった、調査隊が持っていたパンフレットを手に取った。

『お兄ちゃん支援友好の会』とドイツ語で大きく書かれたパンフレット。

入手経緯は調査隊が寝静まった、筈だった深夜に隊長と交信した後だった。

日本では朝の時刻、隊長に机の上に花を置く意味を教えた後だった。

私達は調査隊が泊まる部屋を、三人交代で寝ずの番をしていた。

丁度私が番の時に隊長からプライベート・チャンネルが届いた。

部屋前で交信する訳にはいかず離れたが、戻って来た時に隊員が一人も居なかった。だが部屋の中から隊員の驚愕が上がり、直ぐに居場所は判明した。

私が居ない間、隊長の恋路を話していたところに、調査隊員が出てきて部屋に招いたらしい。私も許可を得て入室したが、そこからは驚愕しかなかった。

漆月　神威。この男の不透明な部分を埋める情報が有ったからだ。

教育機関で総帥の地位が有る理由。それも自身から望んだ訳では無く、周りから望まれ生まれた地位だという事に衝撃を受けた。「まるで魔剣士ブシドーではないか！？」と叫んでしまった。

魔剣士ブシドーも周囲からの望みで生まれ、仮面を着け魔剣を振

り始めた。
更に、魔剣士ブシドーが漆月　神威を元にした人物だと知って絶叫した。
「……お兄ちゃん支援友好の会か」
ドイツ軍上層部はパンフレットを囲んで入会、又は友好関係を築くかの会議をしている。
理由は篠ノ之博士が直接作成した機器を持っていた為だ。
篠ノ之博士と繋がる組織、更に直接作成したＩＳを使う魔剣士ブシドーとの関係を築ける可能性が有るのだ。当然の事だろう。
「隊長が惚れるのも無理無いな……」
なんと言っても魔剣士ブシドーだ。隊長には必要な人だろう。
「隊長、私は全身全霊で応援します」
私は日本の方角に映る月を見上げ、魔剣士ブシドーと恋仲にさせようと硬く誓った。

◇◆◇◆◇◆◇

タッグトーナメント初戦。お互いに戦う相手を変更し、戦闘は続いていた。

一夏と箒は物凄い形相で切り結び、鍔競り合いに陥っていた。

「「むうぅぅ！！」」

二人はお互いが相手の時に限って、何時もこうなる。これは幼い時から続く、千冬が点火させた兄の取り合い戦。

だが今はお互いに成長し、戦う理由は変わった。

≪私だよ！！≫

箒は人生のパートナーに、兄と添い遂げる為に。

≪千冬姉に決まってんだろ！！≫

一夏は姉のパートナーに、本当の兄弟と成る為に。

「「むうぅぅ！！」」

剣でも、プライベート・チャンネル越しでも、己をぶつけ合う。

一方、タッグ戦パートナーは真面（まとも）な戦いをしていた。

シャルロットは砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）と呼ばれる戦法を駆使している。

ラウラとの距離を一定に保ち、ＡＩＣに捕まらない様に立ち回っている。

ＡＩＣの網をショットガンで牽制射撃し、

「見えたよ！」

弾幕が通る網の穴から高速切替（ラピッド・スイッチ）でアサルトカノン、又はアサルトライフルに持ち替え狙い撃つ。だがその弾丸は、

「見えているぞ！」

ＡＩＣに因って阻まれる。

弾丸は粗真っ直ぐ飛ぶ。その為、通過点にＡＩＣを引かれ止められる。

対するラウラはワイヤーブレードを中心にシャルロットを狙う。

機を見て近づきプラズマブレードで、又はレールカノンで狙うが、

「させないよ！」

二丁のショットガンの弾幕で阻まれる。更に、一夏を狙う弾丸も張られた弾幕で落される。

だが箒を狙う弾丸だけは、

「させん！」

ＡＩＣで確実に防いでいる。

二人の思う事は同じ、パートナーを先に倒す。

シャルロットは先程の箒の猛攻を警戒し、ラウラは一夏の雪片の零落白夜を警戒している。

二人の戦いの流れ自体はシャルロットに傾いているが、一夏との連携が全く出来ていない。
場は、一進一退の状態に成っている。

◇◆◇◆◇◆◇

「ふあー、篠ノ之さん……凄いですねぇ。専用機と互角に戦えるなんて」

「まぁ、相手の未熟さも有るだろうな」

感心する様な真耶に千冬は否定するが、些か弱い。

「でも、デュノアさん相手にした時の立ち回りは凄かったですよ？」

「あれは……見事に嵌まったんだろうな」

「嵌まった、ですか？」

「ああ。デュノアの戦法、砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）はその名の通り相手に逃げ水の様に思わせ、自分のペースに落し入れ相手を疲弊させる。だが、この逃げ水を起こすのは自然現象では無い。起こすのは人だ。篠ノ

之には全く見えなかったんだろう」

「え～と、それが嵌まると言うのは？」

「篠ノ之が取った行動は、剛の一矢。まぁ……特攻だな」

「と、特攻ですか？」

「ああ、だが見事に嵌まったんだろう。現にデュノアは篠ノ之を支配下に置けなかった」

「そ、それはそうですが……」

納得が行かない顔をしてる真耶を置いて、千冬はモニターに視線を戻す。

「山田先生、見ていないと終わるぞ？」

「え？」

「そろそろ動く筈だ」

「え、え？」

◇◆◇◆◇◆◇

シャルロットは少々焦りを感じていた。今の儘では確実に負けるからだ。
今、流れを掴んでいる要は銃。撃ち出す弾丸には限りが有り、いずれは切れる。
隠して置きたかったけど……仕方無いよね？
落ち着かせる様に自問自答をし、勝負札を切る事に決めた。
より深く、ラウラを蜃気楼に迷わせてから。
シャルロットは此れまでと同じく、右手をショットガンからアサルトライフルに持ち替え狙い撃つ。その弾丸は、
「ふん、何度やっても――――何！？」
ＡＩＣを避け右に逸れて、ラウラに着弾した。
「まさか、精度を落したのか！？」
これはシャルロットが用意した札の一つ。
銃の精度を下げ、真っ直ぐに飛ばない様に細工を施したもの。
「当たりだよ！」
シャルロットは不敵に笑いながら、左手もアサルトライフルへ持ち替え、撃つ。

「……直か！」

更に両手をアサルトライフルからアサルトライフルへ持ち替え、撃つ。

「今度は、左と直か！」

アサルトライフルは全部で四丁、その内細工をしたライフルは二丁。

シャルロットは高速切替でアサルトライフルを止まらず入れ替え、ラウラを翻弄する。

「ちっ……小癪な！」

ラウラは被弾数が増え始めた。

全て同じ形をしたアサルトライフル、違うのは弾道だけ。撃たれる迄その違いが全く判らない。

そして真っ直ぐ飛ぶアサルトライフルでも狙いをずらし撃ってくる。

先が読めない弾道。ラウラは蜃気楼に迷い込み始めた。

「此処で散乱か！」

シャルロットは右手をショットガンに持ち替え、撃つ。

ラウラはワイヤーブレードとＡＩＣで防ごうとするが、

「なんだと！？」

弾丸は破裂せず一つの儘、ラウラの向け直行した。

「今度は弾頭を変えたのか！？」

これもシャルロットが用意した札の一つ。
ショットシェルを散乱しないスラッグ弾に変え、射程を延ばし狙撃を可能にしたもの。

「当たり！」

左手もショットガンに持ち替え、撃つ。

「今度もか！」

これもスラッグ弾。
ショットガンも全部で四丁、その内二丁がスラッグ弾。
アサルトライフルと組み合わせ、翻弄する様に狙い撃つ。

「ちっ……」

真っ直ぐ、曲がる、散乱。読めない弾道、判らない弾種。
『求めるほどに遠く』

「糞……」

だが替わる銃の形は、アサルトライフルもショットガンも同じ。
『諦めるには近く』

「まだだ！」

ラウラは諦めず、引かずに向かうが、

『その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ』

「ぐ……」

被弾数が多く成り、シールドエネルギーは少しずつ削られて行く。

『緩やかな褐色の死へと進む』

ラウラが蜃気楼に翻弄される間、シャルロットは好機を探っていた。最高の一撃を入れる瞬間を。

この儘行っても、シールドエネルギーを削り終わる前に弾薬が尽きる。

だからその前に、今持てる最強の一撃を入れる瞬間を探っていた。

そして、

「うおおお！！」

その時が来た。

ラウラは被弾を気にせずワイヤーブレードとＡＩＣで捕らえ様とする。

「今だ！！」

「瞬間加速だと！？」

シャルロットは初の瞬間加速で懐に潜り込み、盾の装甲を飛ばし、

「盾殺し（シールド・ピアス）！？」

驚愕するラウラに露出したパイルバンカーを突き刺し、

「チェックメイト！！」

重音を響かせた。

「ぐぁ、あああああ！！」

だが二発目を撃ち込む前に、

「――――え！？」

ラウラはパイルバンカーの先をプラズマブレードで切り裂いていた。

「私は、負けん！！」

勝ちへの執念。それが身体を動かした。

「僕だって！！」

だがそれはシャルロットも同じ事。

切っ先が無くなったパイルバンカーを再度当て、

「ぐぅっ！？」

ラウラを打ち飛ばした。

切られたのはパイルバンカーの先だけ、本体は無傷。

点の攻撃が面と成り攻撃力は下がったが、打ち出す威力は変わら

ない。
第二世代最強と言わせる威力は、ラウラを軽く打ち飛ばす。
「まだ！」
シャルロットは瞬間加速で追うが、その機動は直線。
「させるか！」
ＡＩＣに簡単に捕まる。
だがシャルロットには承知の上、ＡＩＣを破る手段が有る。それは、
「――――枕、抱いて寝てたよね？」
口頭。ラウラと同室のシャルロットのみが出来る手段。
プラズマブレードを突き刺そうとしていたラウラが、硬直した。
「抱いてた枕は……漆月さんの積もりかな？」
続く言葉に、ラウラの頭は沸騰した。戦闘中に己の痴態を突然に暴露されれば当然だろう。
その結果、集中力を欠きＡＩＣは当然消える。
「隙有り！」
「ぐあっ！？」

シャルロットは容赦無く打ち込む。そして瞬間加速で追い、
「顔を埋めてたよね？」
口頭でも容赦無く打ち込む。
「あれは……漆月さんの腕の中？」
「ち、ちが……」
顔を赤くして否定し様とするラウラを、
「隙有り！」
「ぐぅ！」
容赦無く打ち飛ばし、瞬間加速で追う。
だが、ラウラとて二度もやられたら作戦と気づく。
シャルロットの足を止める為、自身の知る事を言う。
「――――呼び名は決まったのか？」
眠れぬ夜に聞いた事。それをお返しとばかりに言うと、シャルロットは硬直した。
「第一候補は……お兄ちゃん、だったか？」

「な、な……」

シャルロットの顔から湯気が立つ。

「隙有りだ！」

「きゃあ！？」

今迄の礼とばかりにシャルロットを殴り飛ばす。

一方、タッグ戦パートナーは、

「ラウラ……寂しかったんだ……」

「俺のミッションは……完遂まで後僅かだったのか……」

漆月と聞こえた辺りから、鍔競り合いの状態で見守っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

中継室。

「副会長……」

薫子は唾を飲み込み、

「ええ……」

麗は神妙に頷き、

「「素晴らしい！」」

絶賛した。

「今回も良い記事が書けそうです」

薫子はほくほく顔でメモを取る。

麗は目を閉じ、

「春終わり　締めはやっぱり　お兄ちゃん」

一句詠んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

蜃気楼を抜け出たラウラは突撃した。
被弾を構わず、狙いを絞る。最初の狙いは、

「貰った！」

「あっ！」

パイルバンカー。
此れさえ無くせば、恐らく自分を倒す手段は無い。ラウラはそう読む。
次の狙いは銃器。撃とうとするショットガンにワイヤーブレードを突き刺す。

「うっ」

ショットガンは暴発しワイヤーブレードも一本失うが、ラウラは構わず瞬間加速で距離を詰める。

「シャル！」

一夏は駆け付け様とするが、

「させないよ！」

箒が道を塞ぐ。

「どけぇ！」

一夏は薙ぎ払おうと零落白夜を発動した。
箒は避け様とするが、
≪剣で受けろ！≫
ラウラの指示通りに剣で受けた。
これは賭けに近い読み。その結果は、
「ちっ……！？」
当たり。
鈍い金属音と共に止まった。
白式の単一仕様能力、零落白夜はエネルギーを全て消滅させる。だが攻撃力が上がる訳でも無く、全てを切り裂ける訳でも無い。エネルギーを切り裂ける様に成るだけだ。
箒が持つ接近ブレードはエネルギーを持たない物体。ＩＳ自体に触れない限り、零落白夜は意味を成さない。
「糞、エネルギーが……」
白式のシールドエネルギーが０と成り、一夏は戦闘不能と成った。
「後は！」
「お前だけだ！」
箒は直行し、ラウラはシャルロットを挟む様に回る。
箒は接近ブレードで、ラウラはプラズマブレードで斬り付けて行

く。

「くっ……」

一夏と決定打を失ったシャルロットは二人の猛攻に成す術も無く、

＜試合終了。勝者ボーデヴィッヒ、篠ノ之ペア＞

抵抗空しく、敗れた。

ラウラは拳を強く握り、

「先ず、一つだ」

勝利を噛み締めた。

「私は、もう力に溺れないぞ……漆月　神威」

だが、その言葉に答える者は居なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

日が沈めば、夜が来る。勝者も敗者も、帰らぬ者も、其々に夜を過ごす。

勝者は敗者に、敗者は勝者に、思いを打ち明け、打ち解ける。

そして日は昇り、戦いも終わりを見せ始める。

呪は月を擁いて　第三十八話

『リベンジよ！』

第三十七話　『先ず、一つだ』（後書き）

勝者、ラウラ&箒ペア！
シャルといっくん……残念でした！
砂漠の逃げ水戦法は距離うんぬんよりペースを掴む事がメインだと思ったので……こうなりました。
そして黒兎隊感染完了。

第三十八話　『リベンジよ！』（前書き）

初戦しゅ～りょ～。

第三十八話　『リベンジよ！』

トーナメントは初戦を全て終え、日も暮れた。

「明日も気が抜けんな」

勝者であるラウラは気を引き締め。

「はぁ……」

敗者であるシャルロットは気落ちしていた。

一夏と特訓した連携が全く出来ず、個人戦に持ち込まれてしまった。特訓を生かせず援護も出来ず一回戦で敗退。そして何より、

「ご褒美……欲しかったなぁ……」

これが気落ちする一番の理由である。枕を抱えベットの上で、右へ左へと転がっている。

「……何を頼む積もりだったんだ？」

転がり続けるシャルロット。

ラウラはその様子に鬱陶しくなったのか、頼もうとした事を訊く。

すると直ぐに止まり、

「……大した事じゃ無いよ」

答えた後に再び転がりだした。

「何処がだ」

ラウラは言動が一致しない様子に口だけでツッコミを入れる。
シャルロットは暫く転がっていたが、

「そう言うラウラは、何をお願いする積もりなの？」

ラウラに訊きながら止まった。逆さまの状態で。

「私は……」

「私は？」

言いよどむラウラに、シャルロットは鸚鵡(おうむ)返しで訊く。

「……大した事では無い」

返ってきた言葉は同じだった。
だがシャルロットは満足せず、

「え～……教えてよ」

自身の事は棚に上げ、身を翻し訊き迫る。

「自分も答えなかったではないか」

「僕は負けちゃったし……いいじゃない、ね？」

「負けと関係有るのか？」
「うん、敗者の特権だよ」
ハッキリと奇言を吐くシャルロットに、そんなものが有るのか、とラウラは思う。
だが力強い眼光に、そうなのか、と納得してしまった。
「それで、ラウラは何をお願いするの？」
「私は…」
「私は？」
思春期真っ盛りのシャルロットはベットから飛び降り、ラウラに迫る。
「その……」
「その？」
「……温もりだ」
ラウラは頬を赤く染め、視線を逸らした。
「漆月さんの温もり？」
「……ああ」

「……漆月さんの温もりだけ？」

「……ああ」

シャルロットは目が点に成った。予想では自分と同じ様な、想い人と……等の事だと思ったからだ。

だが呆けていたのは少しの間、直ぐに我に返り笑みを浮かべた。

そして、

「ラウラ、もう少し欲張っても良いと思うよ」

「欲張る？」

背を押す様に言った。

シャルロット自身もＩＳ学園に来るまでの二年間、何度も同じ事を思っていた。

ＩＳ学園に転入し、一夏に慌ただしく手を引かれた時、檻の中から連れ出してくれた。そんな感覚すら覚えた。

「うん。温もりって言っても色々有るじゃない？」

「そうなのか？」

孤独を知るシャルロットにとって、この数日のラウラは見るに堪えなかった。

毎晩遅くに肩を落とし帰ってきたラウラ。流石に心配に成り声を掛けたが「大丈夫だ」の一点張り。

何とかしたいと思っていたが、手立てが帰って来てなかった。

「うん、色々有るよ。ラウラだって一つじゃ満足しないでしょ？」

「……どうだろうな」

だが持ち直し、元気に成ったラウラを見て、教えたくなった。

「ねえ、ラウラ。一夏の所に行こっか」

「何故だ？」

「叩いたお詫びしてないでしょ？　それに、漆月さんの事も聞けるし……ね？」

「……そうだな」

温もりとは違うが、暖かいと思えるものが有る。それを教えたくなった。

「じゃ、行こ？」

「ああ」

◇◆◇◆◇◆◇

一夏の部屋。

「負け犬」

「ぐぅ……」

部屋の主は心を蹂躙されていた。

「あんた対戦表が出た時……決勝戦で会おう。なんて言ってなかった？」

「ぐぐ……」

「――――ダサ」

「かはっ！」

鈴の失笑に、一夏は崩れ落ちた。

トーナメントで一夏と鈴が当たるのは決勝戦。鈴は一夏の言葉を信じ、決勝戦で燃える様な展開を期待していた。更に、燃えた後の淡い展開を期待していた。其れだけに落胆は大きい。

「鈴さん、その辺りで……」

「セシリ――――」

セシリアは愛の手を思わせる様な言葉を差し出した。

その言葉に、一夏は助かった様な顔を浮かべ、

「でも一夏さん、言った事を守るのが紳士というものではなくて？」
「――――あ」
そのまま心と共に倒れ伏した。
セシリアも鈴と同じ様な事を考えていた為、少々キツイ。
「一夏……」
笑顔で続く箒に、お前もか？　とでも言うような顔を向けるが、
「次、頑張れば良いんだよ」
「箒……」
思わぬ言葉に救い上げられた。そして、
「……あれ？　次あるかなぁ」
叩き落とされた。箒は素で言っている為、攻撃力が嫌に高い。
「へへっ、燃え尽きたぜ……」
一夏が真っ白に成りかけた時、扉をノックする音がした。
「一夏、居る？」
「お、おぉ……シャル！」
入室の許可を取るシャルロットに、一夏は待てるものかと扉に駆

け出した。

「わっ！？　い、一夏、どうし……え！？」

シャルロットは飛び出てきた一夏に驚くが、一夏は構わずシャルロットの手を両手で握り、上下に振り回した。

「シャル……よく、よく来てくれた！」

タッグ戦でパートナー、同じ思いを抱く筈。一夏はそう思い暴走する。

だが、こんな事をすれば……。

「一夏、そんなに僕の事を？」

「あぁ、ああ！　シャルを待ってた！　すげぇ待ってた！！」

「そ、そうなんだ……」

当然、シャルロットは勘違いをして頬を赤く染める。

そして、その様子を見る者達は……。

「「一夏ぁ（さぁん）？」」

当然、嫉妬に燃える。

「なん――――いてぇっ！？」

鈴は右の、セシリアは左の耳を全力で抓み、部屋の中へと引きずり、

「痛い！　痛いぞ二人とも「「ふんっ！」」――――おぅ！？」

椅子に叩き付ける様に座らせ、

「いってぇ……。何すんだ「「ふんっ！！」」――――よぉっ！？」

乙女心の激情を、形として叩き付けた。

「……ふむ、尋問の一種か」

◇◆◇◆◇◆◇

一悶着の後。

「……それで、何しに来たんだ？」

両頬に手の形の紅葉を付けた一夏がラウラに問い掛ける。

「謝罪に来た」

ラウラの思い掛けない言葉に一夏は虚を突かれた顔に成る。

「私の自己主張……自己満足で傷付け、すまなかった」

そう言い、一夏、鈴、セシリアに頭を下げた。

「……理由を、訊いていいか？」

「ああ……」

ラウラは一夏の問いに頷き、話し始めた。

千冬との出会い、自身の抱いた思い。そして、神威と一夏に向けた嫉妬の理由を。

「……私は、力が強さだと思うようになっていた。だから、教官に無力と言わせた漆月　神威と、モンド・グロッソで誘拐され、教官の力を示す場を奪う事に成った……お前を恨む様に成った」

「……無力、か」

一夏の呟き、それは自身だとラウラは言う。

「全ては、私の弱さが原因だ。誘拐が無ければ……教官と会う事も無かったというのに」

自傷する様に吐くラウラ。

「力を求めた結果、私は……「力を求める事は悪い事じゃないだろ？」……何？」

続く言葉を、一夏が封じた。

「……俺だって、力が欲しい。何度もそう思った……誘拐された時から」

一夏が思い出すのは、攫われた時の事。

「俺が誘拐されなきゃ……千冬姉は、間違い無く優勝してた」

助けに来た姉。

自分の問いに「どうでもいい事だ」と、本当にどうでもよさそうにしていた事。

「神威兄にだって……手間を掛けさせなかった」

助けに来た兄。

自分をからかいながら「大した事じゃない」と、何時もの態度で接してくれた事。

「だから、悪い事じゃ無いと思う……」

剣を続けていれば、トレーニングを続けていれば、きっと何かが違った。そう思っていた。

「俺だって……強く在りたい」

姉の様に、兄の様に。背を追うだけでは無く、共に歩きたい。

白式を手にした時から、そう思う様になった。

「俺は……」

一夏は無意識に下げていた視線を上げ、

「……あ」

自分に集中していた視線で我に返った。

「と、兎に角！　俺は叩かれただけだから謝ってもらえばいいけど……」

自分の世界に入っていた事が急に恥ずかしく成り、誤魔化す様に話を戻し、

「……神威兄にもちゃんと謝れよ」

確りとブラコンを発揮した。

「……ああ、誓おう」

ラウラは疑問を抱いたが、今は訊く時では無いと飲み込み、頷いた。

「なら、俺からは言う事は無いな。鈴とセシリアは？」

一夏は話を振ると、二人は顔を見合わせた。

「あたし達は……ねぇ？」

「ええ、同意書が効きますもの」

ＩＳ学園に入る為には、同意しなければならない事が幾つか有る。

その一つに『学園内で起きた問題は、決して学園外へは持ち出してはいけない』というものが有る。由って、学園内で起きた生徒間の問題は当人同士で決着をつけねばならない。
この同意書が出来た一番の理由は、戦争回避の為。
此処で起きた問題は各国の争いにもなりかねない。国を背負う代表候補生等は特にだ。
そして、同意事項を破ればＩＳに関わる全てを剥奪される。

「ま、頭下げてるんだし……この事はいいわ。ただし、決勝まで残りなさい。そこで……」

鈴はラウラに指を突き付け、

「お礼を致しますわ。その時に……」

セシリアは腰に手を当て、

「リベンジよ！」

条件を突き付けた。

「ああ、必ず残ろう」

ラウラは条件を飲み、確りと頷いた。

「あたしはこれでいいけど、セシリアは？」

鈴は「これでお終い」とポーズを取った。

「わたくしも構いませんわ。……人の事を言えませんので」

セシリアは入学当初、神威と一夏に喧嘩を売った事を思い出し、顔を背けた。

「ふふ、よかったねラウラ」

シャルロットは微笑みながらラウラに声を掛ける。

「……ああ」

ラウラはその優しさを、噛み締めるように頷いた。

そして、今まで見守っていた箒は、

「ねえ、ラウラ」

「……ん？　なんだ？」

「謝りに来ただけなの？」

エアブレイクをやらかした。

「ラ、ラウラは漆月さんの事を教えてもらおうとしたんだよ」

ラウラが許してもらえた事を自分の事のように喜んでいたシャルロットにとって、酷くぶち壊しであった。

「兄さんの事？」

「ああ。教えて欲しい」

だが当の本人は直ぐに順応した。
そして兄の話題が出れば、一夏が黙っていない。
「なぁシャル。結局、神威兄をなんて呼ぶんだ？」
「……え？」
シャルロットは突然の不意打ちに、立ち直ってなかったので固まった。
「あ、じゃあ先に兄さんをなんて呼ぶか決める？」
「……え？」
そして、兄の事には箒が付いてくる。
一夏と箒のブラコン魂。一つ一つは単なる火だが協力すれば炎と成る。炎と成った二人は、この様な事には無敵だ。
「そうね、そろそろ大哥をなんて呼ぶかきめるわよ」
「ええ、是非そうしましょう」
「……え？　え？」
更に、染まった者達が加われば業火と成る。
「ラウラも一緒に決めよ？」
「私もか？」

「うん。ラウラは呼び名の候補、知ってるよね？」
「……成る程、了解した」
「……え？　ラウラも！？」
業火を通り越して業炎と成った。もう絶対無敵である。
「よし、鈴！　セシリア！」
「解ってるわ！」
「お任せ下さい！」
一夏の号令に二人はシャルロットの左右に立ち、
「え？　何？　何するの！？」
腕を掴みベッドに座らせ、その儘ホールド。
一夏は向かい合う様に、反対のベッドにドスンと座った。
「よし、箒！」
「うん！　ラウラはそこに座って」
「わかった」
箒はラウラを椅子に座らせ、

「一夏、準備出来たよ！」

何処からともなくノートを取り出し椅子に座った。

「じゅ、準備ってなんの準備なのさっ！？」

「会議の準備だ」

実質出来上がったのはシャルロットの絶対包囲網である。

鈴とセシリアから逃げられても一夏が居る。一夏を越えても、廊下に出る為には箒とラウラが居る。

最短の逃げ道は窓だが、開けてるうちに捕まるだろう。割れば千冬が飛んで来る。逃げる事は絶対無理である。

「よし、では最初は「何を騒いでいる」……ん？」

開始の号令は、扉を開け入ってきた人物に遮られた。

「お、織斑先生……」

入ってきたのは、見回りをしていた千冬。

シャルロットは助けを求めようとする。

「シャルが神威兄をなんて呼ぶか決めてるんだ」

「……はぁ、静かにやれ」

だが千冬もブラコン、溜め息を吐きながら許可を出した。

「え！？　ま――――むぐっ！？」

シャルロットは去る千冬を呼び止めようとするが、口を塞がれた。
「静かにって言ってたじゃない」
「怒られてしまいますわ」
言いつけを捻じ曲げて守る、鈴とセシリアの魔の手に因って。
「よし、候補から挙げて行こう。箒」
抜け出そうとするシャルロットを置いて、一夏は無慈悲に開始した。
「うん。ラウラ、教えて」
「わかった。確か、第二候補は……兄貴、だったな。第三候補は……」
ラウラが挙げる呼び名を箒はノートに書いていく。
「っ！？　～～～～っ！！」
シャルロットは全く声に成らない叫びを上げ、一夏を涙目で見る。
「安心しろ、選ぶのはシャルだ」
だが一夏は笑顔で喜んでいると勘違い。全く意思疎通が出来なかった。

「……私が知る呼び名はこれくらいだな」
「ラウラ、ありがとう。一夏、終わったよ」
そして、準備は整った。
「よし。先ず俺達で厳選しよう」
その号令に、ノートを囲う様にして集まった。動けないシャルロットの下に。
「お、神威兄が有る」
「あ、大哥も有った」
「お兄様も有りますわ」
「ラウラは何が良い？」
「私は……この兄上に惹かれるな」
シャルロットは涙目で助けを求める。
「もごんご、もごんぁん……（助けて、お兄ちゃん……）」
此処に居ない人物を。第一候補で。

◇◆◇◆◇◆◇

「此処は空か……」

「撤収済みのようね」

俺達がしている事は施設潰し。

ヴァルキュリユル・プロジェクトと関係したものを潰して回っている。

「何も無いな」

「そうね」

内部を探るが、何も無い。

時間を置いた為、逃げられたのだろう。

「撤収するわよ」

「ああ」

未だ、襲う施設は残っている。

こいつ等は間違い無く俺達の邪魔に成る。だから、

「次に向かうぞ」
「ええ、わかったわ」
全て、潰す。

◇◆◇◆◇◆◇

一夜明け、トーナメントは順調に進んでいた。
今戦っているのは鈴とセシリアのペア。相手はどちらも訓練機。
「……慣らし、か」
「そうだね」
箒は隣に座るラウラの呟きを聞き取り頷いた。
鈴とセシリアの戦い方は単純。鈴が斬りセシリアが撃つ、セシリアが撃ち鈴が斬る。その繰り返し。
だが連携を切らせない。実戦での呼吸合わせだろう。
「箒の相手は……鈴のほうが良いだろう」

「うん。セシリアだと……厳しいかな」

二人は話ながらも、目の前の戦闘から目を離さない。

箒は二人の実力を知っている為、ラウラはデータを知っているから不意を突かれた為、目を離せない。

「いざとなったら……アレ、やろうね」

「……しかしな」

アレとは箒が提案した連携。

だがラウラは渋った。下手をすれば自爆技と成るからだ。

「大丈夫だよ」

根拠など無いだろう。ラウラはそう思い顔を顰める。

「きっと上手く行くよ」

だが、箒は失敗などしないと言う。

＜試合終了。勝者、凰、オルコットペア＞

試合は終わり、鈴とセシリアがラウラに視線を向ける。待っていろ、とでも言う様に。

「……必要に成ったのならば、だ」

ラウラは視線を受けながら、渋々だが箒に是と返した。

そして、その隣に、

「神威兄のご褒美……」

今更落ち込む一夏と、

「一夏、僕も一緒だから。元気出して、ね？」

健気に励ますシャルロットの姿が在った。

◇◆◇◆◇◆◇

約束を守ろうと、雪辱を果たそうと、頂（いただき）の前に立つ者達。

其処に憎しみは無く、在るのは目の前に在る頂、馳せる想い。

勝敗が決まる時、もう一つ、高い頂が現れた。

呪は月を擁いて　第三十九話

『……今、戻った』

第三十八話　『リベンジよ！』（後書き）

感染された者に壁など無い！

ラウラは和解できました。よかったね！

いっくんはミッションを完遂しました。やったね！

シャル、君に恨みは無いが……呼び名を決めてなかったのがいけないのだよ！

さて、ラウラ＆箒ＶＳ鈴＆セシリア、どっちが勝つのかな？

１００万ＰＶ突破記念＆感謝（前書き）

皆様のおかげで１００万ＰＶ突破しました。ありがとうございます！

今回も「こまけぇことはいいんだよ！」でいきます。

『気にしねぇぜ！』てな方はお進み下さい。

１００万ＰＶ突破記念＆感謝

爺

＜……読者の皆、感謝する。ここまで来れたのは読者のお陰じゃ。今回は漆月　荒刃と＞

鈴

＜鳳　鈴音でお贈りしまーす！＞

爺

＜して今回は……かっぷりんぐ話じゃな＞

鈴

＜そうですね～。では、早速センサーをモニターｖに【全力全壊なの！！】……何この音声＞

爺

＜作者の頭の事じゃろ。どれ、映像は……＞

鈴

＜これは……秘密基地？＞

爺

＜……そう、みたいじゃな＞

鈴

＜大哥と……篠ノ之博士？＞

爺
＜ふむ……＞

◇◆◇◆◇◆◇

とある秘密基地（？）内部。
「準備はいいかね？　むっくん！」
やたらテンションが高い束と、
「何させようってんだ……」
やたらテンションが低い神威が居た。
「決まってるじゃぁあ～りませんか！」
「何が決まってんだ？　月まで拉致りやがって……」
そう、今居る場所は月。
神威は失踪した束に呼び出され、あれよあれよと月まで攫われた。

「どこが箒のピンチなんだよ……」

呼び出しに使った餌は箒。

この時間軸は原作開始の一年前、箒は囚われのお姫様。なので神威は心配で仕方がない。だからコロリと騙された。

「ちっちっちっ。甘い、甘いぞむっくん！　これからする事は箒ちゃん防衛に繋がるんだよ！」

「……何処が？　どう繋がるんだ？　嘘つくなボケ」

「嘘じゃねぇってばよ！！」

束の言う事は九割九分九厘が嘘。だが一厘ほどの可能性が有る、かもしれない。だから、残念なことに嘘とは言い切れないのだ。

「いいかいむっくん。箒ちゃんは囚われてるんだよ？　この先も無事でいられるか判らない」

「それは……解ってる」

真剣な表情に変わる二人。

だが先を知る読者の皆様には、茶番だ。だって無事だもの。

「だから私達は“若しも”を用意しておいた方がいい」

「……ああ、そうだな」

でも二人は真剣。だって箒に会えないから。

「だから……もう用意しました！」

「……は？」

真剣タイム終了。

「これを見よ！」

突然出てきたモニター、映ったのは格納庫。そこには……。

「おい、これ……」

右肩に大砲担いで背中に二枚のリフレクターを付けたもの。ぶっちゃけD．O．M．Eビットがわんさか居た。

「造っちゃった。てへっ」

束は可愛らしく笑うが、神威にとって恐ろしい事この上無い。だってこいつらヤバイもん。うじゃうじゃ居たらマジヤバイもん。

「そういや……此処って……」

俺は何も見なかった。と、神威は視界からモニターを物理的に抹消し、辺りを見回す。

「そう、此処はD．O．M．E……」

広い空間に、束の声が響く。

「……本当、なのか？」

神威は神妙に、確認を取る。

「……だったらいいね。ひっかかった？　むっくん、ひっかかった？　ふっ、修行が「死ね！！」――――Ｏｈ！？」

だが嘘だった。まぁ、当たり前である。ファーストＮＴなど居る訳がない。創れる訳がない。

「ちょっとしたドッキリだったのにぃ～」

月に居るせいか何時もより高く弾けた束。でもダメージが薄い。何故だ？

「ったく。あんなもん有んのなら他のもん要らねえだろ」

正論（？）である。

「むっくん……強過ぎる力は災いを呼ぶんだよ」

言ってる事は正論だが今更である。今、束の身にも起こった筈である。

「俺を呼んだ理由を話せ」

束の言い分を神威は華麗にスルー。

「でも私は、箒ちゃんが心配なんだ……」

お返しに束も華麗にスルー。ではなく目を閉じ両手を胸に当て、自分の世界に入っている。

「……俺を、呼んだ理由を、話せ」

神威は頑張って再度スルー……する訳がなく月下の右腕を展開した。

「でも、私一人じゃ駄目だと気づいて……むっくんを呼んだの――――」

だがＮＴじゃない束は見えてない。気づかぬ儘、くるりと回りながら神威に片手を差し伸べ、

「――――よ……お？」

風前の灯だとやっと気づいたようだ。神威は殴る準備が完了している。

「で？」

口だけが笑う神威。顔色が一気に悪く成る束。

「えっとぉ、束さんは箒ちゃんの為に色々頑張って造ってたんだけどぉ……」

「で？」

目つきが尋常じゃない神威。顔色が尋常じゃない束。

「――――限度が全くわかんなくなりました！！」

経験からくる推測で、ぶちまけた方がマシ。恐怖により束はそう誤測した。

「アホかっ！！」

「ぶべらっ！？」

当然ツッコミが入り、束は盛大に吹き飛んだ。地球の引力から解放されたせいか、飛びっぷりがハンパない。

「逃がすか！」

神威は怒りから逃げたと誤認し、腕からアレを発射。

「Ｗｏｗ！！」

フィッシュ成功。束のハート辺りをナイスキャッチ！

「あーれー」

引き戻されながら悲鳴をあげる束。やけにダメージが低い。何故だ？

「死なす」

神威は拳を再度セットアップ、アーンド、ロックオン！

「死「なんとぉ！！」――――っ！？」

なんと、束は迫り来るクラッシュアームを躱し、盛大なるハグをした。

「駄目だよむっくん。束さんのハートを撃ち抜きたいのはわかるけど……むっくんには箒ちゃんがいるんだよ？」

そして盛大に勘違い……いや、素……か？

「求められても……応えることなんか出来ないよ」

束の頭はトリップにドップリ。神威の頭はボインにドップリ。

束の顔はちと赤い。神威の顔はちと青い。

「っ、っ、っ！」

束がキチガイじみた馬鹿力を発揮してる為、神威は抜け出せない。そして「は、な、せ！」と言っているが声に成らない。

「うん、ちゃんと話すよ」

それを束は都合よく勘違い。しかし、よく聞こえたこものだ。兎は月に居ると何かと凄いらしい。まぁなんにせよ、神威の天国だか地獄だか判らん時間は続く事になった。

「私の一番は……やっぱり箒ちゃんなんだ。だから、無理だよ。箒ちゃんを泣かせることなんか出来ないよ。ごめんね、むっくん……」

まだ続くよ勘違い。神威はちょっと危なそうだ。

「たとえ箒ちゃんがＯＫしても……ん？　ＯＫしたら……ＯＫ？」

なんか逸れたよ勘違い。神威はそろそろヤバそうだ。

「それなら……んん？　若しかして、姉妹丼なんて狙ってるのかなっ！？　お義姉ちゃんはそんな美味しいとこ全部なんて許しませんよっ！！」

なんか暴走したよ勘違い。神威はとうとう逝きそうだ。

「で、でも箒ちゃんがもしＧｏしちゃったら「■　■　■　■　■　■　■　■　！！」うひゃぁっ！？」

物理的にもぶっ飛んだよ勘違い。神威は『死なないで！！』の呪いが発動したらしい。前世のお袋さんに感謝しろ。

「いたた……ちょっとむっくん、ツンが酷いよ？　このツンデレめ……え？」

色々な意味で終わりを見せたよ勘違い。これより『逆襲の神威』開始。

「えっと……なんでフルアーマーなのかな？」

束の前に約１／９のＧＸ－９９００が仁王立ちしていた。湯気だかオーラだか判らないものが背後になんか形作ってる気がする。

「えっと……なんでお目目が真っ赤なのかな？」

普通は緑だが今は真っ赤っ赤でギンギン輝いてる。流石は束すぺ

しゃる、芸が細かい。

「えっと……なんで、その、ヤバイもん……向けるのかな？」

サテライトキャノンをガチャンとセットアップ。神威は「サテライトだけじゃ勿体無い」とビームキャノンを撃てるように改造していた。転ばぬ先の杖、というやつだろう。

「えっと……なんでチャージ出来るのかな！？」

ウィィィィンと音がしてる。チャージ出来るのは……なんか月下が凄く頑張ってるらしい。愛情ゲージがカンストしてるから頑張れる、のかもしれない。若しくはGガン的なフィードバックなんちゃらが組み込まれてる、かもしれない。

「え、ちょ、ちょっと待って！　それシャレに「■　■　■　■　■　■　■　■　！！」ツンデレにも程があるよ！？」

人語を忘れたツンデレラ神威は躊躇無く引鉄を引いた。威力はサテライトに到底及ばないが……結構ヤバげ。

「ちょ、ま……うきゃあああ！？」

束は光の波に？まれ、塵と成ったのであった……。

◇　◆　◇　◆　◇　◆　◇

爺
＜神威め……＞↑激渋顔

鈴
＜まぁ……流石にやり過ぎよね＞

爺
＜お茶目が過ぎるぞぃ＞↑爺バカ発動

鈴
＜お茶目で済ませた！？＞↑吃驚仰天

爺
＜孫の雄姿（ゆうし）を見れたので、次じゃ＞

鈴
＜え！？　篠ノ之博士との関係とか開発はどうしたとかあるんじゃないの！？＞

爺
＜如何でもいいわい、そんなもん＞

鈴
＜ダメだこの爺……はやくなんとかしないと……＞

爺
＜文句有るのか？＞←目がギラン！

鈴
＜ひぃ！？　なんでもないです！！＞←吃驚どころじゃない！

爺
＜では、良いな？＞←１９０ｃｍの身長で見下ろす

鈴
＜は、はい！！　無問題です！！＞←身長差で怖さ倍増

爺
＜うむ。確か……次も孫の話じゃったな？＞←爺バカ再開

鈴
＜大哥ぇ～……一夏ぁ～……＞←半泣き

爺
＜聞いておるのか？＞←またギラ～ン！

鈴
＜はい！！　また大哥とのカップリング話です！！＞←敬礼もしちゃった

爺
＜では映すのじゃ＞

鈴
＜はいぃ……（この人もうやだ……）＞←もう泣きそう

爺
＜む……これは……＞

鈴
＜ぐす……大哥の誕生会が終わった、後……？＞

爺
＜ふむ、千冬嬢が戻って来た年の誕生日じゃな＞

鈴
＜懐かしいなぁ……楽しかったなぁ……＞↑思い出に逃げ込んだ

爺
＜お主はこの翌年の三月に帰国したのじゃったな？＞

鈴
＜皆で馬鹿やったなぁ……＞↑膝を抱えて逃避中

爺
＜これ、聞いておるのか？＞↑孫の事じゃないので普通

鈴
＜特に麗先輩が凄かったなぁ……＞↑聞こえな～い

爺
＜まぁ、良いわい。それより神威じゃ＞↑結局爺バカ

鈴
＜またやりたいなぁ……＞↑少し遠い目してる

◇◆◇◆◇◆◇

「改めて……誕生日おめでとう神威」

「ありがとう、千冬姉さん」

軽くグラスを合わせ、一口含む。

「……どうだ？」

「……うん、美味い」

「そうか、それは良かった」

今は深夜。一夏も神威を祝いに来た者達も、もう寝静まっている。

「でも意外……かな？」

「何がだ？」

「千冬姉さんがワインを用意したのが」

飲んでいるものはロゼのワイン、今日の為に用意したもの。
ただ、大っぴらには出来ないので私の部屋で飲んでいる。
「聖夜にビールは似合わないだろ？」
「……確かに」
小さく笑い合う。だがそれも束の間。
神威は意地悪い笑みを浮かべ、
「ところで、教師が未成年に酒を飲ませて良いのか？」
と、のたまった。
「元服の様なものだ。それに、神威も酒を飲みたかったんだろ？
何時も羨ましそうに酒を飲む私を見ていたじゃないか」
私の反論に神威は視線を逸らしながら、
「……元服じゃ……しょうがない」
負けを認めた。
「……ん？」
「どうした？」
「……ペンギンが無いな」

っ！？　それは……。

「何処に置いたんだ？」

学園の寮室に置いてある……なんて言えるか。流石に、恥ずかしい……。

「千冬姉さん？」

「……クローゼットの中だ」

「ふぅん……」

少し気に成った程度、か。どうせなら、完全に紛らわしてしまおう。

「……神威、今年のプレゼントだ」

そう思い、用意していたものを渡す。

「……プレゼント？　俺、プレゼントは酒かと思ってた」

この顔は……本気でそう思ってたな。

「酒な訳があるか」

「じゃあ……酒はなんだ？」

「それは……」

また言い難いところを……。

「それは？」

「……言っただろ、元服祝いだ」

家で飲み交わす相手に成って欲しい……など言えるか！

「元服祝い、ねぇ……」

「……その顔はなんだ？　何故ニヤついている」

「いや？　良い姉を持てて幸せだな～、と」

そう言われて悪い気はしないが、その顔で信じろと言うのは……無理だ。

そして、私をからかい、ニヤつく姿はまるで……。

「……束みたいだな」

「――――んなっ！？」

人をからかう時の束にそっくりだ。

「……俺が、似ている？　そんな、馬鹿な」

余程ショックらしい。まぁ、私をからかう神威が悪いだろう。

だが、落ち込み過ぎじゃないか？

「……俺が、あの、アホ兎？」

二人は、なんだかんだで気が合っている、と思う。言い合い等を見てると、特にそう思う。
類友、と言ったところだと思うのだが……今一、神威が束をどう思っているかが解らない。

「神威、冗談だ」

流石に拙いか？　と思い前言撤回する。
冗談では無いのだが、これ以外に言葉が見つからない。

「……千冬姉さん、その冗談は金輪際止めてくれ。死にたく成ってくる」

そこまで嫌か？　まぁ、如何でもいいか。酒も不味く成るからな。

「ところで、その封を切らないのか？」

「今開けて良いのか？」

「ああ」

贈ったものを神威が気に入るかどうか……気に成るからな。

「へぇ……ロングコートか……」

贈ったものは紺のロングコート。
神威が冬に好んで着るものは、動き易いジャンパーが多い。だから、一着くらいロングコートが有っても良いだろう。そう思い選んだものだ。

「似合うかな？」
「着てみればいいだろ？」
神威は立ち上がり、コートを羽織る。
「……どう？」
「ああ、良く似合う」
本心からそう思う。
「そっか……。じゃあ、ありがたく着させてもらうよ」
神威も気に入ってくれた様だ。贈った身としては、嬉しい事だ。
「結構暖かいんだな……ん？」
「どうした？」
「千冬姉さん、外見てみな」
「外？　……雪か」
窓の外には、雪がチラついている。
神威は窓まで近づき、外を眺めた。
「あれ、ＩＳ学園だよな……」

私の部屋の窓はＩＳ学園の方角を向いているが、何か気に成る事が有るのだろうか。

「……やけに、輝いてないか？」

「……何？」

私も立ち上がり、窓へ近づくと、

「ツリーの積もりか？　あれ」

ＩＳ学園上部に、クリスマスツリーを模る光が在った。

「恐らく、光道音の仕業だろう」

「……だから、今日は途中で帰ったのか」

だが、この程度ならば可愛いもの……だろう。

「全くあいつは……」

「まぁ、そう言うな」

私はグラスを取りに戻り、持った後また窓へと近づく。

「あれを見ながら飲むのも、一興だろ？　それに、光道音も光道音なりに、神威を祝ってるんだろう」

そう言いながら、グラスを神威に手渡した。

「……おう」
「ふふ、祝福はありがたく受け取れ」
こういうところは、年相応に見える。
「……ところで千冬姉さん」
「なんだ？」
「なんで寄り掛かってくるんだ？」
「……寒いからな」
実際に窓の傍は冷える。嘘は言っていない。
「……じゃあ、コートの中に入る？」
「そうだな、入れさせてもらおう」
お言葉に、甘えさせてもらおう。
「なんか、俺の誕生日って感じじゃ無いな」
「……神威、時計を見てみろ」
「ん？　……なんだ、終わってたのか」
時刻は、過ぎていた。

「じゃあ……」

「ああ……」

もう一度グラスを合わせ、

「「メリークリスマス」」

音を響かせた。

◇◆◇◆◇◆◇

鈴

＜いいなぁ……あたしも一夏とあんな事したいなぁ……＞↑完　全

復　活　！

爺

＜うむうむ、流石はわしの孫！！＞↑何処までも爺バカ

鈴

＜で、続きは――【これ以上書いてられるか！！】――モニターが

爆発した！？＞

爺
＜作者の僻みじゃろ。全く……＞↑うるせぇ

鈴
＜シングルベル鳴らす破目に成ったからって……＞↑ほっとけ畜生

爺
＜まぁ、なんにせよ今回は此処までじゃな＞

鈴
＜そ～ですね……では皆様、お付き合いいただきありがとう御座いました＞

爺
＜そして、今日はイヴ。明日はクリスマスじゃ＞

鈴
＜なので確りと楽しんで下さいね？　作者の様に呪詛を吐かないように＞↑呪うぞ畜生！

爺
＜では皆の者……去らばじゃ＞

鈴
＜メリークリスマス！！　皆に幸あれ！！＞

１００万ＰＶ突破記念＆感謝（後書き）

リクの二つをあげました。楽しんでもらえたら幸いです。

基地造りじゃなくなっちゃったけど……よかったかな（汗）

千冬リクはこんなんだけど……よかったかな（汗）

なんにせよ、クリスマスです。私は、シングルベルを鳴らします。

今、鳴らしているベルはロンド・ベル。だったらいいなぁ……。

なんか『魔除けの鈴』ではなく『魔寄せの鈴』のような気がするけど……気のせいだよね！！　うん、きっと気のせいだ！！

第三十九話　『……今、戻った』（前書き）

決勝まで飛びました。

今回は糖分を過剰摂取しておいた方がいい……かもしれません。

第三十九話　『……今、戻った』

「ん……朝？」

カーテンの隙間から朝陽が覗いていた。

私は身体を起こそうとして、止めた。と言うか……出来なかった。

「あ……」

隣りで眠る彼。その腕に抱きついていた為に、動けなかった。

昨夜、私達はＩＳ学園が有る町、その付近に戻って来ていた。だが私達は戻らず、夜が明けてから戻る事にした。

今迄強行軍で各地を回っていた為、少々疲れていた。そして其の儘ＩＳ学園へ戻っても、戻れない気がした。

此れ迄、日常とは程遠い『場所』に居た。疲れた身体で戻れば、襤褸（ぼろ）が出るかもしれない。

私は幼馴染達の、更織の理解が有るからまだいい。でも、彼は駄目だ。彼の周りは何も知らない、知られる訳にはいかない。だから少し休み、気持ちの整理をしてから、戻る事にした。篠ノ乃博士と別れてから、そう決めた。

「でも……役得、よね」

まだ、はっきりしない頭でぼやいた。

今、目の前で、彼は眠っている。詰まり、其処まで私に気を許している、という事。此れはとても嬉しい。だけど、同時に悲しい。普通に眠れると言う事は、私を女として大して意識していない、と言う事になる。

スタイルには自信が有るのに……。

ベッドが一つしか無くて、共に寝る事を渋ったので、全く意識して無い、ということは無いと思う。恐らく箒ちゃんで馴れてしまった、と思いたい。ベットが一つしか無いのは、そういったホテルだから仕方がない。そんな風に自分を納得させた、と思う。

流石は一夏君の兄貴分、壁が厚い。一夏君の様に唐変木じゃ無いのは良いけど……これはこれで考えものだ。

もっと大胆に行くべきかしら……？

思い立ったら吉、早速やってみよう。箒ちゃんや鈴ちゃんの様に。更に、女特有の武器も使って。

チャンスは最大限に生かすべきよね。

そう思い、準備を始める。

今は二人きり、邪魔は入らない。逆に言えば、今しかない。次の機会は何時に成るか、有るかどうかも分からない。完全にフリーな時間は、彼と二人きりの時間は早々取れるものじゃない。

ＩＳ学園に戻れば強敵が居て、そしてもう直ぐ一年の校外実習が有る。だから、余所見等出来ない、見ても私を想いうかべる、そんな手を打っておくべきだ。

……よし、準備完了！

再び、逃れられない腕を抱き込み、更に足も絡ませてから、彼を揺すり起こす。

「……ねえ、起きて。もう朝よ？」

「……ん。おぅ……箒」

――――なっ！？　箒ちゃんと間違えるなんて……頭にきた！！

こうしてやる！！

「いっ、てぇっ！？」

ふんっ！　間違える方が悪いのよ。

「おい、ほ……夢織か」

「……箒ちゃんだと思ったの？」

声のトーンが落ちてしまったのは、彼の所為だ。

「……間違えた」

「許さない」

「……悪い、許してくれ」

「許して欲しかったら……」

目を閉じて、口を突き出す。

「……なんの積もりだ」
「お早うの挨拶。許して欲しいんでしょ？　だから……ん」
「……はぁ」
抱えた腕から脱力したのが解る。よし、これで……。
「ん～……「調子に乗るな」――――んぅ！？」
唇を抓まれた！？
「んぁん！　んぁんぁ！！（痛い！　痛いわ！！）」
「ならさっさと離せ」
ちょ、ちょっと。引っ張らないで！！
「今、頷いたな？」
貴方が頷かせたのよ！
「おら、足から離せ。離したら俺も離す」
わかった、わかったわよ！
「……よし、離すぞ」
「――――ぷはっ！　……鬼」

乙女の唇をなんだと思ってるのよ、全く……。

「なんとでも。腕も離せ」

……でも、そう言ってられるのも今のうちよ。

「よしよし、離した……な……」

今迄は密着していて気づかなかったのだろう。

彼の腕は私の寝間着。ロシアに発つ前に頂いた彼のシャツの中に突っ込んでいる。二の腕はブラの中で挟まれ、手は股の根元に当てがっている状態。

「……何して、やがる」

彼の顔が、赤く染まっていく。

「……抜かないの？」

私も、顔が熱く成ってくるのがわかる。彼の顔を見て、今更ながら……恥ずかしく成ってきた。

彼は視線を逸らしながら、腕を抜こうとするが、

「んぅ……」

直ぐに止まった。

動く指が、凄くくすぐったくて、声が出てしまった。身体が、凄く敏感に成ってる……。

「……ぬ、抜かないの？」

声が震えてしまった。

泊まったホテルが、そういった所だから……かもしれない。心臓が、激しく脈打っている。

「……お、お前が、したことだ。お前が、なんとかしろ」

「そ、それは、そうだけど……」

なんとかって……。ぬ、抜けばいいのよね？

「……？　な、何してんだ！？」

「な、何って……抜こうとしてるだけよ？」

彼の腕を抱き入れる時と同じ様に、シャツのボタンを外して、ブラを外してるだけで……って私何して！？

「もういい！　俺が抜く！！」

「あ、今動したら……！」

「ん？　……あ」

「……ばか」

「……すまん」

……見られた。嫌ではないのだけど……なんか、嫌。

「……神威君のえっち」

「……すまん」

そういったムード……とか無いのは、嫌。

◇◆◇◆◇◆◇

――――トーナメント決勝戦――――

＜はい、もうお馴染みとなりました黛　薫子です＞

＜同じく、光道音　麗よ＞

＜とうとうやってまいりました決勝戦！　神威様のご褒美券はどちらの手にっ！？＞

＜此処まで来たら言葉は不要、結果が全てよ。だってもう火花散らしてるもの＞

二人の視界には、もう戦いを始めている様に見えた。
「約束通り、勝ち残ったぞ」
「ちゃんと守ったよ」
約束を守り、勝ち上がってきたラウラと箒が。
「ふふん、やるじゃない」
「でも此処まで、ですわ」
同じく勝ち上がり、不敵に対峙する鈴とセシリアが。
既に定位置に着き、武装を展開していた。
＜ではでは、ＩＳファイト決勝戦……＞
＜レディィィ……＞
＜＜Ｇｏ！！＞＞
ブザーでは無くゴングが鳴り、
「「「「勝負！！」」」」
音と共に四人は爆ぜる様に飛び出した。
「行くよ鈴！」

箒は鈴へと真っ直ぐ飛ぶ。
「猪は一夏だけで十分よ！」
鈴は龍砲で迎え撃つが、ラウラのＡＩＣで止められる。
「一気に終わらせる！」
ラウラも箒に続き鈴に迫るが、四方からの光線が二人を阻む。
「頂きますわ！」
足を止めた二人を、ビットが狙う。ラウラはＡＩＣを駆使し箒の路を作ろうとするが、
「なんだと！？」
鈴がセンサーで感知したＡＩＣの展開位置に、左手を突っ込ませていた。
これは鈴とセシリアのＡＩＣ対策の一つ。ＡＩＣを展開させラウラの動きを封じるというもの。
ＡＩＣを展開させた時、ラウラは動けなく成り、必ず手を向けていた。そして、ＡＩＣは展開させた位置から動かせない。
因って今、ラウラはＡＩＣを展開させ、動けない。
「これで、動けないわね？」
「それは鈴も同じだ」

箒に向かうセシリアを尻目に、ラウラは鈴に言い返しレールカノンを向けるが、

「じゃあこれも、防げるかしら！？」

それよりも早く、龍砲が二門同時に火を噴いた。

ラウラはＡＩＣを展開し直そうとするが、鈴の左腕から発射されたモノがラウラの右手を弾き飛ばし、

「く、がぁ！？」

圧縮弾がラウラを吹き飛ばした。

これもＡＩＣ対策の一つ。

ラウラはＡＩＣを手を翳していた為、最大展開数は二つと読んだ。

その事から、攻める時は三手以上と決めていた。

「ラウラ！」

箒はビットを避け向かおうとするが、セシリア自身が路を塞ぐ。

「箒さん、お相手はわたくしでしてよ！」

セシリアの手には、スターライトｍｋ？では無くシレーヌが握られていた。

剣ならば、と箒はシレーヌを斬り落としに掛かる。

「……あれ？」

だが、斬った手応えが余りにも軽すぎた。シレーヌは斬り伏せた

辺りから、折れ曲がっていた。

「参りますわ」

セシリアが言うと同時に、刃は無数に裂けた。

「――――鞭！？」

鋼の鞭が箒を襲う。箒は避け、下がるが、

「逃がしませんわ！」

「え……きゃあ！？」

再度振るった光の鞭が、箒を叩き落とした。

シレーヌは、セイレーンの別名。

セイレーンが美しい姿から怪鳥へと姿を変えた様にシレーヌも姿を変える。サーベルから鞭へと。

シレーヌの実態は、サーベルでは無く鞭状の光学兵器。

「箒！」

「あんたの相手はあたしよ！」

鈴はワイヤーを引き、ラウラの意識を自分に向けさせた。

鈴の甲龍は、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンとの相性は最悪に近い。だが、ＡＩＣが無ければ相性は変わる。

「どっせーい！」

「う、おぉ！？」

甲龍はパワータイプである為、シュヴァルツェア・レーゲンを軽く振り回す。

そして今はタッグ戦。振り回されるラウラは、

「そこですわ！」

「ぐぅ！」

ビット、又は鞭の餌食と成る。

箒はラウラを助けようとセシリアに向かうが、

「余所見は危険よ！」

「うっ……」

龍砲が狙い撃ち、ビットが追い撃ちを掛ける。

鈴とセシリアの連携に隙は無く、箒は下がる事しか出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

観察室。

「一方的な展開に成りましたね……」

「そうだな」

真耶の呟きに千冬が同意した。

「もっと拮抗すると思ったんですけど……」

真耶は意外という顔をしていた。

「連携練度だけで考えれば……当然だがな」

千冬が言う通り、連携練度の差は大きい。

ラウラと箒が連携を取り始めたのは、トーナメントが開始してから。

対する鈴とセシリアは、タッグ戦が決まった時。そして、一夏の特訓、日常での付き合いから、息を合わせる事は、そう難しい事では無い。

「そうですねぇ……」

真耶も今迄の戦闘を思い出し、同意した。

ラウラと箒は、試す様に、確認する様に、戦っていた。

対する鈴とセシリアは、呼吸合わせの単純作業。

「一度負けたんだ……対策くらいは練るさ。それに、見る機会が有った」

負けからくる経験は、大きい。

鈴とセシリアはラウラに敗れたが、その実力を肌で感じ取る事が出来た。

そして、ＡＩＣを対処できた神威とシャルロットを見れた。

「そう言われれば、納得ですっ」

「まぁ……この先どうなるかは、分からんがな」

◇◆◇◆◇◆◇

「ちっ……」

ラウラは舌打つ。此処まで防戦一方に成るとは思って無かったからだ。

ＡＩＣは張れず、張ったところで意味は無く。レールカノンは照準が定まらない。ワイヤーブレードは、自身と繋がるワイヤーの伸縮により、狙いをずらされ叩き落される。

だが……此れまでだ！

ラウラは振り回されながら、慣性に従う様にワイヤーブレードを扇状に広げ伸ばす。

そして、伸びたワイヤーブレードのうち一本が、

≪箒！≫

≪待ってたよ！≫

避ける事に徹していた箒を、攫う様に捕まえた。

「何を……「鈴さん！！」……なっ！？」

いち早く、何をするのか気づいたセシリアが注意を促すが、

「「遅い！」」

箒を弾丸として、突っ込ませていた。以前、鈴がラウラにされた様に。

鈴は反応が遅れるが、双天牙月でなんとか受け止める事に成功する。

「あんた達、よくも……思い出させてくれたわね」

鈴は苦い表情で呟くが、

「鈴、動き止めたね？」

箒の言葉で凍りつく。

直ぐに我に返るが、ビットの射線を潜り抜けたラウラが迫っていた。

「まずっ……」

鈴は下がろうとするが、箒が食らい付く様に攻める。

辿り着いたラウラはプラズマブレードで突こうとする。

「これで――――何ぃ！？」

だが、鈴の腋下から飛んできた弾頭型ビットの頭を突く事に成り、爆炎に包まれた。

セシリアを抜く三人は、直後に起こった爆風に因り離された。

「鈴さん、ご無事ですの？」

「……あんたがソレ言うわけ？」

「すみません、他に思い浮かばなかったもので」

「……ま、いいか。助かったわ」

軽い遣り取りの後、鈴はワイヤーを張る為に巻き戻し始めた。

「でも、これで……！？」

だが、ワイヤーの先端部が無かった。ワイヤーの先端部は、

「「これで仕切り直しだ（よ）！」

爆煙が晴れ、姿を現したラウラの手に握られていた。

◇◆◇◆◇◆◇

ＩＳ学園へと並んで歩く神威と夢織。

「「……」」

二人は微かに頬が赤く、視線を合わそうとしない。

「な、なあ……」

「……な、何かしら？」

「……今日、トーナメントの決勝戦だよな？」

「え、ええ……そうよ」

会話をしようとするが、

「「……」」

直ぐに終わる。このような状態、どこか余所余所しい雰囲気が続いていた。
そして、ＩＳ学園の門を潜り、暫く歩いたところで、
＜さあ、神威様のご褒美を受けられるのはどちらのチームでしょうか！？＞
＜戦え！　己が信じるご褒美の為に！！＞
決して聞き逃せない『単語』と『声』が聞こえた。
「……なあ」
「……何かしら？」
「アレ、完全に潰した……筈だよな？」
「ええ、完全に潰した……筈よ」
先程までの、余所余所しい雰囲気は完全に吹き飛び、
「確か、第三アリーナだったな」
「高確率で、中継室に居るわね」
二人は真剣な顔で視線を合わせ、頷いた後、
「「間に合え！！」」

全力で駆け出した。

◇◆◇◆◇◆◇

戦いは、拮抗していた。

ラウラはワイヤーブレードで箒を自身と結び、鈴はワイヤーでセシリアを自身と結ぶ。

セシリアはビットで狙い撃ち、ラウラは残ったワイヤーブレードで狙い突く。

箒は自らを弾丸にさせ飛び向かい、鈴は龍砲で応戦する。

ラウラはレールカノンで援護し、セシリアはスターライトｍｋ？で阻む。

ラウラも鈴も自身を軸に、結んだ者を軸に、避け、避けさせ、止まらない、止まらせない。

「くっ……」

だが拮抗は、ビットのエネルギーが切れた事に因り、崩壊する。

ラウラと箒はその瞬間を狙い、

「ラウラ！」

「信じるぞ！」

その瞬間加速でセシリアに向かう。だがセシリアは、

「させませんわ！」

「ぐぅっ！」

シレーヌを振り、ラウラを打ち衝ける。瞬間加速で突っ込んだラウラは慣性に従い、其の儘セシリアに向かうが、避けられた。

セシリアは笑みを浮かべ、

「終わりですわ――――」

アリーナの防壁まで弾け飛んだ。

「セシリア！！」

鈴はセシリアを呼ぶが、返事は無かった。

ラウラは、瞬間加速中にワイヤーブレードを、高速で巻き戻していた。そして、脅威的な加速を得た箒が、セシリア衝き飛ばした。

「ラウラ、大丈夫？」

「……大丈夫だ。箒は……無理をするな」

「私も、大丈夫だよ」

「駄目だ。下がっていろ」

ラウラは箒の言葉を頑として受け入れなかった。

箒が提案した連携は成功すれば見返りは大きい反面、ダメージも大きかった。特に箒へのダメージが。攻撃を受けたラウラはシールドが機能するが、接近ブレードを向けていた箒にはシールドが機能しない。

「後は私に任せろ。いいな？」

「……うん」

箒は自分の状態が戦力にならないと気づいた為、頷いた。

沈みがちな箒にラウラは暫し悩んだ後、

「……箒、それを借せ」

箒の持つものを指さし、言った。

「え……！　――――うん！！」

箒はラウラの意図が解り、渡した後、直ぐに下がった。

そして、ラウラの意図を理解したのは箒だけでは無かった。

「……もういい？」

「ああ、待たせた」

鈴の問いの後に、構えを取る。

「あんた、確実を捨てるなんて……馬鹿だわ」

ラウラの構えは抜刀、自身を斬った神威の構えに似ていた。

「……そうだな。だが付き合うお前も……相当なものだ」

鈴の構えは上段、自身が想う一夏の構えに似ていた。

「知ってるわよ自分の事くらい……如何しようも無い事くらい」

「……そうか」

小さく笑い合った後、

「「はあぁぁぁ！！」」

一瞬の交差。

「……負け、か」

敗者は空を仰ぎ、

「……」

勝者は顔を背けた。

「……すまんな」

「なんで謝るのよ。勝ったんだから胸張んなさいよ、馬鹿」

「……ああ」

勝敗が決まった事が解った者は、拍手を、歓声を上げ始めた。

＜試合終了です！　素晴らしい……素晴らしい戦いでした！　では副会長、賛辞を……あら？＞

薫子は興奮気味に言うが、麗が居ない事に気が付いた。

＜……あ、戻って……嘘！？　み、皆さん！　此方に、中継室に！！＞

先程より興奮した様子で言う薫子に、観客達は視線を向け始める。

＜彼が……お兄ちゃんが帰ってきたわ！！＞

続く麗の言葉に、アリーナに居る全員が視線を向けた。

＜……今、戻った＞

そして、姿が見えた事で、

――――――――――――――――――――キャアアア

箒は痛む体を無視して喜び、鈴は思いっきり手を振り、セシリアは騒音で飛び起き、ラウラは凝視した。

＜ところで、褒美の話だが……＞

そして、続く言葉に、箒とラウラのボルテージは上がって行く。

＜それは……＞

神威は少し間を開けてから、

＜――――俺に勝ってからだ！！＞

条件を突き付けた。

◇◆◇◆◇◆◇

現れた頂は帰還者、待ち望んでいた者だった。

今一度、示す為に、只の己を刻む為に、共に向かい往く。

迎え撃つは望む者。そして隣に、阻む者の姿も在った。

呪は月を擁いて　第四十話

『もう、負ける気がしない！！』

第三十九話　『……今、戻った』（後書き）

ラウラと箒はラスボスを倒し優勝しました。だが……隠しボスが現れた！
てなわけで、もう一戦だけお付き合い下さい。

神威と夢織は……どうしてこうなった？
まぁ、夢織はこのところ良いとこ無しだったからいい……かな？

第四十話　『もう、負ける気がしない！！』（前書き）

漸くトーナメントのラストです。

１／７　ちょい加筆しました。

第四十話　『もう、負ける気がしない！！』

「はぁ……」

思わず溜め息が出た。あの後、なんと言うか……大変だった。

俺と夢織は、結局間に合わなかった……と言うか、あのお祭り女が染め上げていたから、間に合う筈が無かった。

そして、整備と体調とで一日開けられた。あの後直ぐなら楽だっただろうに……畜生め。

更にその日の夜、一夏達が押し寄せてきた。

一夏はミッションが完遂しただの言い。箒は婚前がどうのこうのと危険な事を言い。鈴は装備を壊してご免など少し落ち込みながら言い。セシリアは鉢が花瓶だの訳解らん事を言い。シャルル……ではなくシャルロッド、だったか？　は何時の間にかお兄ちゃんと呼ぶように成って正体をばらして染まっていて。その中にラウラ・ボーデヴィッヒが混ざっていて、別人の様に成っていた事に、片眉を上げた。

だが、俺は精神的に酷く疲れたので、酷く面倒臭く成って、全員を追い返した。

愚弟（一夏）には、何かやらかしていた事が解ったのでアイアンクローで吊るし上げ。天然（箒）には、体調を考慮し丁重にハウスさせ。鈴には、

装備を直す事を約束して慰めて。金髪（セシリア）ドリルには、持っていた辞書を全て貸して。シャル……ゴッド？　には、何か言いたそうな銀髪（ど）眼帯（チビ）に終わってからと言い包めさせ、全員を追い払った。

「ふぅ……」

＜……何か、憂鬱そうですね＞

憂鬱ではない、嫌なんだ。だからもう少し現実逃避させろ黛。

＜彼は、彼女達の想いを砕いてしまう事を言った。
そして自分が勝った時、彼女達が潰れないか……その懸念を捨てきれないのよ＞

黙れ原因。息するな。

＜な、なんと……なんという優しさ！＞

信じるな新聞部。

＜そして、自ら障害と成ることで……斬る事の辛さ、路の険しさ、想いの大切さ、それら全てを教え込もうとしているのよ＞

もうホント黙れ根源。妄想に溺れて爆死しろ。

＜なんて……なんて深い愛情！！　私、涙が……＞

だから信じるな。新聞部なら真実を見極めろ。

「兄さん……」

「これが、愛情……」

目の前に居る二人もだ。

特に眼帯、お前に何があった。何故染まっている。本当に別人……と言うか、お前は誰だ。

「はぁ……」

開始まで、こんな視線に晒され続けなければならないのか？

◇◆◇◆◇◆◇

「はぁ……」

私は溜め息を吐きながら、マイクの出力を切った。

「涙で……メモが見えないよ……」

「……眼鏡を取って拭けば？」

切った理由は言いたい事を言う為。

「……それで、どの様に遂行したのかしら？」

私はＩＳ学園を去る時、根回しはしていた。何かしたら、即座に鎮圧出来る様に。

「答えは簡単よ。教師が納得したのよ」

……教師が納得？　何故？　どうやって？

「同じ教師の榊原先生が頑張って説得したわ」

「……何をしたのよ」

「私はお見合い相手を紹介しただけよ？」

「……お見合い相手？」

榊原（さかきばら）　菜月（なつき）……生徒に優しく品行方正で容姿も悪くない。ただ男運が悪いと聞く。だから、相手は……。

「そうよ。お兄ちゃん支援友好の会の会長を紹介したのよ」

――――最悪よ！！　絶対に紹介しちゃ駄目な人じゃない！！

「二人の仲は良いようだから……紹介した私も嬉しいわね」

「頭痛いわ……」

間違い無く、染められた。根強く重度に感染した。

教師はまだ真面(まとも)だったのに……この学園は如何なるのよ。

「私がした口添えは……やる気があった方が生徒は良い結果が残せる。男性操縦者の良いデータも取れる。それぐらいね」

「……なんでそこが真面なのよ」

本当に……頭痛い。

「ふふ……ところで会長？」

「……何かしら副会長？」

何か……企んでるわね。

「昨日帰ってきた時、二人一緒だったわね？」

「……それが何？」

「ずっと……お楽しみだったのかしら？」

――――な！？　何を言って……！？

「今回は婚前旅行だったのかしら？」

「ち、違……」

「え！？　たっちゃんと神威様はそういう仲なの！？」

ちょっと！　貴方は泣いてたんじゃないの！？

「これはスクープ！　総帥と秘書は肉「次の新聞部の予算は０がいい？」――誰にも秘めときたい事は有るよね！」

「ふふ。彼のパートナーが来たから……此処までね」

はぁ、全く……。

「お嬢様」

「……何？　虚ちゃん」

「お赤飯を炊きましょうか？」

貴方も敵なの！？

◇◆◇◆◇◆◇

「お待たせ！」

「やっと来たか」

これは二対二のタッグ戦。神威がパートナーに選んだのは、

「準備はいいか？」

「勿論だ、神威兄！」

自分の弟分、一夏だった。

＜それでは！　真の最終戦……＞

≪一夏……≫

≪箒……≫

＜開始の合図は……会長？＞

≪おう、わかった！≫

≪うん、わかったよ！≫

＜……試合開始＞

夢織が言うと同時に、ゴングが鳴り、四人同時に跳んだ。

「箒ぃ！」

「一夏ぁ！」

パートナーの意図を理解した一夏と箒は、お互いに邪魔をさせまいと、打ち合い始める。

「漆月　神威。貴方の相手は私だ！」

ラウラは神威へと向かい、プラズマブレードを振るう。

神威は童子切を逆手に持ち、一合、二合と、何時かのやき回しの様に打ち合う。

そして、神威の手をＡＩＣで止め、ラウラを押し退けようと現れた割切を、またＡＩＣで止めた。

ラウラはその状態で、次の攻め手を待った。

「……次は、如何するのだ？」

神威と視線を合わせ、答えを待った。

だが返答は、今望んだものでは無く、不意打ちに近いもので、身体を一度だけ大きく震わせる事に成った。

「……お前、変わったな」

神威が一夏と組んだのは、ラウラの判断材料を増やす為。憎悪の対象を並べ、どの様な反応、視線を向けるのかで見極めようとした。

だが、結果は先の呟きの通り。向かってくる姿勢自体は同じだが、中身は別物。目の奥にも、憎悪が欠片も無かった。

自分の呟きに、真直に答え様としているラウラを見て、率直にそう思った。

「あ、貴方の……」

今ラウラに渦巻くものは、歓喜。その感情を抑えられず、頬が緩む。

だが、なんと言えばいいのか、どう返せば良いのか判らず、出た

言葉は、

「……拳骨のお蔭だ」

一つの切っ掛け、それだけだった。

神威は少し目を細め、再開を促す。

「続きは、終わってからだ」

今は言うべき『場所』では無い、と。

ラウラは頷き、だが一つだけ宣言した。

「もう、負ける気がしない！！」

もう溺れない、もう踏み外さない、と。

神威はそれを聞きながら北叟笑み、

「――パンツァーファウスト！？」

割切の影から投擲型のグレネーダーを投げ付け、轟音が響き渡らせた。

「ラウラ！」

箒は爆炎に？まれたラウラに向かおうとするが、

「悪いが通行止めだ！」

路を一夏に塞がれた。

神威は二人を尻目に、下がるラウラを追う。割切の口を開き、砲

口から出る光線で。
ラウラは、縦に広がる光線を、半身を逸らして躱した。そして、砲撃戦では分が悪いと、瞬間加速で距離を詰めようとして、

「――ちぃっ！」

直ぐさま真上へと跳んだ。光線を途切れさせずビームブレード状の大剣にし、横へ薙いだからだ。
だが、神威の狙いはラウラでは無く、

≪伏せろ一夏！≫

その先に居る箒だった。一夏は直ぐに行動に移せたが、箒は僅かに遅れ、シールドエネルギーを犠牲にしながら逃れた。

「此れ以上は！」

ラウラはレールカノンを撃ちながら、ワイヤーブレードで上下から神威を襲う。
神威は割切を閉じ砲撃を受け、前へ出る事でワイヤーブレードを躱し、その儘ラウラへと向かうが、ＡＩＣで止められる。
ラウラは後ろからワイヤーブレードで突こうとするが、神威は割切を離し、

「――下か！」

ラウラの真下へと抜け、二連装のライフルを向ける。
ラウラはワイヤーブレードで割切と自信を結び、その影へ跳ぶ事で射撃を避ける。だが、割切のスラスター点火した為、直ぐに結びを解いた。

神威は割切を持ち直し、今度は割切だけをラウラへと飛ばした。ラウラは軽く避けるが、

「――避けろ箒！」

狙いが自分では無い事に気づき、箒に呼び掛けた。

一夏と切り結んでいた箒は、距離が有ったお蔭で余裕をもって避ける事が出来たが、神威の狙いは箒委では無かった。

「受け取ったぜ神威兄！」

一夏に割切を持たせる事、それが狙いだった。

一夏の白式は雪片弐型しか無い為、突っ込んで行くしかダメージを与える事が出来ない。その際に攻撃を受ければ、シールドエネルギーを削られ、零落白夜の使用に支障をきたす。

だが、盾が有れば、話は変わる。避ける動作を減らせ、真っ直ぐ打ち込んでも盾で防げる。何より、シールドエネルギーの損失を防げる。

≪その儘盾として使え≫

一夏は神威の言い付け通りに盾を構え、箒に突っ込んで行った。

箒は躱すことが出来ず、刀身を盾にして受けた。剣だけ成らば、点と線でしかないので捌く事が出来る。だが、面と成れば、捌く事は難しい。

「おおぉ！」

一夏は動けない箒を斬りつける。箒は離れる事で遣り過ごすが、

直ぐに距離を潰される。
二人の戦いの流れは、一気に一夏へと傾いた。
「だが、貴方は盾を失った！」
ラウラはこれを機と思い、ワイヤーブレードで逃げ道を塞ぎながら、レールカノンで狙い撃つ。
放った砲弾は神威に届くが、
「……残念だったな」
左手に有る、割切より遥かに小さい盾に因って、防がれた。
そして、その盾はライフルへと姿を変え、ラウラを撃ち始める。
右手に持つ、銃口が二つ付いたライフルと共に。
「くっ、厄介な……」
神威はラウラの避ける先を潰しながら、追い詰める。
時にロックを外し、時にマシンガンモードにし、月の初めに見た真耶の戦法を駆使して、狙い撃つ。
迫るワイヤーブレードを足裏に展開した三日月で蹴り裂きながら、放たれる砲弾を盾で防ぎながら、着々と追い詰める。
ラウラは一人では勝てないと見切りを付け、被弾しつつも瞬間加速で箒へと跳び、ワイヤーブレードで攫う。
「逃がすか！」
一夏は箒を追うがＡＩＣに捕まり、

「貰ったよ！」

逆に斬撃を浴びた。

箒は更に打ち込もうとしたが、ラウラに引かれ、離された。その後直ぐに、箒の目の前を三日月が通過した。

ラウラは箒を引きながら下がり、距離を取った。

神威は手に持つ武装を収納し、一夏から割切を受け取り、問い掛ける。

「一夏、俺を信じられるか？」

「おう。疑えって方が無理だ」

自信満々で頷く一夏に神威は、

≪ボーデヴィッヒに零落白夜を使い、全速力で斬り込め≫

特攻をしろと言った。

一夏は言われた通りに零落白夜を発動し、迷わず瞬間加速で突っ込んだ。だが、

「動きは……」

「見えてるよ！」

ＡＩＣで捕らわれた。ラウラと箒は一夏を仕留めようと迫る。

対する一夏は、硬直した。迫る二人が理由では無い。神威の持つ割切からのロックアラートが、自分を指していたからだ。そして、

「おおぅ！？」

一夏を挟む様に光線が通過し、一夏の目の前が爆ぜた。

＜試合終了。勝者……漆月、織斑ペア＞

アナウンスが流れた後、一夏は落ちる二人を尻目に、恐る恐る振り返り、

「……神威兄、信じろって……」

神威が口端を吊り上げている姿を視界に入れたところで、又もや硬直した。

神威は取った戦法は、一夏を餌にし一網打尽で仕留めるという極単純な事。

そして一夏をロックし、割切中央の砲口だけ放射せず、他を最大出力で一夏を避ける様に撃った。

「信じて良かっただろ？」

いけしゃあしゃあと言う神威に一夏は、

「お、おぅ……」

なんとか肯定出来たが、頷く事は出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「全試合終了です！　やはり……最後の山は高かった！」

「落ち込むな、挑戦者よ！　諸君の想いはきっと届いたであろう！」

試合は終わり、隣で何か言っているが気にならない。と言うか、これからの事を考えたら……気など回せる訳がない。

今迄、教師達は始末書を書け等と言ってきた。分類すれば、教師は私と同じ止める側だったという事。

しかし、一人、染まった……堕ちてしまった。詰まり、荒らす側になった……という事。特に私の平穏や自由な時間を。

不味い……非常に不味い！

こんな事で胃を壊し、薬常備なんてしたく無い。白髪だって生やしたく無い。

もう取れる手段は……一つ、よね……？

騒動を収められる人が、直ぐ傍に居れば良い。そうすれば私の苦労も減し、共に居られる時間が増える。

「お嬢様、お赤飯はどう為さいますか？」

「好きにしてちょうだい」

今はそれどころじゃ無い。ある意味、私の死活問題なのだ。

「畏まりました」

如何にして引き込もうかしら……？

◇◆◇◆◇◆◇

戦いは終わったが、敗れた者は、想いを諦め切れず、募り出る。

その想いは、囚われながらも、果たす事に成功する。

そして、勝者は約束を果たそうとして、邂逅した。

呪は月を擁いて　第四十一話

『……甘い』

第四十話　『もう、負ける気がしない！！』（後書き）

パンツァーファウスト：対戦車擲弾。簡単に言うと対戦車用のグレネードの事。

はい、アッサリとケリが付きました。
これで暫く戦闘は無いぞー！
そして教師がとうとう感染され始めましたw

次回、ラウラが中々どうして良い具合に……w

第四十一話　『……甘い』（前書き）

今回は何気に難産でした……。

第四十一話　『……甘い』

試合後の狂乱は疾うに去り、狂喜に満ちた宴も終わった。

「此れが……全てだ」

今は、俺の寮室で目の前に座る、ラウラ・ボーデヴィッヒの懺悔を聞き終わったところだ。

「……成る程な」

千冬姐さんに憧れ、力に溺れた。其れは、彼奴(あいつ)を思い出させる。夢織に焦がれ、力を求めた……もうこの世に居ない彼奴を。

彼奴も、最初は其処まで酷くは無かったが、時が経つに連れ、歪んでいった。主な原因は俺なのだが……。

しかし、裏に属する者として、使い物に成るかと聞かれれば、答えは当然、使えない。何時矛先を俺に、漆月に向けるのか判らない。何時暴走するかも判らない。彼奴は、そう視られる様に成っていった。

そして、最後に対峙した時が彼奴の、判断時だった。残すか、消すかの、最後の見極めだった。その見極めに使った相手は俺。原因の一つが俺だったのだから当然と言えば当然だ。その後、烙印を押された後に処分する者も、俺だった。責任取ってやれ、と言う事だろう。俺は、後で精神的に楽がしたいが為に、夢織を呼び、徹底的に精神も身体と共に彼奴を嬲った。まぁ、後を実行する事は無かっ

たのだが。

「すまなかった……」

もしも、彼奴の存在が無かったら……俺も力に溺れていたのだろうか？　頭を下げる此奴を見て、そんな考えが浮かんだ。

「……左目を見せてくれ」

だが今は、此奴に訊かなければならない事が有る。

「左目を？」

「ああ。眼帯を取って此方に来てくれ」

「構わないが……」

近くに来た、晒された金の瞳を覗き込む。

「な、何を「動くな」……むぅ」

この瞳、ヴォーダン・オージェは疑似ハイパーセンサー、ＩＳの為のモノ。本来ならばヴォーダン・オージェの処置をした者は、自在に稼働をオンとオフの切り替えが出来る筈だ。だが此奴は常に稼働状態。其れは、スイッチの主導権を取られた、という事に成る。

そして、此奴のＩＳに積まれていたヴァルキリー・トレース・システムを改造したモノ、ヴァルキュリア・コントロール・システム。外部からＩＳ操縦者を、モンド・グロッソの部門（ヴァルキリー）受賞者の動きを得た上で、意のままに操ろうとするモノ。

此奴がヴァルキュリユル・プロジェクト、その実験体に選ばれた

理由は左の瞳の――――媒介だ。
システムが発動すれば、全身を包まれ直接に眼で見る事は出来ない。ハイパーセンサー越しに見るしかない。そのハイパーセンサーは此奴自身も持っている。脳に繋がり制御出来ないという、奴等に取って都合の良いモノを持っている。だから、だろう。

「左目に妙な違和感等を感じた事は有るか？」

奴等は、此奴の素性を知っていた為、問題を起こしシステムを高確率で発動させると読んでいた、のだろう。だが、発動したＩＳは万遍無く調べられ、実験データが手に入らない。因って、奴等が欲しいのは……。

「い、いや。特に無いが……」

――――ラウラ・ボーデヴィッヒ自身と、此奴が持つ左目。

「ＶＴシステムに？まれた時もか？」

「あの時は……判らない。余裕など無かった」

ＩＳ学園が出来る身体検査には、限界が有る。目玉の隅々まで調べる事なんて出来ない。だから、仕込むのならば、左目だと思うが……、

「……そうか」

私的な理由で調べる事など出来ない。第一、目玉を調べる許可など出る訳が無い。

「……漆月　神威」

「なんだ？」

「……何故、私の左目を気にするのだ」

「……気になるからな、戦った身としては」

「何故気になるのだ」

「それは「先に離れない？」……そうだな」

言葉を発する毎に、此方に迫るボーデヴィッヒの肩を押して離し、ベッドの方を見ると、

「……」

『近過ぎ』と扇子に映し、不愉快そうな顔をし、足を組み座る夢織が居た。

夢織は「会長として私も聞くわ」と言い、最初から居た……のだが、俺も忘れたいた。

「……まぁ、俺も遣り過ぎたと思ってな」

ボーデヴィッヒに視線を戻し、そう言った。

此奴が事件を起こしてくれたお蔭で、色々と分かった事が多い。

此の事に関しては、礼を言いたいくらいだ。

「……許して、くれるのか？」

この問いには、頷いておいた方が良いだろう。ある程度、手の届く範囲に置いておいた方が、俺達に取って都合が良い事―に成る。それに『貸し』が在る。もし、使う時が有るのなら、隊長のボーデヴィッヒを通した方がスムーズに事が進む、だろう。それに……、

――――頼んだぞ？

千冬姉さんの顔を立てる事にも成るだろう。

「……ああ、もう済んだ事だからな」

そんな事を思いながら言うと、

「ありがとうございます！　兄上！！」

そう、のたまった。完璧な敬礼付きで。

お蔭で俺は、完璧に不意を突かれ、頭が旨く回らない。困惑しながら視線をベッドの方に向ける。が、

「……」

どうやら『手遅れ』らしい。そう扇子に映していた。悲痛な顔で……。

だが、訊かねば……訊いておかねばならんだろう。

「……何故、兄上？」

「シャルロットの呼び名候補の中から抜粋しました」

……シャル、ロット？　ああ、シャルルの本名か。なんだ、此奴は役に立つじゃないか……って、違う。俺が訊きたい事はそんな事じゃ無い。

「……何故、兄上と呼ぶ？」

「一夏、箒、鈴が許しが有れば呼称しても良い、と。セシリアも同意する様に、謝罪の後に呼称を許された、と。以上の事により、呼称しても問題無いと判断しました」

……一夏と箒は知らんが、鈴には好きに呼べ……と言った気がする。セシリアの時は……如何でもよく成っていた……って、違う。俺が訊きたい事はそれでも無い。

「……何故、兄上と呼ぶ気に成った？」

「その事に付いてですが……先ず謝罪を。我が軍で兄上の素性を調べさせて頂きました。兄上が過去に……」

……俺の素性。詰まり、漆月の……。

「――総帥と呼ばれていた事を」

――って、ソレかっ！？

「幼き身で上に立ち、驕る事が一切無く、悲しみだけを消した。これは、力を持つ者に取って……ある種、理想像とも言えるでしょう」

……何故、そうなる？　そう思いながらベッドの方を見ると……、

「……」

『カウントダウン』だと。諦めた顔してやがる……。諦めたら試合終了だぞ？

「私は言葉で戦い続けた兄上の心境……強さを知りたかったのですが……」

……そんなモン、慣れと諦めだ。その境地に至れば良いだけだ。諦めて試合終了したほうが良い事も在るんだ……。

「戦死された、と誤報を信じ……」

昨日セシリアが言っていた事か？　だが、何故……戦死？

「私は……兄上の為に活けられた花々を、鉢を壊して……しまいました……」

いや、よくやった。そこは誇れ、喜べ、もっとやれ。もっと徹底的にやってしまえ。

「しかし兄上は、そんな愚かな私を許して下された」

……若しかして最初の謝罪は、如何でもいいソレも含まれていたのか？

「此れが兄上と呼称する理由……」

……それが理由か。わかった。もう好きに……。

「――の一つです」

――まだ有んのか！？　もう腹いっぱいだぞ！！

「もう一つのは、私がＩＳ学園に所在している事が理由と成ります」

……何故？

「私はドイツ軍所属ですが、今はＩＳ学園に在中しています。因って、ＩＳ学園と日本国の法令に従わねばなりません。そして、日本国の言葉に『郷に入っては郷に従え』と有ります。私はその言葉に従い……」

……なんか、もう読めた。

「――兄上と呼称する事を決意しました」

――そんな事だろうと思ったよ畜生！！

「……ドイツ軍は呼ぶ事を許すの？」

――！！　そうだ、それが有った。流石だ夢織。流石は同じ苦しみを味わった仲！　流石だ相棒！！

「……何故貴様が「気にすんな。俺も気に成っていた事だ」……解りました」

「で、どうなんだ？」

「はい。私も懸念を抱き、クラリッサ……部下を通し報告したところ、許可が出るどころか……」

まぁ、流石に軍が許可出す訳が無い……。

「――『寧ろ呼べ』と後押しされました。心配無用です」

――どころじゃねぇ！！　それで良いのかドイツ軍！？　別の意味で心配だ！！　『貸し』作って良かったのか！？　これも心配に成ってきたぞ！？　おい、相棒……。

「……」

『試合終了』かぁ……。だよなぁ……。

「兄上」

「……なんだ？」

「軍から警護の申し出が有りますが……如何でしょうか」

「……警護？」

何故ドイツ軍が俺を警護？　……ああ、そういう事か。パイプが欲しいのか。と、考え事する俺を置いてボーデヴィッヒは、

「許可を頂ければ直ぐにでも始めます。直ぐにでも……其処の女を阻む盾と成りましょう」

そう言いながらボーデヴィッヒは顔を夢織に向け、眼光を鋭くし

た。

「待て、楯無は俺と旧知の仲「知っています」……だったら何故睨む」

知っているのなら、睨む理由は無い筈だ。睨まれる夢織も俺と同じ、不可解な顔をしている。

「其処の女は今、ロシアの者です」

……だから、何故？

「共に居た兄上の下を、日本国を去り……他国へ属した。警戒が必要です」

……成る程、そんな見解が有るのか。

「待て、ボーデヴィッヒ」

だが、それは不味い。俺達に取って旨くない。そう思い、頭の螺子を締め直しながら問い掛ける。

「お前は、何処まで知っているんだ？」

恐らく此奴が知る内容が、ドイツ軍が知る内容の筈。対応は……内容次第だ。

「……更織　楯無。日本国の良家に生まれ、二人姉妹。幼少の頃より武を嗜む。兄上との出会いは十。以後、行動を共にする事が多く、稀に兄上と姿を消す事が有る。ロシアに発ちは十四、一年で代表ま

で昇り上がり、帰国。その後、ＩＳ学園に入学。……以上です」

概ね偽造通り……だが、全部を言った訳では無い、だろう。

「……俺の事は？」

「……漆月　神威。日本国の一般家庭生まれ。篠ノ之、織斑との交流は五で始まる。織斑姉弟との……同居が六。七で……両親死別。更織　楯無との出会いは十一。以後、行動を共にする事が多く……不透明な部分が見え始める。十七、篠ノ之博士に因り、ＩＳを所有し、操縦出来る事が発覚……」

「……」

「……備考。更織　楯無と『何かしら』の繋がりが有る模様。篠ノ之博士とは……深い繋がりが有る模様。……以上です」

「……成る程」

俺は隠す所だけ隠しているから……こんなものだろう。だが、これならば……通信？　発信源は……夢織か。

≪……如何するの？≫

≪不透明を……適切に埋める≫

夢織の質問に、簡素に答える。騙す、と。

≪そう……じゃあ、お願いね？≫

≪ああ。何か抜けてたらフォローを頼む≫

≪解ったわ≫

夢織との交信を終え、

「……ボーデヴィッヒ」

探りながら、始める。

「はい、なんでしょうか？　兄上」

「お前自身は……」

此奴の警護を突っ撥ねただけでは、壁が残る。単に距離を置けば、痼りが広がる可能性が在る……一夏達に。因って、

「……不透明な部分を如何に解釈する？」

抜けている穴を、都合良く埋める。

「……私見、ですか？」

「ああ」

「了解しました。恐らく、日本国の……――裏側に属している。そう思います」

「……何故、そう思う？」

「先日、一夏に確認した事ですが……一夏が誘拐された時、兄上は長刀を持って助けに来た。持っていた長刀は見た事の無い柄と鞘だった。……更織　楯無も助けに来た。そう言っていました。
兄上の出は一般家庭と有りますが、一般家庭の出では長刀所有が、何より対応が出来ません。その対応……救助も我が軍の情報を得た教官と粗同じ時。一般人では絶対に出来ません……在りえません」

……意外も意外。かなり的確に衝いてくる。

「以上が私見に成ります。其処の女も同じでしょうが……離れた理由が不明です。警戒が必要でしょう」

だが、届いていない。因って……、

「――警戒は不要だ」

――騙せる。

「楯無のロシア発ちは俺が言いだした事だ」

「……兄上が？」

「ああ。外で専用機持ちに成れ、と言ったからな」

「……何故、ですか？」

「国内で代表に成れば……表に出てしまう。それでは俺が困る」

「……」

「俺が困れば当然……」

恐らく、此れで行ける筈。

「――篠ノ之　束も困る」

実際、束姉さんは全く関係無い、蚊帳の外だ。だが今の此奴ならば……、

「な……！？」

――釣れた、予想通りに。

「まぁ、結局俺は表に出てしまったんだが……」

「で、では……更織　楯無は……」

そして、少しだけ真実を混ぜる。

「いや、繋がりは無い。繋がっているのは俺だけだ。楯無が共に姿を消した理由は俺の代わりをしてもらっていただけだ。ＩＳ操縦者として表に出れないからな。だから……国外で代表に成ってもらった。ロシアで代表に成れたのも……俺を通して教わったからだ」

と言っても、発つ前のＩＳ講義だけだが。

夢織はロシア発ちが決まり、其れ迄の間、千冬姉さんと束姉さんにも教わっている為、普通では知り得ない部分も知っている

「……本当、なのか？」

ボーデヴィヒは夢織に確認するように問い、

「……ええ、本当よ」

対する夢織は俺の思惑を理解したらしく、苦笑しながら頷いた。

「此の事は……軍に報告するのか？」

そして、この問いには……、

「……いえ、しません」

今は、無理だろう。

此奴は申し出辺りから、ドイツを背負っていた。ドイツの狙いは俺と、束姉さん。

所有データを口に出したのは、友好の証し。護衛は……俺に取り入り、束姉さんとのパイプ役にしたいのだろう。だが、今の段階で俺の機嫌を損ねれば、

「……此の事は、私の胸に留めておきます」

破局、に成るだろう……色々と。それに、メリットが無いからな、お互いに。

「今は黙っていてくれると、此方も助かる」

俺がした事は、情報の塗り替え。漆月と更識を隠し、代わりに置いたものは、ドイツが欲しいもの。ただ、俺の存在が重要と思わせて。

だが、此奴は伝える事が出来ないだろう。伝えればアウト、篠ノ

之束さんに因って暴かれる。とでも思っているだろう。

「はい、理解しました」

恐らく此奴は、先程のニュアンスで、一夏を助けに行けたのは篠ノ之　束の手引き。と思っているだろう。

不安は残るが、概ね旨く行った。

秘密の共有で近場に置き、渡す情報の危うさで切り離す。これで俺達は此奴を『個』として使え、ドイツは俺に近づけた。これで俺は、旨味を増すだろう……餌として。まぁ、暫くは待ちなんだがな。

「じゃあ……私の事も理解してくれたかしら？」

終わりを見計らって、夢織は口を出し始めた。

「……ああ、邪見してすまなかった」

「でも、抜けてる部分が有るから補足するわ」

抜けてる部分……何処だ？　何が抜けているんだ？

「……それはなんだ？」

「私と神威君の関係よ」

……俺と夢織の関係？　此奴は勝手に俺の代役と解釈すると思うが……。

「兄上との関係……？　どの様な関係なのだ？」

「――婚約者よ」

――は？　夢織は何を考えて……。

「何っ！？　そうなのか！？」

驚愕するボーデヴィッヒと同じ気持ちだ。俺は夢織が何を考えているか知る為に、即座に夢織と交信をする。

≪いや、待て。一寸待て。何を考えている！？≫

≪あら、本当の事じゃない。私（更織）と貴方（漆月）では≫

≪いや、そうだが……ソレとコレと何が関係している！？≫

≪此の子が私の言う事を聞く様にしておくだけよ。私の言葉は神威君の言葉、そう思わせておいた方が後々の事を考えれば良いと思うわ≫

≪……そうなんだが≫

≪私達が結び付いている事にしておけば、疑う事は少ないと思うけど？≫

……一理ある、と思う。が、何か違和感がする……？

≪念には念よ。だからちゃんと同意してね？≫

≪……取り敢えず、解った≫

……何か、不味い気がするが……。

「あ、兄上！　本当ですか！？」

「そうよ、本当よ。……ね？」

「……まぁ、な」

二種の視線に取り敢えず頷くが、何か釈然としない。……なんだ？

「そうだったのか……」

「でも、この事は公にしていないから……秘密よ？」

「……了解した」

……矢張り、何か在る。ボーデヴィッヒから見えない角度で拳を握る夢織を見て、確信した。絶対に何か企んでいると。これは……問い詰めねばなるまい。

そう思い、夢織に向き直る。が、

「おい「兄さん、終わった？」……箒か。まだ終わ「終わったわよー！」……糞」

出来ず仕舞いだった。

夢織が返事をして直ぐ、箒を先頭に愉快な仲間達が入ってきた。

「ラウラ、どうだった？」

「ああ、許して貰えた」
その儘、一直線にボーデヴィッヒへ向かい、囲んで行った。
「だから言ったじゃない。大丈夫だって」
「鈴の言うとおりだったな」
「何事も誠意を持って話せば解り合えるものですわ」
「……最初は俺達に突っ掛かって来なかったか？」
「うん、そうだったね」
「ちゃんとわたくしも謝罪しましたわ！」
「あはは……。ラウラ、良かったね」
「ああ、ありがとうシャルロット」
目の前で騒ぐ様子を見て、気が削がれた。
「……まぁ、後でいいか」
そう呟き、席を立つ。
「……大哥？　何処行くの？」
「直すって約束しただろ？」

「……あ、うん！」

ただ、出る前に、

「お前等、あまり騒ぐなよ？」

忠告だけはしておく。

「「「「はーい！」」」」

「「わかりました（わ）！」」

「いってらっしゃ～い」

「おう」

◇◆◇◆◇◆◇

今、俺が向かっているのは整備室。だが、整備科の連中は誰も居ないだろう。連中は今日の試合後の……狂喜の為に、不眠不休で準備していたらしい。

試合後の事は……もう、忘れたい。ピットから何か発射されたと思ったら、変形して高いお立ち台に成ったり。何か板っぺらが発射されたと思ったら、上る為の階段に成ったり。上ったら上ったで、マイクが飛び出たり巨大モニターが出てきたりで……もう、忘れた。

なんにせよ、休まずに騒ぎまで確り遣った連中は、自室で屍と成っているだろう。

そう思い扉を開くが、もう誰も居ない筈の整備室に、灯りが点いていた。

「あ……」

其処に居たのは、更織のもう一人の娘……。

「……簪」

夢織の、妹だった。

俺と簪の付き合いは、深く無い。

真面に話す様に成ったのは一年前、更織頭首に『借り』を返した時からだ。

そして、その更織頭首が求めたものは、俺の知るＩＳ研究機関の紹介だった。俺が持つ伝手（つて）は倉持技研だけなので、紹介したのだが……。

「……久しぶり、に成るか？」

「う、うん……久しぶり、だと思う……」

理由は簪の為、だと言っていた。それが本当なのか、嘘なのか。
更織頭首は何をしたいのかが、何を考えているのか解らない……が、簪は何も知らない、と思っている。その事が余計に、拍車を掛けるのだが……。因って、簪にはどの様に踏み込んで良いのか……いや、踏み込んで良いのかすら、判らない。

「……休まないのか？」

「……もう少しだけ」

「……そうか」

だがその事とは別に、簪には詫びなければならない。

「何しに……来たの？」

「装備を直しに来ただけだ」

「……装備？」

「コレだ」

簪が今している事は、本来しなくても良い事。

「……甲龍の……？」

「ああ、俺があげたものだが」

「……工具は、あっち……」

「状態を知っているのか？」

「……トーナメント中は、整備室を使えないから……見てた」

自身で専用機を仕上げる事は、しなくても良い事……だった。

「ヒントが、見つかるかも……しれないから……」

「そうか。……なんにせよ、助かった」

「ん……」

そして、もう一つ。夢織との事。

「……」

「……」

今二人の間には、隔たりが在る。

「……あ、あの……」

「うん？」

「……あの人、は？」

その原因は、間違い無く、俺だ。

「……ああ、心配無い。元気だ」

「……そう」

「……普通に呼ばないのか？」

「……決めた、から……」

だが、簪は知らない。教える事も……出来ない、する訳にはいかない。

「……すまない」

「何が……？」

「専用機の事だ。紹介したのは俺だからな」

「……貴方が、謝る必要は……無い」

「それに、一夏は俺の弟だ」

「……でも、貴方じゃ……無い」

「……そうか」

この後、修理が終わるまで無言が続いた。

◇◆◇◆◇◆◇

「はぁ……」

キーボードを打つ手が、進まなく成った……。

此の人が……姉さんを……。

直ぐ其処に居る……此の人と、二人に成ると、思い出してしまう。優しく、強く……何時の間にか、背中を追う事しか出来なくなった……姉を。

楯無……姉さん……。

姉さんは変っていった。此の人が現れてから、強く……綺麗に成っていった。そして、何時の日か、自分と比べる様に……成っていった。

でも、決めたから……。

一人で専用機を仕上げまでは、呼ばない、と。

追い付けた、なんて思えないけど……。

理由が欲しかった。同じ姓を名乗る理由……自信が、勇気が。

「どうした？」

「――っ！？」

すぐ傍まで来ていた事に、気づかなかった。もう、修理は終わった……みたい。

「俺はもう戻るが……まだ、続けるのか？」

「……う、うん……もう少しだけ……」

「そうか……」

そう言いながらポケットに手を入れて、中身を出して……目の前に置いた。

「温くなったが……飲んでくれ」

「……ココア？」

「じゃあ、程々にな」

「あ……」

行ってしまった……。

「……どうしよう」

物を貰うのは、気が引ける……。だって、あの人は……姉さんの……。

「……でも……少しだけなら……」

知りたかった。姉さんが変わって行った……理由を、あの人を。

心の中で姉さんに謝りながら、缶を開いて、口を付けた。

「……ん」

ココアはあの人が言ったように、温いけど……。

「……甘い」

甘さを引き立てる、温かさは……残っていた。

やっぱりあの人は……姉さんの、ヒーロー……？

そう思って姉さんに、訊いた時……姉さんは……。

「……悪い人（ヒール）」

楽しそう笑いながら、そう言っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

整備室から戻り、自室の扉を開けると、
「……まだ居たのか」
ベッドの上でカードゲームをしていた。
「お帰りなさい、神威君」
夢織は、簪の事をどの様に思っているのだろう。
「どうしたの？」
「……いや、なんでもない」
だが、今は訊くべき事では無い。
「……ふぅ～ん？　まぁ今はいいか。ラウラちゃーん！　スタンバイよ！」
「はい！　姉上！！」
……姉上！？　俺が居ぬ間に何があった！？
「あ、兄上……お願いが有ります！」
俺の前に立つボーデヴィッヒ、横に並ぶその他諸々。何時ぞやの時の様な構図だ。

「……なんだ？」

「皆が体験した事を……私も体験したいのです！」

「皆が体験した事？　それはなんだ？」

「それは……」

「それは？」

「――高い高いです！！」

……は？　高い高いって……アレか？　腋下持って……持ち上げる、アレか？

「……何故、高い高い……？」

「これ以上に無い至福の一時、そう部下に聞いたので」

……待て、その部下は正気か？　何か病魔に侵されてないか？

「……駄目でしょうか」

いや、駄目と言うか……どうしたらいいんだ、コレは。取り敢えず、周りは……、

「「「「「「……」」」」」」

……助けてくれる筈無いな。寧ろ「遣れ！！」と視線で語ってい

る。

「遣れば良いんだろ？　遣れば……」

「ほ、本当ですか！？」

「よし、いくぞ～」

「は、はい！　お願いします！！」

は～い……高い高～い……その「やっぱり！」みたいな顔は止めろ、箒。

「お……おお……」

高い高～い……その慈愛に満ちた顔は止めろ、シャルロット。

「この浮遊感……」

高い高～い……何故涙ぐむ、セシリア。

「……だが、この安心感……」

高い高～い……写真撮んな、鈴。

「これが……高い高い……」

高い高～い……親指立てんな、圧し折るぞ、一夏。

「なんという……至福……」

高い高〜い……『此れにて一件落着』じゃねぇ、その扇子ぶっ壊すぞ、夢織。

「クラリッサ……お前の言う事は真理だった……」

高い高〜い……クラリッサか、俺の脳裏に刻んだぞ、要注意危険人物と。

「兄上……ありがとうございます」

高い高〜い……本当に手遅れなんだな……此奴。

高い高〜い……はぁ。

◇◆◇◆◇◆◇

日の裏で動く者は、一つでは決して無い。

網を張る者や、隠れ駆ける者、ただ騙す者も居る。

だが、騙す者は、終わりを消され、囚われた。

呪は月を擁いて　第四十二話

『楽園(天国)なんて、在るのかな……』

第四十一話　『……甘い』（後書き）

はい、やらかしました。

ラウラは……こんな感じに成りましたw

夢織は……何かを企み中。

んで、漸く簪が登場しました。

次回は、娘が登場したので……久々にあの御人も。

最近、あるネタが頭の中から抜けません。

それは、麗を主人公にした話です！

最初は短編にしようかと思ったんですが……長くなりそうなんですよねぇ。

だから……長編にしちゃっていいかな？

タイトルは『呪の影に隠れて』なんて考えてるんだけど、いいかな？

やっちゃっていいかな？　かな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5588u/

呪は月を擁いて

2012年1月15日02時48分発行